大阪市
平野区

# 長原遺跡東部地区発掘調査報告 XVI

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

大阪市平野区

# 長原遺跡東部地区発掘調査報告

# XVI

2010年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

２０１２.３

財団法人　大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

墳墓堂遺構SX335

大阪市平野区

# 長原遺跡東部地区発掘調査報告 XVI

2010年度大阪市長吉東部地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

# 序　　文

本書は、2010年度に実施した大阪市平野区における長吉東部地区土地区画整理事業に伴う３件の発掘調査の成果をまとめたものであり、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』の第16冊目となる。

今回の調査では弥生時代の溝、飛鳥時代の流路、室町時代の集落遺構などが検出された。これらの調査結果は、周辺で実施したこれまでの調査成果とも密接な繋がりをもつものである。長吉六反一丁目の調査では、室町時代における大規模な濠や墳墓堂遺構など、特筆すべき遺構が見つかっており、長吉六反地域の歴史的変遷を明らかにするうえで重要な手がかりとなるであろう。また、長吉出戸七丁目の調査で出土した古墳時代前期以前とされる鉄鏃や、奈良時代から平安時代にかけての土器に伴う銅製の鉸具なども、より古い時代から人々の活動が盛んであった長原遺跡の姿を、豊かに物語るものと言えよう。

終わりに、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、大阪市都市整備局をはじめとする関係者各位、地元住民の皆様にご協力いただいた。ここに心より感謝の意を表したい。

2012年３月

財団法人大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所長　　長山　雅一

# 例　　言

一、本書は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が2010年度に実施した、長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査(NG10－２・５・６次、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局が負担した。

一、発掘調査は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所次長 南秀雄の指揮のもと、長原調査事務所長(現東淀川調査事務所長) 佐藤隆・嘱託調査員 赤松佳奈(現大津市教育委員会)・学芸員(現主任学芸員) 平田洋司・係長 原田昌則(当時、財団法人八尾市文化財調査研究会より派遣)が担当した。調査の期間・面積は第Ⅰ章に記す。

一、本書の編集は佐藤が行った。執筆は、佐藤が第Ⅰ章・第Ⅱ章第１節・第Ⅲ章を担当し、平田が第Ⅱ章第２節の層序と遺構、学芸員小倉徹也が第Ⅱ章第３節の層序と遺構、総括研究員田中清美が第Ⅱ章第２・３節の遺物をそれぞれ分担した。また、第Ⅱ章第２節における井戸側材の年輪年代測定については、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室 光谷拓実氏に依頼し、玉稿を賜った。

一、本書の用字用語や体裁などの調整は、佐藤･小倉および事業企画課長代理 清水和明による報告書校正委員が行った。

一、遺構写真は調査担当者が撮影したほか、寿福写房 寿福滋氏・有限会社阿南写真工房 阿南辰秀氏に一部を委託した。遺物写真の撮影は、寿福写房 寿福滋氏ならびに西大寺フォト 杉本和樹氏に委託したほか、一部の撮影を学芸員 渡邉晴香が行った。

一、基準点測量は、株式会社パスコ・国際航業株式会社・株式会社GIS関西に委託した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当研究所が保管している。

# 凡　　例

1．本書で用いた層序学・堆積学などの用語の中で、遺跡の地層に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。なお、表４・５で用いるRK・NGの略号は、それぞれ長原遺跡東北地区(六反)と長原遺跡を示す。

2．遺構名の表記は、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、柱穴･小穴(SP)、自然河川(NR)、その他(SX)の分類記号の後に、番号を付している。

3．水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP＋○m」と省略した。また、座標値は「測地成果2000」に基づく。図中の方位は図１が真北を基準に、それ以外は座標北を基準にしている。

4．本書で用いた地層の土色および遺物の色調は、『新版 標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄2006]に拠った。

5．各遺物の記述方法、分類、年代観などについては、以下の文献を参考にした。本文中では煩雑を避けるため、これらの引用文献をその都度提示することを割愛した。

弥生土器：[寺沢薫・森井貞雄1989]、弥生時代終末～古墳時代前期の土器[田中清美2011a・2011b]、古墳時代の須恵器:[田辺昭三1981]、飛鳥･奈良時代の土器:[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器:[佐藤隆1992]、鎌倉･室町時代の土器：[中世土器研究会編1995・佐藤隆1996]、江戸時代の陶磁器：[九州近世陶磁学会2002]。

6．引用文献は巻末に示した。

# 本　文　目　次

序文

例言・凡例

第Ⅰ章　長原遺跡東北地区の発掘調査…… 1
　第１節　調査地の位置と経緯 …… 1
　　１)長原遺跡の位置 …… 1
　　２)既往の主な調査 …… 2
　　３)発掘調査の経過 …… 6
　　ⅰ)NG10－２次調査　　ⅱ)NG10－５次調査
　　ⅲ)NG10－６次調査　　ⅳ)調査報告書の作成

第Ⅱ章　調査の結果…… 9
　第１節　NG10－２次調査 …… 9
　　１)層序 …… 9
　　２)遺構と遺物 ……15
　　ⅰ)平安時代以前の遺構と遺物　　ⅱ)室町時代の遺構と遺物
　　ⅲ)江戸時代の遺構と遺物
　　３)小結 ……46
　第２節　NG10－５次調査 ……47
　　１)層序 ……47
　　２)遺構と遺物 ……50
　　ⅰ)弥生～古墳時代の遺構と遺物　　ⅱ)飛鳥～平安時代の遺構と遺物
　　ⅲ)鎌倉～室町時代の遺構と遺物
　　３)SE601の出土板材の年輪年代測定 ……72
　　ⅰ)試料と方法　　ⅱ)結果と考察
　　４)小結 ……73
　第３節　NG10－６次調査 ……75
　　１)層序 ……75
　　２)遺構と遺物 ……80
　　ⅰ)弥生時代後期の遺構と遺物　　ⅱ)飛鳥時代の遺構と遺物
　　ⅲ)平安時代の遺構と遺物
　　３)各層出土の遺物 ……87
　　４)小結 ……88

第Ⅲ章　調査のまとめ…… 89

引用・参考文献…… 93

英文目次

抄録

# 原　色　図　版　目　次


1　NG10－２次調査　第５層上面遺構
　上：SD501(西から)
　下：SD501断面(西から)
2　NG10－２次調査　第４層上面遺構
　上：SD404(東から)
　下：SD404(西から)
3　NG10－２次調査　第３層上面遺構
　上：墳墓堂遺構SX335(南から)
　下：墳墓堂遺構SX335遺物出土状況(北から)
4　NG10－２次調査　出土遺物
5　NG10－５次調査　遺構・遺物
　上：第６層上面SE601(北東から)
　下：平根系大型定角式鉄鏃・銅製絞具


# 図　版　目　次


1　NG10－２次調査　地層断面(一)
　上：北壁上段東部(南東から)
　中：北壁上段中央部(南東から)
　下：北壁上段西部(南東から)
2　NG10－２次調査　地層断面(二)
　上：北壁下段(南東から)
　中：北壁下段下層確認トレンチ(南東から)
　下：北壁下段深掘り部分(南東から)
3　NG10－２次調査　第７層上面遺構
　上：第７面上面遺構(東から)
　中：SR702(北から)
　下：SR703(北から)
4　NG10－２次調査　第５層上面遺構
　上：第５層上面遺構全景(東から)
　下：SD501断面(東から)
5　NG10－２次調査　第４層上面遺構
　上：SD404東端断面(北から)
　中：SD404断面(東から)
　下：SK401(北東から)
6　NG10－２次調査　第３層上面遺構(一)
　上：第３層上面遺構全景(西から)
　下：第３層上面遺構全景(東から)
7　NG10－２次調査　第３層上面遺構(二)
　上：墳墓堂遺構SX335(西から)
　下：墳墓堂遺構SX335盛土断面(北東から)
8　NG10－２次調査　第３層上面遺構(三)
　上：墳墓堂遺構SX335南周溝断面(西から)
　中：墳墓堂遺構SX335南西隅周溝断面(西から)
　下：SK339(南から)
9　NG10－２次調査　第３層上面遺構(四)
　上：SD352(北から)
　下：SD352断面(南から)
10　NG10－２次調査　第２層上面遺構
　上：第２層上面遺構西半部(西から)
　下：第２層上面遺構東半部(東から)
11　NG10－２次調査　第１・２層上面遺構(一)
　上：第１層上面遺構(東から)
　中：第１層断面(南西から)
　下：SD046(南から)
12　NG10－２次調査　第１・２層上面遺構(二)
　上：SD034(北から)
　中：SD029(北から)
　下：SD029断面(南西から)
13　NG10－２次調査　第１・２層上面遺構(三)
　上：SK035(南東から)
　中：SK036(南西から)
　下：SK022(東から)
14　NG10－２次調査　平安時代以前の出土遺物
15　NG10－２次調査　SD501出土遺物(一)
16　NG10－２次調査　SD501出土遺物(二)
17　NG10－２次調査　第４層上面およびSX335ほか出土遺物
18　NG10－２次調査　SX355出土遺物(一)
19　NG10－２次調査　SX355出土遺物(二)
20　NG10－２次調査　第１・２層上面出土遺物(一)
21　NG10－２次調査　第１・２層上面出土遺物(二)
22　NG10－５次調査　地層断面(一)
　上：南壁　第１～５層(北西から)
　中：南壁　第５～７層(北西から)
　下：南壁　第７～11層(北西から)
23　NG10－５次調査　地層断面(二)
　上：南壁　第７～11層(北西から)

中：南壁　第９～12層(北西から)
下：東南隅深堀り部分　第11～14層(北西から)
24　NG10－５次調査　第10層内の遺構(一)
上：遺構全景(東から)
下：遺構全景(西から)
25　NG10－５次調査　第10層内の遺構(二)
上：SD1001(南西から)
中：SD1002(南西から)
下：SD1002(北東から)
26　NG10－５次調査　第10層内の遺構(三)
上：中央部遺構群(北東から)
中：西部遺構群(北東から)
下：SD1004・1005(東から)
27　NG10－５次調査　第８～10層の遺構
上：第10層上面・第８層下面遺構(東から)
下：第９層上面SX901(北東から)
28　NG10－５次調査　第８層の遺構
上：第８層下面　小溝群(北東から)
中：第８層上面の遺構(東から)
下：SR803(北西から)
29　NG10－５次調査　第５・６層遺構
上：第６層上面SE601(北東から)
下：第５層上面SE501(南から)
30　NG10－５次調査　第３～５層の遺構
上：第５層内NR502(北東から)
中：第4ｂ層下面SX401(南西から)
下：第３層下面の遺構全景(西から)
31　NG10－５次調査　遺構および各層出土遺物(一)
32　NG10－５次調査　遺構および各層出土遺物(二)
33　NG10－５次調査　遺構および各層出土遺物(三)
34　NG10－５次調査　遺構出土遺物
35　NG10－５次調査　第５層出土遺物
36　NG10－５次調査　遺構および各層出土遺物(四)
37　NG10－５次調査　SE601出土遺物
38　NG10－６次調査　地層断面
上：南壁東半(北西から)
下：南壁西半(北東から)
39　NG10－６次調査　第13層上面・第10層上面遺構
上：SD401(北から)
下：NR301(東から)
40　NG10－６次調査　第10層上面・第9a層上面遺構
上：NR301(北東から)
下：NR201(南から)
41　NG10－６次調査　第9a層上面遺構
上：NR201(北から)
下：NR201(西壁断面、東から)
42　NG10－６次調査　第6a層上面遺構(一)
上：第6a層上面遺構全景(東から)
下：NR101(南から)
43　NG10－６次調査　第6a層上面遺構(二)
上：NR101断面(南東から)
下：黒色土器椀(墨書「西」)出土状況
44　NG10－６次調査　遺構出土遺物
45　NG10－６次調査　遺構および各層出土遺物

# 挿　図　目　次

図１　長原遺跡の位置と周辺地形 …… 1
図２　周辺の遺跡と調査地 …… 2
図３　長原遺跡東北地区における既往の調査 …… 3
図４　NG10－２次調査区位置図 …… 7
図５　NG10－５次調査区位置図 …… 7
図６　NG10－６次調査区位置図 …… 8
図７　NG10－２次調査地の地層と遺構の関係図 …… 9
図８　北壁地層断面図(１) …… 11
図９　北壁地層断面図(２) …… 12
図10　北壁地層断面図(３) …… 13
図11　東壁・その他の地層断面図 …… 14
図12　第7a層上面遺構平面・断面図 …… 16
図13　古墳～平安時代の出土遺物実測図 …… 17
図14　第５層上面遺構平面図 …… 18
図15　SD501出土遺物実測図(１) …… 19
図16　SD501出土遺物実測図(２) …… 20
図17　第４層上面遺構平面図 …… 22
図18　第４層上面遺構平面・断面図 …… 23
図19　第４層上面遺構出土遺物実測図 …… 24
図20　第３層上面遺構平面・断面図 …… 26
図21　墳墓堂遺構SX335平面・断面図 …… 27
図22　SX335出土遺物実測図(１) …… 28
図23　SX335出土遺物実測図(２) …… 29
図24　SX335出土遺物実測図(３) …… 30

図25　第３層上面遺構・その他出土遺物実測図 …… 32
図26　第１・２層上面遺構平面図 …… 34
図27　第１・２層上面遺構平面・断面図 …… 35
図28　第１・２層上面遺構断面図 …… 36
図29　SD046・SK057・その他出土遺物実測図 …… 37
図30　SD352B出土遺物実測図（１）…… 39
図31　SD352B出土遺物実測図（２）…… 40
図32　SD352B出土の可能性がある遺物実測図…… 41
図33　SD028出土遺物実測図 …… 42
図34　SK035出土遺物実測図 …… 43
図35　SK036・010出土遺物実測図…… 44
図36　SK022出土遺物実測図 …… 45
図37　地層断面図 …… 48・49
図38　NG10－５次調査地の地層と遺構の関係図 … 50
図39　第10層内遺構平面図（１） …… 51
図40　第10層内遺構平面図（２） …… 52
図41　第10層内遺構断面図 …… 53
図42　弥生～古墳時代の遺構および第８～10層出土遺物実測図 …… 54
図43　第10層上面および第８層下面遺構平面図（１） …… 56
図44　第10層上面および第８層下面遺構平面図（２） …… 57
図45　SX901平面・断面図 …… 58
図46　第８層上面遺構平面図 …… 59
図47　第６層および第５層上面遺構平面図 …… 60
図48　SE601、SK602～604平面・断面図…… 61
図49　SE601出土遺物実測図（１） …… 62
図50　SE601出土遺物実測図（２） …… 63
図51　第５層出土遺物実測図（１）…… 65
図52　第５層出土遺物実測図（２） …… 66
図53　SE501出土遺物実測図 …… 67
図54　SE501平面・断面図 …… 67
図55　NR502出土遺物実測図 …… 68
図56　第4b層下面遺構平面図 …… 68
図57　SX401出土遺物実測図 …… 69
図58　第３層下面遺構平面図（１）…… 70
図59　第３層下面遺構平面図（２） …… 71
図60　長原遺跡の井戸側の年輪パターングラフ（点線）と暦年標準パターングラフ（実線）の一致状況　73
図61　NG10－6次調査地の地層と遺構の関係図 …… 75
図62　南壁地層断面図（１）…… 76
図63　南壁地層断面図（２） …… 77
図64　西壁地層断面図 …… 78
図65　SD401出土遺物実測図 …… 80
図66　第13層上面・第10層上面遺構平面・断面図 … 81
図67　NR301出土遺物実測図 …… 82
図68　第9a層上面遺構平面・断面図 …… 84
図69　NR201出土遺物実測図 …… 85
図70　第6a層上面遺構平面・断面図 …… 86
図71　NR101出土遺物実測図 …… 87
図72　各層出土遺物実測図…… 87

# 表　目　次

表１　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（１）…… 4
表２　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（２）…… 5
表３　本書で報告する発掘調査 ……６
表４　長原遺跡東北地区の標準層序 …… 91
表５　長原遺跡の標準層序 …… 92

# 写　真　目　次

写真１　NG10－６次調査状況（東から）……８

# 第Ⅰ章　長原遺跡東北地区の発掘調査

## 第１節　調査地の位置と経緯

### １）長原遺跡の位置

長原遺跡は大阪平野の南部、大阪市平野区長吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である（図１・２）。本遺跡は1973年に地下鉄谷町線の延伸工事に伴う試掘調査で発見されて以来、大阪市営住宅、長吉・瓜破および長吉東部土地区画整理事業施行に伴う調査が継続して行われており、後期旧石器時代以降の歴史的な変遷が明らかになっている。発掘調査の進展に伴い遺跡の範囲についても新知見が蓄積され、今では東西約２㎞、南北約２㎞の範囲を８つの地域に区分して、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・西・西南地区と呼称している（図２）。

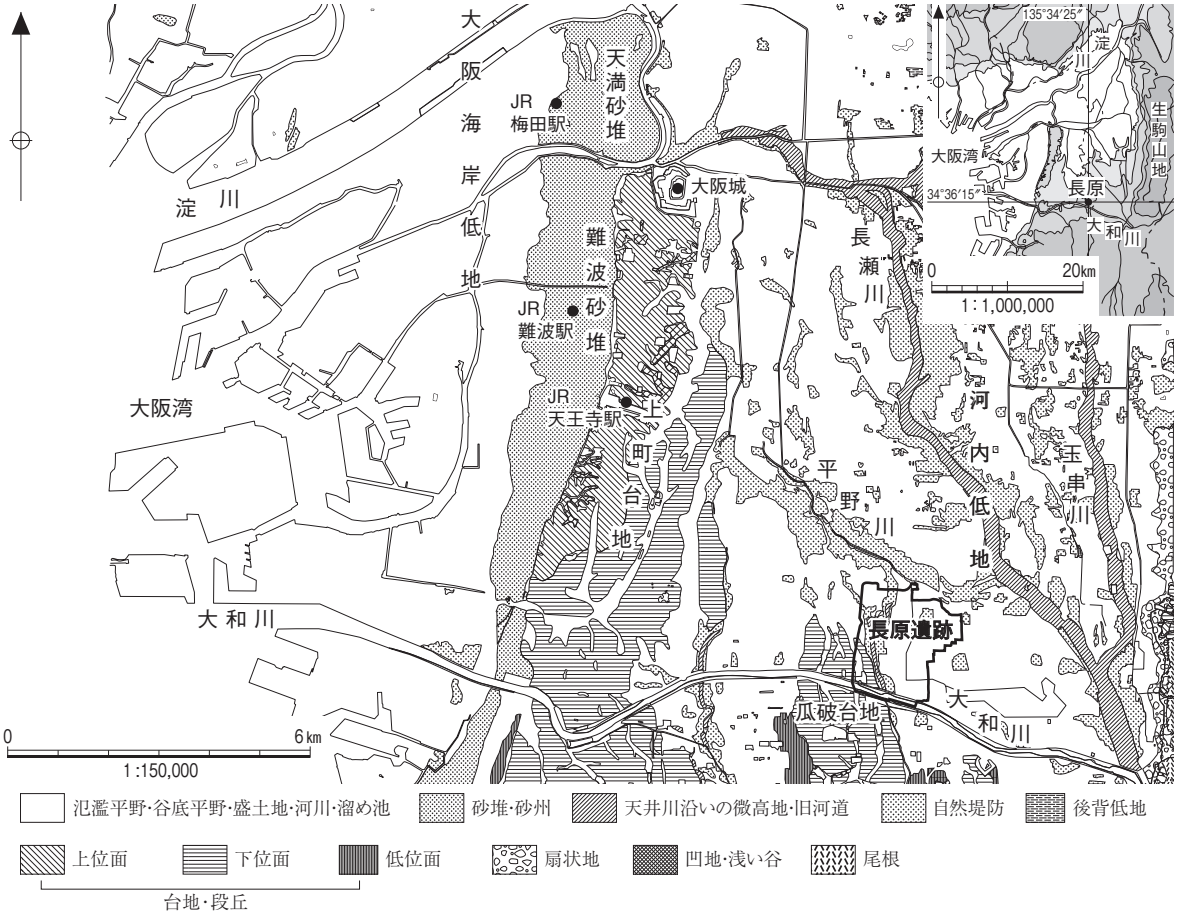



図１　長原遺跡の位置と周辺地形（土地条件図［建設省国土地理院1983］に基づき一部加筆）

本書で報告するNG10－２・５・６次調査を実施した長吉六反１・２丁目および長吉出戸７丁目は、長原遺跡の東北地区に位置しており、ここは遺跡の中でも低位段丘層が地中深くに埋没し、沖積層(難波累層)が厚く堆積している。そのため南部に対して北部の遺構は深い位置から検出されることが多い。

## ２)既往の主な調査

長原遺跡東北地区の調査は、1978年に実施された推定城山古墳跡地の試掘調査が最初であるが、次いで大阪市による下水管渠工事に伴う調査が行われた後、1995年から長吉東部地区区画事業施行に伴う調査が始まった。この調査は大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所(以下、区画整理事務所と略す)、大阪市教育委員会文化財保護課(以下文化財保護課と略す)、旧財団法人大阪市文化財協会の３者により、「長吉東部地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結して実施することになった。

1995年度に都市計画道路長吉１号線予定地で行った発掘調査(NG95－57次)では古墳時代後期に当たる流路や「しがらみ」を伴う堤防状遺構が検出されたほか、朝鮮半島の草鞋に酷似したものが出土し

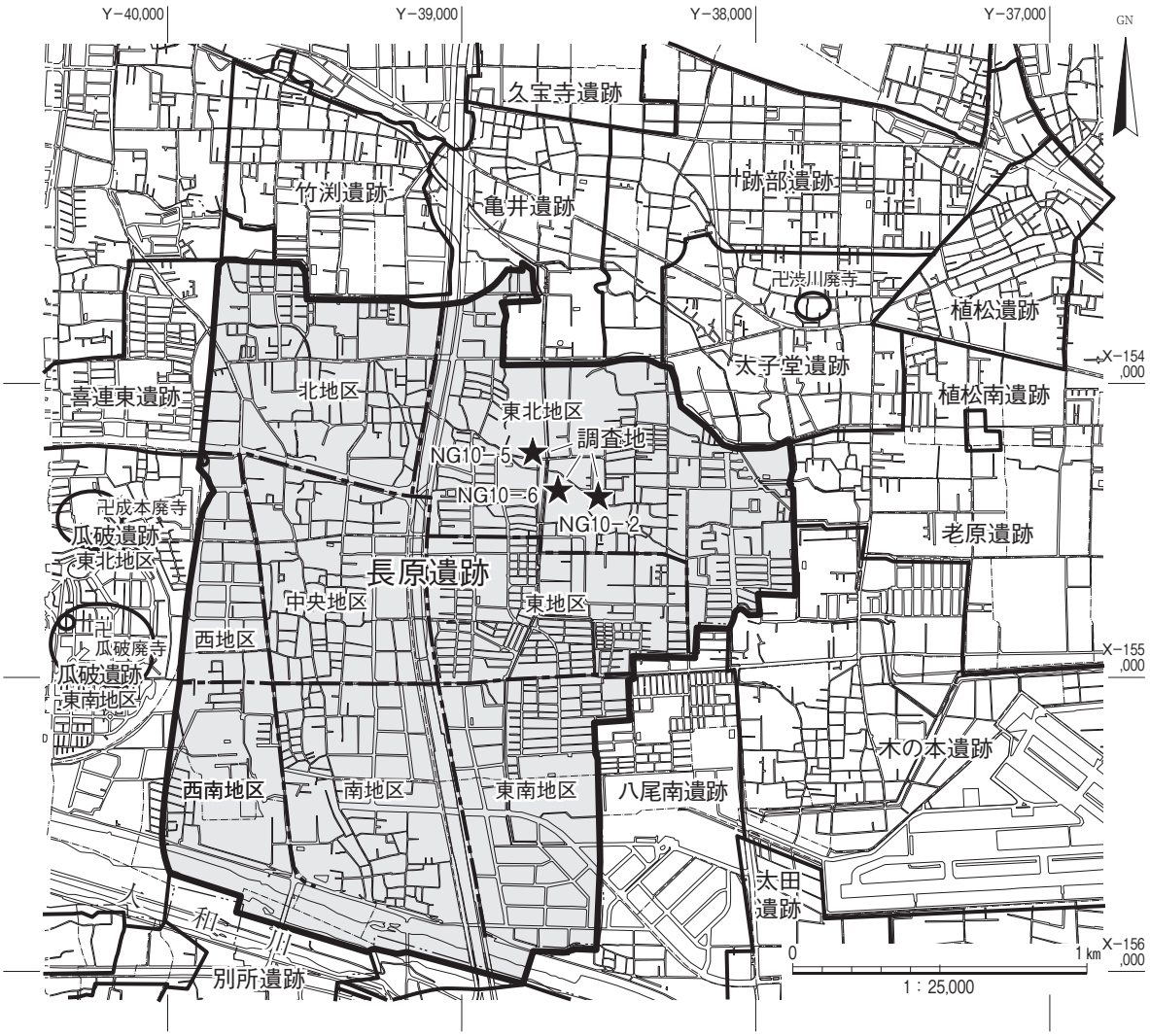



図２　周辺の遺跡と調査地

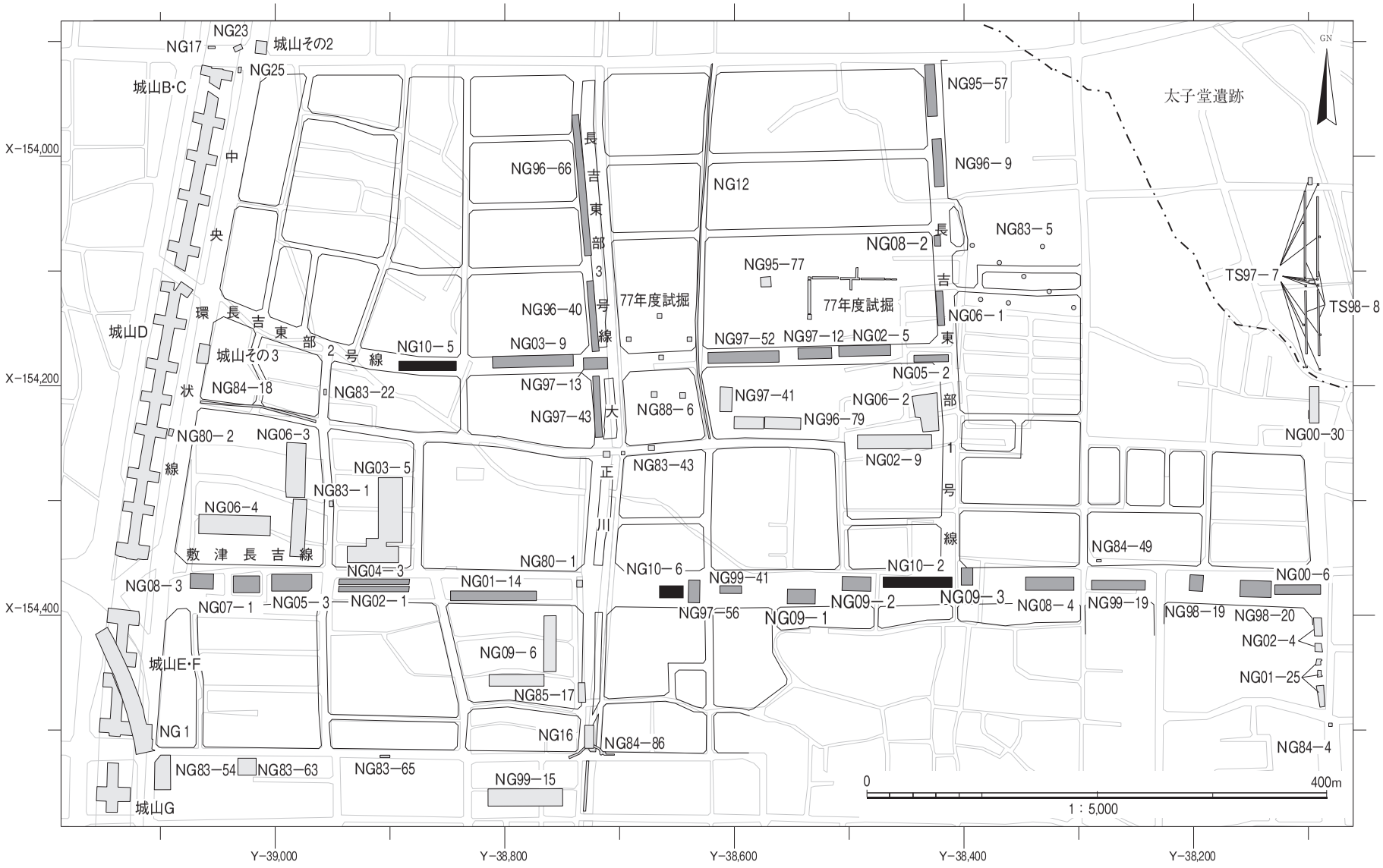



図３　長原遺跡東北地区における既往の調査

表１　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（１）

| 調査次数等 | お　も　な　内　容 | 文　　献 |
|---|---|---|
| 城山その２ | 弥生時代前～中期周溝墓状遺構、古墳 | 大阪文化財センター 1980 |
| 城山その３ | 弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物 | 大阪文化財センター 1980 |
| 城山Ｂ･Ｃ区 | 弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路 | 大阪文化財センター 1986a |
| 城山Ｄ･Ｅ･Ｆ区 | 弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壙、飛鳥～平安時代溝、中世水田 | 大阪文化財センター 1986b |
| 城山Ｇ区 | 弥生時代土壙群、飛鳥時代～中世水田 | 大阪文化財センター 1986c |
| NG１ | 弥生時代中期溝・土壙墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝 | 大阪市文化財協会 1978 |
| 77 年度試掘 | 奈良時代溝 | 大阪市教育委員会･難波宮址顕彰会 1978 |
| NG12 | 飛鳥時代杭列・流路・土器溜まり、平安時代土壙 | 大阪市文化財協会 1979a |
| NG16 | 弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前・中期溝・井戸 | 大阪市文化財協会 1979b |
| NG17 | 縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物 | 大阪市文化財協会 1979c |
| NG80－1 | TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層（NG８層） | 大阪市文化財協会 1981a |
| NG80－2 | 弥生・古墳時代遺物 | 大阪市文化財協会 1981b |
| NG23 | 弥生時代中期遺物、古墳 | 大阪市文化財協会 1980a |
| NG25 | 縄文時代晩期・弥生時代中期遺物 | 大阪市文化財協会 1980b |
| NG83－１ | 弥生時代中期住居、古墳時代中期住居 | 大阪市文化財協会 1984a |
| NG83－５ | TP+8.0mで砂層 | 大阪市文化財協会 1984b |
| NG83－22 | TP+7.6mで奈良時代包含層 | 大阪市文化財協会 1984c |
| NG83－43 | TP+7.8mで砂層 | 大阪市文化財協会 1984d |
| NG83－54 | TP+8.1mで砂層（NG５層か） | 大阪市文化財協会1984e |
| NG83－63 | 弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓 | 大阪市文化財協会 1984f |
| NG83－65 | 弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壙状遺構 | 大阪市文化財協会 1984g |
| NG84－４ | 古墳時代中期溝・土壙、飛鳥時代水田 | 大阪市文化財協会 1985a |
| NG84－18 | TP+8.2mで泥質土層 | 大阪市文化財協会 1985b |
| NG84－49 | TP+7.7mで砂層 | 大阪市文化財協会 1985c |
| NG84－86 | 弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内式期井戸・建物、古墳時代中期土壙 | 大阪市文化財協会 1985d |
| NG85－17 | 縄文時代晩期遺物 | 大阪市文化財協会 1986 |
| NG88－６ | TP+7.8mで砂層（飛鳥時代初頭の須恵器が出土）、飛鳥時代包含層、奈良時代溝 | 大阪市文化財協会 1989 |
| NG95－57 | TP+8.2mで砂層（古墳時代後期中葉の須恵器が出土）、古墳時代後期柵、平安時代集落 | 大阪市文化財協会 1998a |
| NG95－77 | TP+8.0mで砂層（古墳時代後期前葉の須恵器が出土）、古墳時代後期柵 | 大阪市文化財協会 1996b |
| NG96－９ | 弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代集落 | 大阪市文化財協会 1999 |
| NG96－40 | TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝 | 大阪市文化財協会 1999 |
| NG96－66 | 弥生時代中期～庄内式期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落 | 大阪市文化財協会 1999 |
| NG96－79 | 旧石器･縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内式期遺構、飛鳥～平安時代遺構、TP+7.5mで砂層 | 大阪市文化財協会 1997 |
| NG97－12 | 旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、飛鳥時代竈屋・掘立柱建物 | 大阪市文化財協会 2000a |
| NG97－13 | 古墳時代自然流路、平安時代溝 | 大阪市文化財協会 2000a |
| NG97－41 | 縄文時代晩期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構 | 大阪市文化財協会 1998b |
| NG97－43 | 弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壙 | 大阪市文化財協会 2000a |

て注目された[大阪市文化財協会1998a]。1996年度以降から本調査まで毎年のように大小の調査が継続的に行われた。この間の各年度の調査成果については表１に示したとおりであるが、1997年度に都市計画道路長吉２号線予定地で行われたNG97－12・52次調査では、旧石器時代の約50点のナイフ形石器や削器をはじめ、14,000点に及ぶサヌカイト製の剥片が出土し、同時代の石器製作技法を研究する上で注目すべき石器製作址が確認されたほか、弥生時代中期の水田、古墳時代の土手状遺構、飛鳥時代および平安時代の遺構群が検出されている[大阪市文化財協会2000a]。

表２　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（２）

| 調査次数等 | お　も　な　内　容 | 文　　献 |
|---|---|---|
| NG97－52 | 旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構 | 大阪市文化財協会 2000a |
| NG97－56 | 縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構 | 大阪市文化財協会 2000a |
| NG98－19 | 古墳時代中期土壇状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塩土器 | 大阪市文化財協会 2001 |
| NG98－20 | 古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壇状遺構・竪穴建物、古代～中世耕地 | 大阪市文化財協会 2001 |
| TS97－ 7 | 平安時代後期井戸、土壙 | 八尾市文化財調査研究会 2000a |
| TS98－ 8 | 奈良～平安時代初期の小穴、室町時代井戸 | 八尾市文化財調査研究会 2000b |
| NG99－15 | 縄文時代石器集中部、弥生時代中～後期・古墳時代中期集落、飛鳥時代耕地 | 大阪市文化財協会 2002b |
| NG99－19 | 縄文時代後期土壙、弥生～古墳時代前期水田、平安～江戸時代耕地 | 大阪市文化財協会 2002a |
| NG99－41 | 後期旧石器時代遺物、縄文時代早～前期建物、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手 | 大阪市文化財協会 2002a |
| NG00－6 | 古墳時代中期盛土遺構、奈良時代溝、平安時代流路 | 大阪市文化財協会 2003 |
| NG00－30 | 奈良時代ピット、平安時代土壙・流路 | 大阪市文化財協会 2004a |
| NG01－14 | 古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路（墨画土器・獣骨出土） | 大阪市文化財協会 2004b |
| NG01－25 | 鎌倉～室町時代水田 | 大阪市文化財協会 2004a |
| NG02－ 1 | 弥生時代中期集落、古墳時代畠状遺構、奈良時代流路 | 大阪市文化財協会 2005 |
| NG02－ 4 | 古墳時代盛土、鎌倉～室町時代水田 | 大阪市文化財協会 2004a |
| NG02－ 5 | 縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田、古墳時代中期木製品 | 大阪市文化財協会 2005 |
| NG02－ 9 | 旧石器時代遺物、平安時代集落 | 大阪市文化財協会 2008a |
| NG03－ 5 | 弥生時代中期方形周溝墓、古墳時代中期ウマの埋葬、古墳時代後期溝群 | 大阪市文化財協会 2008b |
| NG03－ 9 | 弥生時代後期溝、古墳時代中・後期流路、平安時代集落 | 大阪市文化財協会 2006a |
| NG04－ 3 | 弥生時代土壙・溝、古墳時代溝、飛鳥時代溝、奈良時代流路、平安時代溝、鎌倉～江戸時代水田 | 大阪市文化財協会 2007 |
| NG05－ 2 | 流路、鎌倉～室町時代耕作地 | 大阪市文化財協会 2008c |
| NG05－ 3 | 奈良時代流路、弥生時代盛土・溝、古墳時代溝 | 大阪市文化財協会 2008c |
| NG06－ 1 | 平安時代の耕作地、ヒトと偶蹄目の足跡、豊臣期の畠 | 大阪市文化財協会 2009a |
| NG06－ 2 | 飛鳥時代の流路、鎌倉～室町時代の耕作溝 | 大阪市文化財協会 2008a |
| NG06－ 3 | 弥生時代中～後期の溝、古墳時代中期の竪穴建物・総柱建物 | 大阪市文化財協会 2008b |
| NG06－ 4 | 弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代中期竪穴建物・土壙・ピット | 大阪市文化財協会 2008b |
| NG07－ 1 | 弥生時代の掘立柱建物・土壙、奈良時代の流路 | 大阪市文化財協会 2009c |
| NG08－ 2 | 古墳時代の流跡・地震痕跡、飛鳥時代の溝 | 大阪文化財研究所 2011b |
| NG08－ 3 | 弥生時代後期の竪穴建物・土壙・溝、奈良時代の水田 | 大阪文化財研究所 2011b |
| NG08－ 4 | 古墳時代の水田・流路、平安時代の溝 | 大阪文化財研究所 2011b |
| NG09－ 6 | 弥生時代後期末の竪穴建物・井戸・方形周溝墓・柱穴、古墳時代前期～中期の井戸 | 大阪文化財研究所 2011a |
| NG09－ 1 | 弥生時代中期の溝、古墳時代前期の窪地 | 大阪文化財研究所 2012 |
| NG09－ 2 | 弥生時代中期の溝、室町時代の集落と濠、江戸時代の陶磁器埋納壙 | 大阪文化財研究所 2012 |
| NG09－ 3 | 飛鳥時代の自然流路と柱状木製品、江戸時代後期の集落 | 大阪文化財研究所 2012 |
| NG10－ 2 | 平安時代後期の水田、室町時代の濠と墳墓堂遺構、江戸時代の集落 | 本書 |
| NG10－ 5 | 弥生～古墳時代の溝・土壙・柱穴、飛鳥時代の井戸・土壙、奈良～平安時代の井戸・落込み | 本書 |
| NG10－ 6 | 弥生時代後期の溝、飛鳥時代の自然流路、平安時代の自然流路 | 本書 |

一方、本報告の調査地のある都市計画道路敷津長吉線予定地内の調査は1998年度から着手されたが、八尾市域に近い調査地東方のNG98－19・20次調査地では古墳時代中期前葉の盛土遺構とその周辺から祭祀に伴う滑石製勾玉や臼玉を伴う土器類（長原Ⅰ期前半）が出土している［大阪市文化財協会2001］。次いで1999年度に都市計画道路敷津長吉線予定地内で実施したNG99－19・41次調査では、前者で縄文時代後期の土壙、後者から縄文時代早～前期の竪穴建物など、沖積層（難波累層）中部層に相当する縄文時代の遺構や遺物が相次いで検出された［大阪市文化財協会2002b］。

2001年度の調査は、都市計画道路敷津長吉線予定地内の西部でNG01－14次調査が行われ、古墳時代前期の溝や同中期の水田が検出されている。また、奈良時代の流路から、大量のウシ・ウマの骨をはじめ、人面墨画土器やミニチュア土器などの祭祀遺物が出土した[大阪市文化財協会2004b]。

2002年度以降も表２に示すように都市計画道路敷津長吉線予定地内および都市計画道路長吉東部２号線予定地内の調査を行った。このうち、NG04－３次調査で、「束十五」と記載された木簡の削り屑が出土したほか[大阪市文化財協会2007]、NG06－１次調査では弥生～古墳時代の流路や湿地帯および、平安時代以前の地震痕跡が確認されている[大阪市文化財協会2009a]。

一方、都市計画道路敷津長吉線予定地内の西端に近い位置にあるNG07－１次調査では弥生時代中期後葉の掘立柱建物や土壙をはじめ、古墳時代中期の土壙、奈良時代の流路が検出されたほか、平安時代末～鎌倉時代の初めに発生した可能性がある地震による水平断層が確認され、その変形構造や成因についての検討が加えられた[大阪市文化財協会2009c]。

### ３)発掘調査の経過

今回報告するNG10－２・５・６次調査地のうち、NG10－２・６次調査地は都市計画道路敷津長吉線予定地内に、またNG10－５次調査地は長吉東部２号線内に位置しており、いずれもこれまでに行った周辺部の調査結果から、調査地は沖積層が現地表面下約６ｍまで堆積していることが予想された。そのため、調査地内に事前にシートパイルによる土留め工事を行うほか、工事車両の通行と作業空間および掘削残土の仮置場を確保する必要があった。以下に上記３件の調査の経過について記述する。なお、各調査の調査期間や担当者については表３に示す。

#### ⅰ)NG10－２次調査

この調査は敷津長吉線予定地に、東西62.5m、南北８ｍの調査区を設け、2010年７月２日から調査を開始した。重機掘削は周辺の調査成果から中世の地層までとしていたが、現代表土を掘削した時点で、本調査地は周辺とは地層の状況が異なり、現代の集落につながる中世～近世の地層・遺構が良好な状態で遺存していることがわかった。この状況は、長原遺跡の特色や調査地周辺の歴史的環境を復元する上で重要な資料になると考え、重機掘削は現地表下0.8mまでにとどめた。以下を人力で掘削しながら適宜、遺構検出作業や、実測・写真撮影などの記録作業を行い調査を進めた。2011年２月15日に埋戻しを含む現地でのすべての調査を完了した。

#### ⅱ)NG10－５次調査

この調査は、東西方向の都市計画道路である長吉東部２号線内に位置する(図３)。調査区は道路予定地内に東西50m、南北８ｍを設定した。

調査地周辺の整備、土留工事を行ったのち、掘削作業を開始した。重機による掘削は後述の第４層

表３　本書で報告する発掘調査

| 計画道路名 | 調査次数 | 調査地番 | 面積 | 調査期間 | 担当者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 敷津長吉線 | NG10－２ | 長吉六反１丁目 | 500㎡ | 平成22年７月２日～平成23年２月15日 | 佐藤･赤松 |
| 長吉東部２号線 | NG10－５ | 長吉出戸７丁目 | 400㎡ | 平成22年８月31日～平成23年１月28日 | 平田 |
| 敷津長吉線 | NG10－６ | 長吉六反２丁目 | 200㎡ | 平成22年12月１日～平成23年３月15日 | 原田 |

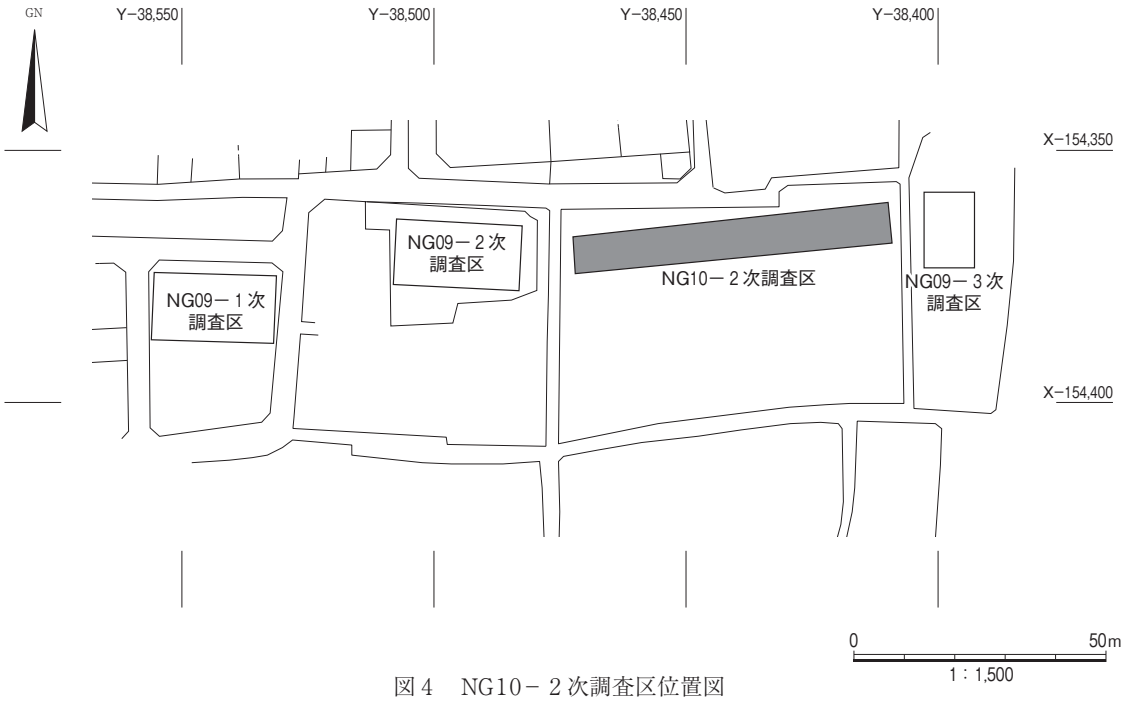



図４　NG10－２次調査区位置図

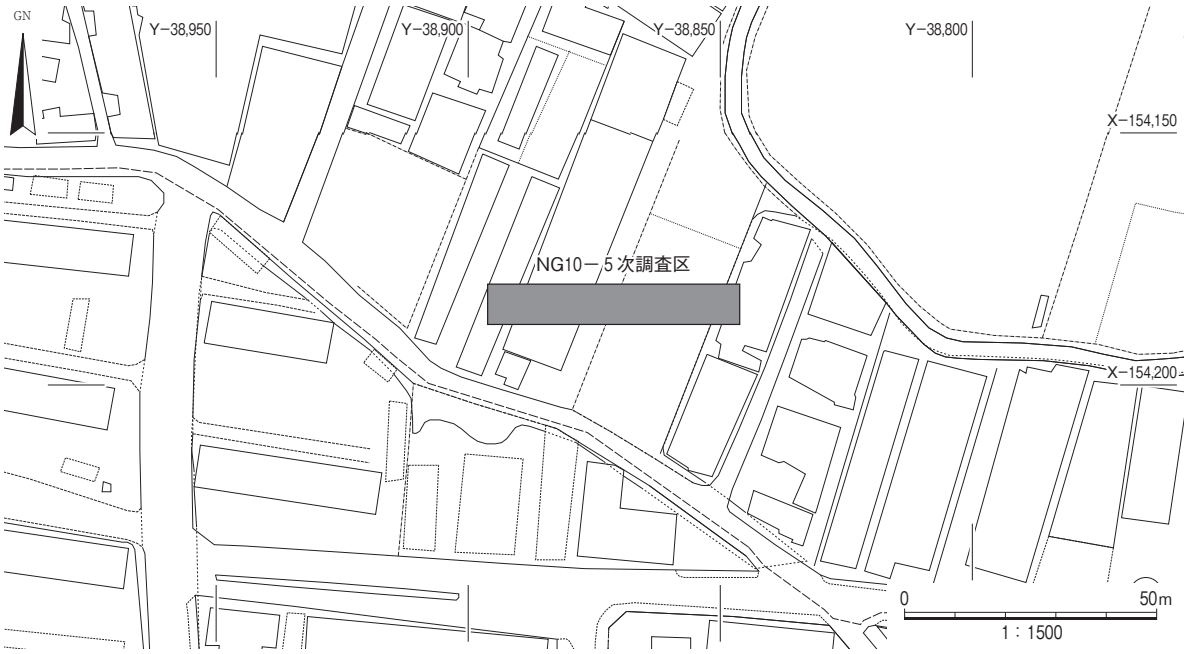



図５　NG10－５次調査区位置図

を除去した時点までとした。第５層での調査終了後は、第６・７層が厚い水成層であったため、これらの地層の掘削については重機と人力の掘削を併用した。この間には切梁工事も実施している。以下は、すべて人力による掘削で進めた。途中、遺構検出作業や、図面作成・写真撮影といった記録作業を行った。調査を終えたのち、埋戻し作業、現状復帰などの諸作業を済ませ、2011年１月28日に現地における作業を完了した。

ⅲ）NG10－６次調査

今回の調査は敷津長吉線予定地に、東西20m、南北10mとし、周辺の整備および土留工事を行った

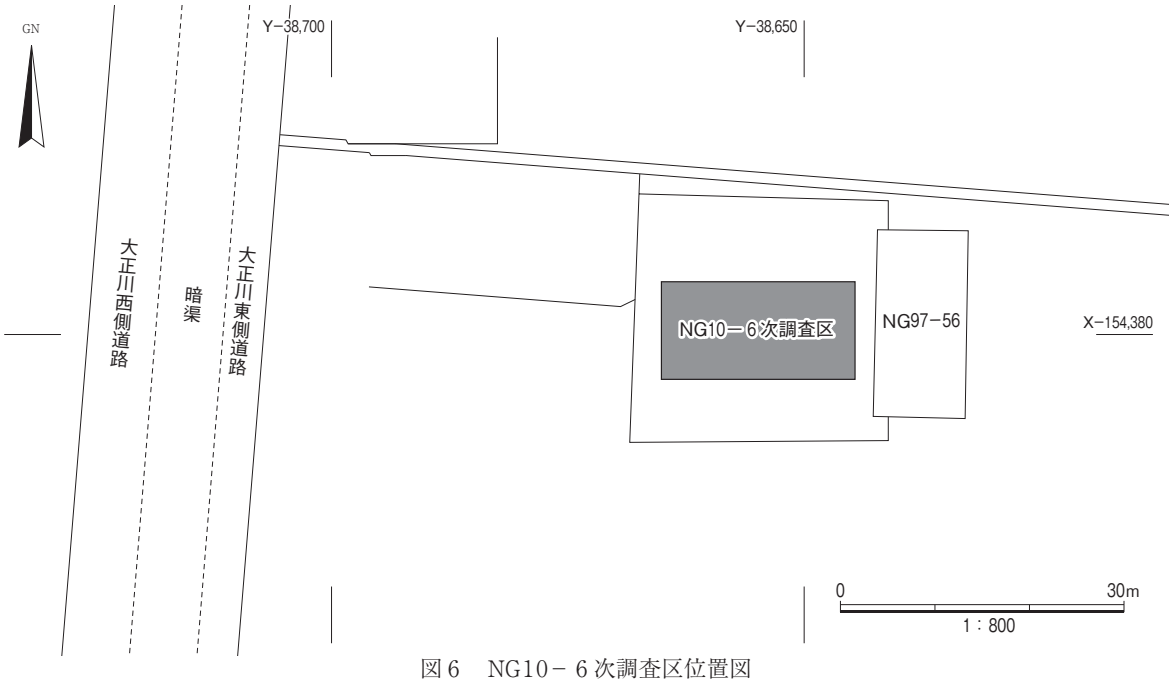



図６　NG10－６次調査区位置図

のち、平成22年12月21日より重機掘削を開始した。重機掘削は近世の作土層である後述の第２層までとし、これ以下は人力と重機掘削を併用して掘削を進めた。適宜、遺構や遺物の検出作業、図面作成、写真撮影などの記録作業を実施した。また、2011年１月13日には委託の基準点測量を、１月27日には委託の現地写真撮影を実施した。現地表下４m以下については、東西方向に小トレンチを設定して、現地表下５mまでの地層を確認した。同年２月16日に調査に係わる作業を終了し、その後は埋戻し、復旧などの諸作業を同年３月15日に終了し、撤収作業を完了した。

iv)調査報告書の作成

2011年６月から調査次数ごとに報告書の作成作業にかかり、出土遺物については、遺物台帳に登録後、遺構や地層ごとに整理して、遺物の洗浄・注記・抽出および接合のあと実測図を作成した。それぞれの実測図はデジタルトレースし、遺構や地層ごとに挿図とした。また、調査次数ごとに層序や遺構の平面および断面実測図を整理して、遺構については平面図と断面図の調整を行った。その後、報告書に掲載する遺構および地層断面図をデジタルトレースして挿図にした。

写真１　NG10－６次調査状況(東から)

発掘調査時に撮影した遺構や地層の写真は次数ごとにファイルに整理して収納したもののなかから報告書の図版や挿図の版下として抜粋したほか、遺物については新たに写真図版用に撮影したものを編集し、報告書に掲載した。以上の諸作業を行って印刷業者に入稿し、報告書を刊行した。

# 第Ⅱ章　調査の結果

## 第１節　NG10－２次調査

### １)層序

本調査地では層厚60～80㎝の現代盛土層(RK０層、NG０層)の下位、4.5mの間に第１～14層の地層を確認した(図７～11､図版１～２)。以下､各層の岩相および特徴を長原遺跡東北地区の標準層序(表４)および長原遺跡の標準層序(表５)と対比させながら記述する。

第１層：細礫を含む黄褐色シルト質極細粒～中粒砂の整地土層で、層厚約20～40㎝である。調査区の東部にのみ分布する。本層の上面で、18～19世紀の遺物を含む溝、土壙を検出した。この時期のRK２層・NG２層は、長原遺跡では多くの場合は作土層であるが、遺物の年代観から本層はこれらの層に対比される。

第２層：にぶい黄色のシルト質極細粒～細粒砂で整地土層である。層厚10～30㎝である。第１層の分布範囲をのぞく西側に存在する。本層の上面では17世紀初頭～中頃の土壙､溝を検出した。RK３層･NG３層も同遺跡では多くの場合は耕作土層であるが、下述する第３・４層を含め、遺物の年代観から、これらの層に対比される。

第３層：細礫を含む黄褐色シルト質極細砂の整地土層である。層厚は15～40㎝で、第１層の分布範囲をのぞく中央～西部で確認される。本層の上面で墳墓堂遺構SX335をはじめとする16世紀後半の遺構を検出した。

第４層：細礫を含む黄褐色極細粒～細粒砂の整地土層である。層厚は約20㎝である。第１層の分布範囲をのぞく中央～西部で確認されるが、西端部にも存在しない。本層の上面で溝SD404や土壙・柱穴などを検出した。量は多くないが15世紀後半～16世紀前半の遺物が遺構から出土している。

第５層：褐色シルト質極細粒～中粒砂の古土壌である。層厚は20～40

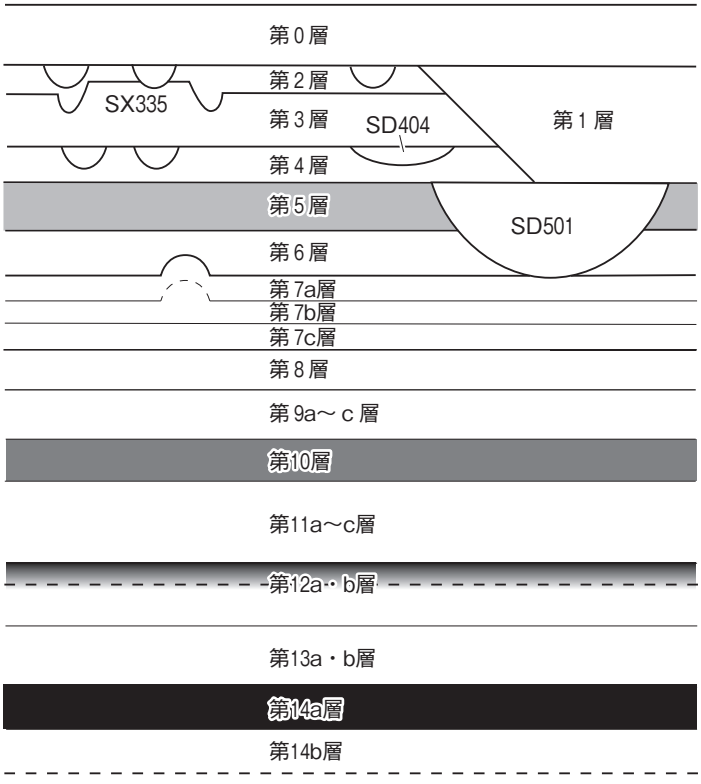



図７　NG10－２次調査地の地層と遺構の関係図

cmである。本層上面で東西方向の溝SD501を検出した。15世紀後半～16世紀初頭の遺物が出土している。RK３層・NG３層に対比しうる。

第６層：灰オリーブ～暗オリーブ灰色の極細粒～粗粒砂で氾濫堆積層である。上部は生物擾乱をうけて乱れている部分もある。層厚は30～40cmである。

第７層：第7a・7b・7c層の３層に細分した。遺物量は少ないが11世紀代の土器が出土している。RK4B層、NG4B層に対比される。第7a層は灰オリーブ色シルト質細粒砂の作土層で、層厚は10～20cmである。本層の上面で水田畦畔を検出した。第7b層は暗オリーブ灰色極細粒砂質シルトの作土層である。層厚は約20cmである。本層の上面でも地層断面では畦畔の高まりを確認しているが、いずれも第7a層上面の畦畔の直下であり、平面的な検出もできていないので、この面での水田の存在は疑わしい。第7c層は暗オリーブ灰色極細粒砂混りシルトの作土層である。層厚は15～30cmである。

第８層：暗緑灰色シルトの河成層である。層厚20～40cmである。

第９層：シルトが主体となる水成層で３層に細分できる。第9a層は暗緑灰色極細粒砂質シルトで生物擾乱や踏込みによって乱れている。層厚は約10～20cmである。RK7A層に相当する。第9b層は東半に分布している暗オリーブ灰～オリーブ黒色シルトで有機物を少量含む湿地の堆積層である。層厚５～10cmで東ほど厚くなっている。第9c層は灰色極細粒～粗粒砂の氾濫堆積層である。層厚は10～40cmで東ほど厚くなる。西半では上位の第9b層と収斂している。

第10層：有機物を多量に含むオリーブ黒色の粘土質シルトの暗色帯で、層中には有機物が帯状に堆積している。層厚は30～40cmである。RK7A層、NG7B層に相当する。

第11層：水成層と暗色帯の互層で３層に細分できる。地震による変形が認められた。第11a層はオリーブ黒色の粘土質シルトの湿地の堆積層で、シルト～粗粒砂のラミナを含む。層厚は10～30cmである。第11b層はオリーブ黒色細粒砂質シルトで淡い暗色帯を形成している。層厚は10～20cmである。第11c層はオリーブ黒色極細粒～細粒砂からなる水成層である。層厚は約10cmで巣穴が観察される。

第12層：第12a・12b層の２層に細分できる。第12a層は灰色極細粒砂混りシルトからなる淡い暗色帯で層厚は20～30cmである。地震による変形が認められる。第12b層は灰色極細粒砂～シルトからなる河成層である。層厚は５～10cmである。

第13層：ラミナが観察される河成層で上部は暗色化している。第13a・13b層に細分できる。第13a層はオリーブ黒色極細粒砂質シルトで弱く暗色化している。層厚は約５cmである。細片であるが本層上面で韓式系土器が出土した。隣接する調査地との比較からRK7B～9C層、NG7B～8C層に比定される。第13b層は上部は細粒な堆積物、下部は粗粒～極粗粒砂のラミナを含むシルト～細粒砂で、最下部にはシルト質粘土が堆積する水成層である。層厚は約60cmである。

第14層：第14a・14b層の２層に細分できる。第14a層は黒褐色シルト質粘土で暗色帯を形成している。層厚は10～30cmである。RK10C層、NG9C層に相当する。第14b層は暗オリーブ灰色極細粒砂混りシルトの水成層である。生物擾乱を受けている。層厚は約45cm以上で下面は掘削深度限界のため確認できなかった。

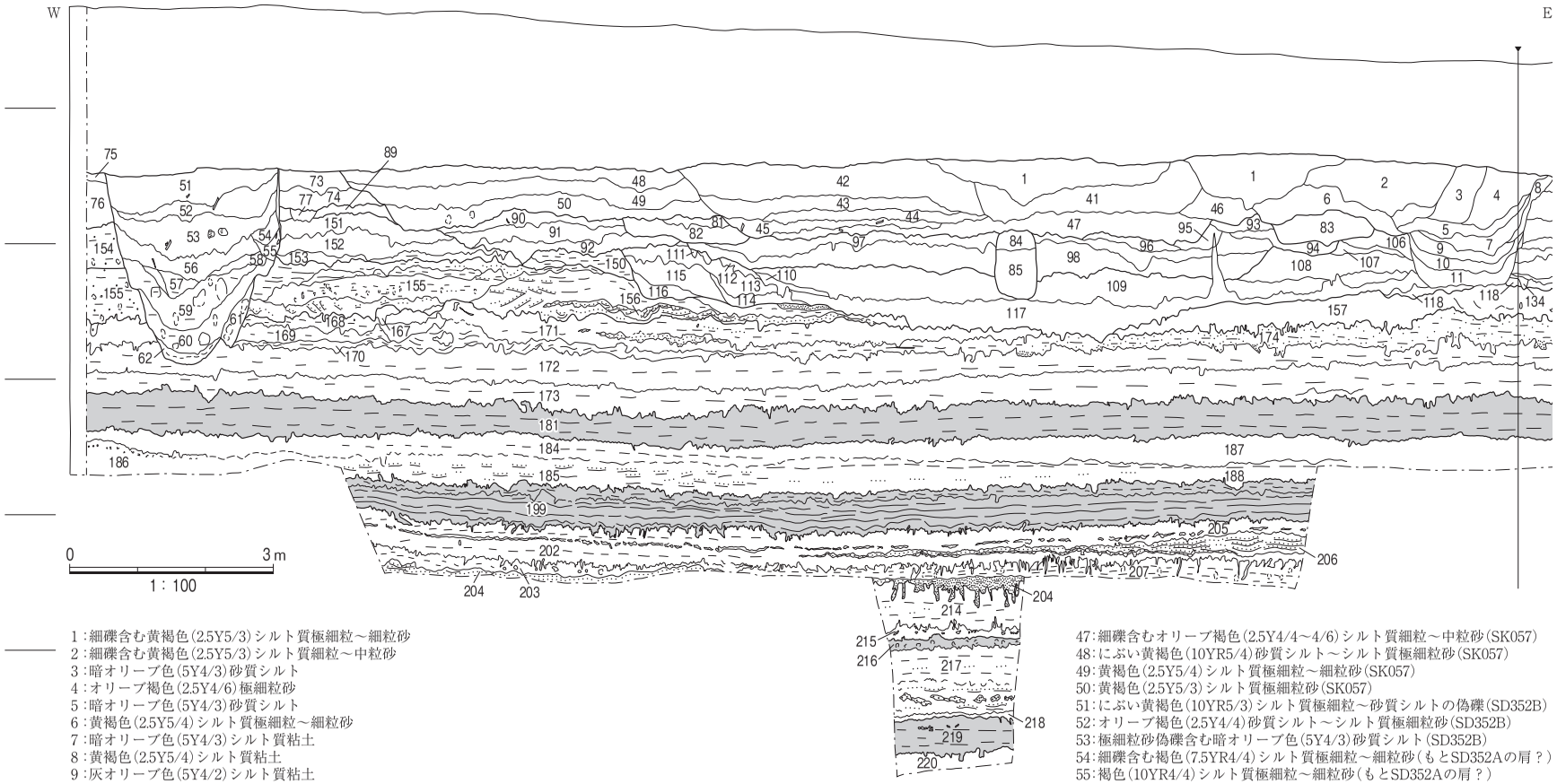



図８　北壁地層断面図（１）

1：細礫含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質極細粒～細粒砂
2：細礫含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細粒～中粒砂
3：暗オリーブ色（5Y4/3）砂質シルト
4：オリーブ褐色（2.5Y4/6）極細粒砂
5：暗オリーブ色（5Y4/3）砂質シルト
6：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～細粒砂
7：暗オリーブ色（5Y4/3）シルト質粘土
8：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質粘土
9：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土
10：暗オリーブ色（5Y4/3）シルト質粘土
11：灰～オリーブ黒色（7.5Y4/1～3/1）砂質シルト
12：オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質極細粒砂
13：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4～4/6）シルト質極細粒～細粒砂
14：オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト質極細粒砂
15：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト
16：細礫含む暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質極細粒～中粒砂
17：黄褐色（2.5Y5/4）砂質シルトとシルト質極細粒～細粒砂の偽礫（SK010）
18：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質極細粒～細粒砂（SK010）
19：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルトとシルト質極細粒～細粒砂の偽礫（SK010）
20：灰オリーブ色（5Y4/2）シルトとシルト質極細粒～細粒砂（SK010）
21：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト質極細粒砂～砂質シルト（SK010）
22：シルト偽礫含むオリーブ黒色（5Y3/2）シルト質極細粒砂（SK010）
23：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質極細粒～細粒砂（SK010）
24：オリーブ褐色（2.5Y4/3）細粒砂とシルトおよび砂質シルトの偽礫（SK010）
25：黄褐色（2.5Y5/4）極細粒～細粒砂（SK010）
26：黄褐色（2.5Y5/6）砂質シルト（SK010）
27：黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂（SK010）
28：細礫含む暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質極細粒～細粒砂（SK036）
29：炭含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト（SK036）
30：暗オリーブ色（5Y4/3）砂質シルト（SK036）
31：暗オリーブ色（5Y4/3）シルト質極細粒砂（SK036）
32：暗オリーブ色（5Y4/3）シルト質極細粒～細粒砂
33：細礫含む黄褐色（10YR5/6）シルト質極細粒～細粒砂
34：オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒～中粒砂
35：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト質極細粒～細粒砂
36：細礫含む暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質極細粒砂
37：細礫含む暗オリーブ色（5Y4/3）シルト質極細粒砂
38：灰オリーブ色（5Y5/3）砂質シルト
39：細礫含む暗オリーブ色（5Y4/4）極細粒砂
40：細礫含む褐色（10YR4/4）シルト質極細粒～細粒砂
41：細礫・炭含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細粒砂（SK057）
42：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～細粒砂（SK057）
43：細礫含む黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～細粒砂（SK057）
44：細礫含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細粒～中粒砂（SK057）
45：オリーブ褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒砂（SK057）
46：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質極細粒～細粒砂（SK057）
47：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4～4/6）シルト質細粒～中粒砂（SK057）
48：にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト～シルト質極細粒砂（SK057）
49：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～細粒砂（SK057）
50：黄褐色（2.5Y5/3）シルト質極細粒砂（SK057）
51：にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質極細粒～砂質シルトの偽礫（SD352B）
52：オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質シルト～シルト質極細粒砂（SD352B）
53：極細粒砂偽礫含む暗オリーブ色（5Y4/3）砂質シルト（SD352B）
54：細礫含む褐色（7.5YR4/4）シルト質極細粒～細粒砂（もとSD352Aの肩？）
55：褐色（10YR4/4）シルト質極細粒～細粒砂（もとSD352Aの肩？）
56：暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）砂質シルト（SD352A）
57：暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト質極細粒～細粒砂（SD352A）
58：暗緑灰色（10GY3/1）砂質シルト（SD352A）
59：細粒～中粒砂偽礫含む暗緑灰色（7.5GY3/1）砂質シルト（SD352A）
60：暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂質シルト～粘土質シルト（SD352A）
61：暗緑灰色（10GY4/1）極細粒～細粒砂（SD352A）
62：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混りシルト質粘土（SD352A）
63：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質極細粒砂（第１層）
64：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒砂（第１層）
65：粗粒砂部分的含むにぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質極細粒砂（第１層）
66：細礫含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質極細粒～中粒砂（第１層）
67：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～粗粒砂（第１層）
68：オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト（第１層）
69：細礫含む黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～細粒砂（第１層）
70：褐色（10YR4/4）砂質シルト（第１層）
71：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質極細粒～中粒砂（第１層）
72：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質極細粒～細粒砂（第２層）
73：細礫含む黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～細粒砂（第２層）
74：細礫含む黄褐色（2.5Y5/4）シルト質細粒砂（第２層）

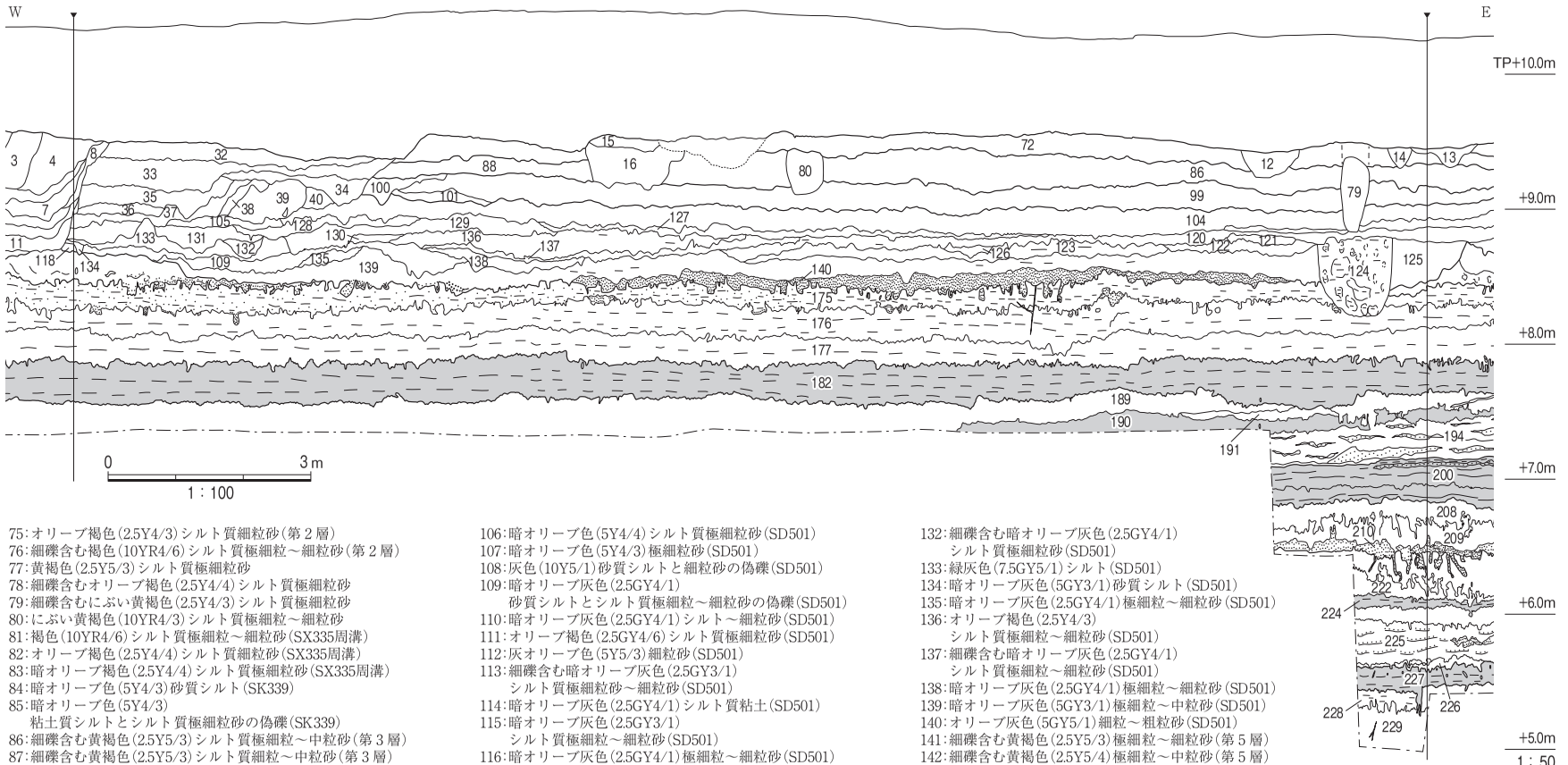
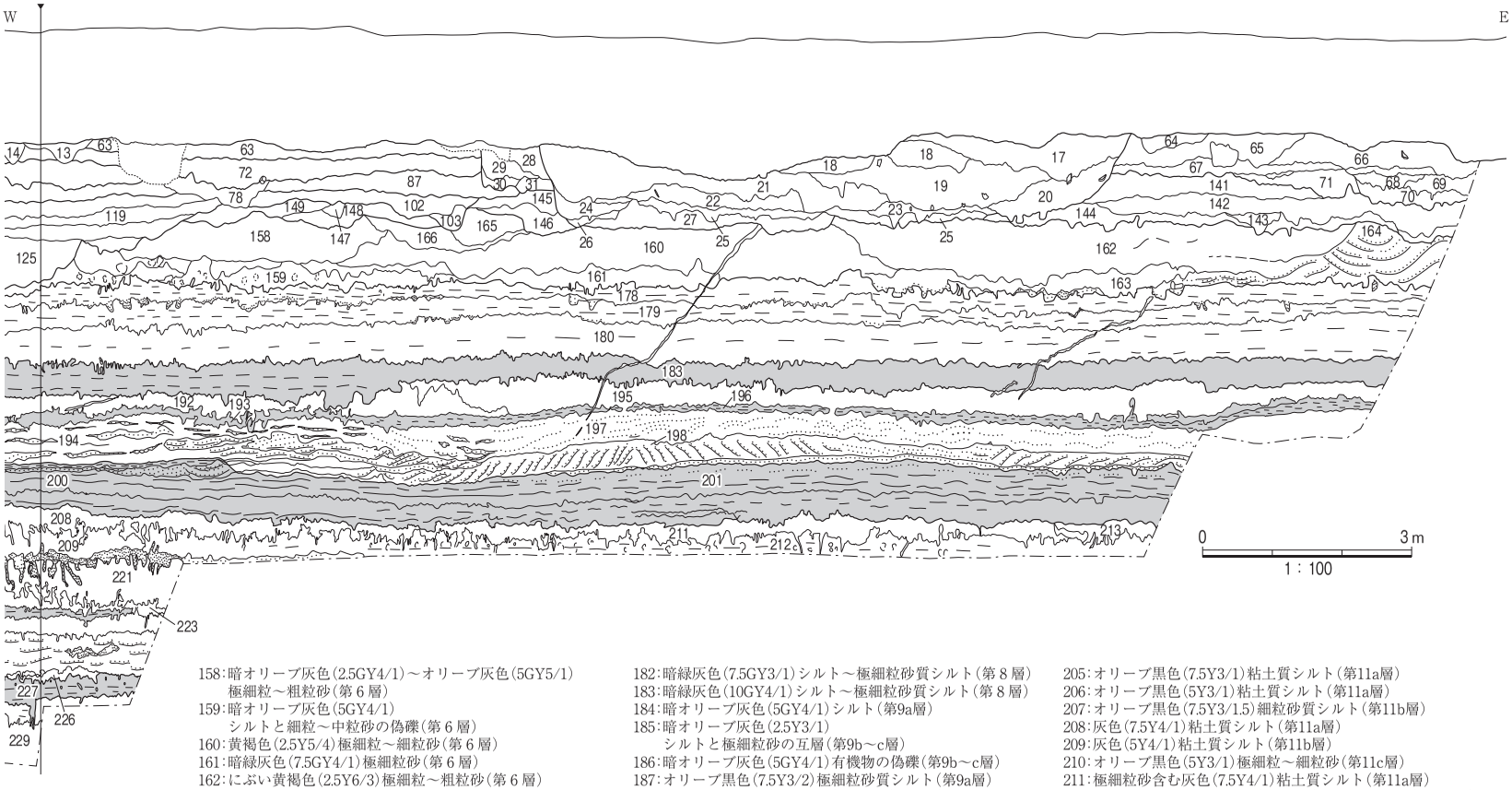


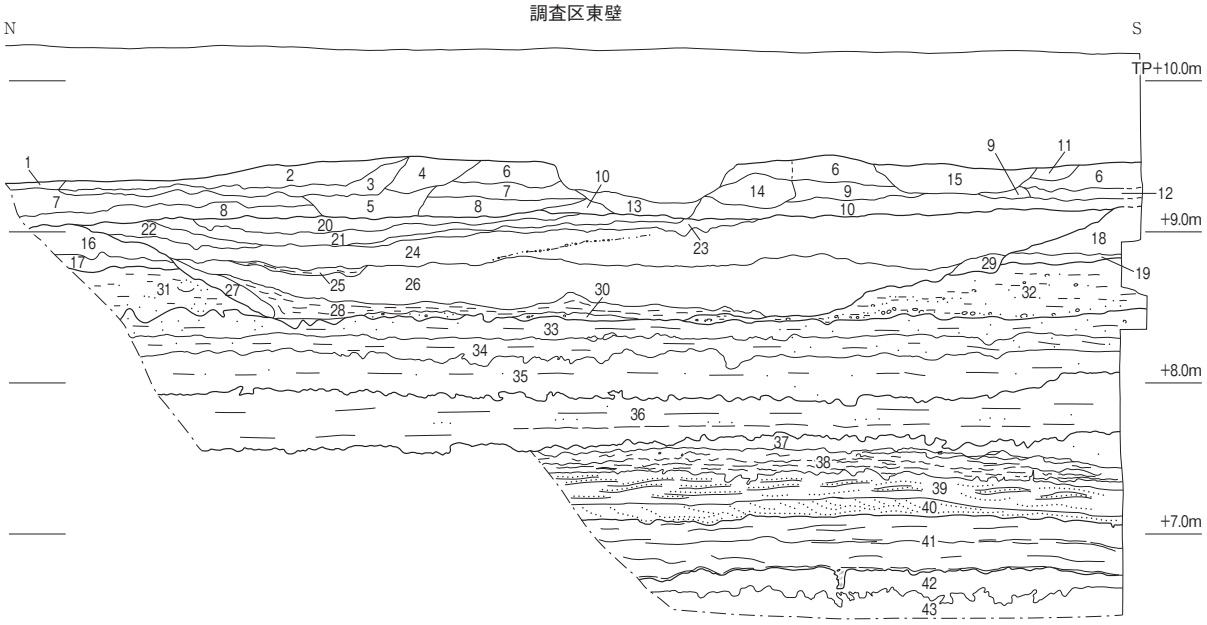

図9　北壁地層断面図（2）

75：オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質細粒砂（第2層）
76：細礫含む褐色（10YR4/6）シルト質極細粒～細粒砂（第2層）
77：黄褐色（2.5Y5/3）シルト質極細粒砂
78：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質極細粒砂
79：細礫含むにぶい黄褐色（2.5Y4/3）シルト質極細粒砂
80：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質極細粒～細粒砂
81：褐色（10YR4/6）シルト質極細粒～細粒砂（SX335周溝）
82：オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質細粒砂（SX335周溝）
83：暗オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質極細粒砂（SX335周溝）
84：暗オリーブ色（5Y4/3）砂質シルト（SK339）
85：暗オリーブ色（5Y4/3）
　粘土質シルトとシルト質極細粒砂の偽礫（SK339）
86：細礫含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質極細粒～中粒砂（第3層）
87：細礫含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細粒～中粒砂（第3層）
88：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質極細粒砂（第3層）
89：細礫含む黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒砂（第3層）
90：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒砂（第3層）
91：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質極細粒～中粒砂（第3層）
92：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質細粒～中粒砂（第3層）
93：細礫含む褐色（10YR4/4）シルト質極細粒砂（SX335盛土）
94：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒～細粒砂（SX335盛土）
95：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト（SX335盛土）
96：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）
　シルト質極細粒～細粒砂（SX335盛土）
97：暗オリーブ色（5Y4/3）シルト質極細粒～細粒砂（SX335盛土）
98：灰オリーブ色（7.5Y4/2）砂質シルトと
　シルト質極細粒～細粒砂の偽礫（SX335盛土）
99：細礫含む黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒～細粒砂（第4層）
100：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質極細粒砂（第4層）
101：中粒砂少し含む灰オリーブ色（5Y5/2）シルト質極細粒砂（第4層）
102：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/6）極細粒～中粒砂（SD501）
103：オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト（SD501）
104：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/6）極細粒～細粒砂（SD501）
105：オリーブ灰色（10Y4/2）砂質シルトの偽礫（SD501）
106：暗オリーブ色（5Y4/4）シルト質極細粒砂（SD501）
107：暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒砂（SD501）
108：灰色（10Y5/1）砂質シルトと細粒砂の偽礫（SD501）
109：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）
　砂質シルトとシルト質極細粒～細粒砂の偽礫（SD501）
110：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト～細粒砂（SD501）
111：オリーブ褐色（2.5GY4/6）シルト質極細粒砂（SD501）
112：灰オリーブ色（5Y5/3）細粒砂（SD501）
113：細礫含む暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）
　シルト質極細粒砂～細粒砂（SD501）
114：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト質粘土（SD501）
115：暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）
　シルト質極細粒～細粒砂（SD501）
116：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒～細粒砂（SD501）
117：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト質粘土（SD501）
118：暗緑灰色（7.5GY4/1）極細粒～中粒砂（SD501）
119：灰オリーブ色（5Y4/2）
　砂質シルト～シルト質極細粒砂（SD501）
120：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質極細粒砂（SD501）
121：オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト質極細粒砂（SD501）
122：暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト質極細粒～細粒砂（SD501）
123：暗緑灰色（7.5GY4/1）極細粒砂～シルト
124：暗オリーブ灰色（5GY4/1）
　シルトとシルト質極細粒～細粒砂の偽礫
125：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）
　砂質シルトと細粒～中粒砂の偽礫（SD501）
126：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト質極細粒砂（SD501）
127：暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質極細粒砂（SD501）
128：細礫含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）
シルト質極細粒～細粒砂（SD501）
129：暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト質極細粒砂（SD501）
130：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂質シルト（SD501）
131：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）
　砂質シルトとシルト質極細粒～細粒砂の偽礫（SD501）
132：細礫含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）
　シルト質極細粒砂（SD501）
133：緑灰色（7.5GY5/1）シルト（SD501）
134：暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂質シルト（SD501）
135：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒～細粒砂（SD501）
136：オリーブ褐色（2.5Y4/3）
　シルト質極細粒～細粒砂（SD501）
137：細礫含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）
　シルト質極細粒～細粒砂（SD501）
138：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒～細粒砂（SD501）
139：暗オリーブ灰色（5GY3/1）極細粒～中粒砂（SD501）
140：オリーブ灰色（5GY5/1）細粒～粗粒砂（SD501）
141：細礫含む黄褐色（2.5Y5/3）極細粒～細粒砂（第5層）
142：細礫含む黄褐色（2.5Y5/4）極細粒～中粒砂（第5層）
143：にぶい黄褐色（2.5Y6/4）極細粒砂（第5層）
144：黄褐色（2.5Y5/4）細粒～中粒砂（第5層）
145：細礫含む暗オリーブ色（5Y4/3）
　シルト質極細粒～細粒砂（第5層）
146：灰オリーブ色（7.5Y5/2）極細粒～細粒砂（第5層）
147：オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質極細粒砂（第5層）
148：暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒～細粒砂（第5層）
149：暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒～細粒砂（第5層）
150：褐色（10YR4/4）シルト質極細粒砂（第5層）
151：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/4）
　シルト質細粒砂（第5層）
152：細礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）
　シルト質細粒～中粒砂（第5層）
153：細礫含む灰オリーブ色（5Y4/2）
　シルト質極細粒砂（第5層）
154：褐色（7.5YR4/4）シルト質極細粒砂（第5層）
155：暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）～オリーブ灰色（2.5GY5/1）
　シルト～細粒砂（第6層）
156：暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト～粗粒砂（第6層）
157：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒～細粒砂（第6層）

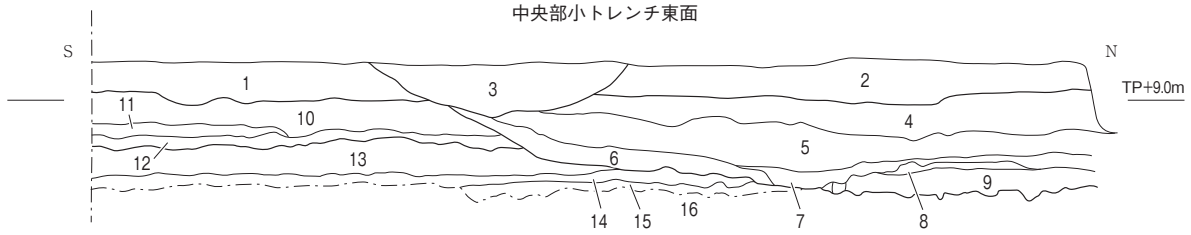



158：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)～オリーブ灰色(5GY5/1)
極細粒～粗粒砂(第６層)
159：暗オリーブ灰色(5GY4/1)
シルトと細粒～中粒砂の偽礫(第６層)
160：黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～細粒砂(第６層)
161：暗緑灰色(7.5GY4/1)極細粒砂(第６層)
162：にぶい黄褐色(2.5Y6/3)極細粒～粗粒砂(第６層)
163：暗オリーブ灰色(5GY4/1)
シルトと細粒～中粒砂の偽礫(第６層)
164：黄褐色(2.5Y5/3)極細粒～細粒砂(第６層)
165：細礫含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～粗粒砂(第６層)
166：灰オリーブ色(7.5Y5/2)極細粒砂(第６層)
167：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質極細粒砂(第7a層)
168：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質極細粒砂(第7a層)
169：暗オリーブ灰色(2.5GY3.5/1)シルト質極細粒砂(第7a層)
170：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒～細粒砂(第7a層)
171：灰色(7.5Y4/1)シルト質極細粒～細粒砂(第7a層)
172：灰色またはオリーブ黒色(10Y3.5/1)細粒砂(第7b層)
173：暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂質シルト(第7c層)
174：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質細粒砂(第7a層)
175：オリーブ黄色(7.5Y3/2)極細粒～細粒砂(第7a層)
176：オリーブ黄色(10Y3/1)極細粒砂質シルト(第7b層)
177：暗オリーブ灰色 (5GY3.5/1)極細粒砂質シルト(第7c層)
178：オリーブ黒色(10Y3/1.5)シルト質極細粒砂(第7a層)
179：オリーブ黒色(10Y3/1.5)極細粒砂質シルト(第7b層)
180：オリーブ灰色(2.5GY5/1)極細粒砂質シルト(第7c層)
181：暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト～極細粒砂質シルト(第８層)
182：暗緑灰色(7.5GY3/1)シルト～極細粒砂質シルト(第８層)
183：暗緑灰色(10GY4/1)シルト～極細粒砂質シルト(第８層)
184：暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト(第9a層)
185：暗オリーブ灰色(2.5Y3/1)
シルトと極細粒砂の互層(第9b～c層)
186：暗オリーブ灰色(5GY4/1)有機物の偽礫(第9b～c層)
187：オリーブ黒色(7.5Y3/2)極細粒砂質シルト(第9a層)
188：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト(第9b層)
189：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒～細粒砂(第9a層)
190：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト(第9b層)
191：灰オリーブ灰色または黒色(2.5GY2.5/1)
極細粒砂質シルト(第9a層)
192：灰色(10Y4/1)極細粒砂質シルト(第9a層)
193：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト(第9b層)
194：暗緑灰色(5GY4/1)極細粒～粗粒砂(第9c層)
195：暗緑灰色(10GY4/1)極細粒～粗粒砂(第9a層)
196：有機物含むオリーブ黒色(10Y3/1)シルト(第9b層)
197：オリーブ黒色(10Y3/2)極細粒～粗粒砂(第9c層)
198：灰色(10Y4/1)中粒～粗粒砂(第9c層)
199：オリーブ黒色(7.5Y3/2)有機物と粘土質シルト(第10層)
200：オリーブ黒色(5Y3/1)有機物と粘土質シルト(第10層)
201：オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土(第10層)
202：有機物少し含むオリーブ黒色(7.5Y3/1)
粘土質シルト(第11a層)
203：オリーブ黒色(7.5Y3/1.5)
シルト質細粒砂～細粒砂質シルト(第11b層)
204：灰色(7.5Y4/1)細粒～中粒砂(第11c層)
205：オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト(第11a層)
206：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト(第11a層)
207：オリーブ黒色(7.5Y3/1.5)細粒砂質シルト(第11b層)
208：灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト(第11a層)
209：灰色(5Y4/1)粘土質シルト(第11b層)
210：オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒～細粒砂(第11c層)
211：極細粒砂含む灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト(第11a層)
212：オリーブ黒色または灰色(5Y3.5/1)粘土質シルト(第11b層)
213：オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト(第11a層)
214：灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト(第12a層)
215：灰色(7.5Y4/1)極細粒砂～シルト(第12b層)
216：オリーブ黒～灰色(10Y3.5/1)極細粒砂質シルト(第13a層)
217：暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土(第13b層)
218：オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト(第13b層)
219：黒褐色(2.5Y3/1)シルト(第14a層)
220：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土(第14b層)
221：灰色(7.5Y4/1)極細粒砂質シルト(第12a層)
222：オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂～シルト(第12b層)
223：灰色(10Y4/1)極細粒砂～シルト(第12b層)
224：オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂質シルト(第13a層)
225：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土(第13b層)
226：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土(第13b層)
227：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土(第14a層)
228：黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト(第14b層)
229：オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルト(第14b層)

図10　北壁地層断面図(３)




1：細礫含む褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～中粒砂(第1層)
2：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～細粒砂(第1層)
3：オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒～細粒砂(第1層)
4：細礫含む褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂(第1層)
5：細礫含む褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～細粒砂(第1層)
6：細礫含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第1層)
7：細礫含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～中粒砂(第1層)
8：細礫含む褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～細粒砂(第1層)
9：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂(第1層)
10：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂(第1層)
11：暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第1層)
12：灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂(第1層)
13：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒～細粒砂
14：細礫含む黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒～細粒砂
15：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトとシルト質細粒砂の偽礫
16：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂(第5層)
17：灰オリーブ色(7.5Y4/2)細粒砂(第5層)
18：オリーブ灰色(10Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂(第5層)
19：オリーブ灰色(10Y4/2)細粒～中粒砂(第5層)
20：細礫含む褐色～暗褐色(10YR4/4～3/4)シルト質細粒砂(SD501)
21：細礫含む褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～細粒砂(SD501)
22：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂～砂質シルト(SD501)
23：灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質細粒砂(SD501)
24：灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂質シルト～粘土質シルト(SD501)
25：オリーブ黒色(10Y3/2)砂質シルト(SD501)
26：暗オリーブ灰色(5GY4/1)
　シルトとシルト質細粒～中粒砂の偽礫(SD501)
27：灰色(7.5Y4/1)極細粒～細粒砂(SD501)
28：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土(SD501)
29：暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒～細粒砂(SD501)
30：灰オリーブ色(7.5Y4/2)細粒～粗粒砂(SD501)
31：灰色(7.5Y4/1)極細粒～粗粒砂(第6層)
32：オリーブ灰色(2.5GY5/1)極細粒～粗粒砂(第6層)
33：オリーブ黒色(7.5Y2/2)シルト質極細粒～粘土質シルト(第7a層)
34：オリーブ黒色(7.5Y2/1)極細粒砂質シルト(第7b層)
35：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)極細粒砂質シルト(第7c層)
36：暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト～極細粒砂(第8層)
37：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト(第9a層)
38：極細粒砂・有機物含む暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土質シルト(第9b層)
39：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂(第9c層)
40：灰色(10Y4/1)細粒～粗粒砂(第9c層)
41：有機物含む灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト(第10層)
42：灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト(第11a層)
43：粘土含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト(第11b層)




1：細礫少し含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質極細粒砂(第4層)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/6)細礫混りシルト質極細粒砂(第4層)
3：オリーブ褐色(2.5Y4/5)細礫混りシルト質極細粒～細粒砂(SD404)
4：オリーブ褐色または暗オリーブ褐色(2.5Y3.5/3)
　シルト～シルト質極細粒砂(全体に偽礫目立つ、SD501)
5：暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト・シルト質極細粒～細粒砂の偽礫(SD501)
6：暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒～細粒砂(SD501)
7：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂質シルト～シルト質粘土(SD501)
8：暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂質シルト～シルト質細粒砂(SD501)
9：暗オリーブ色(5Y4/4)極細粒～粗粒砂(SD501)
10：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂(第5層)
11：オリーブ灰色(10Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂(第5層)
12：暗オリーブ色(6Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第5層)
13：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒～粗粒砂(第6層)
14：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂質シルト～細粒砂(第6層)
15：オリーブ黒色(7.5Y3/2)極細粒～細粒砂(第6層)
16：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)～オリーブ黒色(7.5Y3/2)
　砂質シルト～下部はシルト(第7a層)

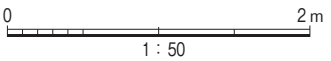



図11　東壁・その他の地層断面図

２）遺構と遺物

ｉ）平安時代以前の遺構と遺物

湿地であった本調査地が比較的安定した状態になり始めるのは飛鳥時代である。第９層は生物擾乱を受けて乱れた地層であったため、上面で平面的な調査を行ったが耕作痕跡や遺構は確認できなかった。遺物はいずれも細片であるが６世紀末～７世紀初頭の須恵器杯身などが出土している。本格的な土地利用が確認できるのは第９層以上であり、調査地は耕作地として利用された。第9a～9c層は作土層であるが、各層の境界もしくは層内には氾濫堆積である砂層の痕跡が見られる。

第7a層の上面では平安時代中～後期の水田畦畔SR701～705を検出した（南北方向４条、東西方向１条、図12、図版３）。ここではその遺構について述べたのち、水田作土およびその他の各層から出土した古墳～平安時代の遺物を報告する。

SR701　調査区の東端部で検出した。幅0.8m、高さ0.1m前後の東西方向の水田畦畔である。同じ方向の畦畔はほかには検出されなかった。

SR702　調査区の東部で検出した。幅0.7m、高さ0.1m強の南北方向の水田畦畔である。調査区の北から南に及んでいる。周辺には踏込みの痕跡が多く見られた。中ほどで途切れるのは水口ではなく、後述する東西方向の溝SD501に壊されているからである。

SR703　調査区の中央部やや東寄りで検出した。幅0.8m、高さ0.1mの南北方向の水田畦畔である。調査区の北から南に及んでいる。

SR704　調査区の中央部で検出した。幅0.7m、高さ0.1m弱の南北方向の水田畦畔である。北半部は後述するSD501に壊されている。

SR705　調査区の中央部西寄りで検出した。幅1.0m、高さ0.1mの南北方向の水田畦畔である。北半部は残りが悪くて検出できなかった。この畦畔より西側は地形もやや低くなっており、砂質の強い地層が堆積している。水田の耕作は西部には及んでいなかったと考えられる。

**各層の遺物**

上記の水田作土およびほかの各層から出土した古墳～平安時代の遺物を報告する（図13、図版14）。

１は韓式系土器の体部から底部にかけての破片である。細かい格子目タタキで整形している。第13a層の上面から出土した。古墳時代中期頃のものである。

２～７は須恵器である。２は古墳時代後期の杯蓋、３・４は飛鳥時代、７世紀前半の杯身である。７は７世紀代の壺である。口頸部を欠いているが、３段構成で接合されていた可能性がある。体部はタタキ整形の痕跡が認められる。５は奈良時代、８世紀前半の杯蓋である。６は８世紀代の高台付杯である。２は後述する室町時代の溝SD501の埋土に混入して出土した。３・４は第9a層から出土した。５～７は第８層から出土した。

８～11は土師器である。８～10は奈良時代、８世紀代の杯である。８は第9a層から出土した。９・10は第８層から出土した。11は11世紀前半頃の皿である。第６層から出土した。

12～15は黒色土器である。12は両面黒色のB類の椀であるが、黒色化が不完全で一部が土師質である。13～15は内面黒色のA類の椀である。13は黒色の部分がとれてしまっている。12は第７層から

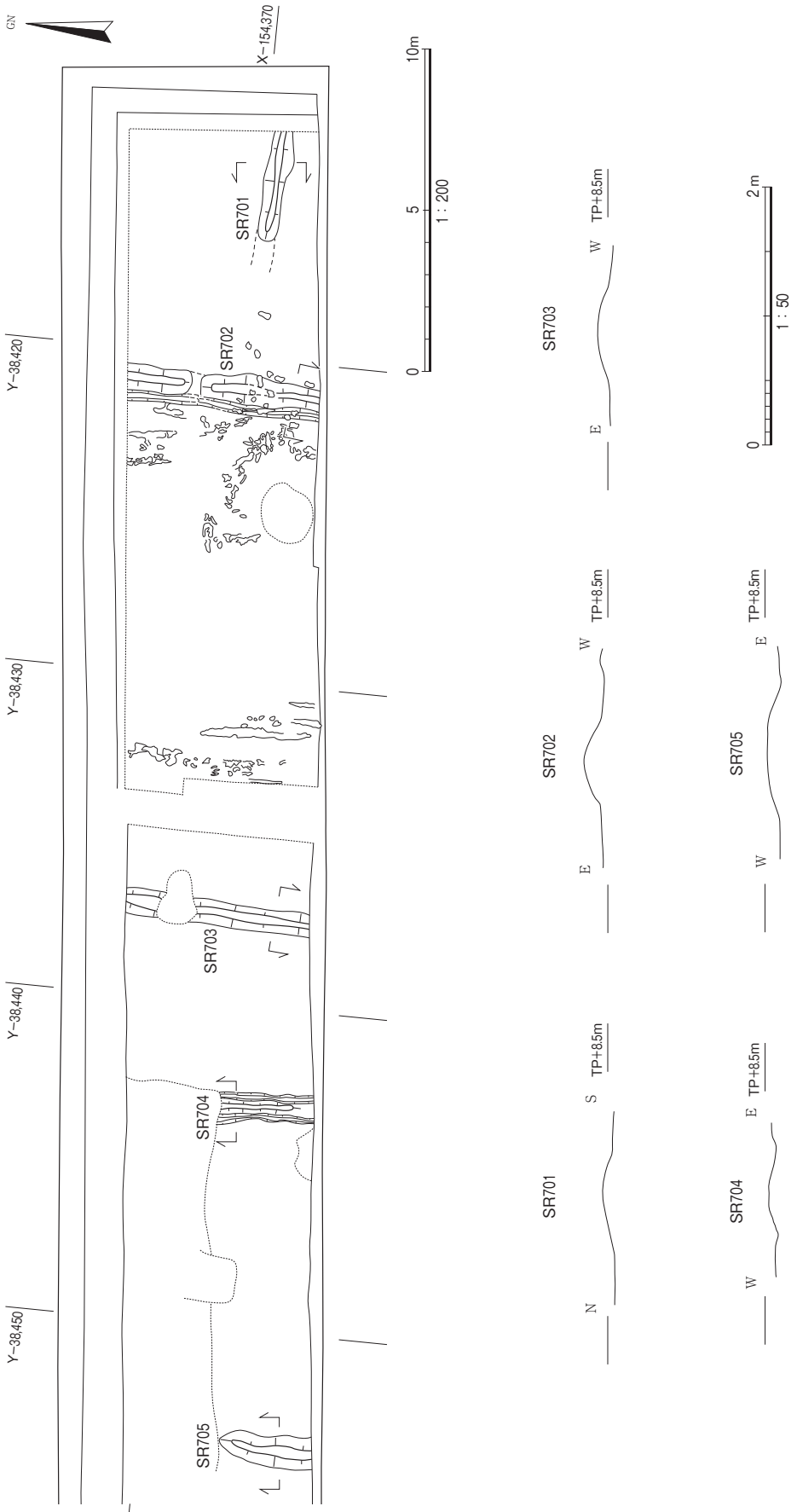



図12　第7a層上面遺構平面・断面図

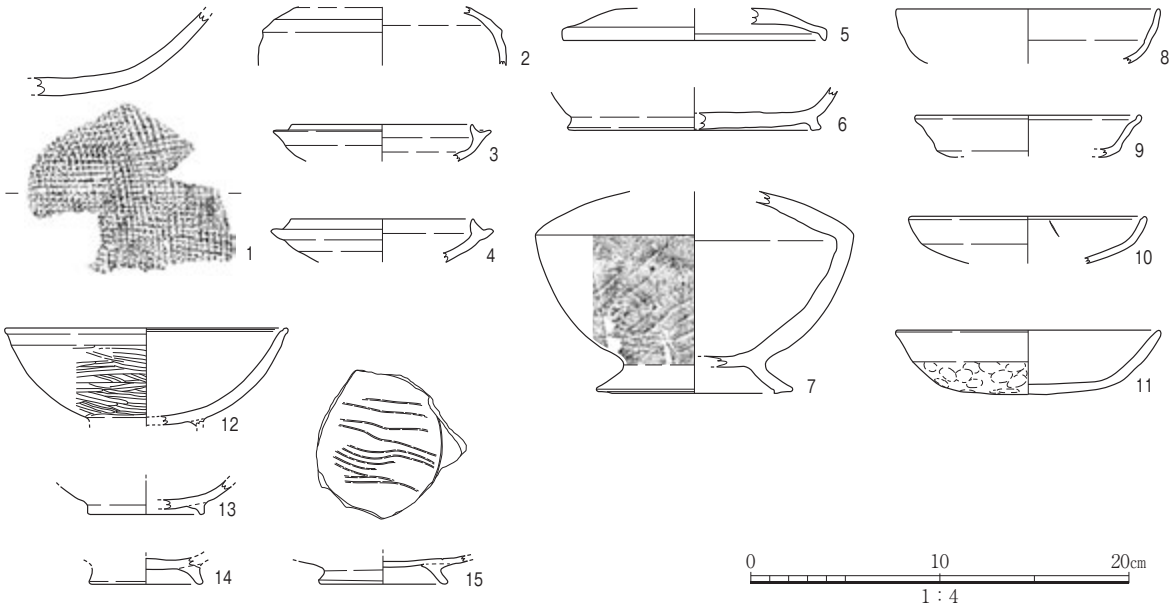



図13　古墳～平安時代の出土遺物実測図

第13a層上面（1）、第9a層（3・4・8）、第8層（5～7・9・10）、第7層(12)、第6層(11・13・14)、SD501（2・15）

出土した。13・14は第6層から出土した。15は室町時代のSD501の埋土に混入して出土した。第7a層の上面で検出した水田の年代は、第7層から出土した12や、その上を覆う第6層から出土した11・13・14の年代観から11世紀前半頃と考えられる。

ⅱ）室町時代の遺構と遺物

周辺を含む広い範囲に影響を及ぼして第7層の水田を廃絶させた氾濫堆積層（第6層）の上位に形成された古土壌である第5層の上面から、さらに上位の第3層上面までは室町時代の生活面である。出土遺物の年代観によれば15世紀から16世紀にかけてのものと考えられる。以下、遺構面ごとに遺構・遺物の状況を報告する。

ａ）第5層上面の遺構と遺物

第5層の上面では東西方向の溝SD501を検出した。調査区の大部分をSD501が占めており、ほかに顕著な遺構は見られなかった。

SD501　幅6.8m、深さ0.7mという大規模な溝で、調査区の西から約20m付近で北へ直角に曲がる（図11･14、原色図版1、図版4）。両端までの完全な断面は調査区東壁で記録できた（図11）。埋土は、上部がオリーブ褐色～暗オリーブ灰色のシルト～シルト質細粒砂からなる偽礫層で、埋め立てられた地層である。下部は暗オリーブ灰色の極細粒～粗粒砂や砂質シルト～シルト質極細粒～細粒砂である。東隣地のNG09－3次調査でも確認されており［大阪文化財研究所2012］、東西方向の長さは70m以上ある。集落、あるいは屋敷を区画するための濠と考えられる。15世紀から16世紀にかかると考えられる遺物が出土しており、それらには出土層位によって特に年代差はないため、一括して報告する。

土師器皿16～19・羽釜32、瓦質土器ミニチュア釜20・擂鉢37・羽釜38～41・甕43・44・火鉢45、中国産青磁碗21～27、白磁皿28・29、青花碗30・31、備前焼擂鉢33～35・壺36・甕42、軒丸瓦46・47・丸瓦48～50・平瓦52・雁振瓦51、漆椀53を図示した（図15・16、図版15・16）。

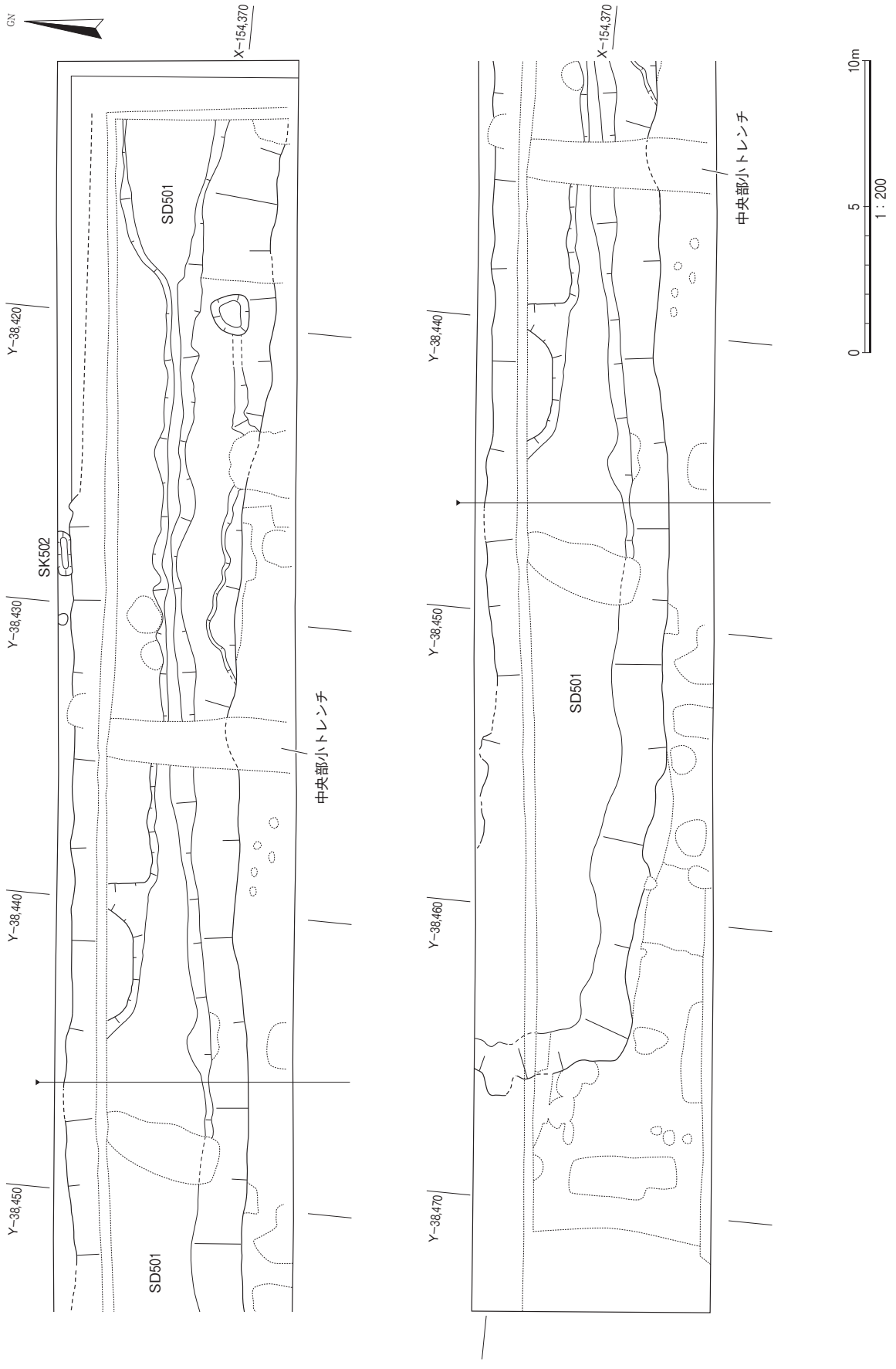



図14　第５層上面遺構平面図

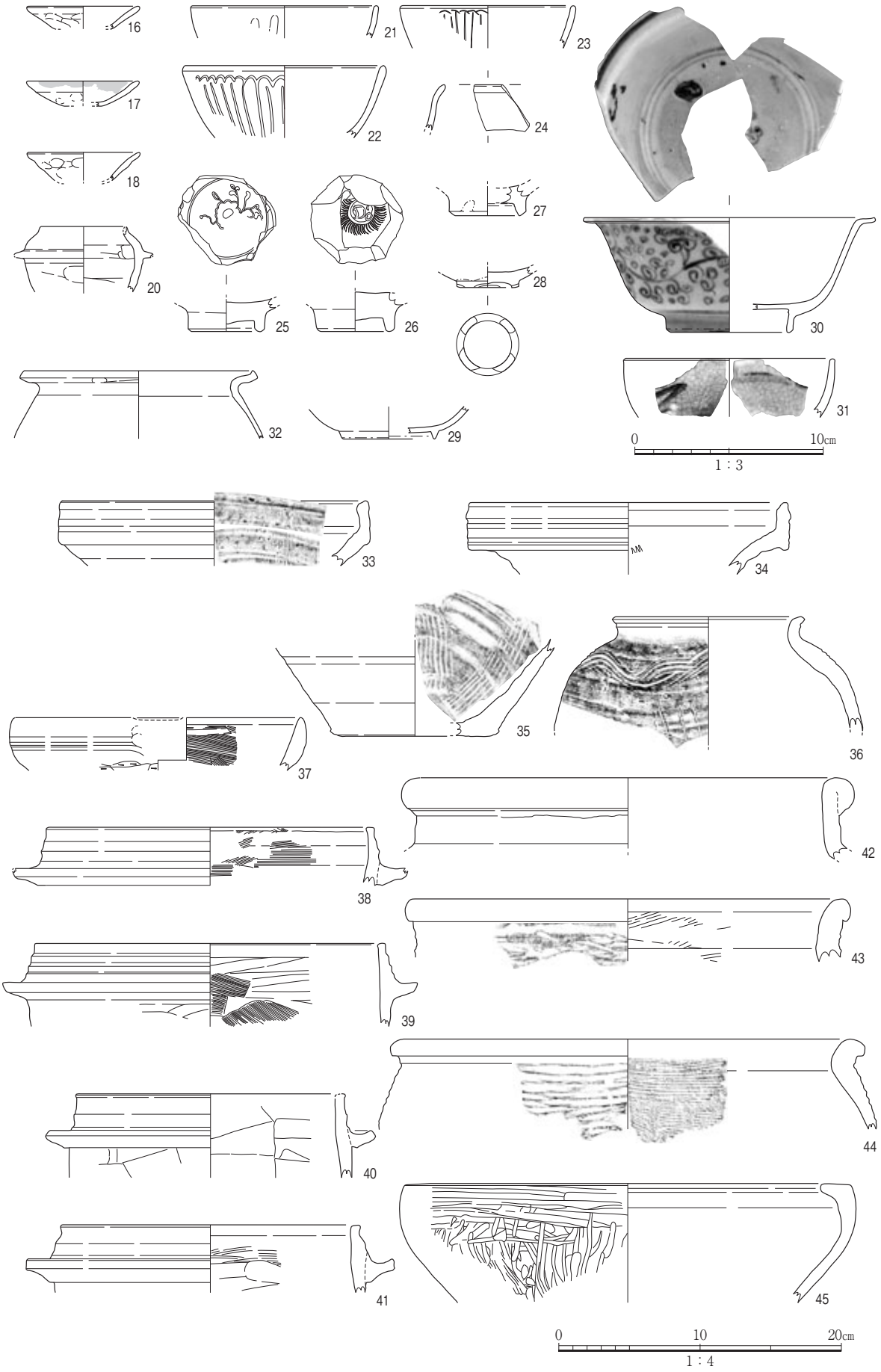



図15　SD501出土遺物実測図（1）

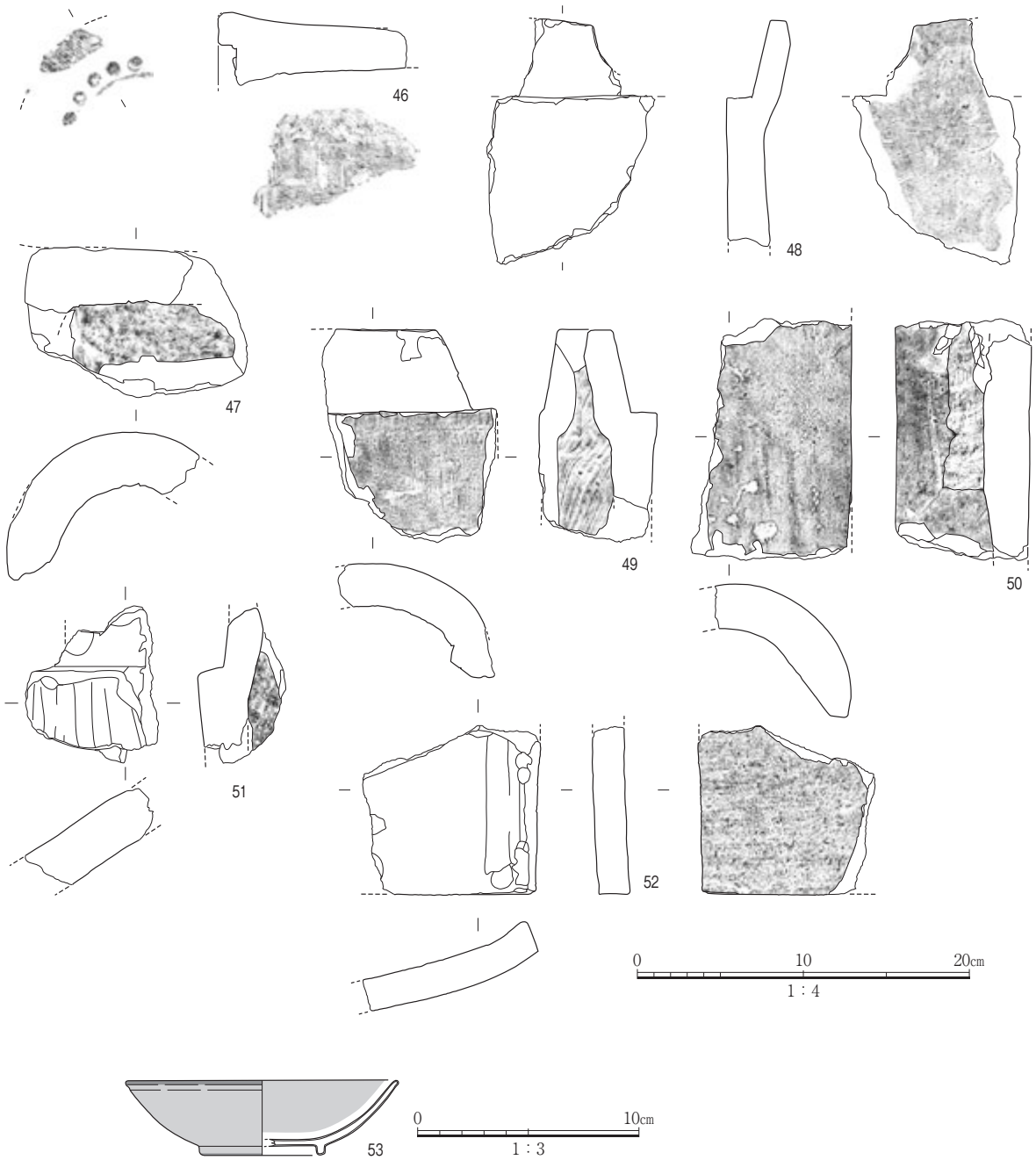



図16　SD501出土遺物実測図（２）

土師器皿16～19はいずれも体部から口縁部が斜め上方へ直線的に伸びる。瓦質土器擂鉢37は口縁部の縁帯下端の稜線がほとんどなく、新しい特徴をもつものである。羽釜38～41のうち、40・41は燻し処理が不良で土師質に近い。口縁部もほぼ直立している。甕43・44の頸部はまだ明瞭であるが、43には燻し処理が認められず土師質である。二次的に燻し処理がとれた可能性もある。中国産青磁碗21～23は幅の細い蓮弁文である。24は無文の碗と考えられる。25・26の底部内面にはスタンプによる花文が施されている。白磁皿28は森田勉氏の分類による白磁D群である[森田1982]。29は端反の皿であり、同氏のE群に当たる。青花碗30は粗雑ではあるが細かい唐草文を外面に描く。底部内面中央にも花文らしき文様がある。小野正敏氏の碗B群の特徴をもっている[小野1982・1985]。焼成がやや不良で灰

色がかった素地であり、焼成時の熔着物が残るなど、必ずしも上級品ではないが、15世紀に遡る青花であり、大阪市内では最古の資料である。備前焼擂鉢33・34は口縁部の縁帯が上方へ伸びて端部に面をもっている。16世紀にかかる特徴である。壺36の肩部外面には櫛描きの波文が巡る。軒丸瓦46は外区の珠文のみが確認できる。47は瓦当の部分を欠いている。丸瓦48～50の凹面には布目が残る。平瓦52の凹面の布目はほとんどナデで消されている。雁振瓦51の凹面には布目が残る。小さな破片ではあるが、付近にあった建物を復元する際の手がかりになる。漆椀53は全面に黒漆を施したのち、口縁端部と高台端部以外に赤漆を塗る。また、細片のため図化できなかったが、砂岩製の茶臼が見られた。

これらの年代は15世紀代から16世紀前半と考えられる。SD501の埋没年代を示すものである。

ｂ）第４層上面の遺構と遺物

整地土層である第４層の上面では、東西方向の溝SD404のほか、１基の井戸や20基近くの土壙、６基の柱穴などを検出した。以下、主な遺構について述べ、出土遺物を報告する。

SD404　調査地中央部南寄りで検出した東西方向の溝である（図17・18、原色図版２、図版５）。東端と西端はいずれも南へ直角に曲がっている。この間の東西長は溝の端どうしで30.3mである。幅は1.7～2.7m、深さ0.3～0.4mである。埋土は、上部が細礫を含むにぶい黄褐色のシルト質極細粒～細粒砂であり、下部がオリーブ褐色の砂質シルト～シルト質細粒砂である。東西幅はおよそ100尺であり、屋敷を区画した溝の可能性もある。

出土した遺物は少ないが、土師器皿56、瓦質土器羽釜58、備前焼擂鉢57を図示した（図19、図版17）。土師器皿56は底部から体部にかけて大きく外反し、斜め上方へ伸びる。瓦質土器羽釜58は二次的に火を受けて燻し処理が失われたものと考えられる。備前焼擂鉢57は口縁部の縁帯が上方へ伸びて端部に面をもっている。16世紀にかかる特徴である。

これらの年代観からこの溝が埋没するのは15世紀後半から16世紀にかかる時期と考えられる。

SE423　調査地中央部南壁沿いで検出した瓦質井戸側を用いた井戸である（図17）。井戸側はシートパイルによって壊されていたが、掘形と井戸側内を掘り分けて遺物を採集できた。掘形の直径は1.5mである。深さは検出面から1.0m以上である。掘形の埋土はにぶい黄褐色～暗オリーブ灰色のシルトとシルト質極細粒～細粒砂の偽礫である。井戸側内の埋土は上部がオリーブ褐色の砂質シルトと極細粒～中粒砂の偽礫で、下部が水つきの暗オリーブ灰色砂質シルトである。掘形から15世紀代の瓦質土器が出土しており、SD501の埋没年代からみても、この井戸は第５層上面の遺構の可能性が高い。西隣のSK418や上位層の遺構の底面で検出したためにこの面で認識したと考えておく。

上記の遺物のなかから瓦質土器羽釜66・67・甕68を図示した（図19、図版17）。羽釜66・67は口縁部が内傾する。甕68は頸部が明瞭で、体部外面のタタキメも比較的細かい。いずれも燻し処理が良好である。こうした形態や技法の特徴から、この井戸がつくられた年代は15世紀代である。

SP407～410・421・422　調査地中央部南寄りで検出した柱穴および小穴である（図17・18）。SP407～410・421・422のうち、SP407・408・410・411・421・422には柱痕跡が認められ、柱穴であるが、SP409のみは浅い小穴である。柱痕跡の直径は0.1m前後である。検出した範囲が狭くて間隔もまちまちであるため、建物や柵は復元できていない。SP421は２基の柱穴が切り合っている。

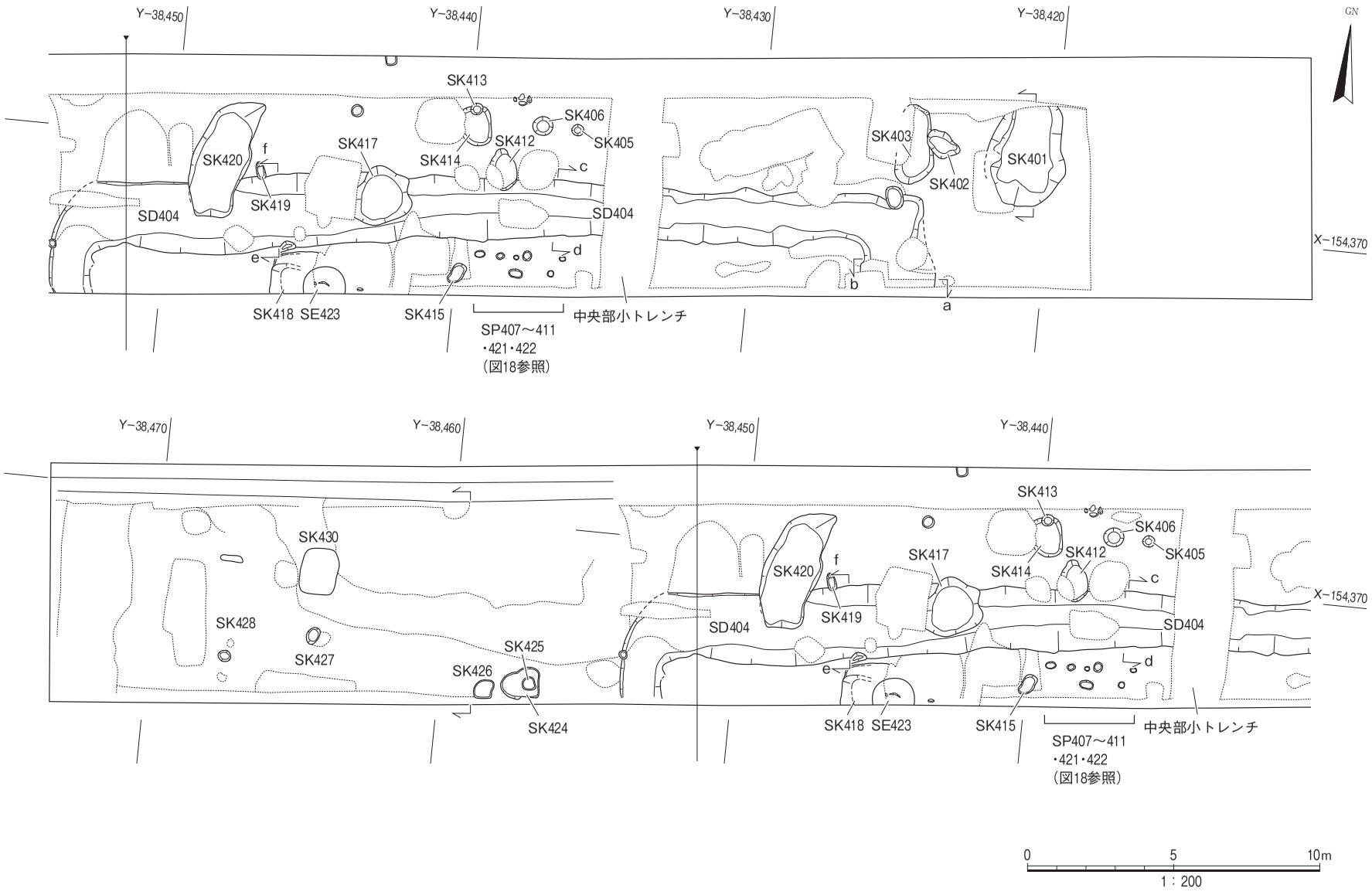
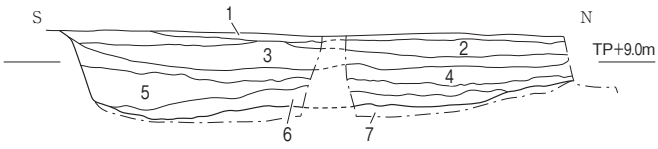


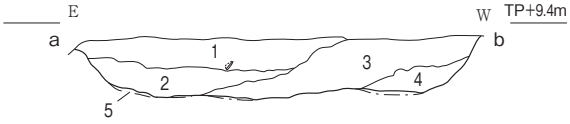

図17　第４層上面遺構平面図

SK401南北断面



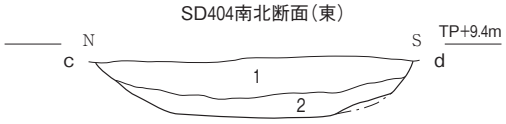

1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂
2：細礫含む褐色(10YR4/4)シルト質細粒～中粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～細粒砂
4：灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂
5：灰色(5Y4/1)極細粒～細粒砂
6：灰色(7.5Y4/1)シルト質極細粒砂
7：灰色(7.5Y4/1)シルト～細粒砂(SD501)

SD404東西断面(東端)



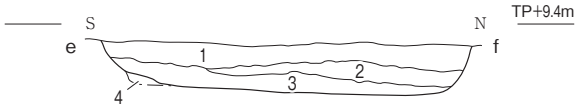

1：細礫･シルト偽礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂
2：シルト大偽礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト･砂質シルトの偽礫
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～粗粒砂
5：暗オリーブ灰色(5Y4/1)極細粒～細粒砂(第6層)

SD404南北断面(東)

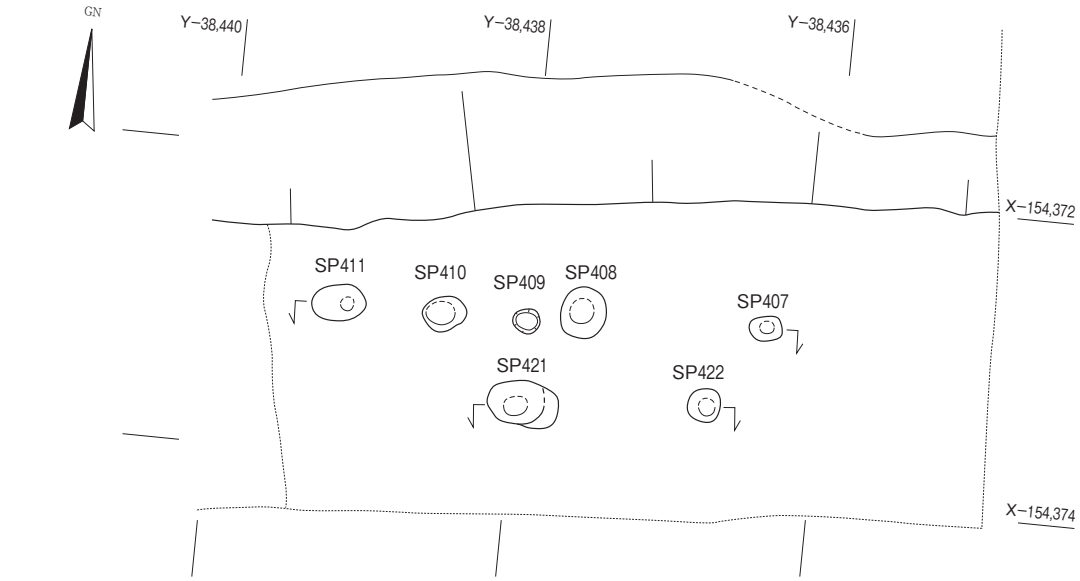


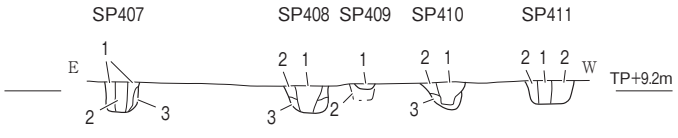

1：細礫含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂

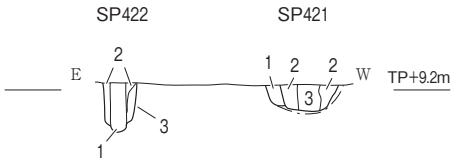
SD404南北断面(西)




1：細礫含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～中粒砂
2：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト～シルト質極細粒～細粒砂
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～細粒砂(第5層)




SP407
1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト偽礫
2：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂(柱抜取穴)
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂

SP408
1：褐色(10YR4/4)砂質シルト
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂

SP409
1：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂

SP410
1：褐色(10YR4/4)砂質シルト
2：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂

SP411
1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂(柱抜取穴)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂

SP421
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂(柱抜取穴)

SP422
1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト(柱抜取穴)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～中粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂

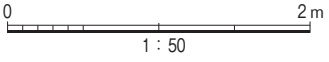



図18　第4層上面遺構平面・断面図

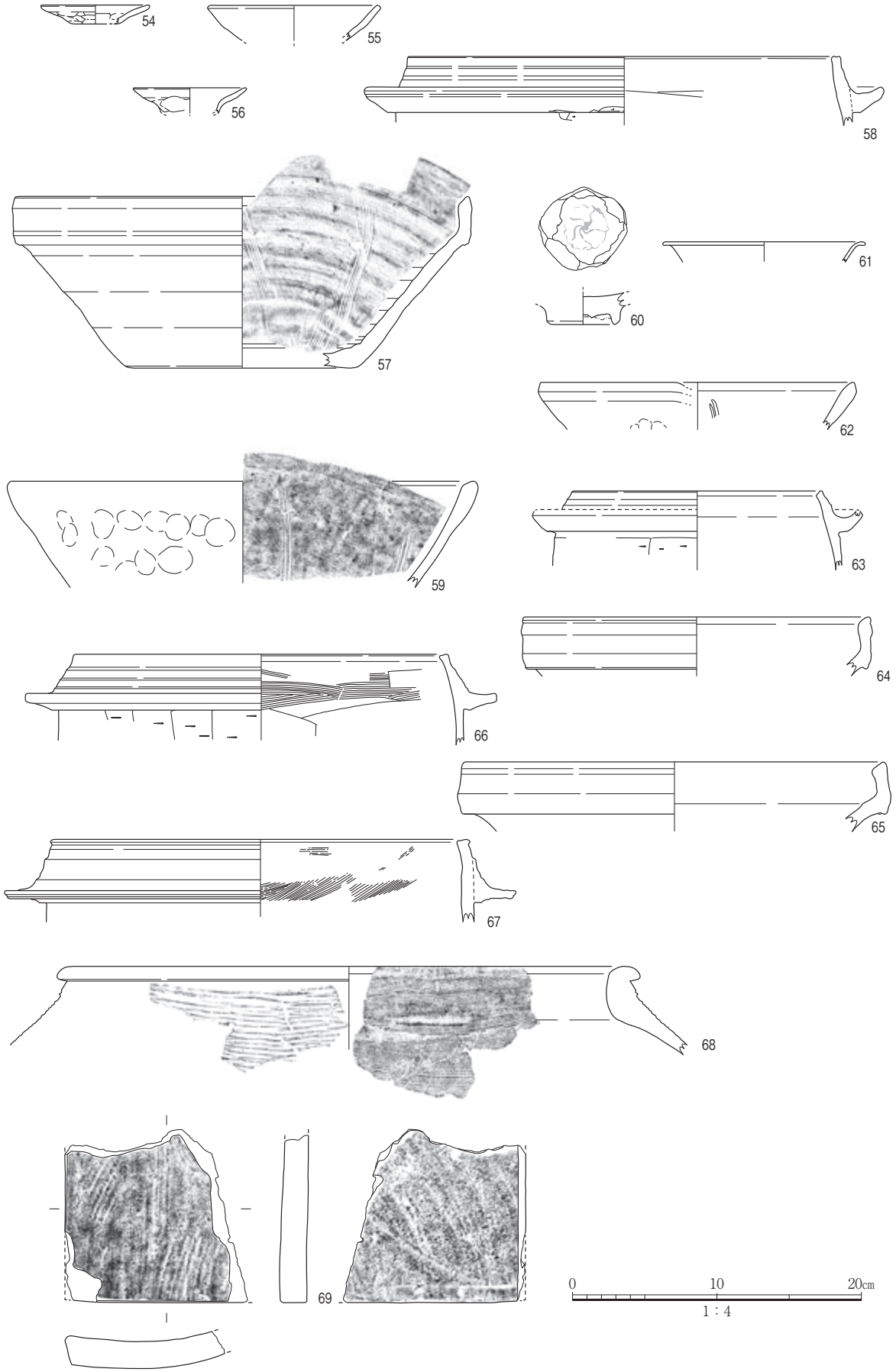



図19　第４層上面遺構出土遺物実測図

SK401(54・55)、SD404(56～58)、SK418(59)、SK420(60～64)、SP421(65)、SE423(66～68)、SK430(69)

出土した遺物は少ないが、備前焼擂鉢65を図示した(図19)。口縁部の縁帯が上方へ伸び、端部の面は明瞭である。16世紀代のものと考えられる。

SK401　調査区東部で検出した土壙である(図17・18、図版５)。北側と南西端を上位層の遺構に壊されている。平面楕円形で、長径は3.5m以上、短径は2.8mである。深さは0.6mである。埋土はオリーブ褐色～灰色のシルト質極細粒～細粒砂で、一部に細礫を含む。

出土した土師器皿54・55を図示した(図19、図版17)。54は体部下半が外反し、斜め上方へ伸びる。55は体部から口縁部にかけて斜め上方へ伸びる。15世紀後半から16世紀にかかる時期と考えられる。

SK418　調査区中央部南寄りで検出した土壙である(図17)。上位層の遺構で東側は失われており東西は1.5m以上である。南側は調査区外のため、南北は1.4m以上である。深さは0.3mである。埋土は上部がにぶい黄褐色の砂質シルトとシルト質極細粒～細粒砂の偽礫で、下部がオリーブ褐色の砂質シルトである。

出土した瓦質土器擂鉢59を図示した(図19、図版17)。口縁部の縁帯下端の稜線がほとんどなく、16世紀にかかる特徴をもつものである。

SK420　調査区中央部で検出した土壙である(図17)。SD404を切っている。平面楕円形で、長径は4.3m、短径は1.9mである。深さは0.4mである。埋土は細礫を含むオリーブ褐色のシルト質極細粒～細粒砂である。

出土遺物から瓦質土器擂鉢62・羽釜63、備前焼擂鉢64、中国産青磁碗60、白磁皿61を図示した(図19、図版17)。瓦質土器擂鉢62は口縁部の縁帯下端の稜線が失われている。羽釜63は口縁部は内傾するが、燻し処理が不完全である。備前焼擂鉢64は口縁部の縁帯が上方へ伸び、端部の面は緩やかである。16世紀にかかる特徴である。中国産青磁碗60は底部内面にスタンプによる花文が施されている。61は口縁部が端反の白磁皿である。

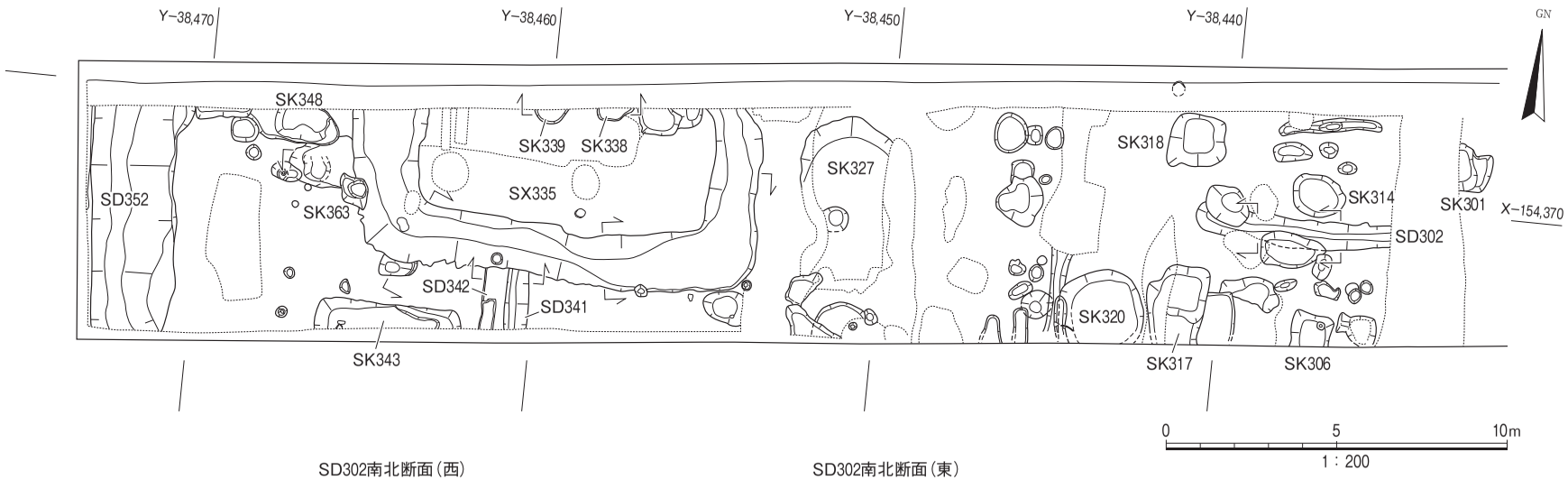
これらの特徴から、年代は15世紀後半から16世紀にかかる時期と考えられる。

このほかに、調査区西部のSK430から出土した平瓦69を図示した。凹面に平行タタキと考えられる痕跡が認められる。

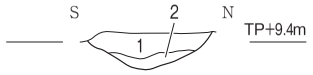
ｃ)第３層上面の遺構と遺物

本層上面では墳墓堂遺構SX335や南北方向の溝SD352A、その他の土壙など多数の遺構を検出した。層序の項で述べたように、調査区東部には中世に遡る遺構がなく、遺構はすべて中央部から西部にかけての範囲に存在する。

SX335　周溝を伴う方形の盛土の南半のみを調査区内で検出した(図20・21、原色図版３、図版６～８)。周溝は幅1.2～2.0m、深さ0.3～0.4mである。埋土は褐色～灰色のシルト質極細粒～細粒砂で、水が溜まっていたり流れたりした痕跡はほとんど見られない。周溝の内側の盛土部分は東西幅9.0mで、南北方向は5.0m以上である。盛土直下には細礫を含む褐色のシルト質細粒砂や暗オリーブ色のシルトと極細粒～中粒砂などからなる層厚0.4～0.5mの整地土層が見られ、掘込み地業がなされていたと考えられる。こうした特徴から、瓦の出土量が多くはないものの、喜連東遺跡で見つかっている墳墓堂遺構SX01およびその周辺の方形区画[大阪市文化財協会1999]と同様の性格のものである可能性が高

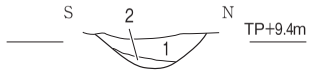



SD302南北断面（西）



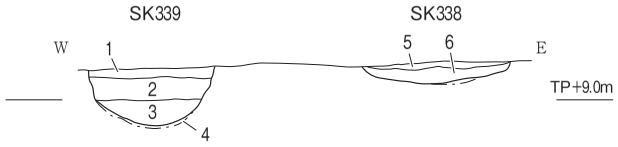

1：シルト偽礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂～砂質シルト

SD302南北断面（東）




1：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒～中粒砂
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂

SK338・339東西断面



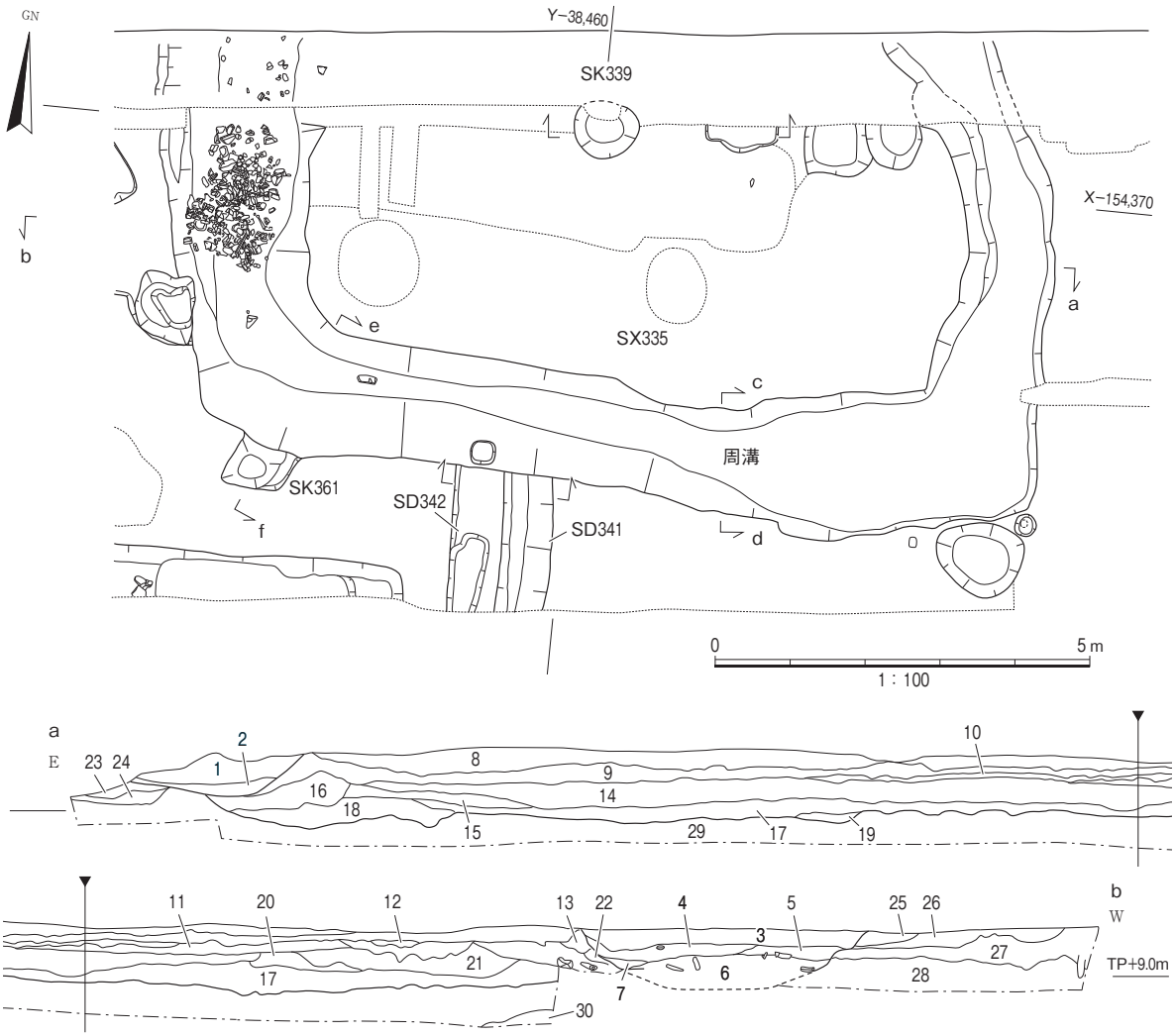

1：細礫含む暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂
2：細礫含む暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)暗オリーブ灰色シルト質偽礫
3：暗オリーブ灰色(5GY3/1)砂質シルト
4：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質細粒砂
5：オリーブ褐色(2.5GY4/6)シルト質極細粒～中粒砂
6：オリーブ褐色(2.5Y4/5)極細粒～粗粒砂

SD341・342東西断面

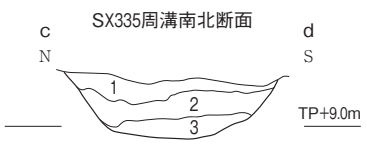
1：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂
2：褐色(10YR4/6)シルト質極細粒～細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質シルト
4：褐色(10YR4/4)砂質シルト

0
2m
1：50

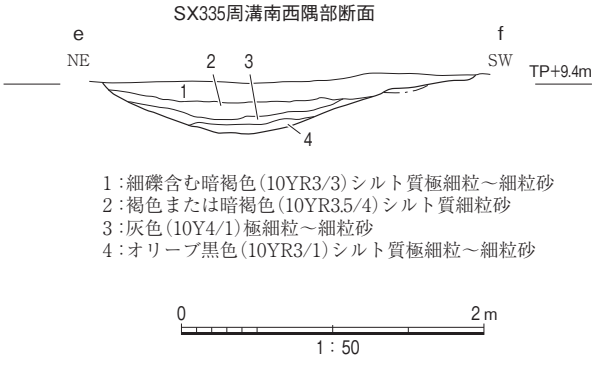
図20　第３層上面遺構平面・断面図




1 :細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒～細粒砂の偽礫(周溝)
2 :褐色(7.5YR4/4)シルト質極細粒砂(周溝　酸化鉄沈着)
3 :灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂(周溝)
4 :灰オリーブ色(5Y4/2)シルト～シルト質極細粒砂の偽礫(周溝)
5 :灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂質シルト(周溝)
6 :オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質極細粒砂(周溝)
7 :褐色(10YR4/5)砂質シルト
8 :細礫含む褐色(10YR4/6)シルト質極細粒砂
9 :褐色(10YR4/4)砂質シルトと極細粒～細粒砂(酸化鉄沈着)
10:暗オリーブ色(5Y4/3)シルト・極細粒～細粒砂の偽礫
11:オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～粗粒砂の偽礫
12:細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～細粒砂
13:細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂
14:細礫含む暗オリーブ色(5Y4/3)シルト・極細粒～中粒砂の偽礫
15:灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルトの偽礫
16:オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトと細粒～中粒砂の偽礫
17:細礫・砂質シルト偽礫含む暗オリーブ色(5Y4/3)
　シルト質極細粒～細粒砂
18:オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質極細粒～中粒砂
19:暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂質シルトの偽礫
20:オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質極細粒～細粒砂
21:オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質極細粒～細粒砂の偽礫
22:オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト・極細粒～細粒砂の偽礫
23:細礫含む褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～細粒砂
24:暗オリーブ色(5Y4/3)極細粒～細粒砂
25:褐色(10YR4/6)シルト質極細粒砂
26:褐色(10YR4/6)シルト質極細粒砂
27:褐色(10YR4/6)シルト質極細粒砂
28:褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂
29:シルト偽礫含む暗オリーブ灰色(5GY4/1)
　シルト質極細粒～細粒砂
30:暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト～極細粒砂




1 :細礫含む褐色(7.5YR4/3)シルト質極細粒砂
2 :暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細粒砂
3 :にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂




1 :細礫含む暗褐色(10YR3/3)シルト質極細粒～細粒砂
2 :褐色または暗褐色(10YR3.5/4)シルト質細粒砂
3 :灰色(10Y4/1)極細粒～細粒砂
4 :オリーブ黒色(10YR3/1)シルト質極細粒～細粒砂

図21　墳墓堂遺構SX335平面・断面図

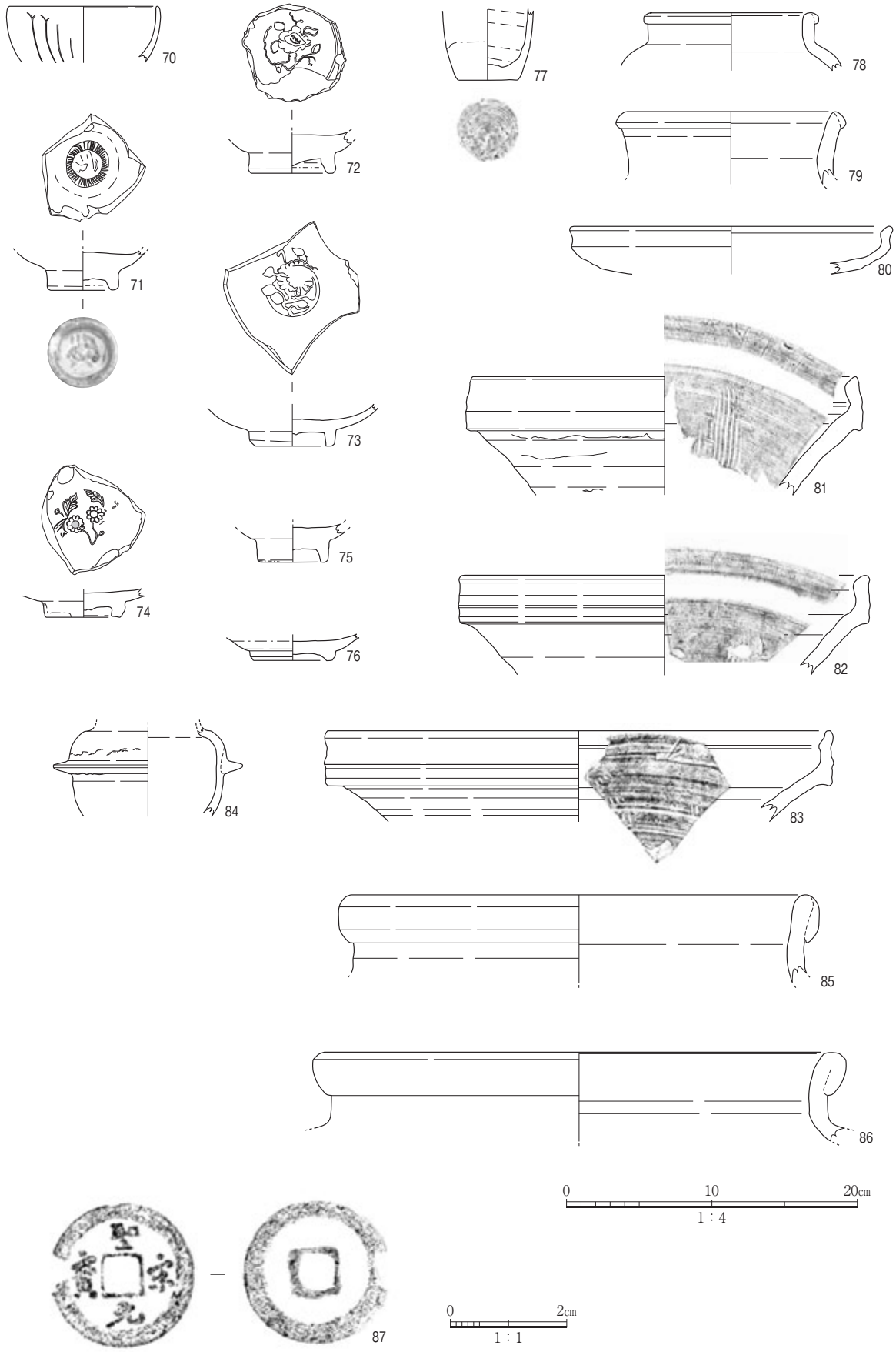



図22　SX335出土遺物実測図（1）

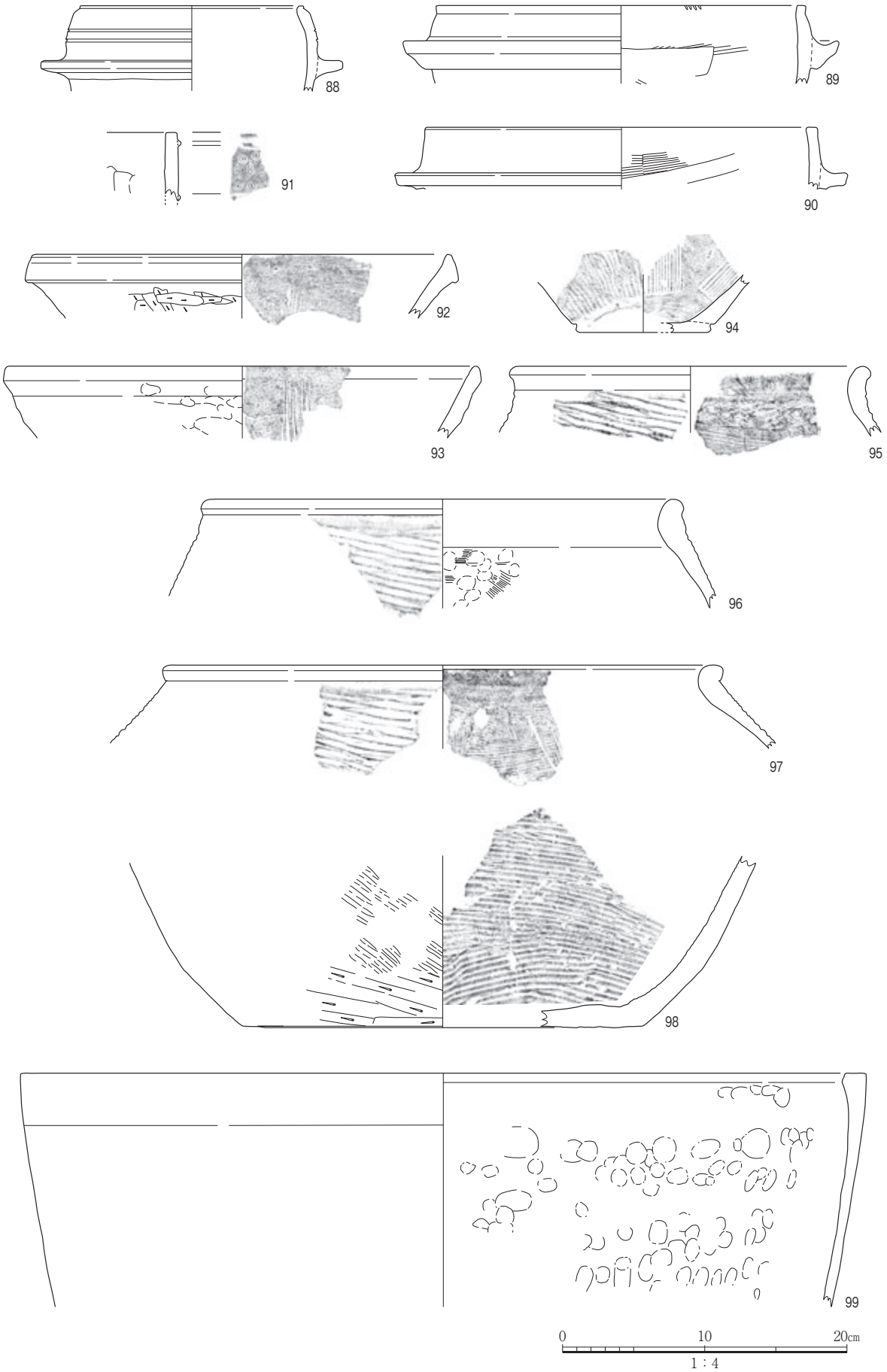



図23　SX335出土遺物実測図（２）

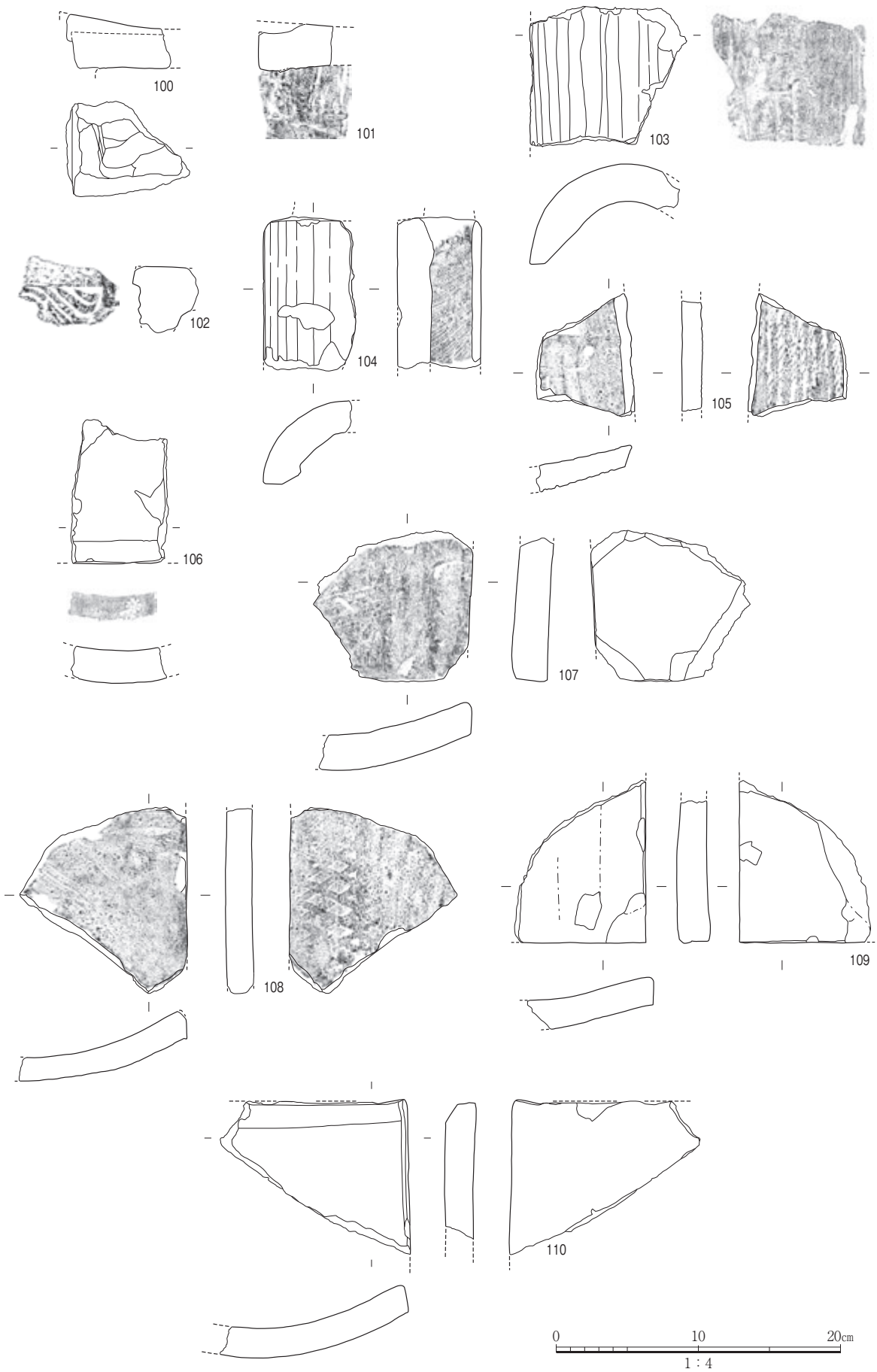



図24　SX335出土遺物実測図（3）

い。周溝の遺物は特に西側に集中していた。

出土した遺物から、瓦質土器ミニチュア釜84・羽釜88～90・擂鉢92～94・甕95～98・火鉢91・井戸側材99、瀬戸美濃焼茶入77、備前焼壺78・79・鉢80・擂鉢81～83・甕85・86、中国産青磁碗70～75、白磁皿76、聖宋元寶87、軒丸瓦100・101・軒平瓦102・丸瓦103・104・平瓦105～110を図示した(図22～24、図版17～19)。瓦には図化できなかったが鬼瓦らしき破片がある。瓦質土器羽釜89・90は燻し処理が不完全で口縁部も直立に近い。擂鉢92は口縁部の縁帯下端が突出し、断面が三角形を呈するが、93は縁帯下端の稜線がほとんど失われ、燻し処理も不完全である。甕95～97は頸部が短くて下位層の資料ほど明瞭ではなく、タタキメも粗くなっている。97の燻し処理は不完全で、土師質である。火鉢91は外面に二重の円形と杏仁形のスタンプを並べて施す。平面方形あるいは長方形の火鉢である。瀬戸美濃焼茶入77は底部および体部の底部近くを露胎として、それ以外の部分に鉄釉を掛ける。体部の露胎部分には鉄化粧が施されている。大窯期の後半に位置づけられる。備前焼擂鉢81～83は口縁部の縁帯が上方へ伸び、82の端部の面は緩やかであるが、81・83の端部の面は明瞭である。中国産青磁碗70の外面は幅の細い蓮弁文である。71～74の底部内面にはスタンプによる花文が見られる。75は判然としないが、施されている可能性がある。71の高台内には墨書がある。縦に２文字で「小入」かと思われるが、特に下の字が読みにくい。白磁皿76の底部内面は蛇の目釉剝ぎである。横田賢次郎・森田勉氏の分類による皿Ⅲ類に当たる[横田・森田1978]。聖宋元寶87は宋銭で、初鋳は1101年である。軒丸瓦100・101は瓦当の部分を欠いている。軒平瓦102の瓦当は波文である。丸瓦103・104の凹面には布目が残る。平瓦105の凸面は縄タタキ、凹面には布目が残る。106の端面には花文のスタンプが押されている。108の凸面は斜格子目タタキで整形されている。

SK339　調査区西部の北壁沿いで検出した土壙である(図20・21、図版８)。位置が墳墓堂遺構SX335の盛土部分の中央付近に当たることから、何らかの関係がある可能性を考えて注意深く掘削したが、特に柱痕跡や顕著な遺物は認められなかった。平面円形で、直径が0.9m、深さ0.4mである。埋土は細礫を含むシルト質極細粒～細粒砂や砂質シルトである。

SD302　調査区の中央部東寄りで検出した東西方向の溝である(図20)。幅0.6～0.9m、深さ0.2mである。埋土はオリーブ褐色～暗灰黄色の砂質シルトやシルト質細粒～中粒砂である。

出土した土師器皿112を図示した(図25)。体部が斜め上方へかるく外反しながら伸びる。

SD341・342　調査区の西部、SX335の南で検出した南北方向の２条の溝である(図20)。SD342がSD341を切る。SD341は幅0.6m以上、深さ0.2mで、埋土はオリーブ褐色の砂質シルトである。SD342は幅1.1m、深さ0.1mである。埋土は褐色のシルト質極細粒～細粒砂である。

SD342から出土した土師器皿111を図示した(図25)。体部が斜め上方へ内湾気味に伸びる。

SD352A　調査区の西端で検出した南北方向の溝で、幅2.6mである(図８・20、図版９)。北壁地層断面の観察によれば、後述する掘り直した溝は第２層上面から掘り込まれていたが、最上部の埋土が見極めにくかったため、この面で認識する結果となった。ただし、図８の54・55層が古い段階での溝の肩であったとすれば、埋土が大きく２層に分かれることからも、その溝が埋まったのち、位置を踏襲して上部の溝が掘り直された可能性がある。本来の溝をSD352A、上部の掘り直した溝をSD352B

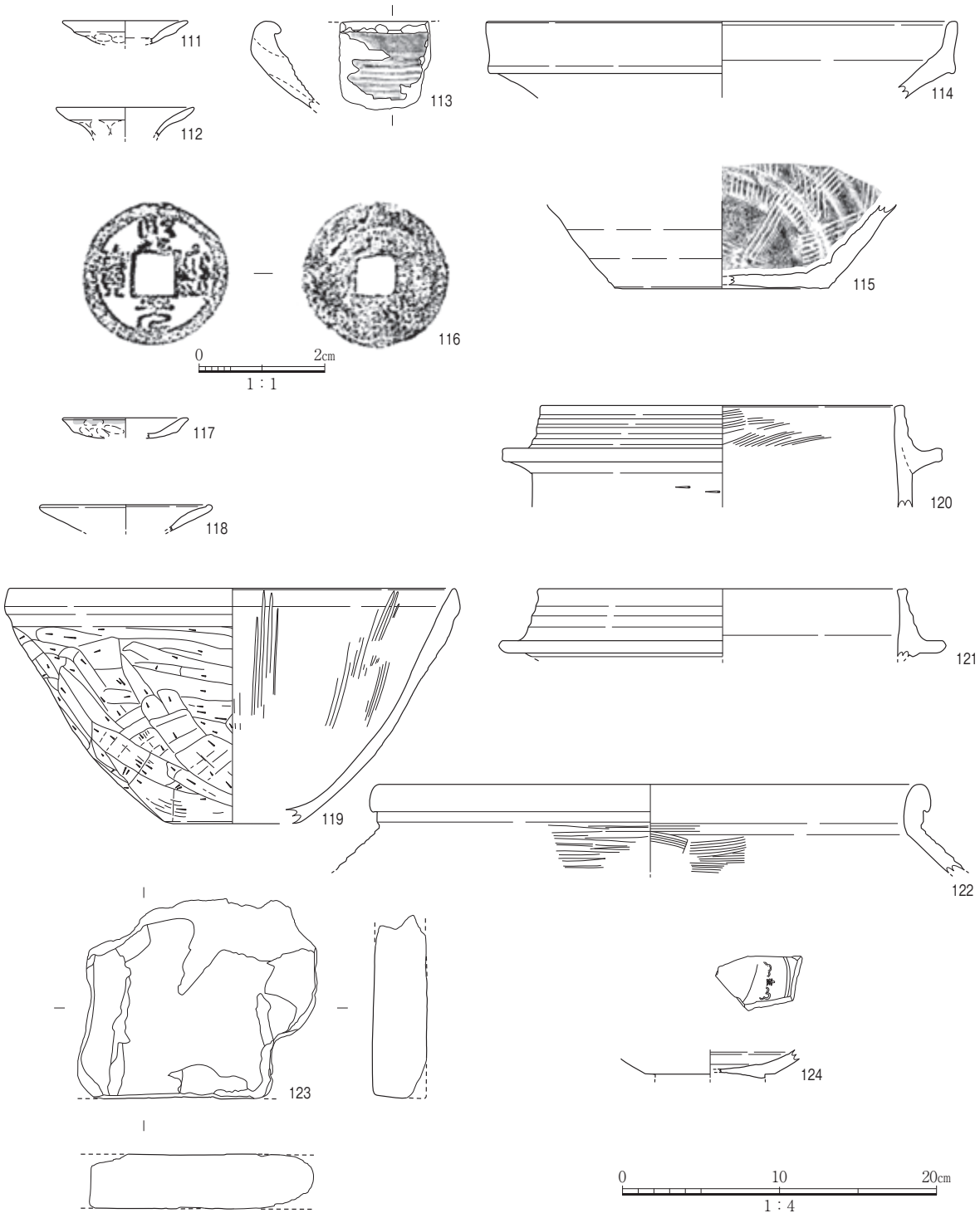



図25　第３層上面遺構・その他出土遺物実測図

SD302(112)、SD342(111)、SD352A(113～116)、第５層(117･118･121)、第４層(119･120･122･123)、第３層(124)

とする。この復元が正しければ、SD352Aの深さは1.1mほどで、埋土は暗オリーブ灰色の砂質シルトやシルト・砂の偽礫を含む粘土質シルトである。後述する江戸時代の遺物は埋土の下部まで沈み込んでおり、かつ溝の底付近まで上部の埋土が及ぶ部分もあったが、西端の一部のみ、江戸時代の遺物を含まない部分があり、これらの年代観は周辺の遺構と矛盾しない。

出土した遺物から、瓦質土器甕113、備前焼擂鉢114・115、熙寧元寶116を図示した(図25、図版17)。備前焼擂鉢114は口縁部の縁帯が上方へ伸び、端部の面はあまり明瞭ではない。115は放射状の擂目に斜め方向の擂目が加わることから、16世紀後葉のものであろう。熙寧元寶116の初鋳年は1068年である。

**各層の遺物**

第５層からは土師器皿117・118が出土した(図25)。117は灯明皿として使用されている。第４層からは瓦質土器擂鉢119・羽釜120・121・甕122、塼123が出土した。瓦質土器擂鉢119は口縁部の縁帯下端の稜線がほとんど失われ、土師質である。甕122も頸部は明瞭であるが、タタキメが粗く土師質である。第３層からは中国産白磁碗124が出土した。内面には花文らしきスタンプが一部認められる。

ⅲ)江戸時代の遺構と遺物

第２・１層上面では、溝、土壙、井戸などの近世から近代に至る多数の遺構を検出し、それらに伴う遺物が多量に出土している(図26・27、図版10～13)。遺構検出作業はまず、調査区東部にのみ分布する第１層の上面と調査区中央～西部の第２層上面において同時に行い、続いて東部において第１層を掘削して第２層上面に相当する遺構面(すでに第５層上面に達していた)で行った。図26・27はその結果に基づいて示した。したがって、調査区中央～西部の第２層上面遺構には、東部における第１層上面遺構と同時期の19世紀までの遺構を含む。一方、調査区東部では土壙や小穴を検出した。特にSK205～SK209・SK213～SK215は５m四方の範囲に重なり合って掘られている。江戸時代初期である17世紀初頭～中葉を中心とする遺物が出土した。東部における第１層上面では18～19世紀代の遺物を含む土壙、井戸、溝などを検出した。以下、年代の古いものから順に主要な遺構･遺物を述べていく。

SD046　調査区中央部西寄りで検出した幅3.0～3.5m、深さ0.6mのやや蛇行する溝である(図26・27、図版11)。

出土遺物のうち、土師器皿125、瓦質土器ミニチュア釜127・128、肥前陶器(唐津焼)皿126、丹波焼擂鉢141、備前焼擂鉢142、軒平瓦144を図示した(図29、図版20)。土師器皿125は体部内面をヨコナデする。底部との境は凹線ができるほど明瞭ではない。肥前陶器(唐津焼)皿126の内面には目跡がない。高台外側に３箇所破損部があり、胎土目を外した痕跡であろう。丹波焼擂鉢141の擂目の単位は１本である。備前焼擂鉢142は口縁部の縁帯が上方へ伸びる形態であるが、下位層の資料よりも端部の面が明瞭である。軒平瓦144の瓦当文様は唐草文である。

SK057　調査区西部の北壁沿いで検出した東西13.2m以上、南北3.0m以上、深さ0.5mの土壙である(図26・27)。

出土遺物のうち、土師器ミニチュア釜129、肥前陶器(唐津焼)小碗131・碗132・溝縁皿134・瓶133、瀬戸美濃焼志野碗130・織部向付137・138、備前焼擂鉢143、中国産白磁皿135、青花碗136を

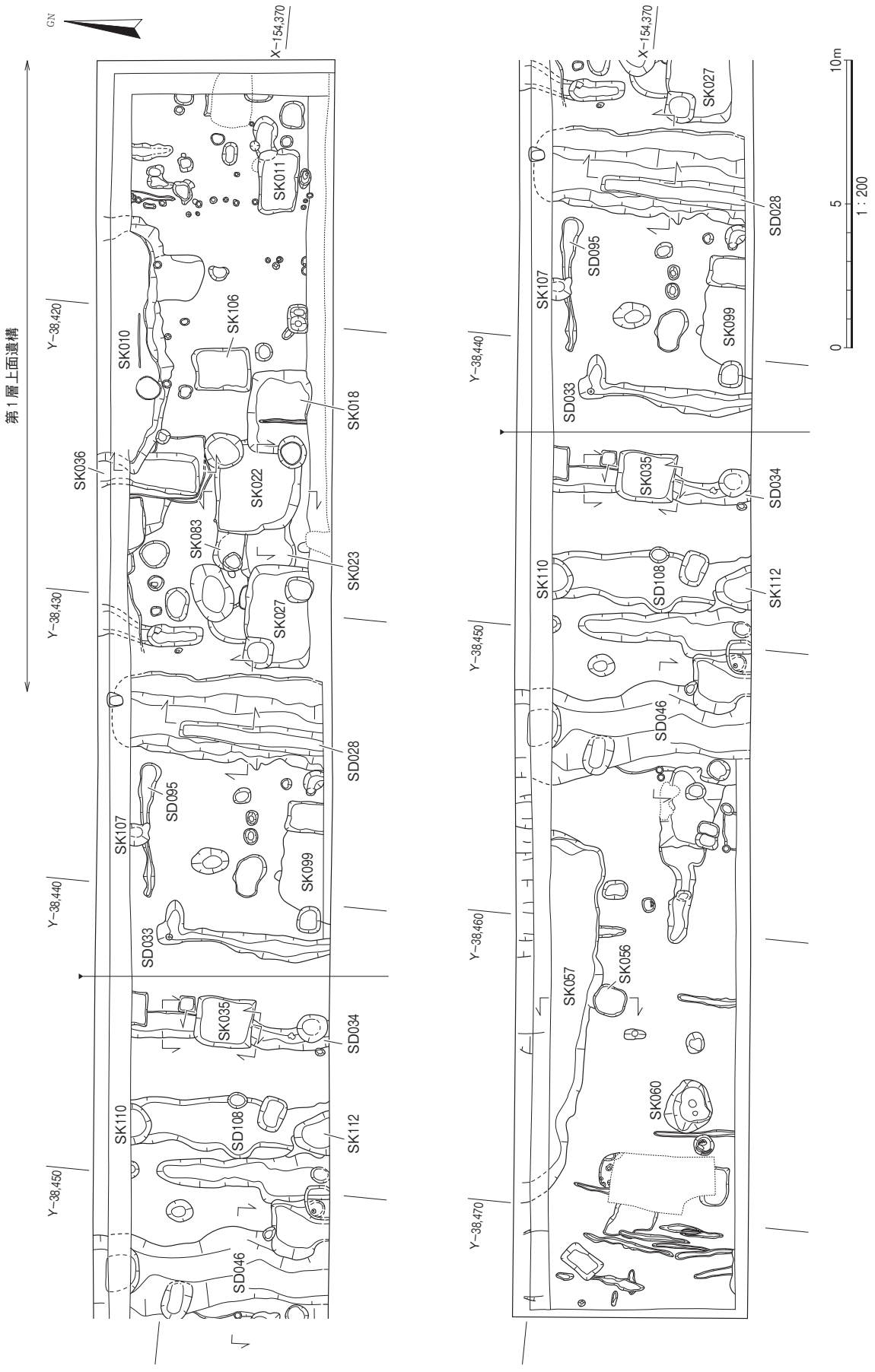
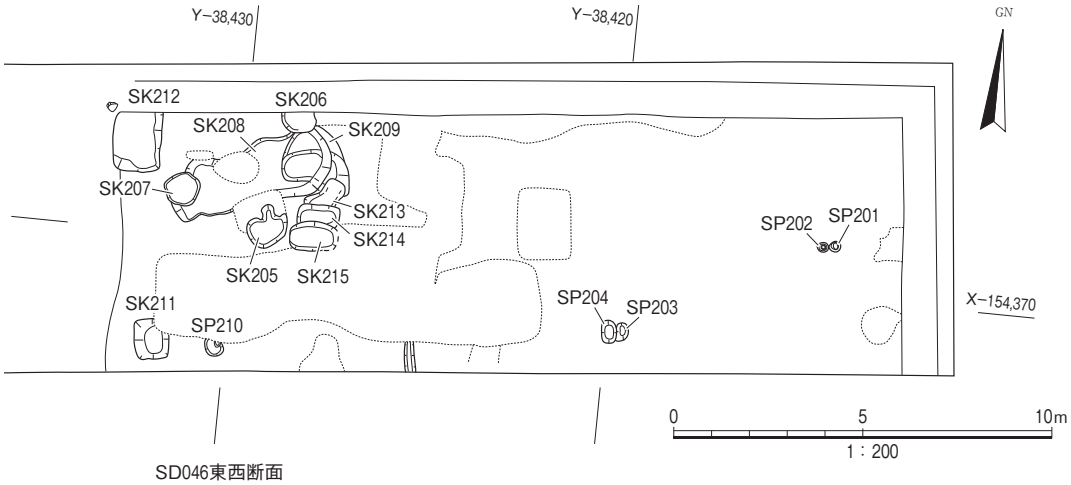
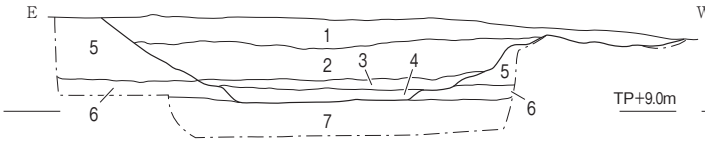



図26　第１・２層上面遺構平面図

第2層上面遺構(調査区東部)

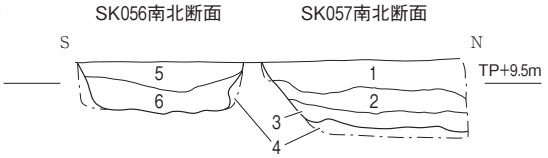



SD046東西断面



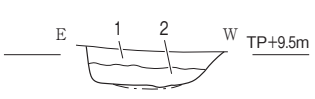

1：細礫含む暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質極細粒～中粒砂
2：シルト偽礫含む暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質細粒～中粒砂
3：灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂
4：シルト偽礫含む灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質細粒～中粒砂
5：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂と砂質シルトの偽礫
6：細礫含む褐色(10YR4/4)細粒砂～シルトの偽礫
7：細礫少し含む灰色(7.5Y4/1)シルト質極細粒～細粒砂

SK056南北断面　SK057南北断面



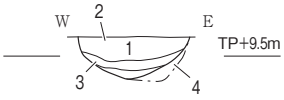

1：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂
2：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト
3：礫・酸化マンガン偽礫含む暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト
4：灰色(7.5Y4/1)砂質シルト
5：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂
6：細礫含む黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト

SD034東西断面(北)



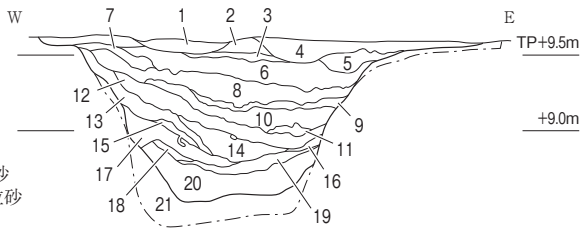

1：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)
シルト質極細粒砂～砂質シルト
2：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂

SD034東西断面(南)

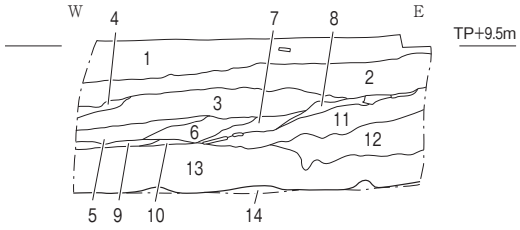



1：細礫含む暗褐色(10YR3/4)砂質シルト
2：灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト
3：暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質極細粒砂
4：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂

SD028東西断面




SD028南北断面北半




1：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～中粒砂
2：炭化物多く含む黒色(10Y2/1)シルト
3：炭化物含む黒色(7.5Y2/1)シルト質極細粒砂
4：炭化物含む黒色(10YR2/1)砂質シルト
5：黒色(2.5Y2/1)砂質シルト
6：オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト
7：黒色(7.5Y2/1)砂質シルト
8：黒色(10Y2/1)砂質シルト
9：オリーブ黒色(10Y3/1)砂質シルト
10：黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
11：細礫含む灰色(10Y4/1)シルト質極細粒砂
12：細礫含む暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質極細粒～中粒砂
13：細礫含む灰色(10Y4/1)粘土質シルト
14：暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質極細粒～細粒砂

1：細礫含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質極細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質シルト
4：細礫含む明黄褐色(10YR6/6)シルト質極細粒～細粒砂
5：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質極細粒～細粒砂
6：細礫・炭化物多く含むオリーブ黒色(5Y3/2)砂質シルト
7：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質極細粒砂
8：細礫・炭化物少し含む黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト
9：黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト
10：オリーブ黒色(10Y3/1)砂質シルト
11：灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト
12：細礫含む暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質細粒～中粒砂
13：灰色(10Y4/1)シルト質極細粒砂
14：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質極細粒砂
15：暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト質極細粒～細粒砂
16：暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質シルト
17：暗緑灰色(10GY3/1)シルト質極細粒砂
18：暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土質シルト
19：暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質シルト
20：細粒～粗粒砂含む暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂質シルト
21：暗緑灰色(7.5GY3/1)シルト質極細粒砂

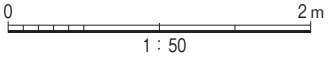
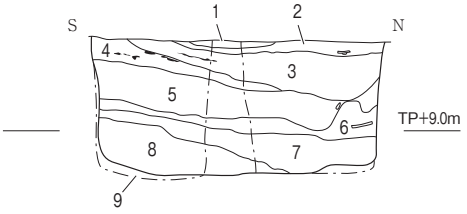


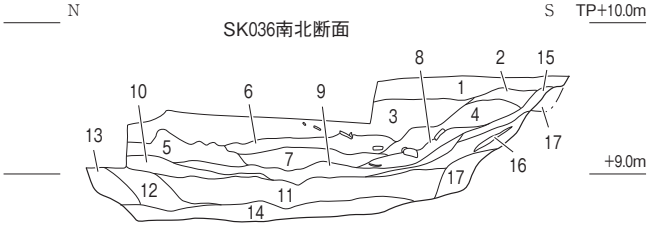

図27　第1・2層上面遺構平面・断面図

SK035南北断面



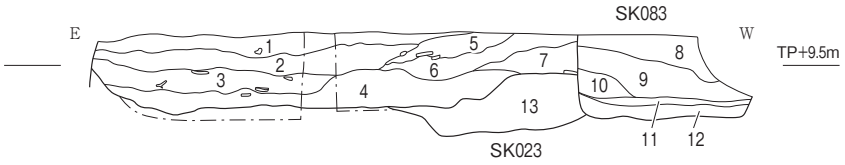

1：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂
2：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒～中粒砂
3：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト～シルト質細粒砂
4：炭化物含む黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト
5：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂～砂質シルト
6：細礫含むオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト
7：オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト～シルト質極細粒砂
8：シルト偽礫多く含むオリーブ黒色(7.5Y3/1)砂質シルト
9：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト～極細粒砂

SK036南北断面



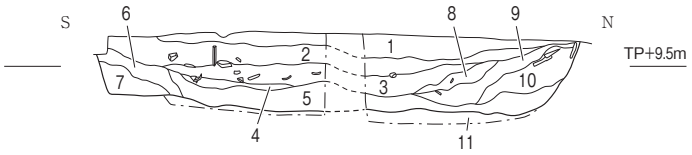

1：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～中粒砂
2：細礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂
3：礫含むオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質極細粒～細粒砂
4：細礫含むオリーブ黒色(5Y3/2)砂質シルト
5：黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト
6：細礫含むオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質極細粒砂
7：灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト
8：黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
9：黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
10：礫含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
11：灰色(7.5Y4/1)シルト
12：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質極細粒砂
13：オリーブ黒色(7.5Y3/2)細粒砂
14：灰色(5Y4/1)シルトと極細粒～細粒砂
15：灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質細粒～中粒砂
16：灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂
17：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～細粒砂
18：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂

SK022ほか東西断面




1：礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂
2：礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト
3：砂礫含む灰オリーブ色(5Y3/2)粘土質シルト
4：暗オリーブ色(5Y4/3)～オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質シルト
5：礫含む暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト
6：礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～中粒砂
7：礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂
8：細礫含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒～中粒砂
9：細礫含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂
10：細礫含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂
11：暗オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂
12：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒～中粒砂
13：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒～粗粒砂

SK022南北断面




1：礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂
2：礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト
3：砂礫含む灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土質シルト
4：灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土質シルト
5：砂質シルト偽礫多く含むオリーブ灰色(10Y4/2)
　シルト質極細粒～細粒砂
6：礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)細粒～中粒砂
7：礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト
8：炭含むオリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質極細粒～細粒砂
9：礫含む暗オリーブ色(5Y4/3)極細粒～中粒砂
10：炭含むオリーブ黒色(7.5Y3/2)極細粒～細粒砂
11：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～中粒砂

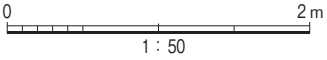



図28　第１・２層上面遺構断面図

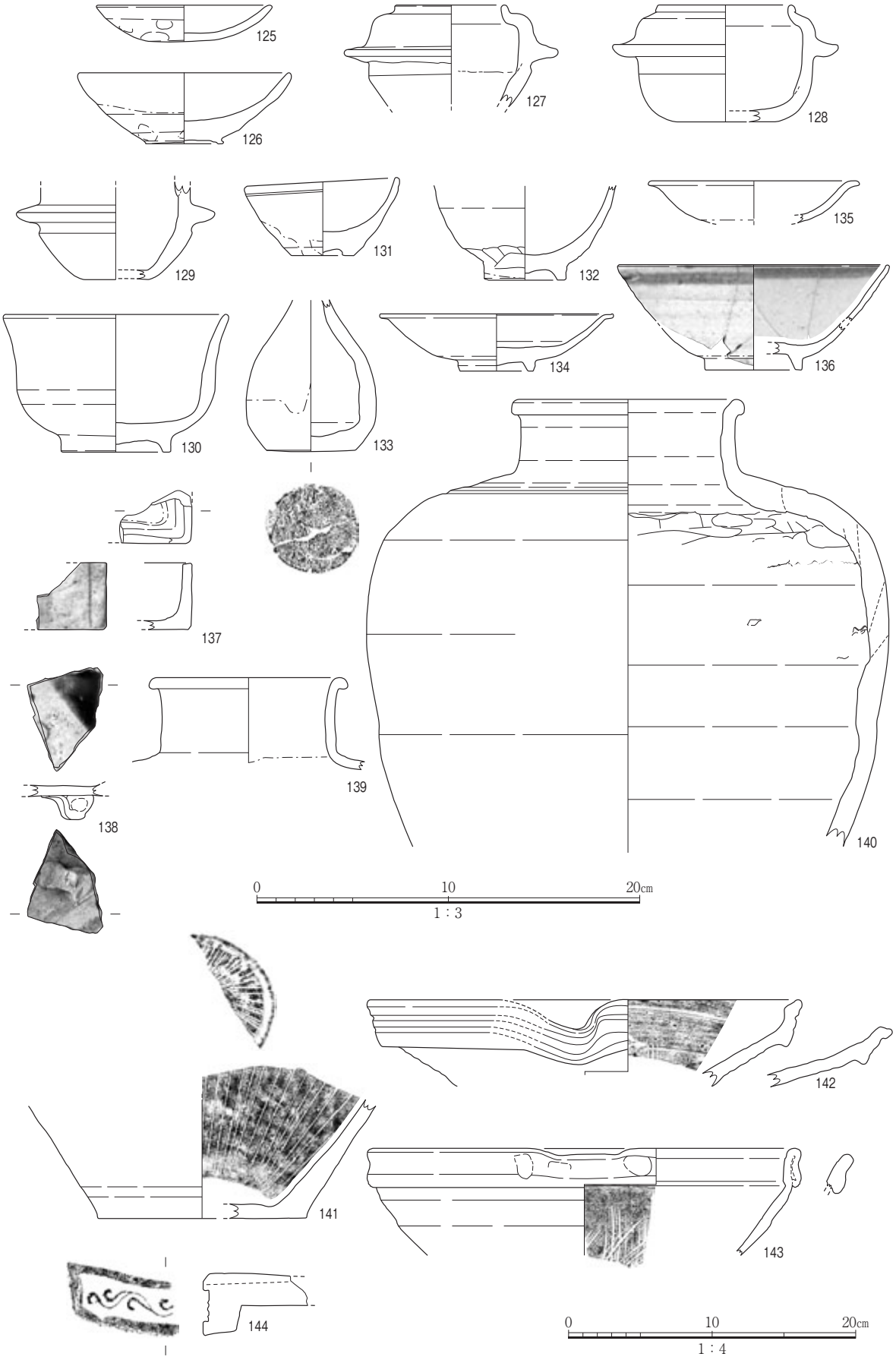



図29　SD046・SK057・その他出土遺物実測図

SD046(125～128・141・142・144)、SK057(129～138・143)、SD034(139)、SK208(140)

図示した(図29、図版20)。肥前陶器(唐津焼)小碗131は底部内面に胎土目が３箇所残る。底部外面にはよく見えない。溝縁皿134は底部内面に砂目が２箇所認められ、本来は３箇所であったと考えられる。瓶133、瀬戸美濃焼志野碗130は高台畳付と内部が基本的に露胎である。織部向付137・138は同一個体の可能性もあるが、接合しないので別々に報告した。いずれも内面に布目が残る。137は外面に鉄釉や灰釉で直線的な文様を描く。138の内面は緑釉と透明釉を掛け分けて、後者の部分に錆絵を描く片身替りである。備前焼擂鉢143は薄くつくった口縁部を折り返して縁帯とする特殊な器形であるが、擂目が施され、片口をもつことから擂鉢とした。中国産白磁皿135の焼成は陶胎に近い。青花碗136の底部内面は露胎である。

上記の遺構のほかに同年代のものとして、調査区中央部で検出したSD034からは肥前陶器(唐津焼)壺139、調査区東部の第２層上面で検出したSK208からは信楽焼壺140を図示した(図29、図版20)。いずれも17世紀前葉のもので、葉茶壺として用いられた可能性がある。

SD352B　先述したように、調査区の西端で検出した南北方向の溝SD352Aがいったん埋め立てられたのち、第２層上面から掘り直された溝と考える。幅2.6m、深さ0.7～0.8mで、埋土は上部がにぶい黄褐色シルト質極細粒砂～砂質シルトの偽礫で、下部は極細粒砂の偽礫を含む暗オリーブ色の砂質シルトや、水つきの暗オリーブ灰色シルトである。江戸時代の遺物は下位のSD352Aの埋土中まで沈み込んでいた可能性がある。

出土した遺物から、中国産青花碗145・146、肥前陶器呉器手碗147・溝縁皿148、肥前磁器染付碗149～151・青磁碗154・白磁小杯152・154・青磁皿153、土師器焙烙156、備前焼擂鉢157、丹波焼擂鉢158、軒丸瓦159～162・丸瓦163・164・平瓦165・166を図示した(図30・31、図版20・21)。また、調査区西端部において第２層を掘り下げた際に出土した肥前陶器碗167・溝縁皿168・皿169、肥前磁器染付皿170、銅製品171(図版のみ)もこの溝から出土した可能性が高いので、あわせて報告する(図32、図版20)。中国産青花碗146は焼成がやや不良で陶胎に近い。肥前陶器呉器手碗147は高台畳付のみ露胎である。釉は貫入が著しい。溝縁皿148・168はいずれも砂目が３箇所認められる。168と碗167の高台内には「二中」の墨書がある。皿169は内野山系の製品で、砂目が２箇所残っており、本来は３箇所であったと考えられる。肥前磁器染付碗149の外面は一重網目文に加えて魚や山水文らしき簡素な絵を描く。150は一重網目文を描く。高台内に墨書があるが判読できない。151は体部外面に黒色釉を掛け、底部内面の中心に菊花文を描く。154は外面に青磁釉を掛ける。青磁皿153の底部内面は蛇の目釉剝ぎであるが、その部分に鉄錆を塗り、さらにそれを掻き取って波文や圏線文を表現している。染付皿170の底部内面は蛇の目釉剝ぎである。体部内面には簡素な唐草文を巡らせる。土師器焙烙156は体部外面を掻き上げる。左右に孔を穿った耳が付く。難波洋三氏の分類によるC類のa1[難波1992]である。備前焼擂鉢157の口縁部内面は面というよりも段をなしている。丹波焼擂鉢158は擂目が７本単位の櫛目である。軒丸瓦159～162の瓦当文様はいずれも右回りの三つ巴文である。そのうち159・162は巴文と珠文の位置関係から同文であるが、笵傷がないため同笵かどうかは確認できない。159の丸瓦部にはコビキBの技法が認められる。銅製品171は平面楕円形で、長径が16.5㎝前後、短径が14.5㎝、深さが3.6㎝である。容器のような形態であるが、底部に３箇所以上の孔があることから、

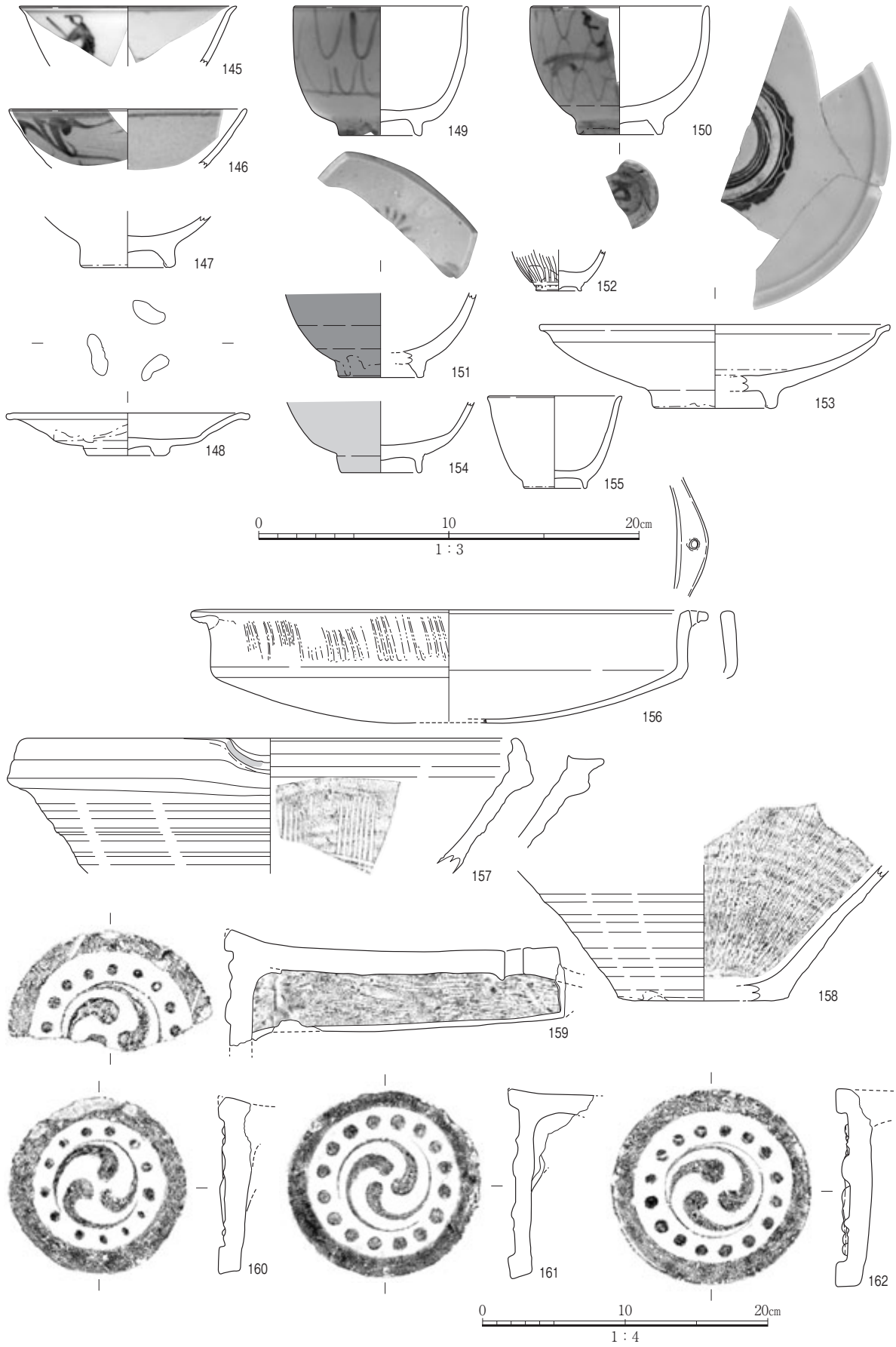



図30　SD352B出土遺物実測図（１）

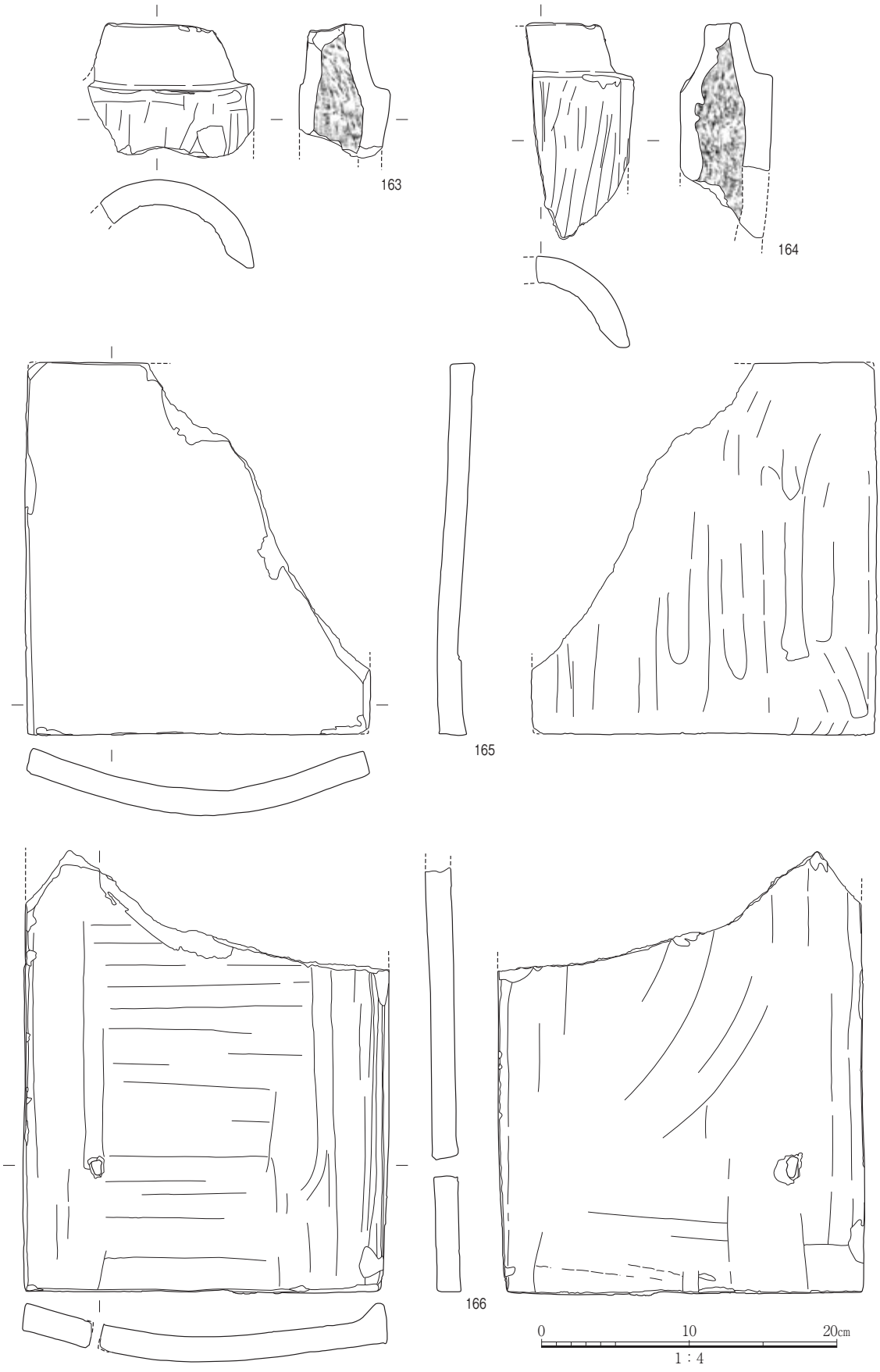



図31　SD352B出土遺物実測図（２）

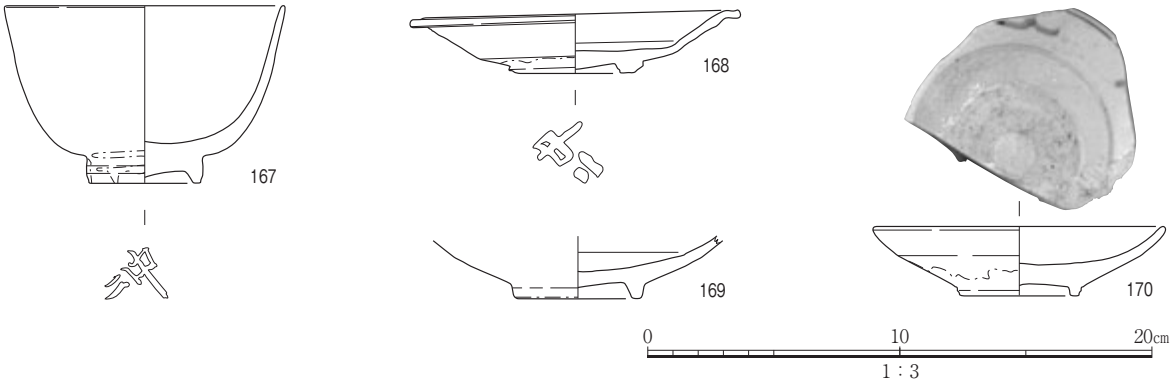



図32　SD352B出土の可能性がある遺物実測図

別の用途のものである。

以上の遺物は、肥前磁器・陶器の様相から、17世紀中葉のものであろう。

SD028　調査区中央部東寄りで検出した南北方向の溝である(図26・27、図版12)。幅2.8～3.2m、深さ1.1mで、北壁の手前で途切れている。溝がほぼ埋まったのち上部のやや窪んでいた部分から比較的まとまった遺物が出土した。

瀬戸美濃焼陶器染付碗172、肥前磁器染付碗173～175・染付鉢180、関西系陶器色絵碗176・碗177・錆絵碗178・灯明皿179、土師器焙烙181、堺擂鉢182・183を図示した(図33、図版21)。瀬戸美濃焼陶器染付碗172は別個体がもう１点出土している。肥前磁器染付碗173～175は外面に簡素な梅枝を描く。すべて底部内面は蛇の目釉剝ぎである。染付鉢180の外面には体部に花唐草を描き、高台内に判読不能の字款がある。内面は底部に松竹梅、体部に牡丹唐草を描く。関西系陶器色絵碗176は上絵付けの釉が変質しているため確実ではないが、赤と緑の絵があったと考えられる。灯明皿179の口縁部内面には菊文を型取った粘土を貼り付ける。土師器焙烙181は小破片のため、口縁部径が不確かである。難波氏のD類[難波1992]である。堺擂鉢183の片口部には扇の中に「極」の刻印がある。

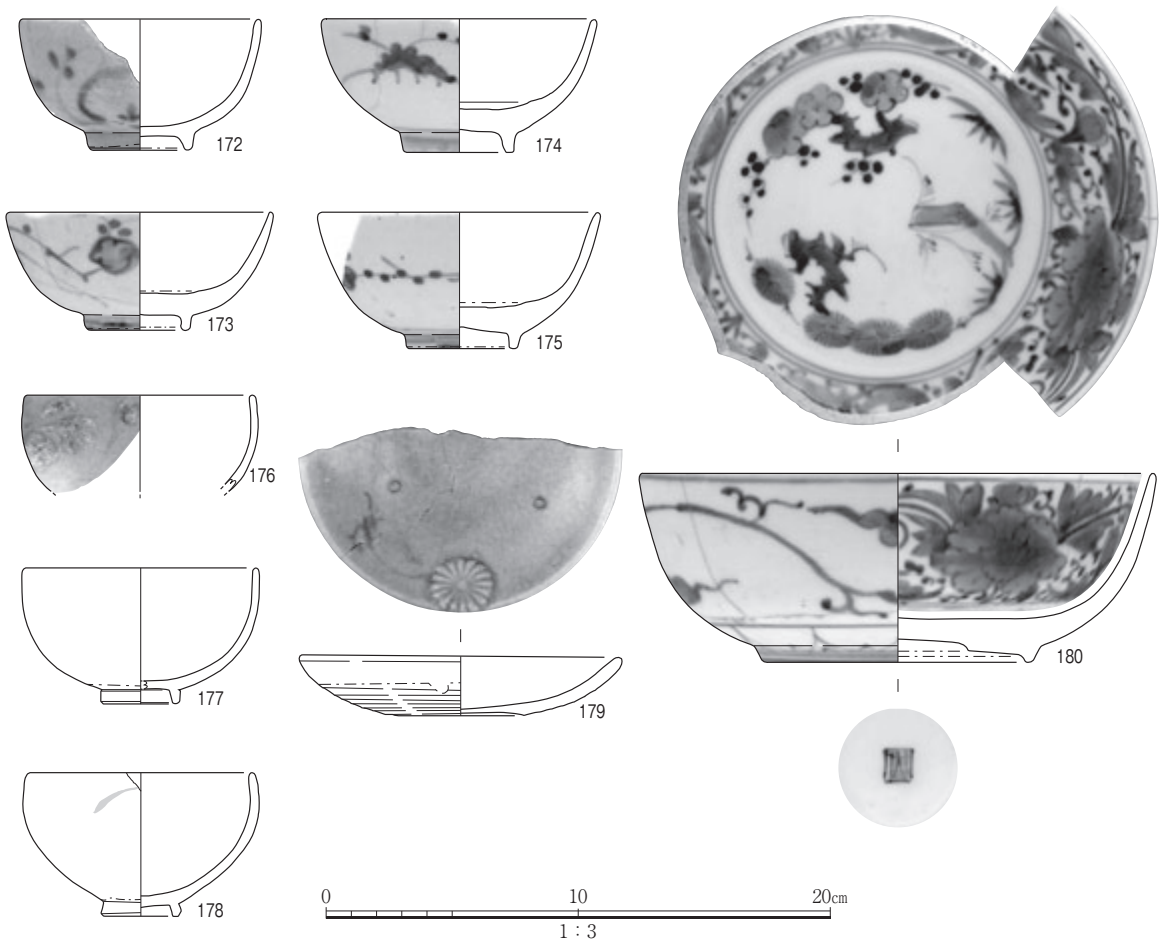
以上の遺物の年代は、肥前磁器や瀬戸美濃焼陶器、関西系陶器などの様相から18世紀後葉～末と考えられる。

SK035　調査区中央部で検出した土壙である。東西1.8m、南北2.0m、深さ0.9mで、SD034を切る(図26・28、図版13)。

出土した遺物から、肥前磁器染付碗184・185・染付筒形碗186、関西系陶器色絵碗187・188、土師器皿189、軒丸瓦190・191・軒平瓦192、丸瓦193・隅平瓦194を図示した(図34)。肥前磁器染付碗184は外面に梅枝を描く。底部内面は蛇の目釉剝ぎである。185の外面には、丸に菊を３箇所に配し、直線を斜めに組み合せた幾何学文で残りを埋めている。SD028から出土した破片と接合したが、この遺構で報告する。染付筒形碗186の外面には、丸に菊、四方襷、直角を組み合せた幾何学文を描く。関西系陶器色絵碗187の外面には花を緑で、花を赤で上絵付けする。188は花を赤と青で、笹を緑で上絵付けする。土師器皿189は回転ケズリで底部から体部を調整する。底部の内外面に黒斑がある。灯明皿として使用されている。軒丸瓦190・191は右回りの三つ巴文である。軒平瓦192は唐草文である。

以上の遺物の年代は、肥前磁器や関西系陶器の様相からみて、18世紀後葉～末と考えられる。

SK036　調査区東部北壁沿いで検出した土壙である。東西2.3m、南北3.0m以上、深さ0.9mで、



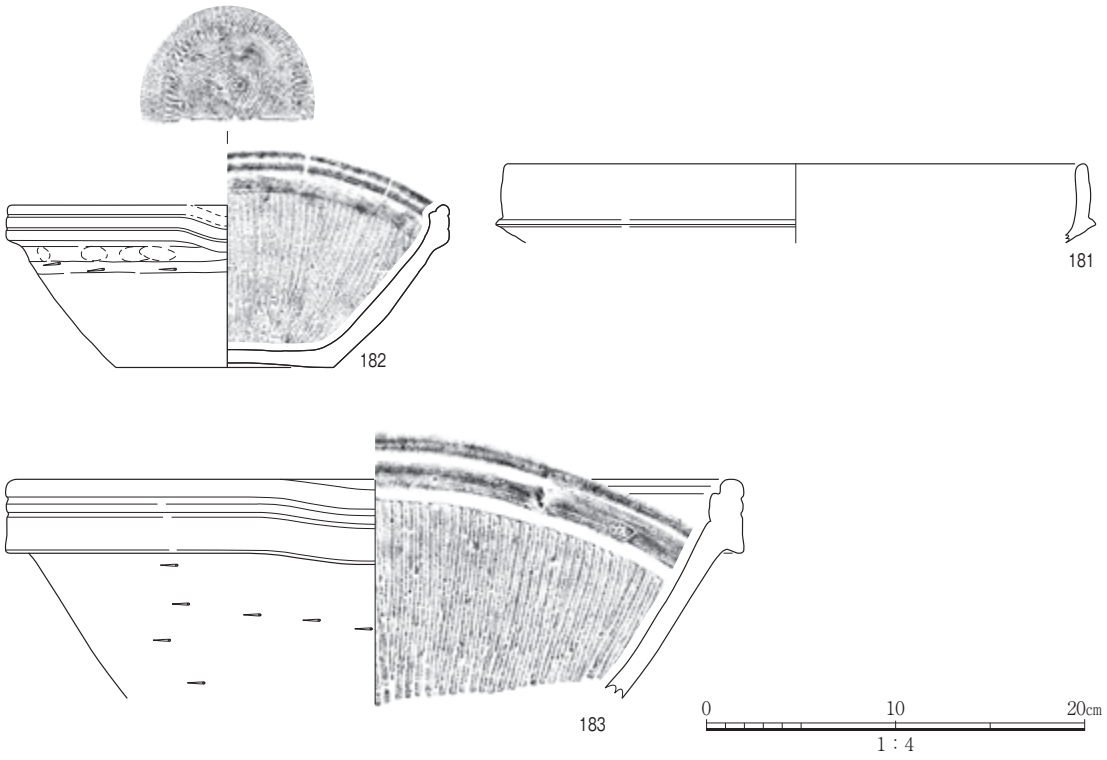




図33　SD028出土遺物実測図

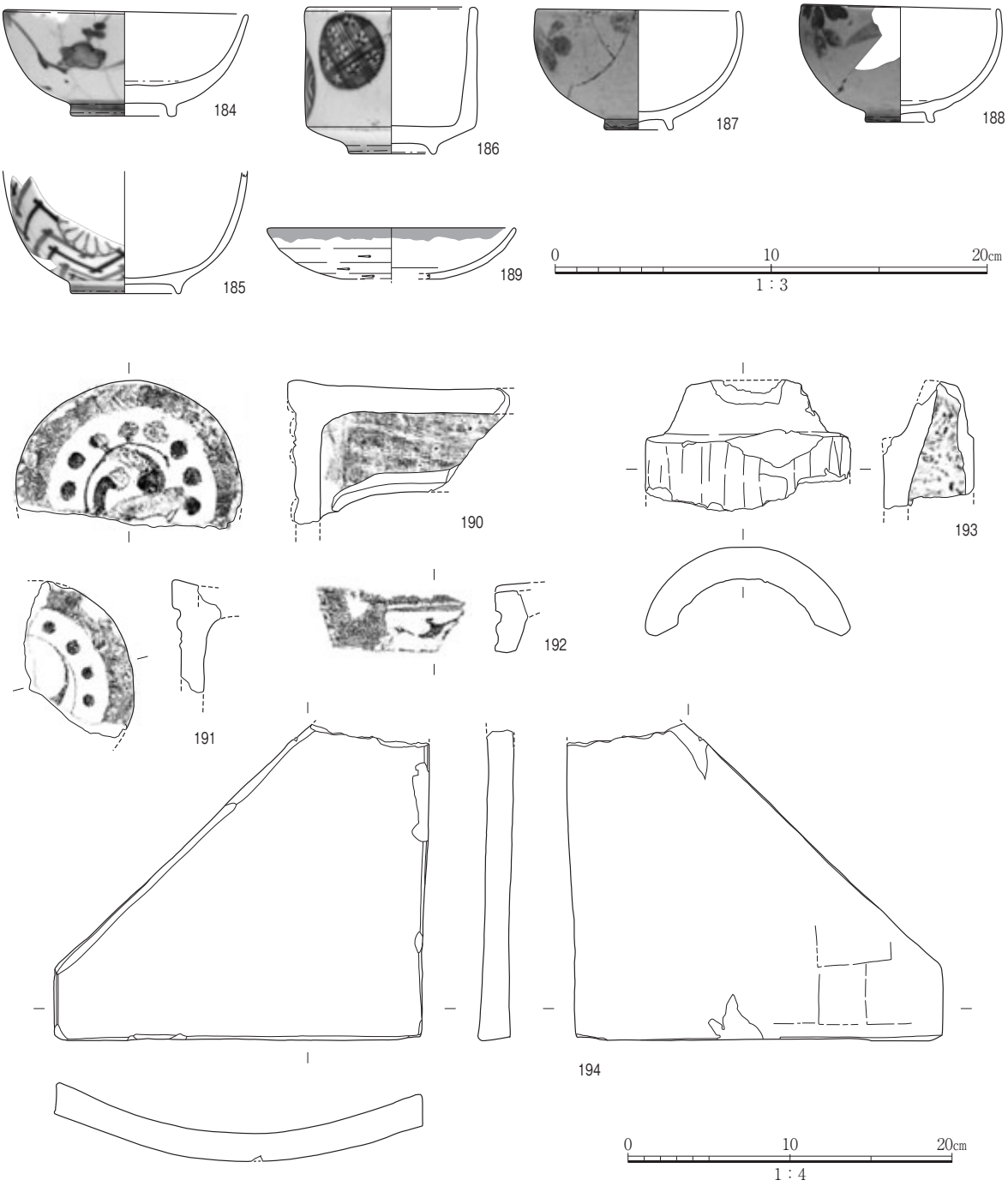



図34　SK035出土遺物実測図

SD010に切られる(図26・28、図版13)。

出土した遺物から、肥前磁器染付碗195・染付皿197、瀬戸美濃焼陶器筒形碗196、軒丸瓦199～204・軒桟瓦205を図示した(図35)。肥前磁器染付碗195は梅枝などを描く。染付皿197の外面には唐草を巡らせる。内面には人物と竹林を描く。瀬戸美濃焼陶器筒形碗196は鎧茶碗である。軒丸瓦199～204はいずれも右回りの三つ巴文である。199と200、201～203はそれぞれ笵傷が一致することから同笵である。軒桟瓦205は菊文である。

以上の遺物の年代は、肥前磁器や瀬戸美濃焼陶器などの様相からSK035と同様に18世紀後葉～末と考えられる。

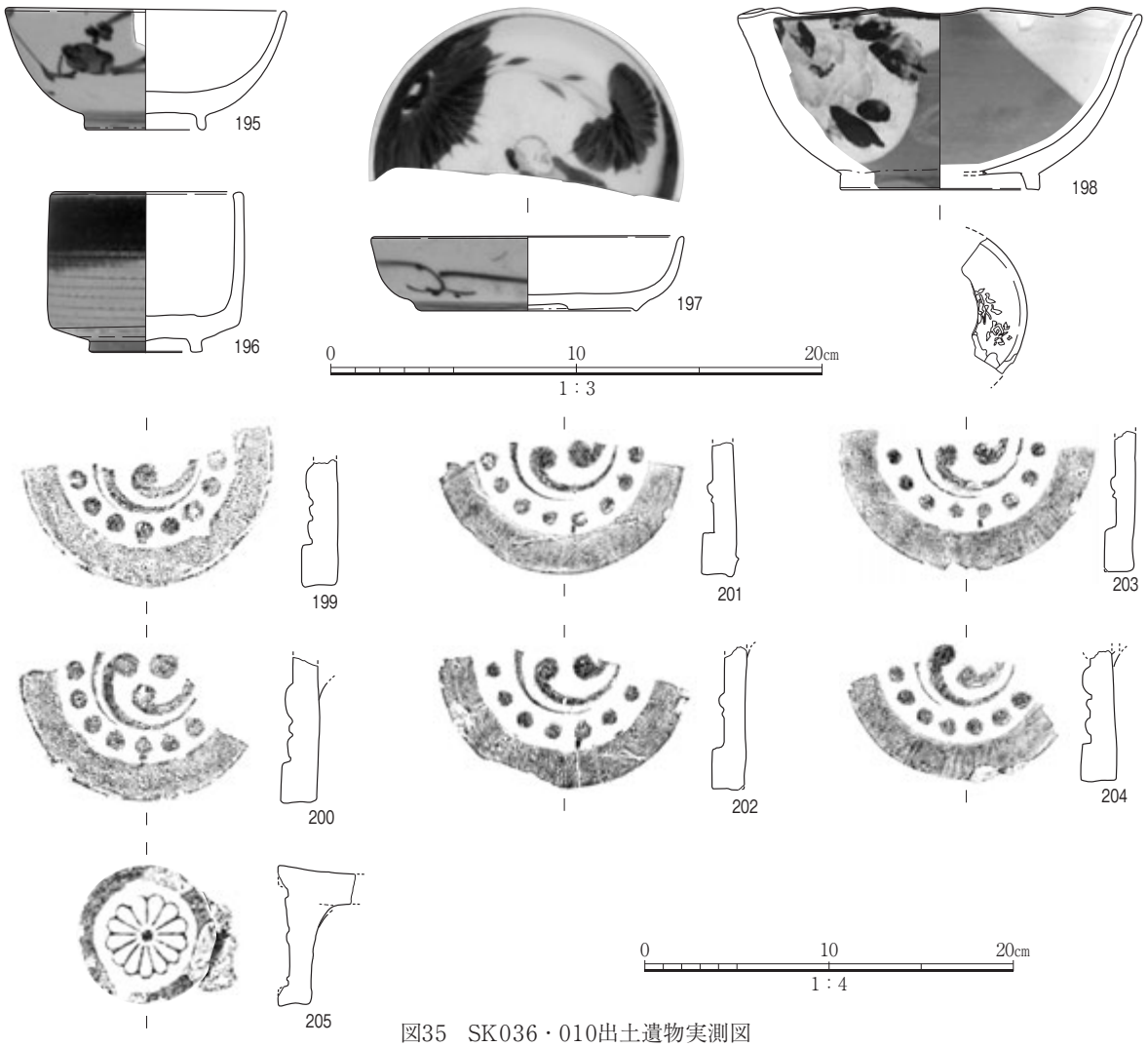



図35　SK036・010出土遺物実測図
SK036(195～197・199～205)、SK010(198)

SK010　調査区東部北壁沿いで検出した土壙である。東西9.0m、南北は南東に浅く出張った部分をのぞけば2.4m以上、深さ0.6mで、SK036を切る(図26、図版13)

出土した遺物には図示した関西系陶器鉢198のほかにも、肥前磁器染付碗・皿、瀬戸美濃焼陶器皿、堺擂鉢、土師器羽釜・焜炉などがある(図35、図版21)。関西系陶器鉢198はにぶい黄橙色の素地の内外面に部分的な白化粧を施し、その上に呉須や錆で花を描いたのち透明釉を掛けている。乾山焼を写したものと考えられる。高台内に「聚楽」と手書きの銘がある。

以上の遺物の年代は、肥前磁器や瀬戸美濃焼陶器、土師器などの様相や、乾山焼写しが京焼陶工によって盛んに行われる年代からみて、19世紀前半と考えられる。

SK022　調査区東部で検出した土壙である。東西3.3m、南北2.9m、深さ0.5mで、SK083に切られ、下位にSK023がある(図26・28、図版13)。

出土した遺物から、肥前磁器染付碗206・207・赤絵碗208・白磁菊形皿214、瀬戸美濃焼磁器染付碗209、関西系磁器染付碗212、関西系陶器色絵火入210・灯明受皿211・灯明皿215・輪花鉢216、軟質施釉陶器灯明受皿213、信楽焼壺217、土師器焙烙218・羽釜219、堺擂鉢221、軒丸瓦220を図示し

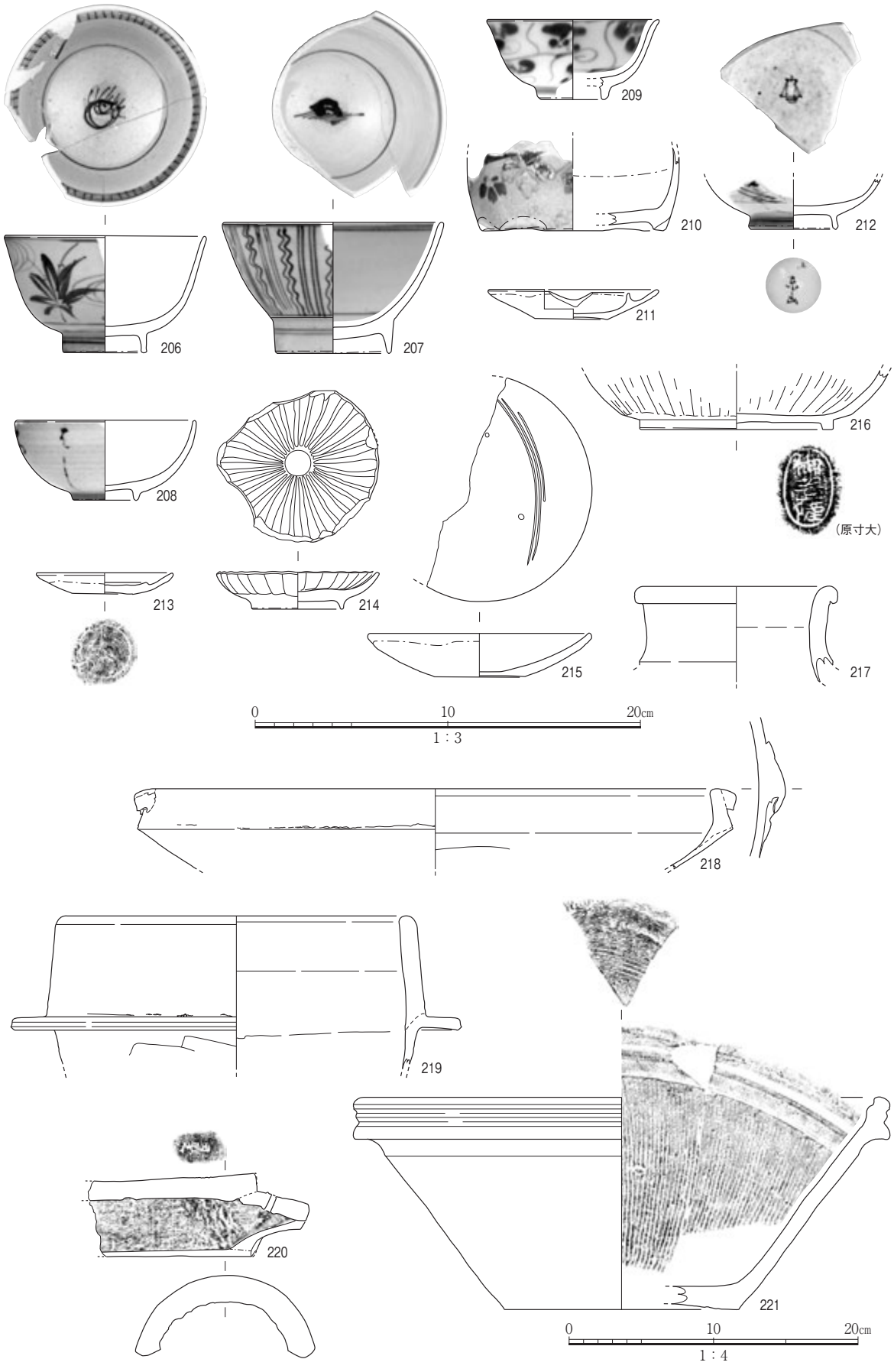



図36　SK022出土遺物実測図

た(図36、図版21)。肥前磁器染付碗206の外面には流水と紅葉を描き、内面は口縁部に格子目文を巡らせ、底部中央には宝珠と考えられる文様を描く。207は広東碗で、外面に２本１組の直線と波線を放射状に描く。底部内面には簡略化した山水文を描く。赤絵碗208は赤の上絵付けで文字を書くが、判読できない。関西系磁器染付碗212の高台内には「東山」銘が手書きされている。関西系陶器色絵火入210は釉下に錆絵染付の文様が見られ、赤と緑で花が上絵付けされている。輪花鉢216の高台内左脇には「御菩薩」の小判印が押されている。京都産と考えてよいものである。土師器焙烙218は難波氏のD類[難波1992]で、耳が付くが、孔は穿たれていない。220は瓦当部を欠くが、玉縁部に釘孔があることから軒丸瓦である。凸面に刻印があり、「岡瓦又」と読める字のほかに記号のような部分もある。

以上の遺物の年代は、肥前磁器染付広東碗や瀬戸美濃焼磁器染付碗、関西系磁器が存在することから、19世紀前～中葉と考えられる。

### ３)小結

本調査における成果を時代順に述べていく。

まず、平安時代中～後期の水田を検出した。たびたび洪水に見舞われる低湿な環境のなかで営まれたものであり、長原遺跡において広範囲に始まる荘園開発の動きと捉えられる。ただし、その後も河川の氾濫は続いたと考えられ、本格的な開発が進められるのは室町時代以降のことであった。

室町時代から江戸時代にかけては、集落に係わる多くの遺構・遺物を確認した。特に、長原遺跡では基本的に作土層であるRK２層・NG２層およびRK３層・NG３層の層準において、本調査地周辺が集落の中心であったことを示す特筆すべき遺構を多数検出し、中国産磁器をはじめとする多量の遺物を得ることができたことは重要な成果である。幅6.8m、深さ0.7mという大規模な溝SD501はすでに東隣地のNG09－３次調査でも断面で検出されていたが[大阪文化財研究所2012]、今回の成果によって東西方向の長さが70m以上に及ぶことが明らかとなった。集落、あるいは屋敷を区画するための濠であろう。その上位層においても東西長30m(100尺)の溝SD404がある。また、墳墓堂遺構SX335は長原東部地区では初めての発見であり、こうした施設を営むことができる有力者層が近辺に存在したことがわかった。SD501から出土した中国産青花碗30やSX335の周溝から出土した瀬戸美濃焼茶入77は、大坂城跡や大坂城下町跡の資料と比較しても最古級のものであり、注目される。

上記の集落に係わる遺構は15世紀頃から現れ、16世紀にかけていったん盛期を迎えるが、江戸時代に入っても、多量の陶磁器の存在から本調査地が集落の中心であり続けたことがわかる。西のNG09－２次調査地では、９枚の肥前陶器小皿を埋納して中国産青花皿で蓋をした江戸時代初期の土壙が見つかっている。今回の資料においても、織部向付137・138や、茶壺の可能性がある肥前陶器壺139・信楽焼壺140、「御菩薩」の印銘から京焼と考えられる鉢126など、一般的な農村とは一線を引くことができる資料が認められる。

## 第２節　NG10－５次調査

### １）層序

現地表の標高はTP＋10.0mとほぼ平坦である。調査では最も深い部分で現地表下5.8mまでの地層の観察を行い、第０～14層に区分した(図37･38、図版22･23)。このうち第11層以下については遺構･遺物が希薄であることから、調査区南壁沿いに設けたトレンチ内の断面観察を基本とし、さらに掘削深度が深くなる第13・14層については調査区東南端で一部深掘りを実施し、観察を行った。以下で各層の特徴について記す。また、長原遺跡東北地区の標準層序(表４)および長原遺跡の標準層序(表５)との対比をあわせて記す。

第０層：現代盛土層および攪乱で、層厚は100～140㎝である。RK０層、NG０層に相当する。

第１層：現代作土層で、層厚は10㎝である。RK１層、NG１層に相当する。

第２層：灰オリーブ色粗粒砂混り細粒砂質シルトなどからなる作土層で、層厚は10～20㎝である。周辺の調査結果からRK２層、NG２層に相当する。

第３層：灰オリーブ色粗粒砂質シルトなどからなる作土層で層厚は10～20㎝である。本層の下部には水成層に由来する粗粒砂が多く認められた。本層下面では溝が検出された。土師器・須恵器・瓦器を含む。RK３層、NG３層に対応する。本層の下部に見られた水成層起源の粗粒砂は本来RK4A層、NG4A層に相当するものであろう。

第４層：第4a・4b層の２層に細分した。第4a層は暗緑灰色シルトなどからなる作土層で層厚は10㎝未満である。東部にのみ遺存する。RK4B層、NG4B層に対応する。概ね本層までを重機により除去した。第4b層は東端付近で落込みSX401の遺構埋土で、最大層厚60㎝である。土師器・須恵器・黒色土器が出土した。RK4C層、NG4C層に相当する。

第５層：緑灰色シルト・暗灰黄色シルトなどからなる水成層で、層厚は20～60㎝と東に向かって厚く堆積する。植物の根による擾乱が著しくラミナは部分的にしか認められない。本層下部を主体として飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が多く出土した。調査地西端では本層内から削り込む平安時代の自然流路NR502を検出した。RK4C ～６層、NG4C ～7A層に相当する。

第６層：暗緑灰色シルトおよびオリーブ灰色細粒～粗粒砂などからなる水成層で、層厚は80㎝ある。飛鳥時代の井戸SE601などは本層上面の遺構である。本層上部はシルト主体で、下部は西部が砂主体、東部はシルトと砂の互層となる。遺物は出土しなかったが、上面の遺構の年代観からRK６～7A層、NG6B～7B層に相当する。

第７層：暗緑灰色シルトを主体とする水成層で、暗緑灰色細粒砂の薄層を介在する。また下底付近には灰色シルトが堆積する。層厚は30～40㎝である。RK7A層、NG7B層に相当する。

第８層：第９層と第10層に由来するシルトの偽礫を含む作土層で、層厚は10㎝未満である。上面で畦畔、下面で耕作に伴う小溝を検出した。弥生土器・土師器片が少量出土した。NG03－５次調査の結果から古墳時代中～後期に位置づけられよう。RK7A層、NG7B層に相当する。

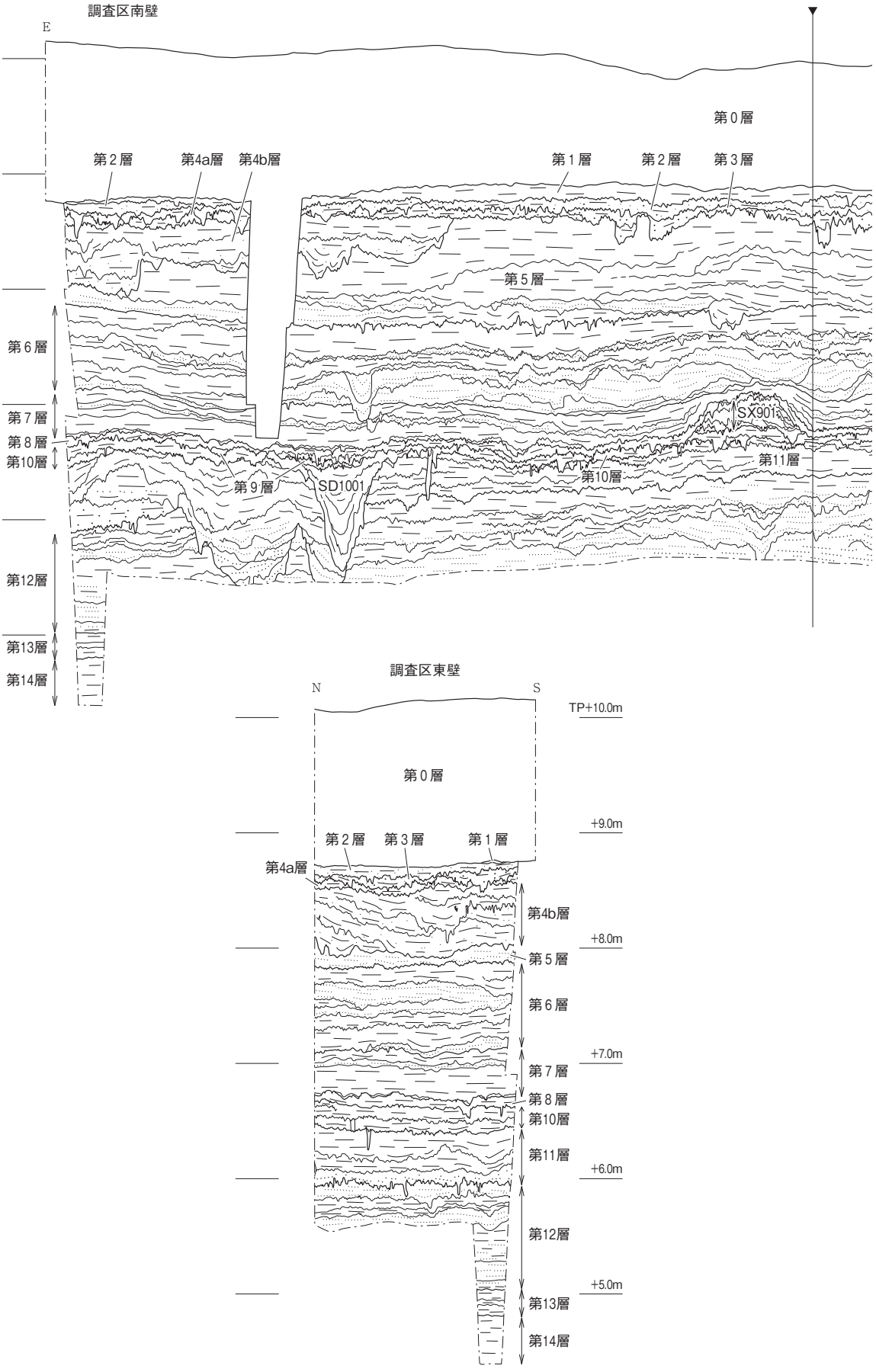
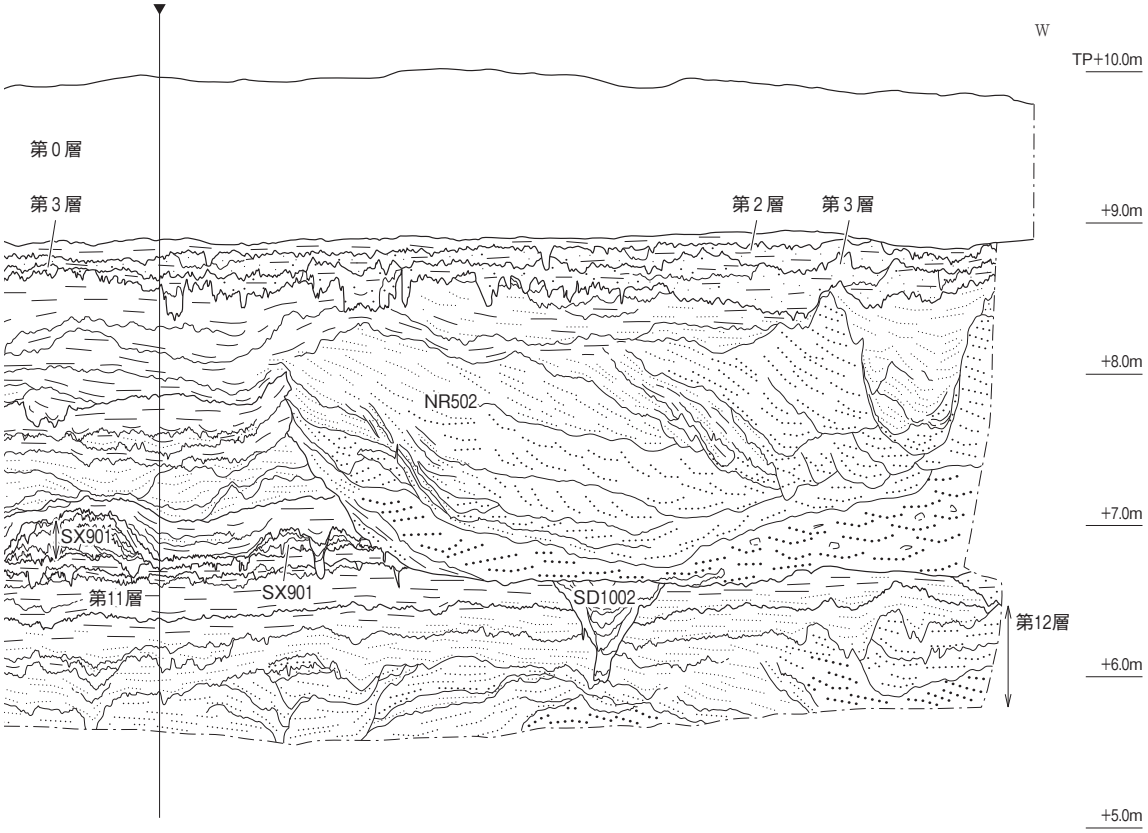
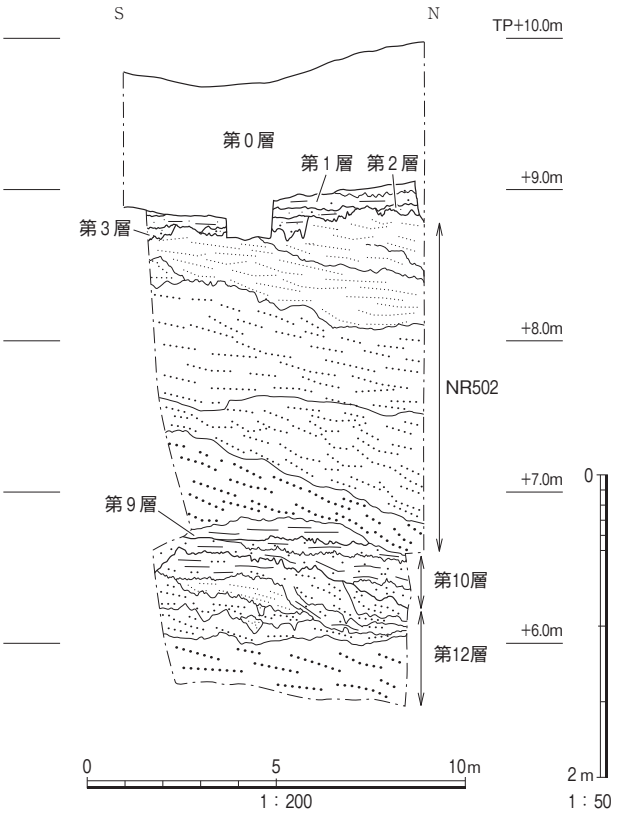

調査区南壁
E
第０層
第２層
第4a層
第4b層
第１層
第２層
第３層
第５層
第６層
第７層
第８層
第10層
第９層
SD1001
SX901
第11層
第10層
第12層
第13層
第14層
調査区東壁
N
S
TP+10.0m
第０層
+9.0m
第２層
第３層
第１層
第4a層
第4b層
+8.0m
第５層
第６層
+7.0m
第７層
第８層
第10層
第11層
+6.0m
第12層
+5.0m
第13層
第14層

図37　地層断面図


W
TP+10.0m
第0層
第3層
第2層
第3層
+9.0m
+8.0m
NR502
+7.0m
SX901
SX901
第11層
SD1002
第12層
+6.0m
+5.0m

調査区西壁


S
N
TP+10.0m
第0層
第1層
第2層
+9.0m
第3層
+8.0m
NR502
+7.0m
第9層
第10層
+6.0m
第12層
0
5
10m
1：200
0
2m
1：50

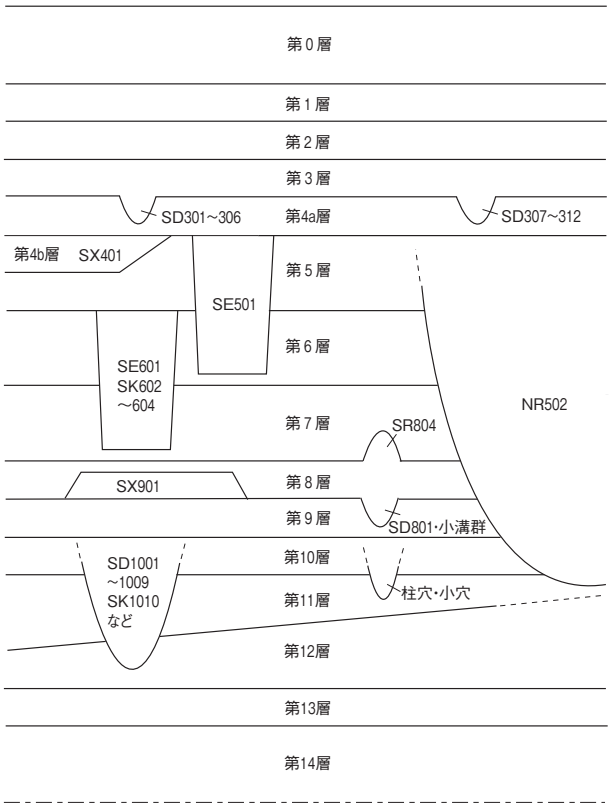



図38　NG10－５次調査地の地層と遺構の関係図

第９層：灰色シルトからなる水成層で層厚５㎝未満で部分的に遺存する。本層上面で盛土遺構SX901などを検出した。古墳時代中期～後期に位置づけられる。RK7A層、NG7B層に相当する。

第10層：黒色シルトからなる暗色帯で層厚は５～10㎝である。本層中で多くの溝・土壙・小穴などを確認した。出土遺物は多くないが、弥生土器・土師器を含み、弥生時代中期～古墳時代前期に位置づけられる。RK7B ～9A層、NG7B ～8B層に位置づけられる。

第11層：オリーブ黒色～暗緑灰色シルトを主体とする水成層である。東部では層厚50㎝と厚いが、西では収斂し、後述の第12層と区分できなくなる。最上部は土壌化し、弥生時代中期後半の弥生土器が少量出土した。また、下底部付近にはやや暗色化した部分が認められる。調査区東部では壁面での観察であるが、南東－北西方向の自然流路を検出した。本層以下は調査区南壁沿いにトレンチを設けて確認した。RK9B ～10A層、NG8B ～9A層に相当する。

第12層：暗緑灰色細粒砂質シルト～緑灰色粗粒砂からなる水成層で下位および西側に向かうほど粗粒化する。調査地東端で層厚90㎝を確認したが、西側ではさらに厚く堆積すると考えられる。本層以下からは遺物が出土しなかった。RK10B層、NG9B層に相当する。

第13層：黒～黒褐色シルトからなり、暗色帯を形成する。層厚は20㎝で上下２層に細分可能である。本層以下は調査地東端の一部で確認したのみである。RK10C層、NG9C層に相当する。

第14層：暗オリーブ灰色シルトからなる水成層で層厚は40㎝以上である。RK11層、NG10・11層に相当する。

２）遺構と遺物

ⅰ）弥生～古墳時代の遺構と遺物

第10層内では溝・土壙・柱穴などの遺構を確認した（図39～41、図版24～26）。なお、調査区南西端付近では、後述の平安時代の自然流路であるNR502により削平を受けており、規模の大きな遺構のみが遺存している。これらの遺構から出土した遺物は多くないが、第11層最上部より弥生時代中期後葉の遺物が出土していること、第９層から古墳時代中期の遺物が出土したことから、弥生時代中期後葉～古墳時代中期に位置づけられる。以下おもな遺構についてその概略を記す。

SD1001　調査区東部で検出した南南西－北北東方向の溝で、幅3.5m、深さ0.9mである。埋土の観察から幾度かの掘り直しが認められ、肩口付近に加工時形成層である第10～12層に由来する偽礫を含むシルトが残るほかは機能時堆積層のシルトで埋没していた。また、埋土最上部には第９層が堆積している。

弥生土器のほか庄内式土器が出土しており、庄内期の溝と考えられる(図42、図版31)。

222は短く開いた口縁部の端部を上下に拡張した大型の弥生土器甕である。器体の内外面をヨコナデ調整している。弥生時代中期後葉に属するものである。223は実測図上で一個体の土器として復元しえた体部が球形に近い弥生土器甕である。口縁部は外上方に開いており、内外面をヨコナデ調整している。口縁端部は丸い。低い平らな底部は中央部が浅く凹むもので、周囲をユビオサエで整えている。体部の調整は外面が横方向のナデ、内面は板状工具による横方向のナデである。庄内１期に属するものであろう。

SD1002　調査区西部で検出した南西－北東方向の溝である。幅2.5m、深さは0.7～0.8mである。埋土は下部が第10～12層に由来する偽礫を含む加工時形成層、上部がシルト主体の機能時堆積層である。SD1001同様掘り直しが認められる。埋土最上部には第９層が堆積していた。

遺物は弥生土器もしくは土師器細片が出土したのみであり、時期を決することはできないが、形態の類似性からSD1001と同様の時期が推測される。

SD1001・1002の機能としては、その規模から集落の区画溝あるいは耕作に係る導排水路が考えられるが、出土遺物が総じて少ないことから後者の機能を推定しておきたい。

SD1003　調査地東端で検出した南北方向の溝である。幅1.0m以上であるが検出面からの深さは0.1m未満と規模に比して浅い。出土遺物は多くないが、古墳時代前～中期の遺物が出土している(図42、図版31)。

224は土師器高杯の脚裾部片で、端部を面取り気味におさめている。調整は外面が横方向のナデで、内面は左上がりの細かいハケの後、ユビオサエで整えている。古墳時代前～中期に属するものであろう。

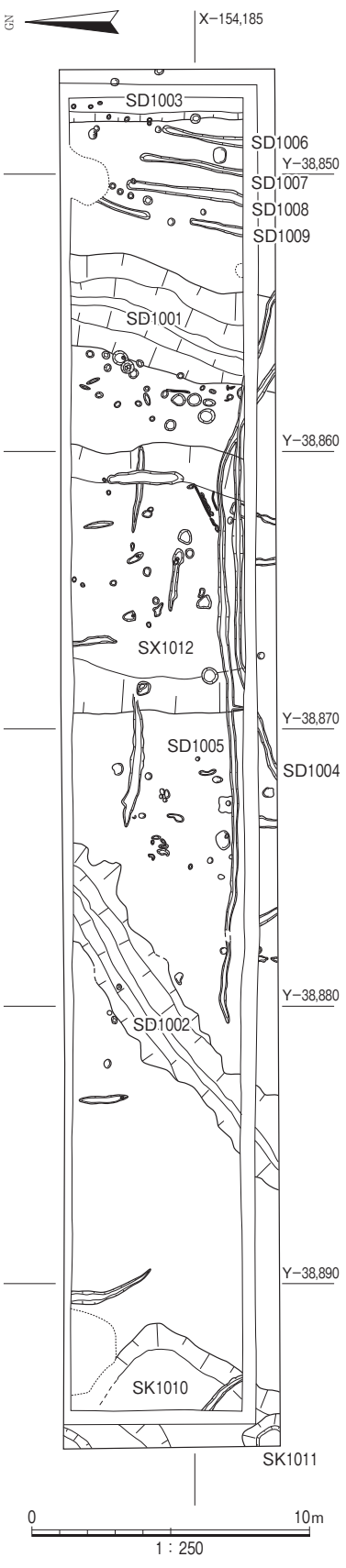



図39　第10層内遺構平面図(１)

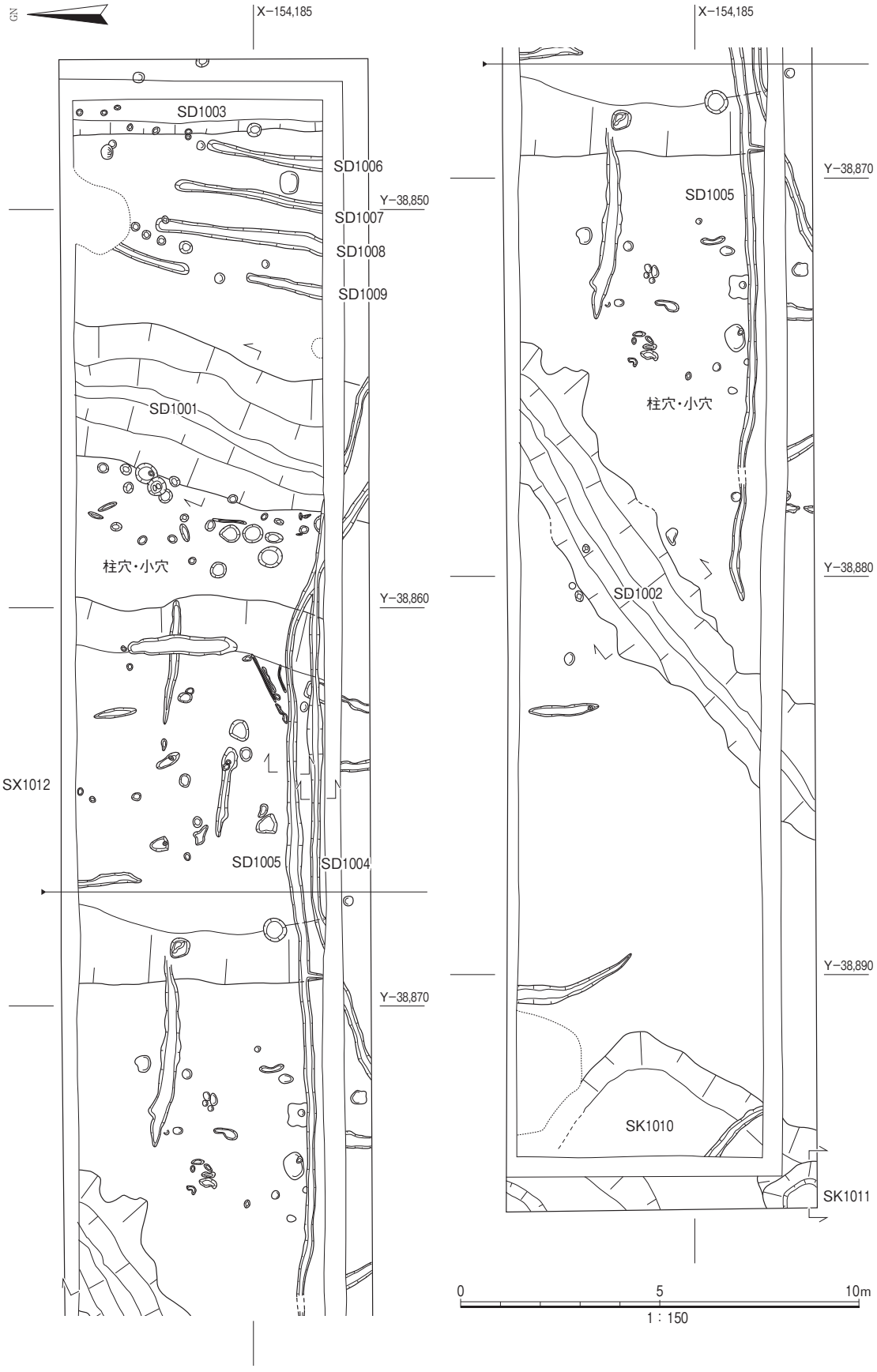



図40　第10層内遺構平面図（２）

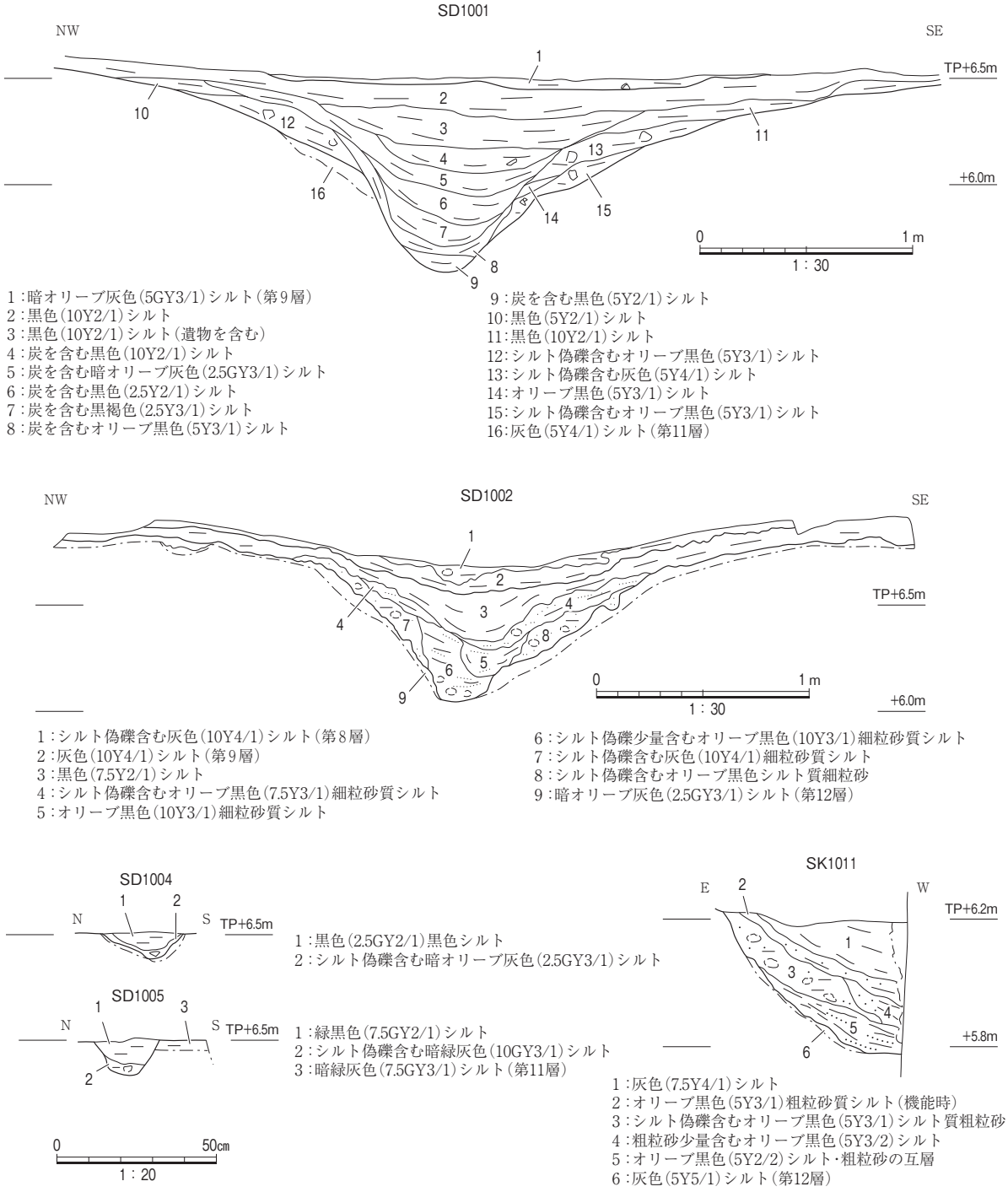



図41　第10層内遺構断面図

SD1004・1005　調査区南部で検出した２条の溝である。検出長はSD1004が25m以上、SD1005が18m以上と連続性が高いことが特徴である。東西方向を基調とするが、ともに東ではやや南方に向きを変え、SD1005は西でも南方に向きを変えている。ともに幅0.2m、深さ0.1m前後で、埋土は下部が加工時形成層、上部が機能時堆積層である。切合い関係からはSD1004が先行するが、規模・形状が類似することから、大きな時期差はないと推定できよう。遺物は弥生土器細片が出土したのみであるが、SD1001よりも後出し、後述の柱穴・小穴との関係では先後関係が確認できたものでは

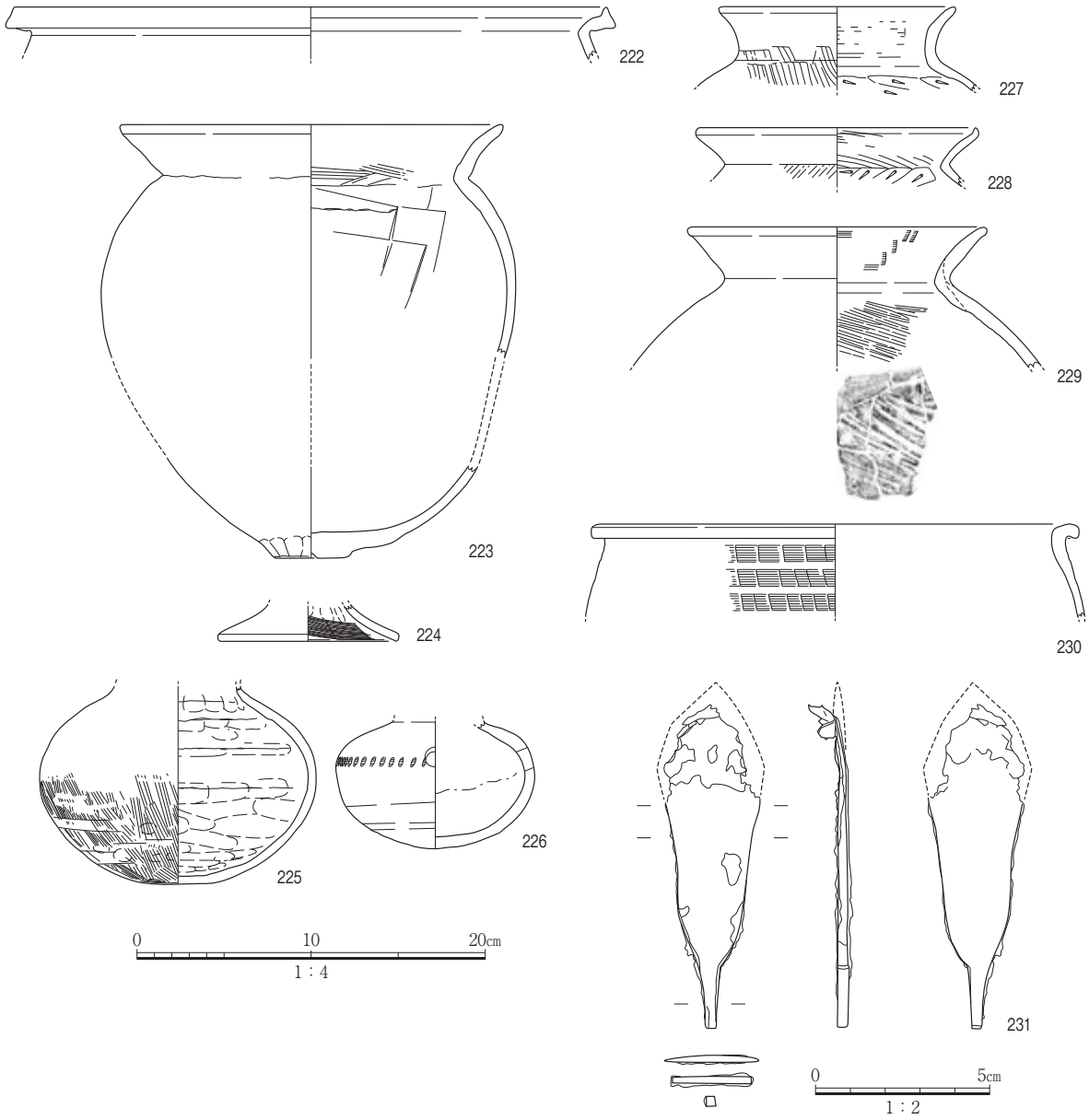



図42　弥生～古墳時代の遺構および第８～10層出土遺物実測図
SD1001(222・223)、SD1003(224)、SK1011(225)、第10層(226～230)、第８層(231)

SD1004・1005の方が新しい。

SD1006～1009　調査区東部で検出した４条の並行する溝である。幅0.2～0.3m、深さは0.1m未満である。形状から耕作に係る溝と推定できる。なお、調査区中央部でも同方向あるいはこれに直交する方位の小溝が部分的に確認されたが、これらと同様、耕作に係るものであろう。遺物は弥生土器あるいは土師器細片が出土したのみであるが、切合い関係からは後述の柱穴・小穴群よりも新しい。

SK1010　調査区西端で検出した土壙である。検出した範囲では一辺5.0m以上の平面形が方形の土壙であるが、上部および西部がNR502で失われているため本来の形状は不明である。検出面からの深さは概ね0.1m前後であるが、NR502による削剥分を復元すると0.2m程度であったと考えられる。埋土は粗粒砂質シルトで、上部には第９層が堆積していた。時期を決することはできないが、土師器細

片が出土している。なお、この部分では第10層が平面的に遺存していないが、埋土が第10層に類似すること、出土遺物にも矛盾がないことから次に記すSK1011同様、第10層内の遺構として報告する。

SK1011　調査区西南端で検出した土壙である。調査区外に続くため正確な規模は不明であるが、半径0.6m以上の平面形が円形で、深さは0.4m以上である。SK1010に後出する。埋土は下部が第11～12層に由来する偽礫を多く含む加工時形成層であるが、部分的にラミナが認められることから掘削時には水が湧いていたと推測できる。上部はシルトを主体とする水漬きの機能時堆積層である。これらのことから本遺構は井戸として機能していた可能性がある。

土師器片のほか木片が出土し、古墳時代中期と推定できる(図42)。225は口頸部を欠損した土師器直口壺で、最大径は体部の中程にある。器体の調整は外面が左上がりのハケの後、ヨコナデで、内面はユビオサエの後、横方向の幅広いヘラケズリを加えている。頸部の内面にはユビオサエが残る。古墳時代中期前葉に属するものであろう。

SX1012　調査区東半で検出した幅10.0m、深さ0.2m未満の浅い落込みである。形状から自然の落込みであろう。埋土最上部には第９層が堆積している。

柱穴・小穴　調査区全域で約100基確認した。直径0.1～0.3m、深さ0.2m未満のものがほとんどで、直径７～９㎝の柱痕跡が認められるものもある。建物や柵など構造物を復元することはできなかった。

これらの遺構を検出した第10層からは弥生土器・土師器など以下の遺物が出土した(図42、図版31)。

226～230は弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器である。226は頸部以上を欠損した最大径が体部の上半にある初期須恵器甕である。体部の上半に櫛描き刺突文を施したあと、円孔を穿つ。227は口縁部が一旦立ったあと、外上方に短く開く土師器甕である。口縁部をヨコナデ調整しており、体部の調整は外面が左上がりの粗いハケ、内面は逆時計回りのヘラケズリである。口縁端部を丸くおさめる。228は口縁部が頸部から「く」の字形に外反する弥生土器甕で、口縁端部を上方に肥厚している。口縁部をヨコナデ調整しているが、内面には逆時計回りの粗いハケメが残る。体部は外面が右上がりのタタキ整形で、内面は時計回りのヘラケズリ調整である。色調が灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石粒を多く含む生駒西麓産の土器である。229は最大径が体部の中程にある土師器甕である。口縁部は球形に近い体部の上半から外反しており、同端部は丸い。器体の調整は口縁部がヨコナデで、体部の外面は不定方向のナデ、内面には左上がりのタタキ痕がある。器形は古墳時代前期の甕に類似しているが、内面の平行タタキと変わらない整形痕は当該期の韓式系土器に稀に見られることがある。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は微細な長石・雲母・黒色粒を含む良質なものを用いている。230は口縁部を水平方向に折り曲げた弥生土器大型の鉢である。口縁部の下端をわずかに肥厚しており、体部の外面には３帯の櫛描き簾状文が巡る。

以上の土器類の所属時期は、226が古墳時代中期(TK216型式)に属するもので、227・229は古墳時代前期末～同中期前葉、228は弥生時代終末(庄内２～３期)、230は弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)に属するものである。

上記のように第10層内ではさまざまな遺構が確認された。出土遺物は弥生時代中期後半～古墳時代

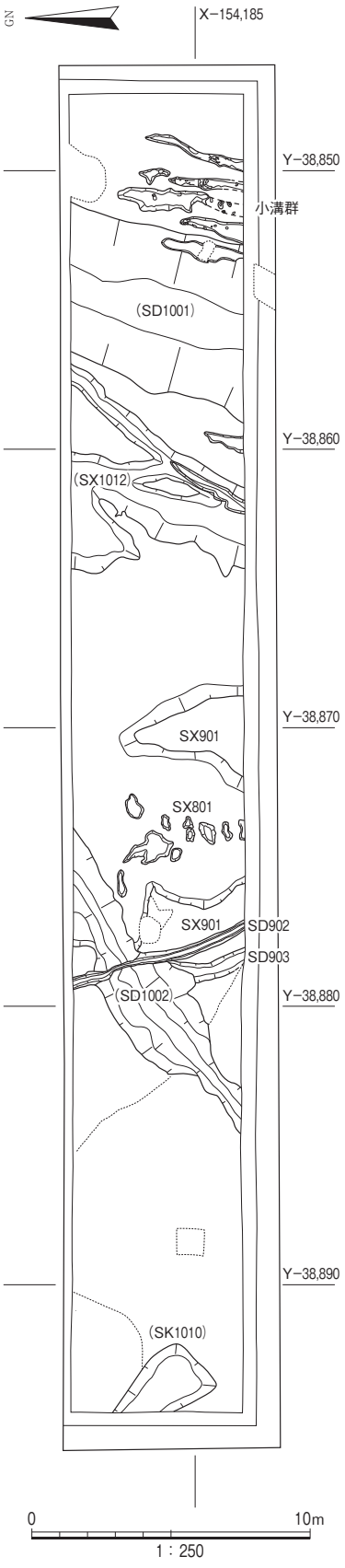



図43　第10層上面および
第８層下面遺構平面図（１）

中期と時期幅があるが、遺物の様相からは遺構の時期の主体は庄内期～古墳時代中期であろう。出土遺物や切合い関係からSD1001・1002など規模の大きな溝や柱穴・小穴群などは庄内期を中心とし、耕作に係ると推定した小溝群は古墳時代中期に降ると考えられ、大きく見れば集落域から耕作域への変遷があったといえよう。ただし、集落域とはいえ遺物・遺構は総じて少なく、縁辺部に当っていたと推測できる。

第10層が形成された後、調査地全域は水成層である第９層によって覆われる。ただし､第９層の堆積は薄かったとみられ、第８層の作土層によってほとんどが失われており、第10層の遺構の最上部のほかは部分的に遺存するのみであった。

第10層上面の遺構として認識されたものは第９層が遺存している部分のみであり、先述のSD1001・1002・SK1010・1011・SX1012など規模の大きな遺構が窪みとして残されていた(図43、図版27)。

第９層上面では盛土遺構SX901と２条の溝SD902・903を確認した(図44・45、図版27)。

SX901　調査区西半で検出した盛土遺構である。中央部はSX801によって幅5.5mほど溝状に掘り込まれており、東西に２分されているが盛土のようすから一連のものと判断した。西部が平安時代の自然流路NR502によって失われていること、調査区外南に続くことから形状は不明であるが、北端および東端裾の形状から東西11m以上、南北８m以上の平面形が方形であった可能性がある。北端裾についてはSD1002が窪みとして残っており、この肩部を意識した可能性がある。盛土は最も高い部分で0.3mである。盛土は第10層および第９層を用いており、各盛土は平均に積まれている。周辺に遺存する第10層および第11層は厚くないにも係らず、第11層以下が盛土に含まれていないことから、周囲を掘削し盛土を行ったものではなく、古墳の盛土および溝などの土手とは考えられない。盛土の様子からは周辺に分布していた第９層および第10層を掻き上げ、高まりを築いたことが窺える。目的については明らかでないが、第８層の作土層がSX901を削平していないことから、第８層段階、周辺を耕地化するにあたって高まりを築いたとすることができよう。

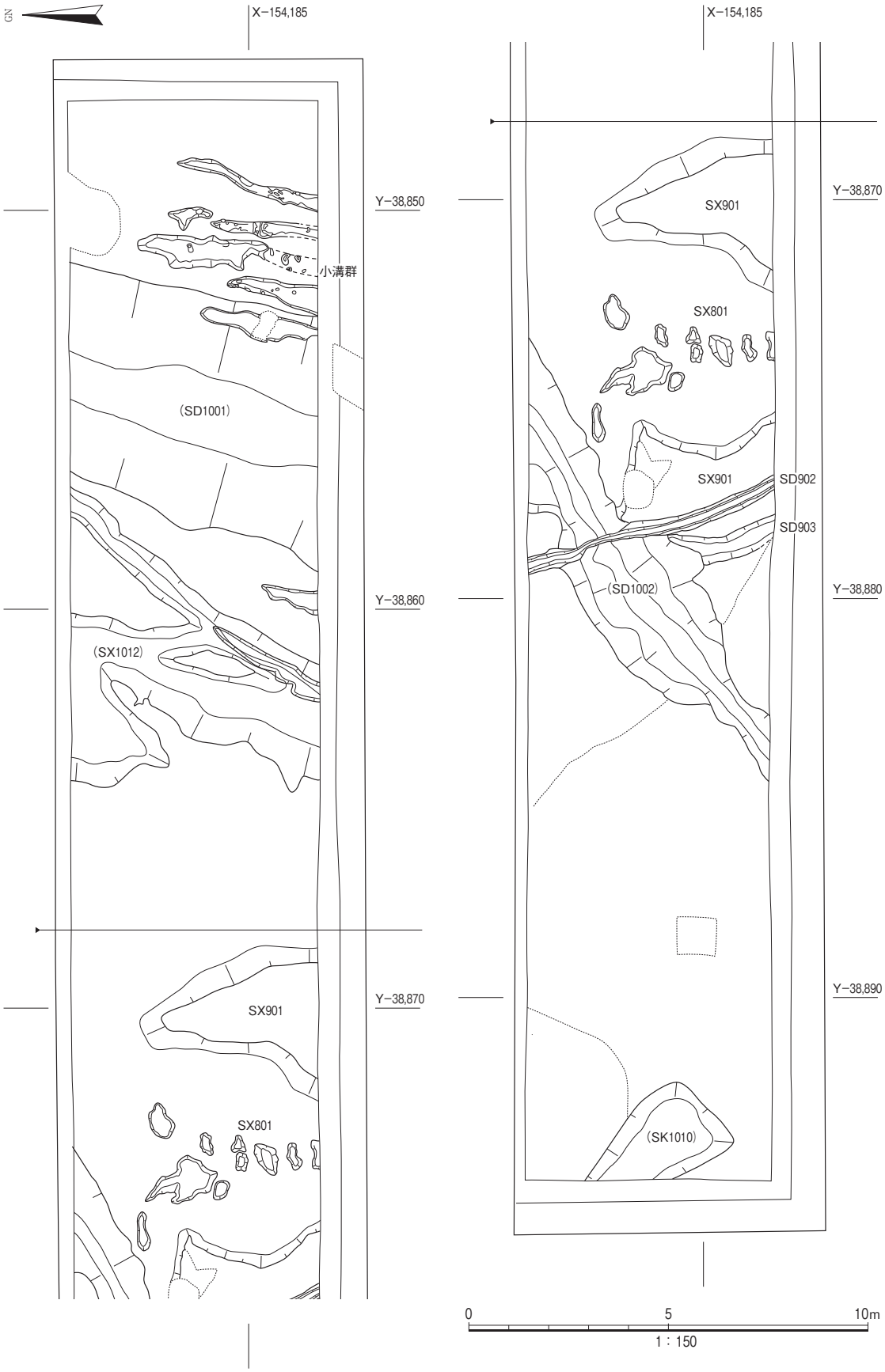



図44　第10層上面および第８層下面遺構平面図（２）

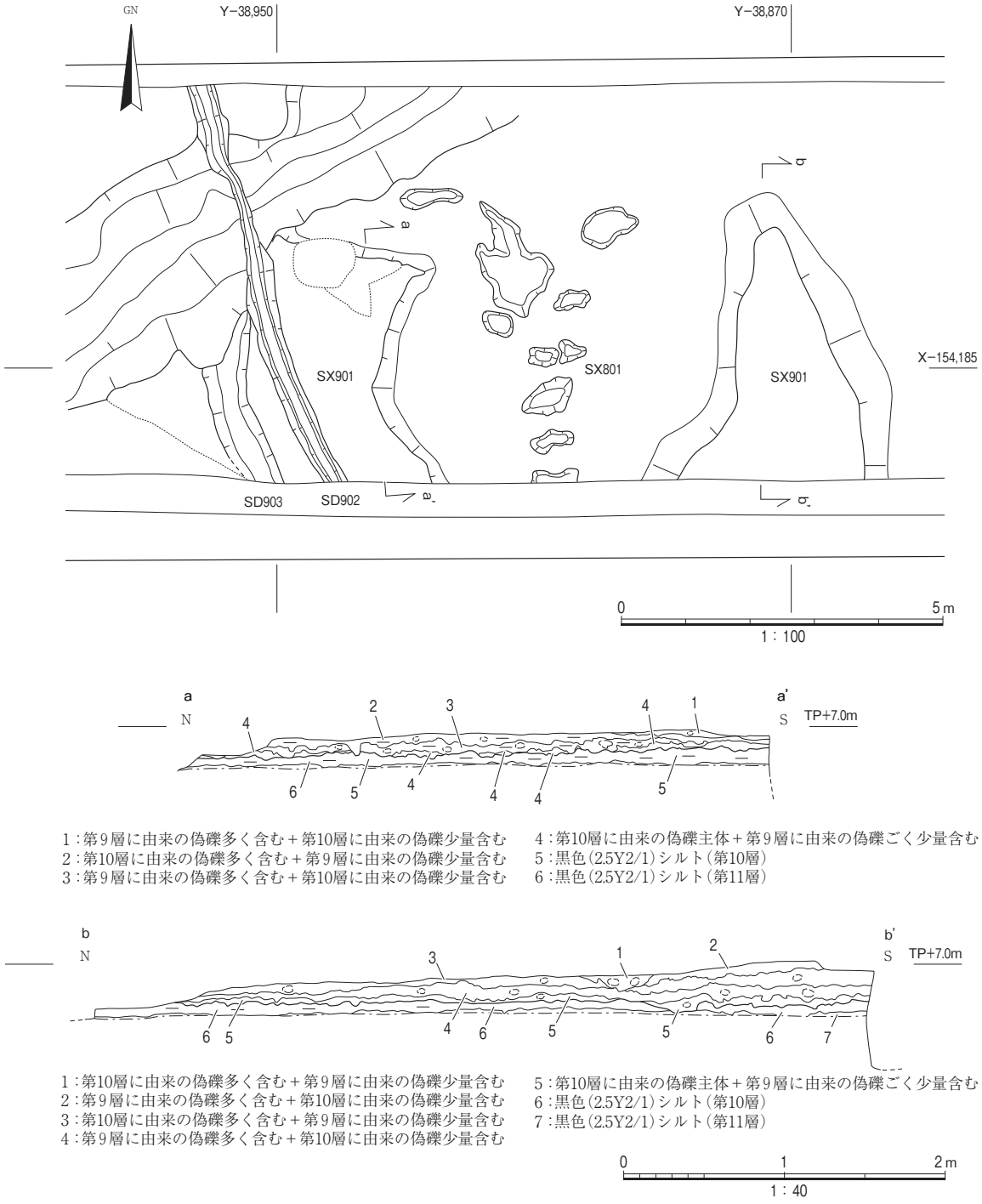



図45　SX901平面・断面図

遺物は出土しなかったが、古墳時代中期と考えられる。

SD902　調査区西部で確認した北でやや西に振る方位の溝である。SX901に後出する。幅0.2～0.4m、深さは0.2～0.3mで、幅に比して深い溝である。北に向かうほど底は低くなっている。埋土は下半が偽礫を多く含む加工時の形成層であり、上部が機能時堆積層である。埋土最上部には水成層である第7層が堆積しており、第8層の段階にも機能していた可能性がある。

SD903　SD902の西に位置する溝である。幅0.4mで深さは0.1mである。北部は第8層の耕作によっ

て失われていた。

作土層である第８層下面では溝などを確認した。また、SX901は高さ0.2mほどの高まりとして残されている。

**SX801**　SX901を東西に分かつように掘られた溝状の落込みである。幅5.5m、深さは0.2m程度である。底部は若干の凹凸はあるものの概ね平坦で、第10層上面にて掘削を停止している。またSX901より北部には続かないことから、SX901の盛土の一部を除去したものと推定できるが、機能については不明である。

**小溝群**　調査地東端部で北でやや東に振れる小溝群を検出した。幅0.2～0.5m、深さ0.1m未満である。第８層下面検出の遺構であり、第８層の耕作に係わる小溝であろう。

第８層上面では、調査地東部にて１条の畦畔SR803を検出した(図46・図版28)。１条のみではあるが、第８層が作土層であることから調査地は水田として利用されていた可能性が高い。

**SR803**　北でわずかに東に振る方位の畦畔である。幅0.5m、高さ0.1m未満と遺存状況は悪い。

第８層からは弥生土器・土師器が出土したが、いずれも細片である。その他、SX901の東側で鉄鏃が出土した(図42、原色図版５、図版36)。

231は第８層から出土した尖端が欠損した最大長9.3㎝、鏃身の最大幅2.75㎝、最大厚0.25㎝の平根系大型定角式鉄鏃である。刃部は鏃身部の先端にあり、下端以外は欠損している。鏃身から直線的な関(斜角関～斜関)を経て茎に至る。鏃身の断面形態は刃部の下端が扁平なレンズ形を呈し、これより下は断面形態が長方形で刃付はしていない。茎の断面形態は方形で、口巻きの痕跡は確認されなかった。

同様な平根系大型定角式鉄鏃は、広島県大町七九谷Ａ地点、兵庫県塩壺西[村上恭通2003]など、弥生時代終末～古墳時代前期前葉にかけての類例があり、231についても古墳時代前期前葉以前に位置付けられるものであろう。

第８層の時期を直接示す遺物は出土していないが、第10層の出土遺物および周辺の調査での第８層の年代観から古墳時代中期～後期と推定できる。

ⅱ)飛鳥～平安時代の遺構と遺物

第８層は１ｍ以上もの厚い水成層である第７層および第６層に

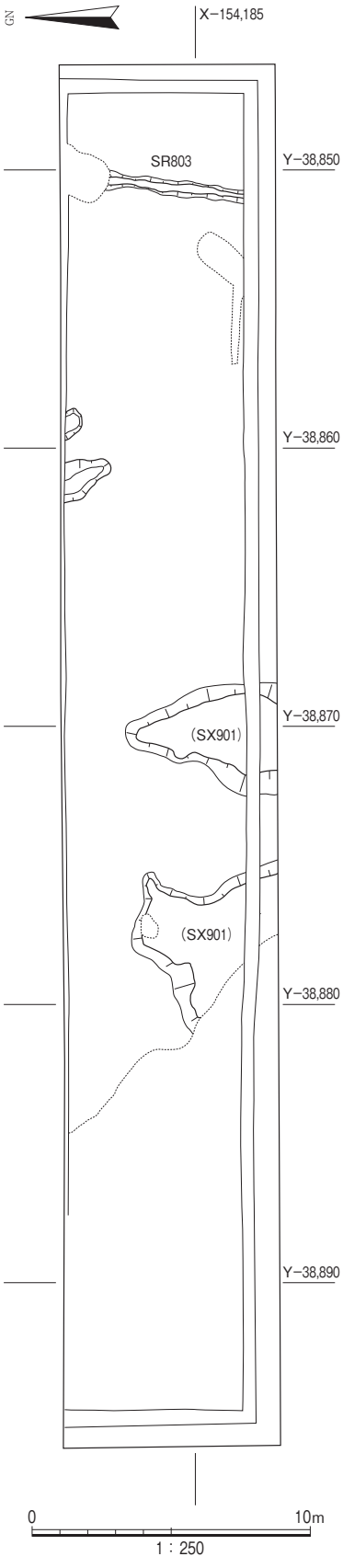


図46　第８層上面遺構平面図

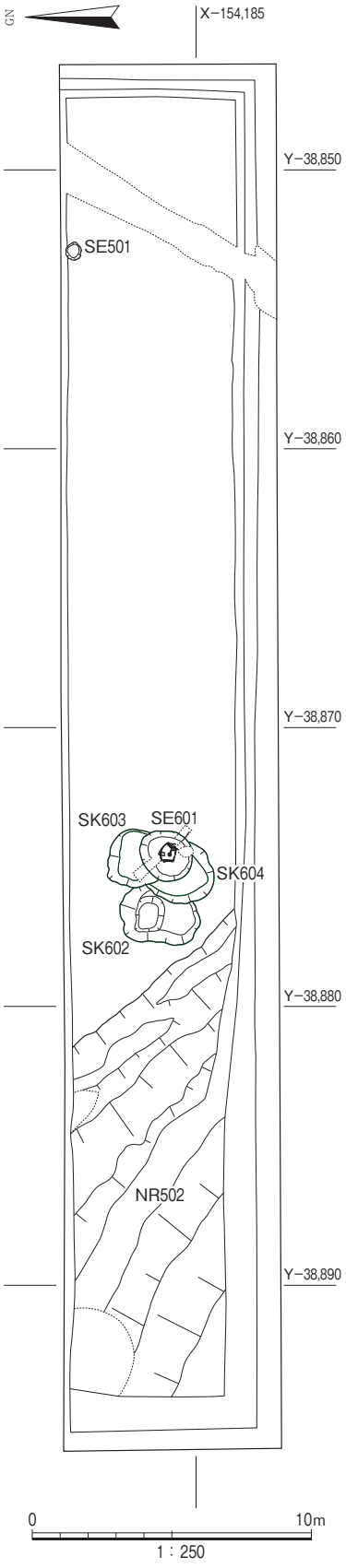



図47　第６層および第５層上面
遺構平面図

よって覆われる。これら厚い水成層の堆積時期は周辺の調査成果から古墳時代後期～飛鳥時代と推定される。

第６層上面では井戸・土壙などを確認した(図47・48、原色図版５、図版29)。飛鳥時代に位置づけられる。

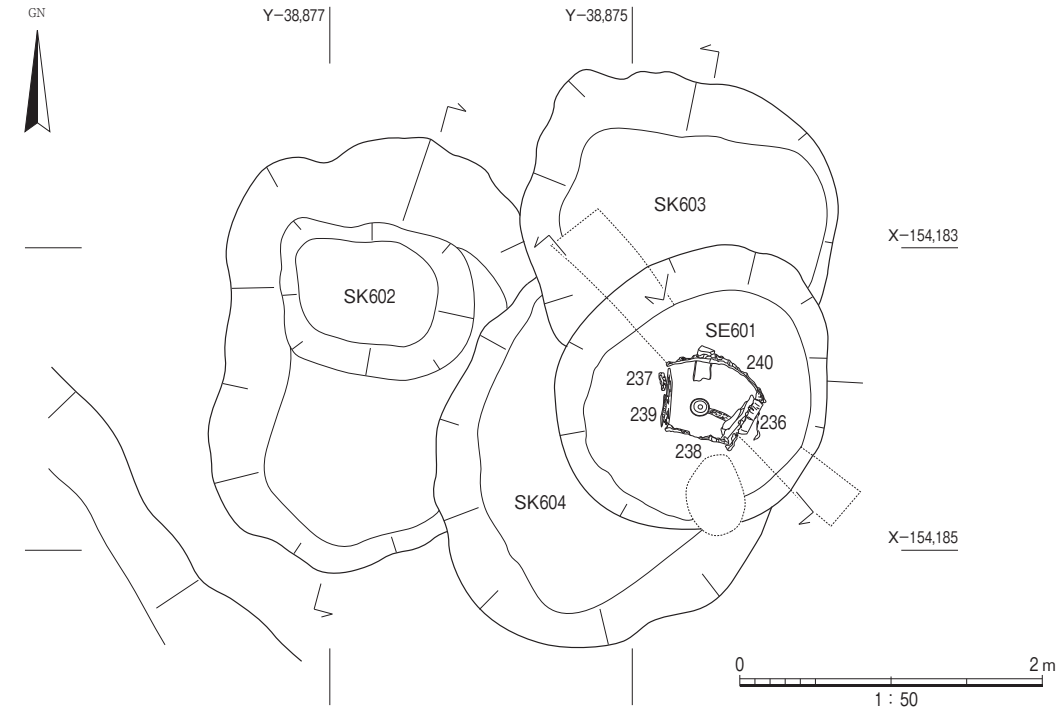
SE601　調査地西部で検出した直径1.6～1.8m、検出面からの深さ0.8mの平面形が円形の井戸である。井戸側には４枚の板材が組み合わされて使用されている。材と材は臍穴に横材を通して固定され、臍穴の高さが合うよう材の下には石が置かれていた部分がある。うち１枚は弧状を呈しており、見かけ上は井戸側の平面形は五角形を呈している。埋土は水漬き状態を示すシルトが主体で炭化物のラミナも認められた。

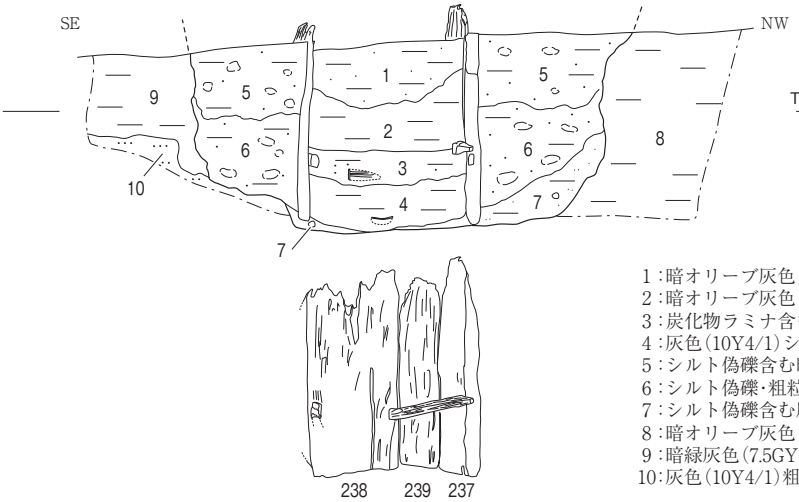
埋土からは土師器・須恵器などが出土した(図49、図版34)。

232は完形の土師器杯Ａで、口縁部はわずかに外反しながら立つ体部から短く開く。口縁端部を丸くおさめている。器体の調整は口縁部から体部にかけて内外面ともヨコナデのあと、外面が横方向、内面は縦方向の２段のヘラミガキである。底部の外面を横方向にヘラケズリしており、内底面には３重の螺旋状暗文を施す。233は須恵器杯G身で、口縁部は体部から外上方に直線的に開く。口縁部に強いヨコナデ調整を加えており、口縁端部は丸い。234は口径が大きい須恵器杯Gあるいは杯Bの蓋である。かえりは小さく、口縁端部も丸い。天井部の1/3を逆時計回りにヘラケズリ調整している。235は天井部の中央を欠損した須恵器蓋である。口縁部に強いヨコナデを加えて端部を面取っている。天井部にはオリーブ灰色の自然釉が付着している。

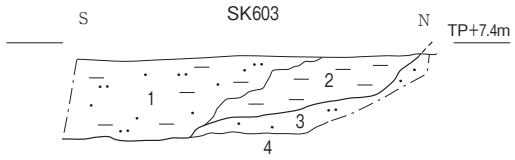
次に井戸側に転用された木製品について記述する(図49・50、図版36・37)。

236は残存長68.9㎝、最大幅41.6㎝、最大厚5.1㎝の板材である。表面が腐食しており、一部で手斧による連続したハツリ痕が、材の下端で斧による切断痕が確認された。樹種はヒノキで、柾目材である。237は残存長88.2㎝、最大幅14.4㎝、最大厚6.2㎝の板材である。下端には斧による切断痕が見られる。材の両端に近くに６㎝×４㎝および４㎝×３㎝の長方形の臍孔を穿っている。樹種はヒノキで、柾目材である。238は残存長86.4㎝、最大幅46.7㎝、最大厚4.8㎝の板材である。表裏面

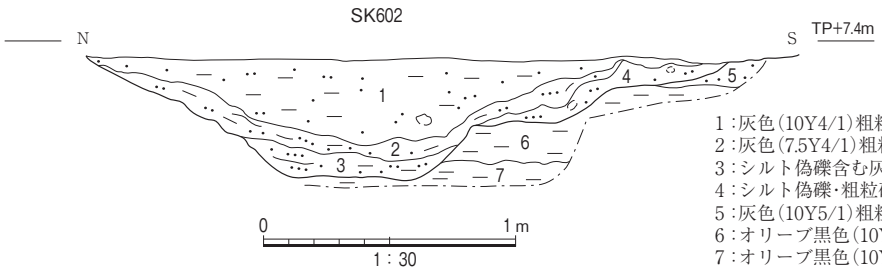



1：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒～粗粒砂質シルト
2：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)(1よりやや暗い)シルト
3：炭化物ラミナ含む灰色(7.5Y4/1)シルト
4：灰色(10Y4/1)シルト
5：シルト偽礫含む暗オリーブ灰色(5GY4/1)粗粒砂質シルト
6：シルト偽礫・粗粒砂含むオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト
7：シルト偽礫含む灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト
8：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト(SK603)
9：暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト(第6層)
10：灰色(10Y4/1)粗粒砂(第7層)




1：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粗粒砂質シルト
2：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト
3：オリーブ灰色(5GY5/1)粗粒砂(第7層)
4：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト(第7層)




1：灰色(10Y4/1)粗粒砂質シルト
2：灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルト
3：シルト偽礫含む灰色(10Y4/1)粗粒砂
4：シルト偽礫・粗粒砂含む灰色(7.5Y4/1)シルト
5：灰色(10Y5/1)粗粒砂(第7層)
6：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト(第7層)
7：オリーブ黒色(10Y3/2)シルト(第8層)

図48　SE601・SK602～604平面・断面図

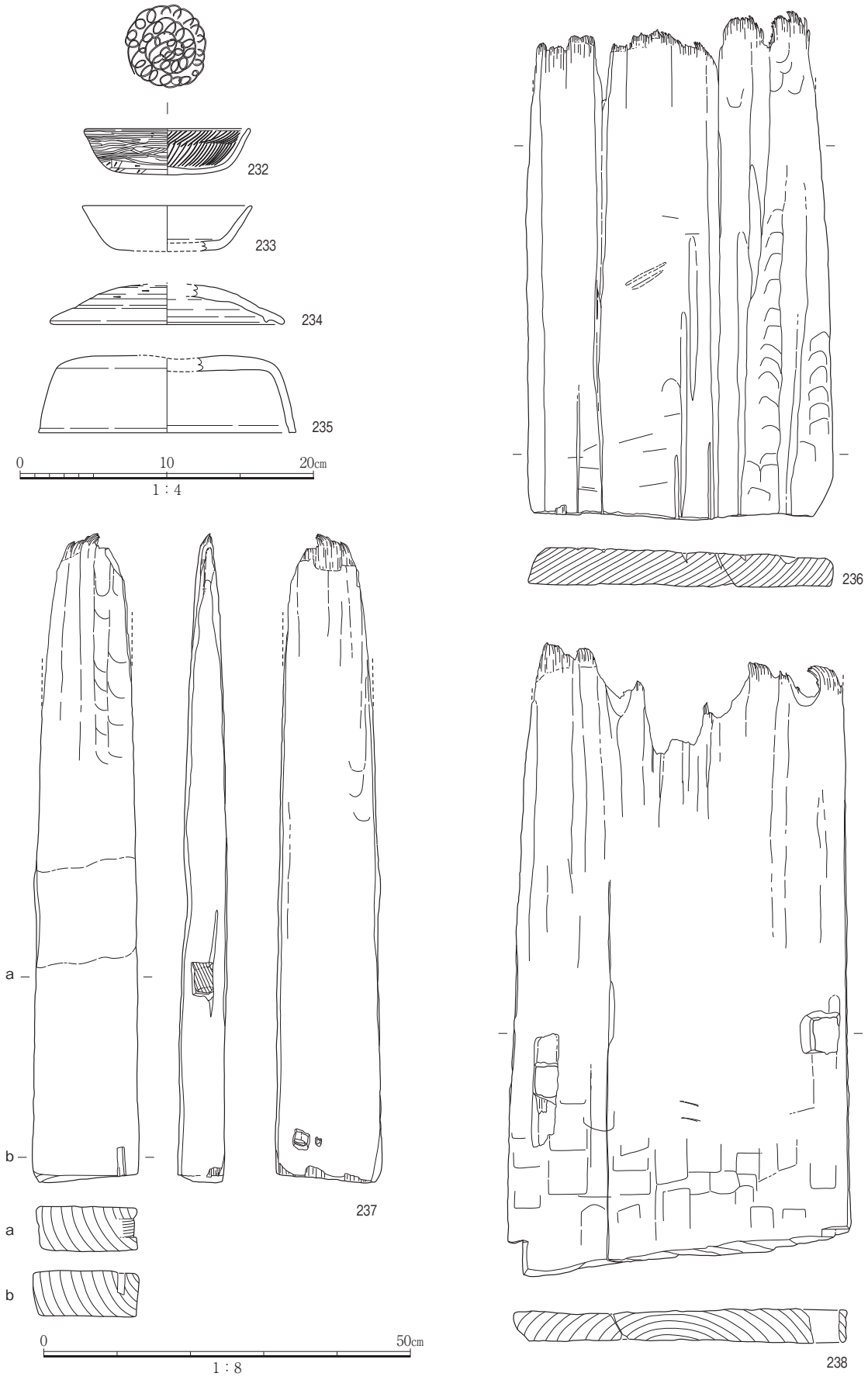



図49　SE601出土遺物実測図（1）

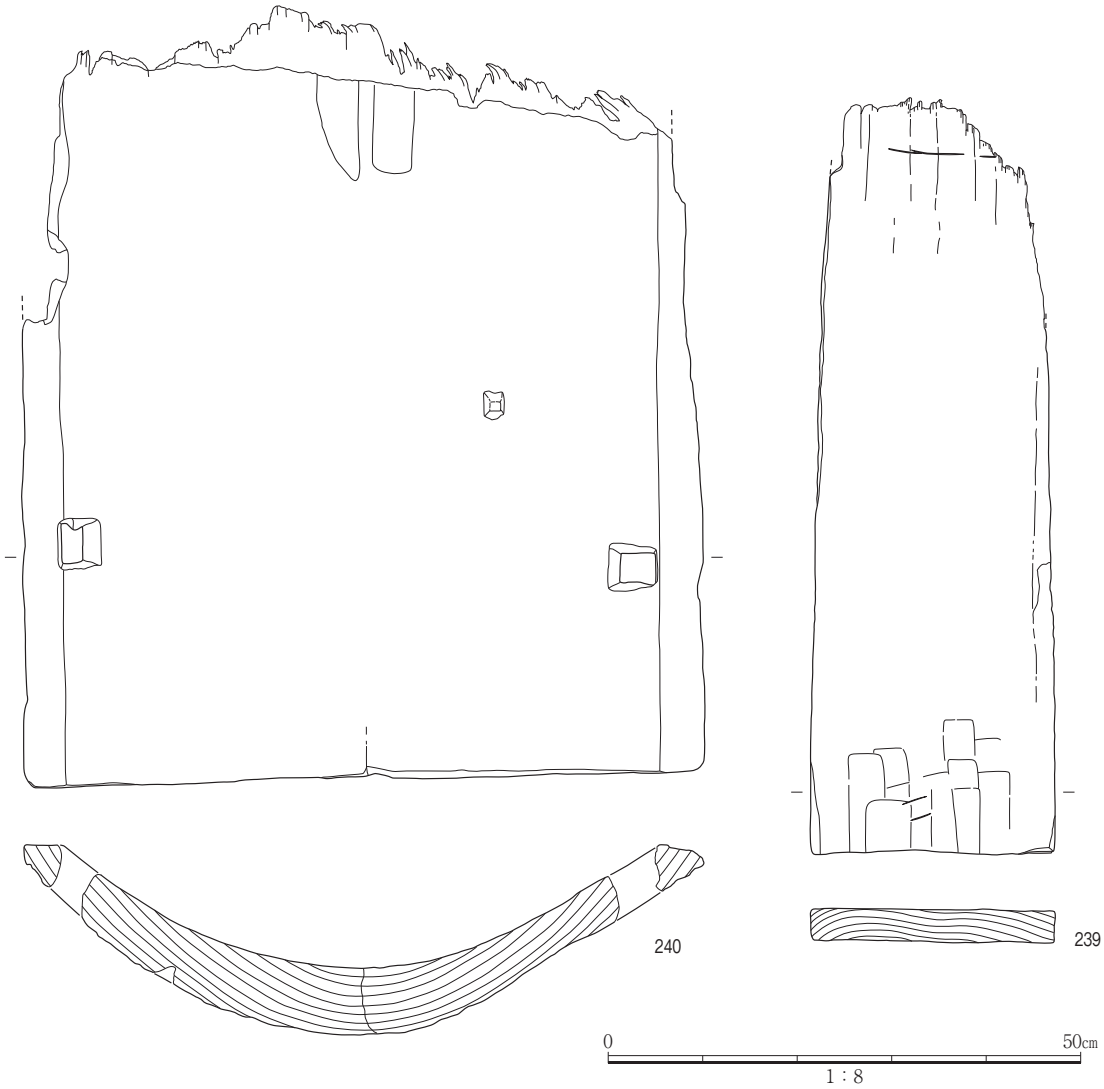



図50　SE601出土遺物実測図（２）

および側面の３箇所に臍穴がある。表裏面の一部に手斧による連続したハツリ痕が見られる。樹種はヒノキで、板目材である。239は残存長79.9cm、最大幅26.0cm、最大厚3.5cmの板材である。下端部およびこの近くに縦方向の手斧による加工痕や切断痕が見られる。樹種はヒノキで、板目材である。240は残存長82.8cm、最大幅72.1cm、最大厚7.1cmの断面がU字形の材である。材の両端近くに5.6cm×4.4cm、5.2cm×5.0cmの臍孔がある。このほか、臍孔の上部にも3.0cm×2.4cmの臍穴があるほか、実測図の左側にある臍孔の上部20cmには長さ10cm、幅４cm以上の小判形の臍孔がある。断面および臍孔の形態を考慮すると準構造船の舷側板の転用材と考えられる。樹種はヒノキで、板目材である。

以上の木製品のうち、237（年輪年代測定試料No.１）・236（年輪年代測定試料No.２）の２点については後述するように光谷拓実氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室）に年輪年代測定していただき、上限年代が671年という結果を得ている。井戸側内から出土した土器類の上限年代は671年より遡らないことが明らかとなったが、この年代は井戸側材に転用された以降の推定年代を加えたとしても７世紀の後半の範疇におさまるものとみられる。土師器杯232や須恵器杯G身233・蓋234の所属年代は７世紀の後葉頃とみられるが、この度測定された板材の

年輪年代測定結果(上限年代：671年)とも整合している。

SK602～604　SE601と近接して検出した直径2.0～2.5mの円形もしくは楕円形の土壙である。当初は遺構として認識できず、第６層の掘削途中で確認した。いずれも検出面からの深さは0.4～0.5mであるが、SE601とはそれほど底面の標高は変わらない。SE601に先行する。埋土はSK602は下部が自然堆積層、上部が埋戻し土、SK603・604はすべて埋戻し土であった。土師器・須恵器片のほかSK602からはモモ核が多く出土した。

これらの土壙は位置関係からSE601と関係が深いと推定できる。ほぼ同じ深さであることからSE601に先行した井戸の可能性がある。

第６層に続いて堆積した第５層はシルトが主体であり、湿地状の環境下で堆積したものである。本来は水成層であるが、基底付近は植物の根による擾乱が著しく、踏込みとみられる変形が認められた。本層からは多くの遺物が出土している(図51・52、原色図版５、図版31～33・35・36)。

241～257は須恵器である。241はつまみを欠損した杯G蓋で、口縁部のかえりは短い。天井部をヘラケズリ調整している。242は口径が大きい割に器高の低い杯H蓋である。口縁部と天井部の境界は不明瞭で、天井部の約2/3をヘラケズリ調整している。口縁端部はわずかに内傾するが、尖り気味におさめている。243は杯H身で、低い立ち上りは受け部から内傾しており、底部の2/3以上をヘラケズリ調整している。244は底部の中央を欠損した杯Bで、口縁部は外上方に直線的に立つ体部からわずかに開き、同端部は丸い。底部の外縁に断面が方形の高台を貼り付けている。245～247は杯Bの底部片である。底部の外縁から内側よりに断面が台形状の高台を貼り付けた247以外の245・246の高台は断面が長方形で、底部の外縁に貼り付けている。248は高杯の脚部で、裾部は水平に開く。柱状部の下端にスカシ孔を穿つ。249～251は杯蓋で、杯G蓋250以外は杯B蓋である。天井部の中央部には249が扁平な、250は宝珠状のつまみがある。250の口縁部のかえりは小さく、251の口縁部は下方に肥厚している。いすれも天井部の2/3以上をヘラケズリ調整している。252は口頸部の大半を欠損した平瓶で、体部の形態はやや扁平である。器体の調整は体部の下半から底部にかけてヘラケズリで、同内面および体部外面の上半部はヨコナデである。253は体部の上半が張りのある平瓶で、口頸部は器体の大きさの割に太く大きい。底部の外縁に断面が長方形の高台を貼り付けている。254・255は細頸壺の口頸部の破片である。口縁部を254は玉縁状に、255は丸くおさめている。256は口頸部を欠損した台付長頸壺である。最大径は体部の上半にあり、ここに１条の浅い凹線が巡る。体部の下半から底部にかけてヘラケズリ調整しており、底部の外縁には下端を内に肥厚した短い脚台を貼り付けている。体部上半の外面にはオリーブ灰色の自然釉が付着している。257は台付壺の底部片で、外縁に断面が長方形の高台を貼り付けている。

258・259は器体が砲弾形の製塩土器である。ともに体部の上半以下を細く成形しており、口縁端部の形態は259が丸く、258は内傾した面をなす。ともに体部の調整はユビナデによっている。260～275は土師器である。260は杯蓋で、天井部の中央部に中凹みのつまみがある。器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、天井部の内外面はナデであるが、天井部外面の下端近くにはユビオサエが残る。261は器高の低い平底の杯で、口縁部はわずかに内湾しながら立つ体部から内傾しており、同端部は

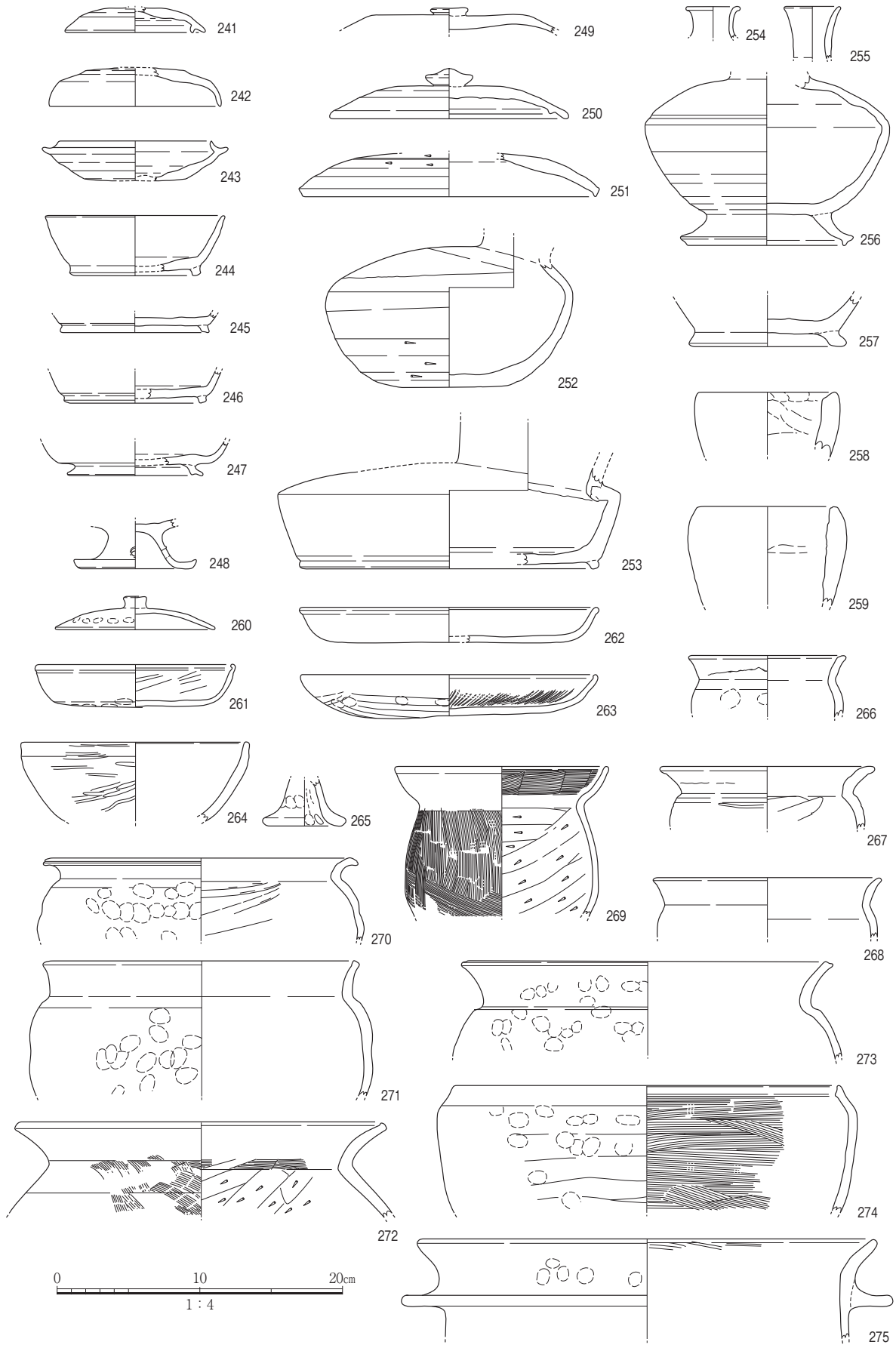



図51　第５層出土遺物実測図（１）

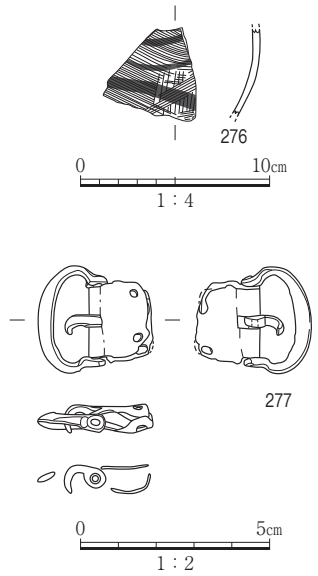



図52　第５層出土遺物実測図（２）

丸い。器体の調整は内外面がヨコナデで、底部の裏面はユビオサエで整えている。262・263は皿である。ともに口縁部は体部から短く開き、同端部を丸くおさめている。262の器面調整は内外面ともにヨコナデで、底部の裏面はユビオサエで整えている。263は体部の中程から底部がユビオサエのあと、横方向のヘラケズリで、同内面は縦方向の放射状の暗文を施している。264は底部を欠損した椀で、口縁部は内湾しながら立つ体部から直立している。体部の外面は横方向のヘラミガキで、同内面はヨコナデで調整している。にぶい橙色を呈しており、二次的な火を受けた瓦器の可能性がある。265はミニチュア高杯の脚部で、器体の内外面をユビオサエで整えており、脚裾部は横方向のナデで調整している。266～273は甕である。266は小型の甕で、口縁部は頸部から短く開く。調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部は内外面がナデであるが外面にはユビオサエが残る。267・268も口縁部が頸部から短く開く甕で、器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の内外面はナデである。269は底部を欠損した小型の甕で、口縁部は頸部から内湾しながら短く開く。同端部は丸い。口縁部をヨコナデ調整するが、内面には横方向のハケメが残る。体部の調整は外面が左上がりから縦方向のハケ、内面は右上がりのヘラケズリである。270～272は中型の甕で、口縁部の形態は270は頸部から緩やかに外反しており、271は頸部からわずかに開きながら立ち、272は頸部から大きく開く。口縁部の調整はいずれもヨコナデであるが、272の内面には横方向のハケメが残る。270・271の体部の外面はユビオサエで整えており、272はヨコナデ調整している。体部の内面の調整は270・271が右上がりのナデ、272は右上がりのヘラケズリである。273は大型の甕で、口縁部は頸部から緩やかに開き、同端部は下端が肥厚し、上端面は浅く凹む。体部の外面はユビオサエで整えており､内面は右上がりのナデ調整である｡274は最大径が頸部にある大型の鉢で、口縁部は体部の上端から内傾しており、同端部も内傾した凹面をなす。体部は外面をユビオサエで整えており、内面は左上がりから横方向のハケで調整している。275は羽釜の破片である。口縁部は直立する体部から外上方に短く開き、頸部の下端に鍔を水平に貼り付けている。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石を多く含む生駒西麓産の土器である。

以上が第５層出土の土器類である。これらの所属時期は241～243・247・248・250・252・256・265～269・272～275は飛鳥Ⅱ～Ⅳ、244～246・249・251・253・258～263は奈良時代、254・255・257・264・270・271は平安時代初期に属するものであろう。

276は土師器甕の体部片で、ハケ調整された外面に人面とみられる墨画がある。長原遺跡の東北部でこれまでに出土している飛鳥時代後期以降の人面墨画土器と同じものであろう。277は銅製の鉸具で、最大長3.1㎝、最大幅2.8㎝ある。帆立貝形の外枠にT字形の刺金と梯棒が組合わさるもので、外枠を表裏面から薄い銅板を折り曲げて挟むようになっている。長原遺跡ではNG95－76次調査で馬具の一部と推定されている銅製鉸具が出土しているが、帆立貝形の外枠を一体に作り、これに刺金と軸

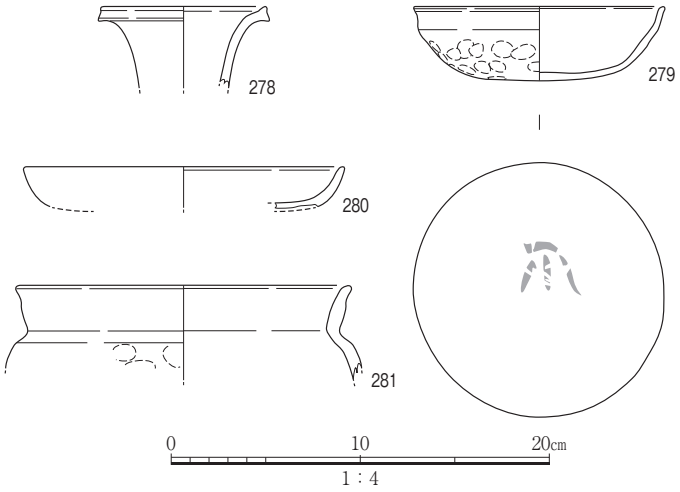
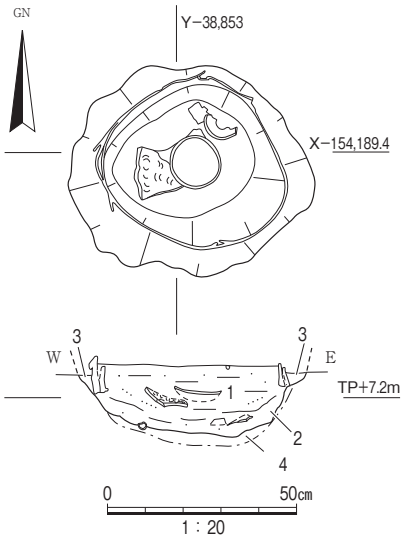



図53　SE501出土遺物実測図




1：オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂質シルト
2：暗オリーブ灰色(5GY3/1)細粒砂質シルト
3：暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト
4：暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト(第7層)

図54　SE501平面・断面図

金を一体に作った刺金軸をはめ込むもので、277とは構造が異なっている[大阪市文化財協会2000b]。革帯を挟む表側には2個の小さな鋲がある。

上述のように第5層の堆積年代は飛鳥時代後半～平安時代初期と考えられる。

第5層段階の遺構として井戸SE501のほか自然流路NR502がある。

SE501　調査区北東部で検出した井戸である(図47・54、図版29)。調査に際して排水のために掘削した側溝内に位置していたこともあり、遺構として認識できたのは第6層を掘削中であった。検出時の規模は平面形が0.6mの円形で、深さは0.2mである。後述のように本遺構の年代は平安時代初頭に位置づけられることから、仮に本来の遺構面が第5層上面にあったとすれば、本来の深さは0.9m程度であったと考えられる。井戸側もしくは水溜めとして直径0.5mの曲物が使用され、埋土は水漬きの堆積を示すシルトである。底付近から土師器・須恵器が出土した(図53、図版34)。

279は完形の土師器杯である。口縁部はわずかに内湾しながら立つ体部から上方に開く。口縁端部は内傾している。口縁部の内外面および体部の内面をヨコナデ調整しており、体部の外面はユビオサエで整えている。底部裏面のほぼ中央に「瓜」の墨書がある。278は体部を欠損した須恵器壺の口頸部片である。口縁端部を上下に肥厚しており、外端面は浅く凹む。280は土師器皿の破片である。器体の内外面をヨコナデ調整しており、口縁端部を丸くおさめている。281は土師器甕で、口縁部は張りのある体部から外上方に短く開く。器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面をユビオサエ、内面はヨコナデである。

以上の土器類は、平安時代Ⅰ期(8世紀末～9世紀初頭)に属するものとみられる。

NR502　調査区西端で検出した自然流路である(図47、図版30)。第5層内の最上部付近から下がっている。流向は南東から北西方向で、幅15m以上、深さは2.4m以上である。埋土は下部には第9～10層の偽礫を含むなど急速な流れがあったことを示す。また、途中には休止面がほとんど見られないこと、埋土上部が流路幅を越えてオーバーフローしていることから急速に埋没したと考えられる。方

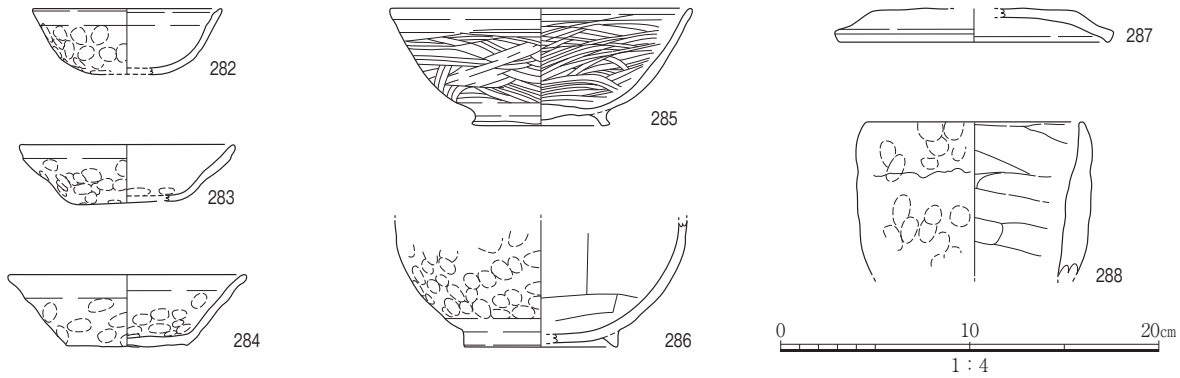



図55　NR502出土遺物実測図

向や時期から南東約約500mのNG97－56次調査[大阪市文化財協会2000a]で検出された自然流路につながるものであろう。遺物は底付近を中心に土師器・須恵器・黒色土器などが出土し、平安時代前半に比定できる(図55、図版32)。

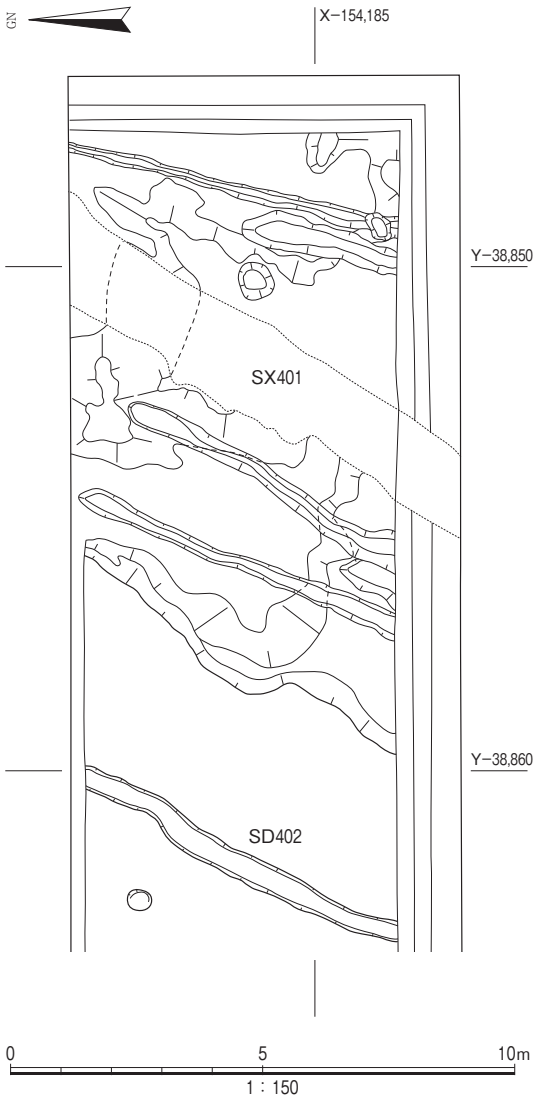



図56　第4b層下面遺構平面図

282～284は土師器椀である。282の口縁部はわずかに内湾して立つ体部から外上方に開く。口縁部を強くヨコナデ調整しており、同端部は内傾している。体部の外面はユビオサエで整えており、内面の調整は横方向のナデである。283の体部は底部から一旦内湾したのち、外上方に大きく開いており、口縁部はわずかに短く開く。口縁部を下にして逆時計回りにユビオサエを加えて体部を成形しており、内底面にもユビオサエが残る。口縁部の内外面および体部内面の上半の調整はヨコナデである。284の体部は平らな底部から外上方に直線的に立つ。口縁部を強くヨコナデ調整しており、同端部は丸い。体部および底部の内外面をユビオサエで整えている。器体の成形技法は283と同じである。

285は黒色土器B類椀で、口縁部は内湾しながら立つ体部から短く開く。口縁部をヨコナデ調整しており、同端部は内傾している。体部の調整は外面が左上がり、内面は右上がりの粗いヘラミガキである。中心が厚い底部には断面が逆台形の高台を貼り付けている。286は口縁部を欠損した土師器椀で、体部は緩やかに内湾して立つ。底部の外縁に断面が三角形の高台を貼り付けている。287

は須恵器杯B蓋で、口縁端部を下方にわずかに肥厚している。色調がにぶい橙色を呈するいわゆる生焼けの須恵器である。288は砲弾形を呈する製塩土器の破片である。調整は口縁部の外面がユビオサエ、内面はユビナデで、器体の内外面はユビナデである。

以上の土器類の所属時期であるが、282は平安時代Ⅰ期、283・284は平安時代Ⅱ期古～中段階、285・286は平安時代Ⅲ期古段階に属し、製塩土器288は口縁部が体部に対して薄く成形されていることから長原・瓜破遺跡の製塩土器のⅣ期(８世紀後半)に属するものであろう[京嶋覚1992]。したがって、NR502は平安時代中期以前に機能していた流路と考えられる。

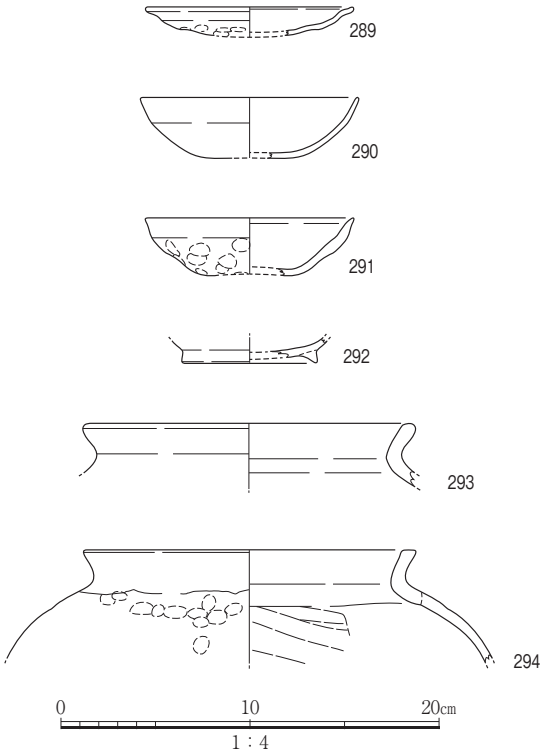


図57　SX401出土遺物実測図

第４層は第4a層・第4b層に分けることができ、このうち第4b層は遺構SX401の埋土としてのみ存在した。作土層である第4a層の遺構としては断面で耕作に係わる小溝などを確認したが、本層の多くを機械により除去したため、平面的にはほとんど検出できなかった。

SX401　調査地東端部で検出した落込みである(図56、図版30)。幅12.5m以上で調査区外東部に続く。深さはもっとも深い部分で0.6m以上である。西肩は南西から北東方向に直線的に延び、底付近では同方向の幅0.2～0.4m、深さ0.1m程度の小溝が認められた。小溝は埋土の途中にも確認されている。埋土はシルト～細粒砂質シルトであり、全体的に攪拌されている。炭の薄層を介在する部分もある。第4b層段階の耕作に係る遺構であり、調査区東端が一段低くなっていると推定できよう。

本遺構からは比較的多くの土師器・須恵器・黒色土器が出土し、平安時代後半に推定できる(図57、図版32～34)。

289は丸味のある底部から体部を経て口縁部が水平に開く、土師器「て」の字口縁皿である。口縁部から底部の内面の調整はヨコナデで、底部の外面はユビオサエで整えている。290は土師器椀で、口縁部は内湾して立つ体部からわずかに開く。口縁部の内外面をヨコナデ調整しており、同端部は丸い。291は土師器椀で、底部の大半を欠損している。口縁部は外上方に直線的に立つ体部からわずかに開く。口縁部を強くヨコナデ調整しており、同端部は尖り気味で丸い。体部の外面をユビオサエで整えており、同内面はナデ調整である。292は黒色土器B類椀の底部片で、断面が三角形の高台を貼り付けている。293は土師器甕の口頸部片で、頸部から短く開く口縁部の端部は丸い。器体の内外面をヨコナデ調整している。294は土師器甕で、最大径は体部の上半にある。口縁部は体部からわずかに開いて立つ。口縁部の上端面はわずかに凹む。

以上の土器類の所属時期は、291・294の時期は、ともに平安時代Ⅲ期古段階、289・290は平安時

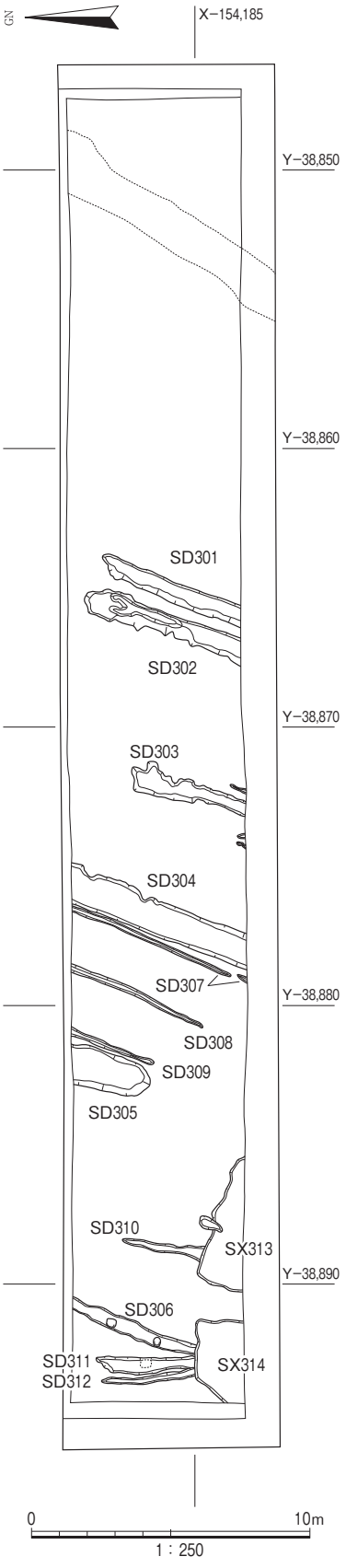



図58　第３層下面遺構平面図（１）

代Ⅲ期、292は平安時代Ⅳ期、293は平安時代Ⅱ期頃に属するものであろう。遺構の時期は平安時代後期頃と考えられる。

SD402　SX401の西で検出した北で東に振る方位の溝で、幅0.4m、深さ0.1mである。埋土は作土層である第4a層であり、耕作に係るものと推定できる。後述の第３層段階の溝と同じ方位であることは注目されよう。

上記のように厚い水成層である第６層および第７層の堆積後、飛鳥時代には調査地周辺は湿地の環境を呈していたと考えられる。ただ、飛鳥時代には井戸が掘られるなど、人々の活動域の一部であったことは確実である。また、飛鳥～平安時代前半にかけても、多くの遺物が出土しており、近隣に集落があったことは間違いないであろう。調査地の東側には飛鳥時代から平安時代にかけて南東から北西方向の自然流路があり[大阪市文化財協会2006]、また、調査地内西側には同方向の平安時代前半の自然流路であるNR502が存在する。これらの自然流路に挟まれるように集落域が分布している可能性がある。

平安時代後半以降は周辺は耕地化される。遺構の方位が正方向でないことは注目され、自然流路あるいは自然流路埋没の際に形成された自然堤防など、地形的な制約によると推測されよう。

ⅲ)鎌倉～室町時代の遺構と遺物

作土層である第３層段階の遺構が相当する。本層下面の遺構として溝10数条が確認された(図58・59、図版30)。本層以上は重機により掘削したため失われた遺構も多く、特に重機による掘削が深く及んだ東部において本来はもっと多くの溝が存在したと考えられる。埋土はいずれも第３層の作土層であり、耕作に係るものといえる。これらの溝は幅0.6～1.2m、深さ0.1～0.2mとやや規模の大きなものSD301～306と幅0.2m、深さ0.1mと小規模なものSD307～312の両者がある。これらの溝はいずれも北に向けてやや深度を増している。幅広の溝は約４～５mおきに存在し、その間に規模の小さい溝がある傾向が窺え、幅広の溝は耕作単位の区画であった可能性がある。溝の方位はいずれも南南西から北北東方向であるが、調査地西端では南北方向に近くなっている。

また、調査区西南端では不整形の浅い落込みSX313・314を

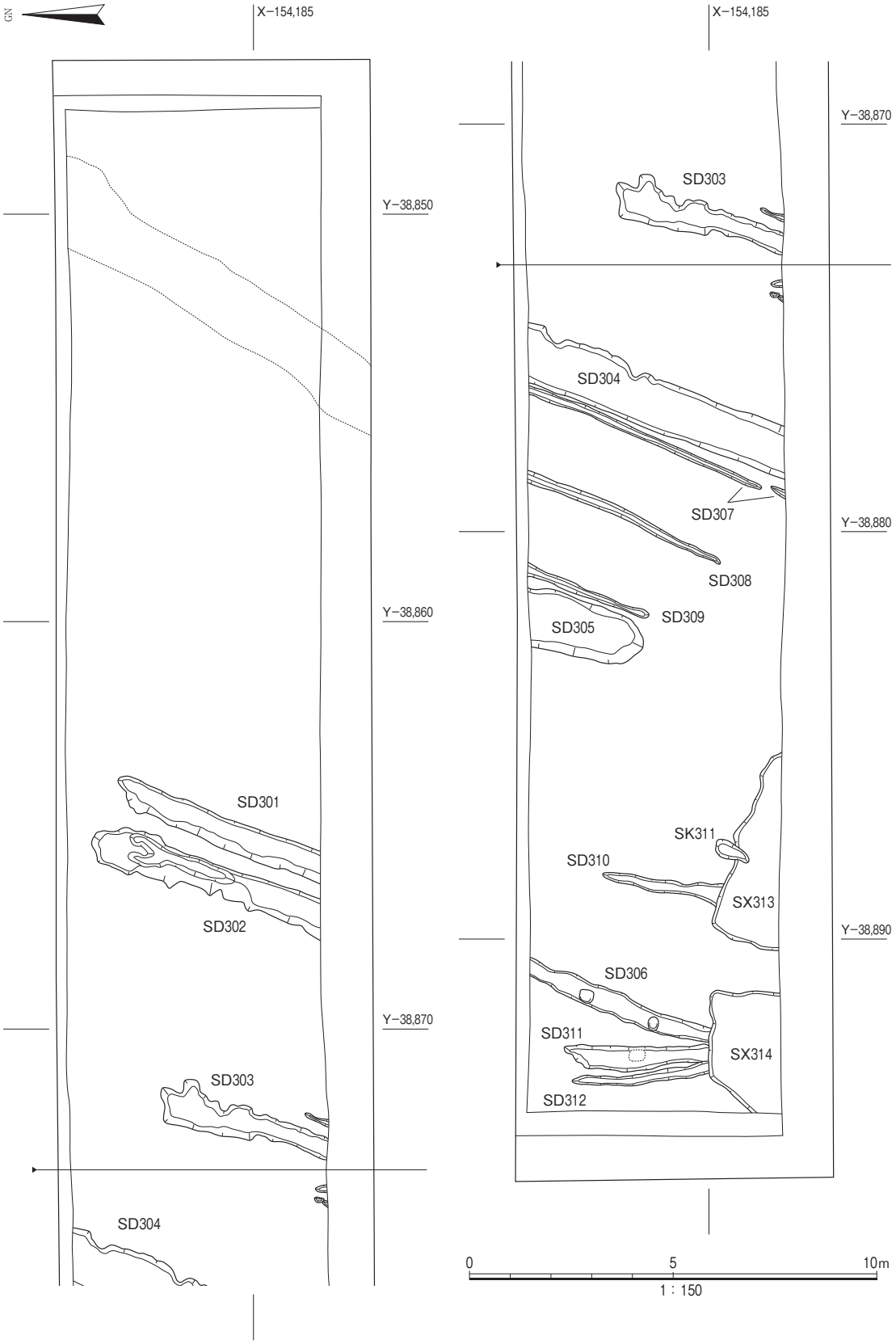



図59　第３層下面遺構平面図（２）

検出した。下位層がNR502の埋土である軟弱な細粒砂であることから、第３層の耕起の際に深く掘削されたものであろう。

出土遺物は多くないが、土師器･須恵器のほか瓦器片が出土しており、鎌倉～室町時代に比定できる。

なお、江戸時代以降については平面的な遺構検出作業を行っていないため不明であるが、断面の観察ではいずれも作土層が確認されており、調査地周辺は耕作域として利用されていたことがわかる。

### ３)SE601の出土板材の年輪年代測定

長原遺跡の東北地区における発掘調査では、井戸側の残存する井戸SE601が発見された。このなかで、年輪年代測定が可能と思われる井戸側を２点選定し調査をおこなった。以下、その結果について報告する。

#### ⅰ)試料と方法

年輪測定用に選定された２点の井戸側は、№１(報告番号237)と№２(報告番号236)である。これらの材種は目視による観察からいずれもヒノキ材と同定した。

年輪幅の計測は、井戸側材から直接年輪読取器を使用し、0.01㎜まで読みとった。年代を割り出す際に使用したヒノキの暦年標準パターンは、おもに近畿地域の遺跡出土木材の年輪で作成した882年分(37B.C.～845A.D)である。

コンピュータによる年輪パターンの照合は、井戸側の年輪データと暦年標準パターンデータとを５年移動平均法によって前処理し、これを対数変換したあとに移動相関によって相関係数ｒを求め、つぎにｔ検定による相関性の有無を検討し、照合成立の可能性がもっとも高いところの最大ｔ値を検出する方法を採用した[光谷拓実ほか1990]。このとき、照合正否の判断基準は、最大ｔ値を5.0前後以上に設定しておこなった。

つぎに、コンピュータによるｔ値の検出結果をもとに井戸側材の年輪パターングラフと暦年標準パターングラフとを重ねあわせ、目視で問題のないことを確認してから最終的な判断を下すこととした。

#### ⅱ)結果と考察

計測した２点の井戸側材は、辺材が残存していない形状のものであったので、得られる年輪年代(調査対象部材の最外層の年代値をいう)は、外側が削除された分だけ伐採年代より古い年代を示す。したがって年輪年代の解釈にあたっては注意しなければならない。

側板２点の計測年輪数は、№１が259層＋(５層)、№２が101層＋(41層)であった。ここで(　)内の層数は、計測区間の外側部分において年輪そのものは判別できるが劣化がすすんでいるために正確な年輪幅計測ができない年輪の残存層数を示している。つまり、計測可能区間の最外層の年代値に(　)内の層数を加算してはじめて井戸側材の最外年輪の年代値、すなわち年輪年代となる。

コンピュータによる井戸側２点の年輪パターン照合は、いずれも一応の設定基準としているｔ値をクリアする値が得られた。そこで、この照合位置での正否の確認のため、双方の年輪パターングラフを重ねあわせ目視で比較検討したところ、問題なく一致していることがわかった(図60)。得られた年輪年代の結果は、№１が444年＋５層＝449年＋α層(ｔ値:5.1)、№２が560年＋41層＝601年＋α層(ｔ

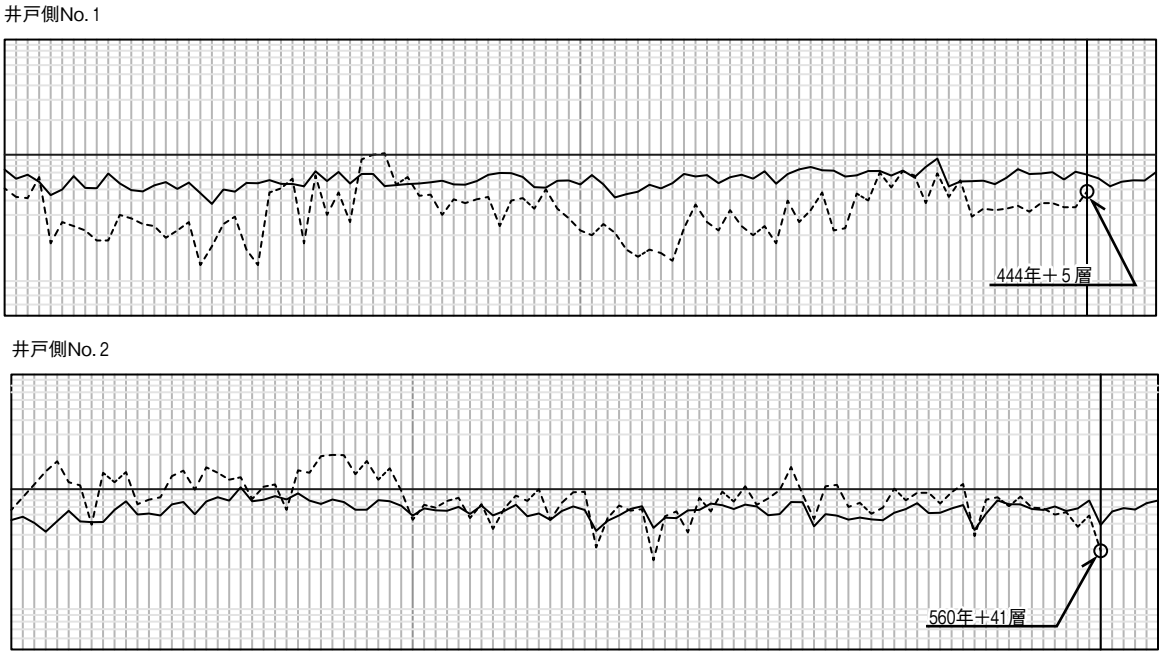



図60　長原遺跡の井戸側の年輪パターングラフ(点線)と暦年標準パターングラフ(実線)の一致状況

値：8.4)と確定した。２点の年代差の大きな原因は、おもに井戸側の木取りが原木の中心部分でおこなわれたのか、あるいは外側部分なのかによってその違いが生じる。また、井戸側の外側の加工程度の差によってもおこる。いずれにしても、得られた年輪年代を井戸の築造年代とからめて考える場合、№１の年輪年代よりも新しい年代が得られた№２の601年＋α層がその手がかりとなる編代情報である。

原木の正確な伐採年代を求めるには、A（伐採年代)=TRD（年輪年代)＋H（心材部の削除年輪数)＋S（辺材部の年輪数)の式で求まる。これを236にあてはめてみると、Hを推定することは難しいが、Sはヒノキの平均的な年輪幅と辺材部のなかの平均的な年輪数を把握しておけばある程度の年輪数を推算することはできる。普通､樹齢200～300年以上の木曽ヒノキを例にとると､平均辺材幅は約3.0㎝､このなかの平均年輪数は53±17層である。つまり、3.0㎝の辺材部のなかに36層～70層の年輪が刻まれている。この数値をそのまま№２の推定伐採年代にあてはめると、A=601＋H＋36～70となる。ここでHの年輪層数は不明であるが、Sの平均年輪数を加算すると推定伐採年代は637年～671年がその上限年代となる。つまり、236の伐採年代は７世紀中頃～後半代以降の可能性が考えられる。

４)小結

本調査地では弥生時代中期後葉以降の変遷をたどることができた。

部分的な掘削であるが、弥生時代中期以前については遺構・遺物ともに希薄である。第11層堆積後の弥生時代中期後葉になると比較的環境が安定し、遺物が認められるようになる。調査地南約150mのNG03－５次調査では方形周溝墓が確認されているが、本調査地では確実に弥生時代中期といえる遺構は確認することができなかった。庄内期～古墳時代中期にかけて遺物量が増し、遺構も多く認め

られるようになる。集落の縁辺部にあたっていると考えられ、古墳時代中期にかけて耕作域へと変化していくようである。その後、再び調査区周辺は第９層に見られるように水没する不安定な環境となり、居住域としては不適となっていくこともこの推定を裏付けるものである。第８層段階は耕作域として利用され、耕作域の部分部分には高まりが築かれていたようである。

古墳時代後期から飛鳥時代にかけては大規模な洪水に見舞われ、１ｍ以上もの堆積層によって調査地周辺の標高は高くなる。その後、植物おそらくアシなどの繁茂する湿地となり、調査区西側の自然流路もこの過程で形成されたと考えられる。ただし、飛鳥時代には井戸が設置されたり、飛鳥時代から平安時代初頭にかけて遺物が多く出土する、また、平安時代初頭の井戸が築かれるなど、居住そのものには不適であるが、近隣に集落が存在したことは明らかである。特に平安時代では墨書土器や銙帯など、一般的な集落から出土する遺物とは異なる遺物が出土していることが注目されよう。

平安時代後半以降、調査地周辺は耕作域として利用される。条里制にもとづき、遺構は正方位を指向する時期であるが、調査地周辺では方位は振れたものが多く、かつてあった自然流路および埋没の際に形成された自然堤防などの地形的要因によって、自然地形に応じた方位となっている。鎌倉～室町時代にも引き続き耕作域として利用されているが、方位は自然地形に応じたものであり、飛鳥時代から平安時代にかけて堆積した地層の起伏は大きかったと推定できる。

## 第３節　NG10－６次調査

### １)層序

調査地の現地表はT.P.+9.6m付近にある。調査では現地表下約５m(TP+4.5m)までの地層を確認し、第０～18層に区分した(図61～64、図版38)。

第０層：現代の盛土で、砕石を主体とする。層厚は50㎝である。RK０層に対応する。

第１層：灰オリーブ黒色極細粒砂質シルトからなる現代の作土層であり、層厚は５～15㎝である。RK１層に対応する。

第２層：近世～近代の作土層で第2a～2c層に細分した。第2a層は灰オリーブ色極細粒砂質シルトからなり、層厚は５～20㎝である。第2b層はオリーブ灰色極細粒砂質シルトからなり、層厚は５～15㎝である。近世陶磁器類を含む。第2c層は灰オリーブ色極細粒砂質シルトからなり、第3a層の偽礫を含むやや不均質な岩相で、層厚は５～20㎝である。第２層はRK２層に対比される。

第３層：第3a～3c層に細分した。調査区西部付近の標高が高く、東部にかけて緩やかに下がる。酸化マンガン・酸化鉄の斑文が顕著で、極細粒砂～細礫を含むシルトからなる。第3a層はオリーブ褐色極細粒砂質シルト層で、調査区の西部のみに層厚５～15㎝で遺存する。第3b層は灰オリーブ色極細粒砂～細礫質シルト層で、調査区の中央部以西で層厚は５～15㎝で分布する。鎌倉時代の瓦器椀片を含む。第3c層はオリーブ褐色極細粒砂質シルトからなり、層厚は５～20㎝である。第３層はRK３層に対比される。

第４層：第4a・4b層に細分される。第4a層は酸化マンガンの斑文が見られる褐色極細粒砂質シルトからなり、層厚は８～25㎝である。平安時代後期の黒色土器A類を含む。第4b層はにぶい黄褐色シルト質極細粒砂からなり、上部が土壌化している。調査区中央部以西で確認した。層厚は10～20㎝である。第４層はRK4A層に対比される。

第５層：にぶい黄褐色粘土質シルトである。酸化鉄の斑文が顕著で、層厚は10～15㎝である。RK4B i ～ ii 層に対比される。

第６層：第6a・6b層に細分した。ともに酸化鉄の斑文が目立つ。第6a層は灰色粘土質シルトからなり、層厚は10～20㎝である。本層上面にて平安時代前～中期の自然流路NR101を検出した。第6b層は灰色粘土質シルトからなり、層厚

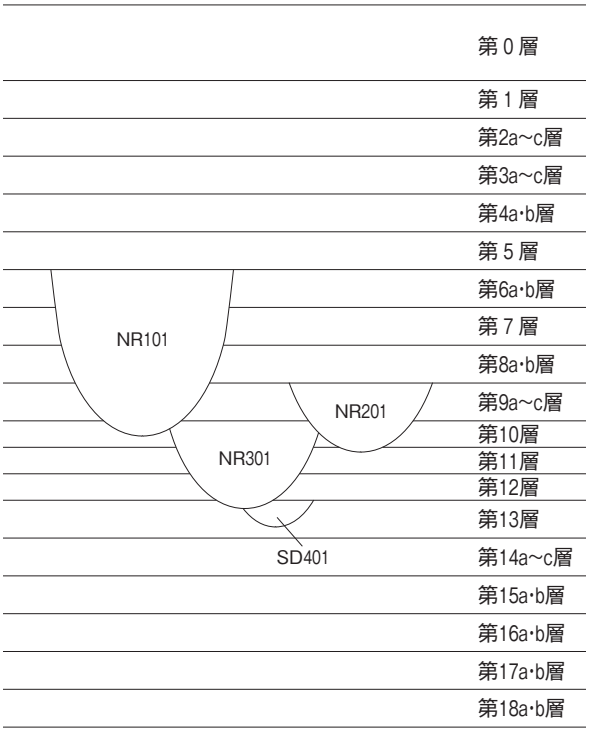



図61　NG10－６次調査地の地層と遺構の関係図

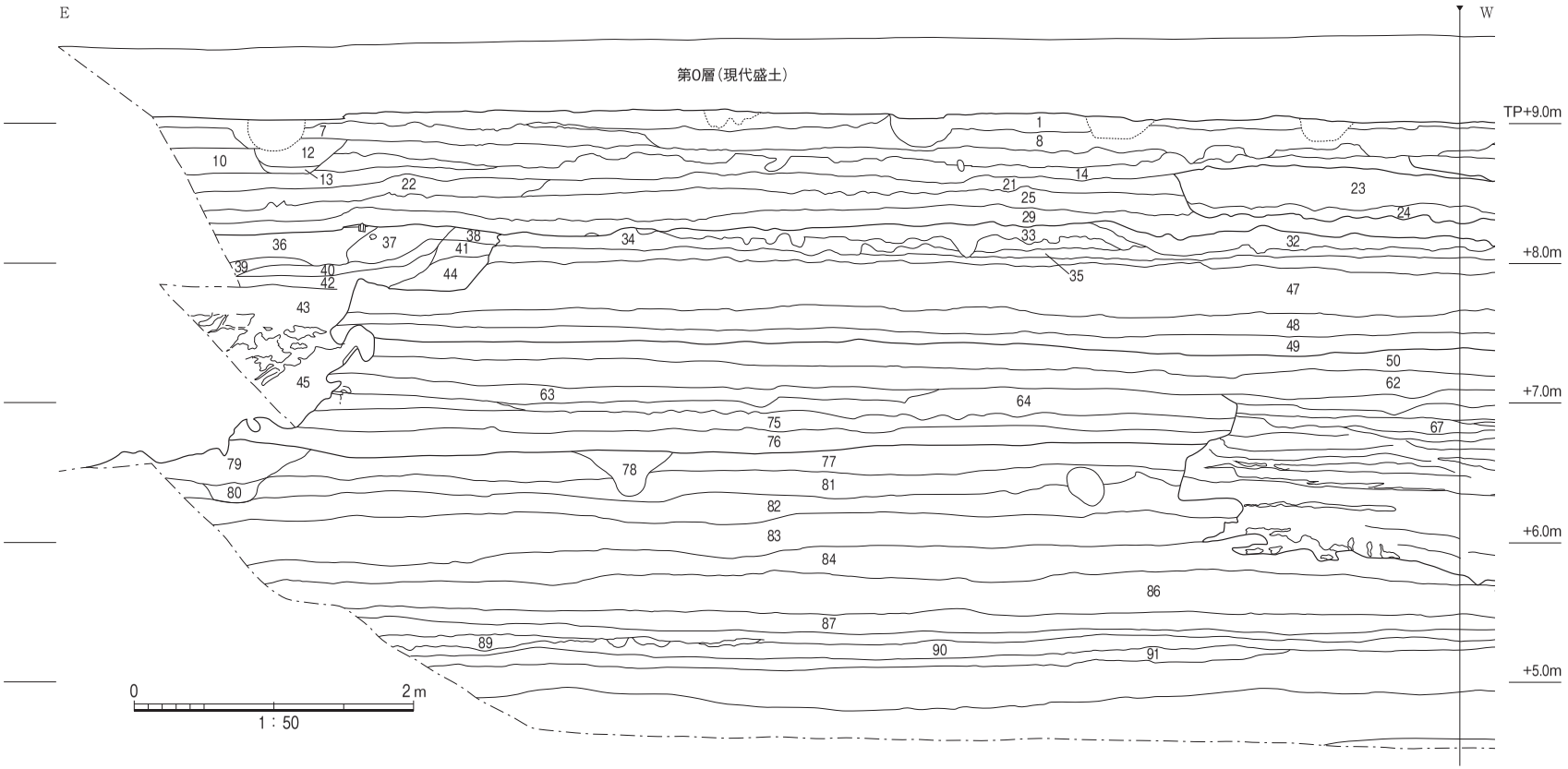



図62　南壁地層断面図（1）

1：オリーブ黒色（10Y3/1）極細粒砂質シルト（第1層）
2：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒砂質シルト
3：暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒砂質シルト
4：灰オリーブ色（7.5Y4/2）極細粒砂質シルト
5：オリーブ灰色（10Y4/2）極細粒砂質シルト
6：暗オリーブ色（5Y4/3）極細～細礫質シルト
7：灰オリーブ色（7.5Y4/2）細粒砂質シルト（第2a層）
8：灰オリーブ色（7.5Y4/2）極細粒砂質シルト（第2a層）
9：灰オリーブ色（7.5Y4/2）極細～極粗粒砂質シルト（第2a層）
10：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒砂～細礫質シルト（第2b層）
11：灰オリーブ色（7.5Y5/2）極細粒砂質シルト（第2b層）
12：暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト
13：オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂質シルト
14：灰オリーブ色（5Y5/2）極細粒砂質シルト（第2c層）
15：灰オリーブ色（7.5Y5/2）極細粒砂質シルト（溝）
16：灰オリーブ色（5Y5/2）極細粒砂～細礫含むシルト（溝）
17：オリーブ褐色（2.5Y4/3）極粗粒砂質シルト（第3a層）
18：褐色（10YR4/4）極細～極粗粒砂質シルト（第3b層）
19：オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂質シルト（第3c層）
20：黄褐色（2.5Y5/4）極細粒砂質シルト
21：黄褐色（2.5Y5/3）極細粒砂質シルト（第3c層）
22：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒～細礫質シルト（第3c層）
23：褐色（10YR4/4）極細粒砂質シルト
24：暗灰黄色（2.5Y4/2）極細粒砂
25：褐色（10YR4/4）極細粒砂質シルト（第4a層）
26：褐色（10YR4/4）極細粒砂質シルト（第4a層）
27：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質極細粒砂（第4b層）
28：褐色（10YR4/4）極細粒砂質シルト（第4b層）
29：細粒砂含にぶい黄褐色（10YR5/4）
　　粘土質シルト（第５層）
30：浅黄色（2.5Y7/4）極細粒～細粒砂（第５層）
31：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質シルト（第５層）
32：褐色（10YR4/4）極細粒～細粒砂
33：にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂（第6a層）
34：にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂質シルト（第6a層）
35：灰黄色（2.5Y6/2）極細粒砂質シルト
36：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒砂質シルト（NR101）
37：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒砂（NR101）
38：黄褐色（2.5Y5/3）極細粒砂（NR101）
39：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒砂（NR101）
40：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒～細粒砂（NR101）
41：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒砂（NR101）
42：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒～細粒砂（NR101）
43：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂（NR101）
44：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂（NR101）
45：灰オリーブ色（5Y5/2）極細粒～中粒砂（NR101）
46：灰色（5Y5/1）粘土質シルト（第6b層）
47：灰色（10Y4/1）シルト質粘土（第７層）
48：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）細粒砂質シルト（第8a層）
49：暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）細粒砂質シルト（第8b層）
50：灰色（10Y4/1）極細粒砂質シルト（第9a層）

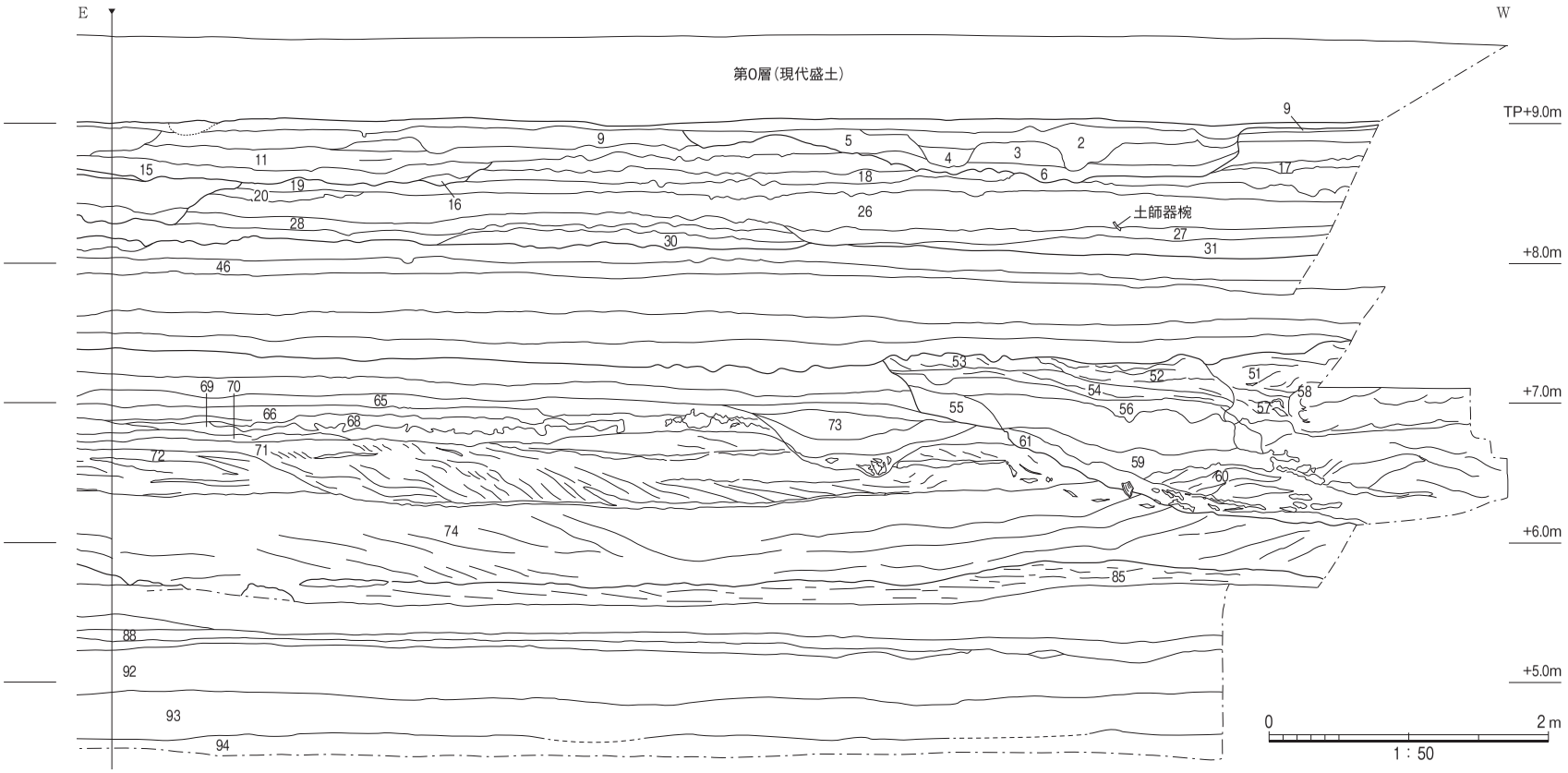



図63　南壁地層断面図（2）

51：灰白色（5Y8/2）極細粒砂～中礫（NR201）
52：オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト質極細粒砂（NR201）
53：灰色（10Y5/1）極細粒砂質シルト（NR201）
54：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒砂質シルト（NR201）
55：オリーブ黒色（10Y3/1）極細粒砂質シルト（NR201）
56：灰色（10Y4/1）細粒砂～細礫（NR201）
57：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒～細粒砂（NR201）
58：浅黄色（5Y7/3）細粒砂（NR201）
59：暗緑灰色（7.5GY4/1）極細粒砂質シルト（NR201）
60：オリーブ黄色（5Y6/3）細粒～中粒砂（NR201）
61：オリーブ黒色（10Y3/1）極細砂質シルト（NR201）
62：暗オリーブ灰色（5GY4/1）極細粒砂質シルト（第9b層）
63：オリーブ黒色（10Y3/1）粘土質シルト（第9c層）
64：灰オリーブ色（7.5Y5/3）極細粒～細粒砂（第10層）
65：灰色（10Y4/1）シルト質極細粒砂（NR301）
66：炭化物含暗オリーブ灰色（5GY4/1）
　　極細粒砂質シルト（NR301）
67：オリーブ黒色（7.5Y3/1）細粒砂質シルト（NR301）
68：炭化物含灰色（10Y4/1）細粒砂質シルト（NR301）
69：灰色（5Y4/1）極細粒～細粒砂（NR301）
70：炭化物含オリーブ黒色（5Y3/1）細粒砂質シルト（NR301）
71：灰色（7.5Y5/1）極細粒～細粒砂（NR301）
72：灰色（7.5Y5/1）細粒～中粒砂（NR301）
73：暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト質極細粒砂（NR301）
74：灰オリーブ色（5Y6/2）細粒砂～細礫（NR301）
75：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土質シルト（第11層）
76：オリーブ黒色（7.5Y3/1）細粒砂質シルト（第12層）
77：シルト偽礫含黒色（5Y2/1）
　　シルト質極細粒～細粒砂（第13層）
78：オリーブ黒色（5Y3/1）極細粒砂質シルト（SD401）
79：オリーブ黒色（10Y3/1）極細粒砂質シルト
80：オリーブ黒色（10Y3/1）極細粒砂質シルト
81：オリーブ黒色（7.5Y3/1）極細粒～細粒砂（第14a層）
82：暗オリーブ灰色（5GY4/1）極粗粒砂質シルト（第14b層）
83：極細粒砂含暗オリーブ灰色（5GY4/1）
　　粘土質シルト（第14c層）
84：暗緑灰色（10GY4/1）シルト（第15a層）
85：オリーブ灰色（2.5GY5/1）極細粒～中粒砂
86：暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土質シルト（第15b層）
87：灰色（7.5Y4/1）粘土質シルト（第15b層）
88：灰色（7.5Y4/1）粘土質シルト（第16a層）
89：オリーブ灰色（5GY5/1）中粒～極粗粒砂（第16b層）
90：細粒砂含む灰色（7.5Y4/1）粘土質シルト（第16b層）
91：黒色（2.5Y2/1）粘土質シルト（第17a層）
92：オリーブ黒色（5Y3/1）シルト質粘土（第17b層）
93：暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土質シルト（第18a層）
94：暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土（第18b層）

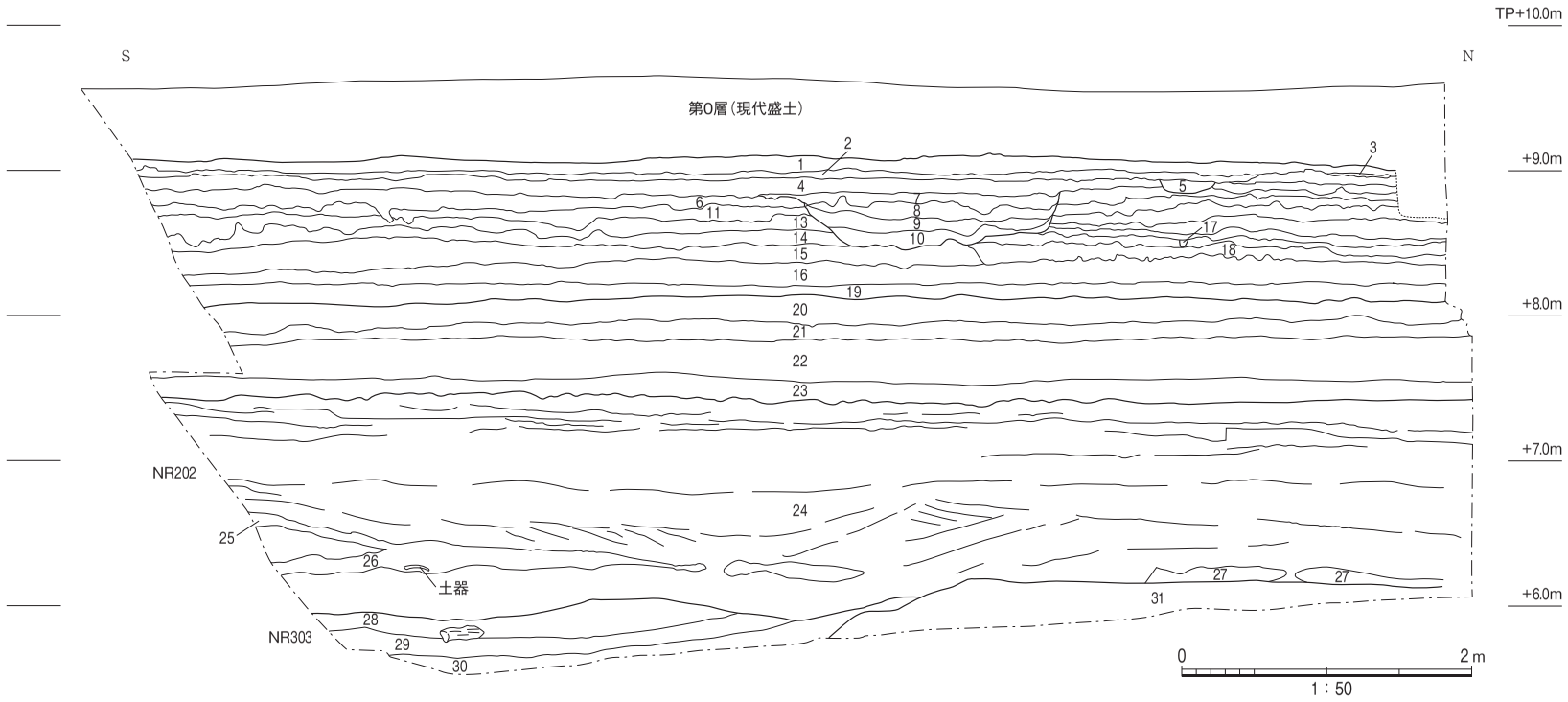



図64　西壁地層断面図

1：オリーブ黒色（10Y3/1）極細粒砂質シルト（第1層）
2：灰オリーブ色（7.5Y4/2）極細粒砂質シルト（第2a層）
3：オリーブ灰色（10Y4/2）極細粒砂質シルト（第2a層）
4：オリーブ灰色（10Y4/2）極細粒砂質シルト（第2b層）
5：灰オリーブ色（7.5Y4/2）極細粒砂質シルト
6：灰オリーブ色（5Y4/2）極粗粒砂質シルト（第2c層）
7：オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂質シルト
8：オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂質シルト
9：灰色（7.5Y5/1）極細粒砂質シルト
10：褐色（10YR4/4）細粒砂質シルト
11：オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト（第3a層）
12：オリーブ褐色（2.5Y4/3）極粗粒砂質シルト（第3a層）
13：灰オリーブ色（5Y5/2）極細粒～細礫質シルト（第3b層）
14：オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂質シルト（第3c層）
15：褐色（10YR4/4）極細粒砂質シルト（第4a層）
16：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質極細粒砂（第4b層）
17：灰色（7.5Y4/1）極細粒砂質シルト
18：褐色（10YR4/4）極細粒砂質シルト（第4a層）
19：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質シルト（第5層）
20：灰色（10Y6/1）粘土質シルト（第6a層）
21：灰色（5Y5/1）粘土質シルト（第6b層）
22：灰色（10Y4/1）シルト質粘土（擾乱痕跡多　第7層）
23：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）細粒砂質シルト（第8a層）
24：灰白色（5Y8/2）極細粒砂～中礫（NR202）
25：暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土質シルト（NR202）
26：暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）極細粒～極粗粒砂（NR202）
27：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極細粒砂質シルト（NR202）
28：灰オリーブ色（5Y5/2）極細粒砂～中礫（NR303）
29：灰色（9Y4/1）細粒砂（NR303）
30：オリーブ灰色（2.5GY5/1）中粒～極粗粒砂（NR303）
31：暗オリーブ灰色（5GY4/1）極細粒砂質シルト（第11層）

は５～15㎝である。第６層はRK4Biii～iv層に対比される。

第７層：灰色シルト質粘土からなり、層厚は20～38㎝である。全体に生物擾乱が著しく、上部を中心に酸化鉄の斑文が目立つ。RK4Cｖ層に対比される。

第８層：第8a・8b層に細分した。第8a層は暗オリーブ灰色細粒砂質シルトからなり、層厚は10～22㎝である。RK4Cvi層に対比される。第8b層は暗オリーブ灰色細粒砂質シルトからなり、層厚は４～20㎝である。第８層はRK4Cvii層に対比される。

第９層：第9a～9c層に細分した。第9a層は灰色極細粒砂質シルトで、層厚は20～40㎝である。本層上面で飛鳥時代中頃～後半の自然流路NR201を検出した。RK5～6A層に対比される。第9b層は暗オリーブ灰色極細粒砂質シルトからなり、層厚は20～40㎝である。RK6B層に対比される。第9c層はオリーブ黒色粘土質シルトからなり、層厚は20～40㎝である。調査区南東部のみで確認した。RK6C層に対比される。

第10層：灰オリーブ色極細粒～細粒砂の河成層で、層厚は20㎝である。本層上面で飛鳥時代中頃の自然流路NR301を検出した。RK7A層に対比される。

なお、本層から第14c層については、同流路により大半が削剝されているため、調査区東南部にのみ残存している。

第11層：暗オリーブ灰色粘土質シルトで、植物遺体を含む湿地堆積層である。層厚は６～15㎝である。RK7B層に対比される。

第12層：オリーブ黒色細粒砂質シルトからなり、暗色帯を構成する。層厚は８～15㎝である。弥生時代後期の遺物を少量含む。RK8A～B層に対比される。

第13層：黒色シルト質極細粒～細粒砂からなり、上部は土壌化しており暗色帯を構成している。層厚は12～20㎝である。本層上面で弥生時代後期中葉の溝SD401を検出した。RK8C層に対比される。

第14層：植物遺体のラミナや生物擾乱が認められるやや不均質な河成層で、第14a～14c層に細分した。第14a層はオリーブ黒色極細粒～細粒砂からなり、上部に極細粒砂の偽礫や生物擾乱が認められる不均質な層相である。層厚は６～20㎝である。第14b層は暗オリーブ灰色極細粒砂混りシルトからなり、生物擾乱が認められる不均質な層相である。層厚は10～25㎝である。第14c層は暗オリーブ灰色極細粒砂混り粘土質シルトからなり、極細粒砂の偽礫や植物遺体のラミナを含む。層厚は20～34㎝である。

第15層：河成層で第15a・15b層に細分した。第15a層は暗緑灰色シルトからなり、植物根痕および生物擾乱が認められる。層厚は10～24㎝である。第15b層は灰色粘土質シルトからなり、植物遺体の水平ラミナが認められる。層厚は30～40㎝である。

第16層：河成層で第16a・16b層に細分した。第16a層は灰色粘土質シルトからなり、10枚程度の水平堆積したラミナの明瞭な植物遺体の集積層である。層厚は５～15㎝である。第16b層は灰色細粒砂混り粘土質シルトで植物遺体を含むほか、上部には中粒砂を埋土とする踏込みが認められる。層厚は５～15㎝である。上記の第14層から本層までは河成層であることから、自然流路の一部である可能性もある。第16a層から弥生時代後期の土器が出土している。

第17層：暗色帯を構成し、第17a・17b層に細分した。第17a層は黒色粘土質シルトで調査区南東部のみに存在している。層厚８～10㎝である。第17b層はオリーブ黒色シルト質粘土からなり、下部を中心に生物擾乱が認められる。第17層は遺物が出土しておらず、また、上位層の評価にも左右されるが、RK10C層に対比される可能性がある。

第18層：第18a・18b層に細分した。第18a層は暗オリーブ灰色粘土質シルトからなり、生物擾乱が認められる。層厚20～40㎝である。第18b層は暗オリーブ灰色粘土からなり、粘性が高い。層厚16㎝以上である。第17層と同じくRK10C層に対比されると考えられる。

## ２）遺構と遺物

### ⅰ）弥生時代後期の遺構と遺物

調査区東南部において、第13層上面でSD401を検出した（図66、図版39）。

SD401　南東から北西方向に直線的に延びる小溝で、北部はNR301に切られている。1.3m分を確認した。幅0.4m、深さ0.3mである。埋土はオリーブ黒色極細粒砂質シルトである。弥生時代後期中葉の弥生土器甕などの細片が少量出土している。

295～297は弥生土器の破片である（図65）。295は甕の口縁部片で、外上方に開く口縁部の下端を肥厚しており、調整は内外面ともにヨコナデである。296は長頸壺の口頸部片である。口縁部は頸部の上半で外上方に開いており、内外面をヨコナデ調整している。頸部の外面の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のナデである。297は小型の甕の底部で、裏面を平坦に整えている。内面をユビナデで整えており、外面には煤が付着している。

以上の弥生土器は弥生時代後期中葉に属するものであろう。

### ⅱ）飛鳥時代の遺構と遺物

第10層上面でNR301を検出した。第9a層上面で調査地西部にてNR201を検出した。

NR301　北東から南西方向の自然流路である（図66、図版39・40）。東部ではNR101、西部ではNR201に切られる。幅は９m前後、深さ1.2mである。断面の形状は浅い半円形である。埋土は西部ないし南部では極細粒砂～細礫を主体とする河成層で、急速に埋没したことを示し、中央部より北側上部では、植物遺体や炭酸鉄の塊が認められる粘土質シルトが厚く堆積し、この堆積以降は湿地や沼沢地のような環境であったことが推定される。最上部の粘土質シルト層から、飛鳥時代中頃を中心とする土師器杯・甕、須恵器杯・甕などの細片のほか動物骨が少量出土している（図67、図版45）。本流路は東接するNG97－56次調査でも検出されている。

298は土師器杯Cで、底部の中央部を欠損している。口縁部は内湾して立つ体部から短く開いており、同端部は内傾している。器体の調整は体部外面の中程から底部にかけてヘラケズリで、体部の上半は横方向のヘラミガキである。体部の内

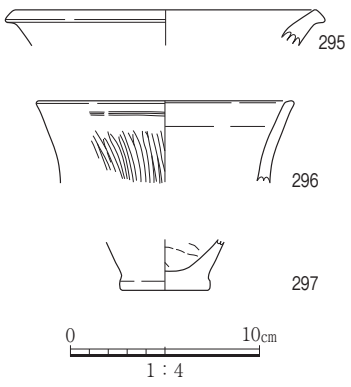



図65　SD401出土遺物実測図

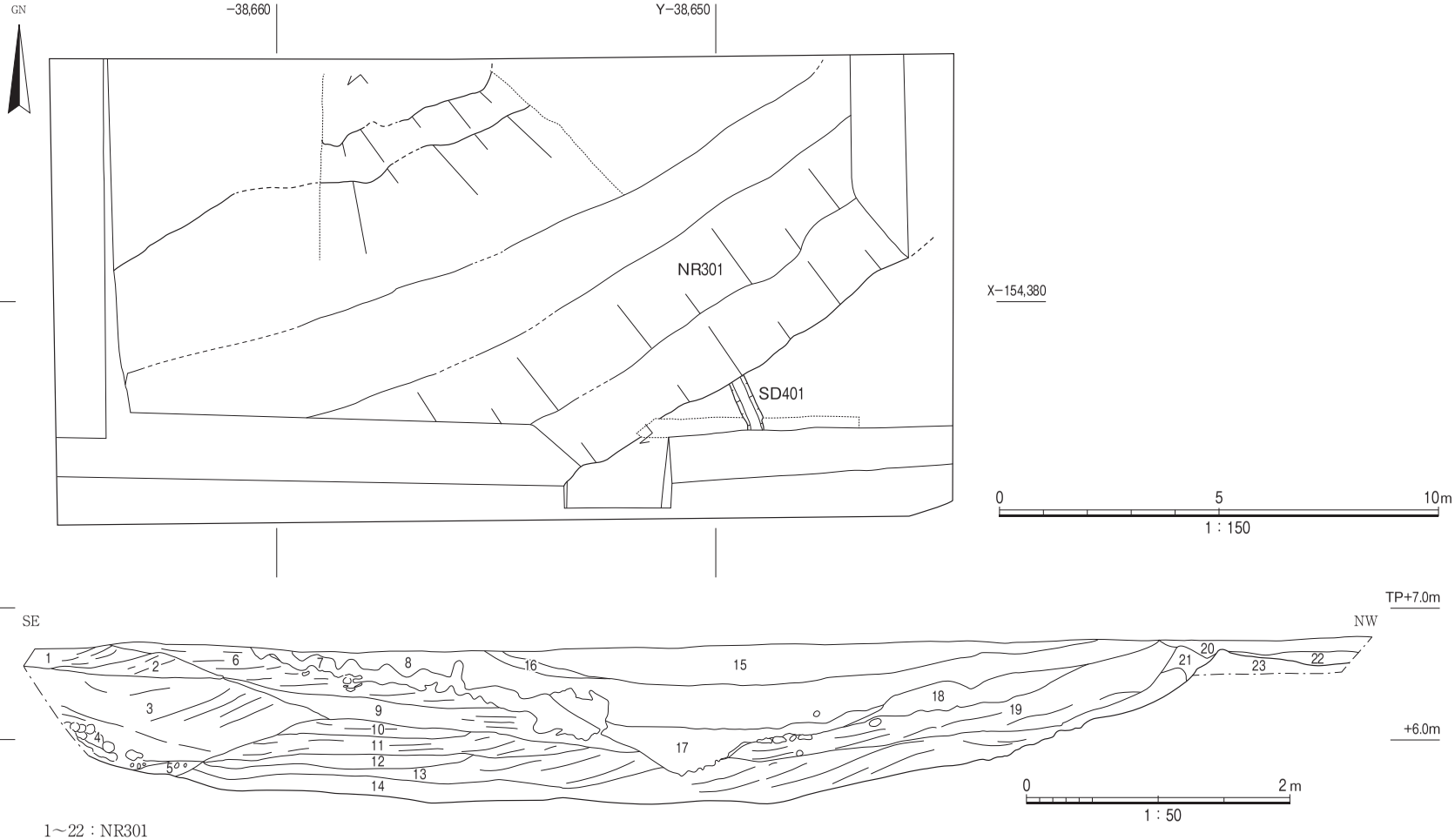



図66　第13層上面・第10層上面遺構平面・断面図

1～22：NR301

1：炭化物含む灰色(7.5Y4/1)極細粒砂
2：オリーブ黄色(7.5Y6/3)極細粒～細粒砂
3：灰オリーブ色(7.5Y6/2)極細粒～細粒砂(下部は細礫)
4：オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト偽礫
5：灰オリーブ色(7.5Y6/2)細粒～極粗粒砂
6：オリーブ黄色(5Y6/3)細粒～中粒砂
7：植物遺体・炭酸鉄含む灰色(5Y4/1)極細粒砂
8：細粒砂・遺物遺体・炭酸鉄含む灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト
9：炭化物含む灰色(7.5Y6/1)極細粒砂
10：灰色(10Y6/1)極細粒～粗粒砂
11：灰オリーブ色(7.5Y6/2)極細粒砂～細礫
12：灰色(10Y5/1)極細粒砂
13：灰色(10Y5/1)極細粒砂～中礫
14：オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂～細礫
15：灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト
16：オリーブ黒色(10Y5/1)細粒砂質シルト
17：細粒砂・炭酸鉄含む灰色(10Y4/1)粘土質シルト
18：シルト偽礫多数・植物遺体含む
　　オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂
19：灰オリーブ色(7.5Y6/2)極細粒砂～細礫
20：オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂質シルト
21：オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂質シルト
22：暗オリーブ灰色(5GY4/1)細粒砂質シルト
23：オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂質シルト

面の調整は縦方向のヘラミガキで、内底面には螺旋状の暗文を加えている。299も298に酷似した底部を欠損した土師器杯Cである。器体の調整も298と変わらないが、外面のヘラミガキおよび内面の暗文が粗雑である。300・301は口径が298・299に比べて大きな土師器杯Cで、300は底部を欠損している。300・301ともに口縁部は内湾しながら立つ体部からわずかに開き、同端部は内傾している。器体の調整は体部から底部にかけてヘラケズリで、器体の上半部は横方向の細かいヘラミガキである。器体の内面の調整は縦方向の密なヘラミガキで、301の内底面には螺旋状の暗文が施されている。302は丸底で体部がやや篇球形な器体から口縁部が短く開く土師器甕である。口縁部の内外面から体部の外面の上端近くまでヨコナデ調整しており、口縁端部は丸い。体部の調整は外面が横方向のヘラケズリで、内面は横方向の幅広い断続的なナデである。303は体部の中程以下を欠損した最大径が体部の中程にある土師器甕である。口頸部の内外面をヨコナデ調整しており、同端部は細く丸くおさめている。体部の調整は外面が右から左上がりのハケのあと、ユビオサエおよびナデを加えており、内面は左上がりから横方向のナデである。体部の外面には煤が、内面にはコゲが付着している。

304はヘラ切りしたあと、天井部が未調整な須恵器杯H蓋で、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。口縁端部を丸くおさめている。

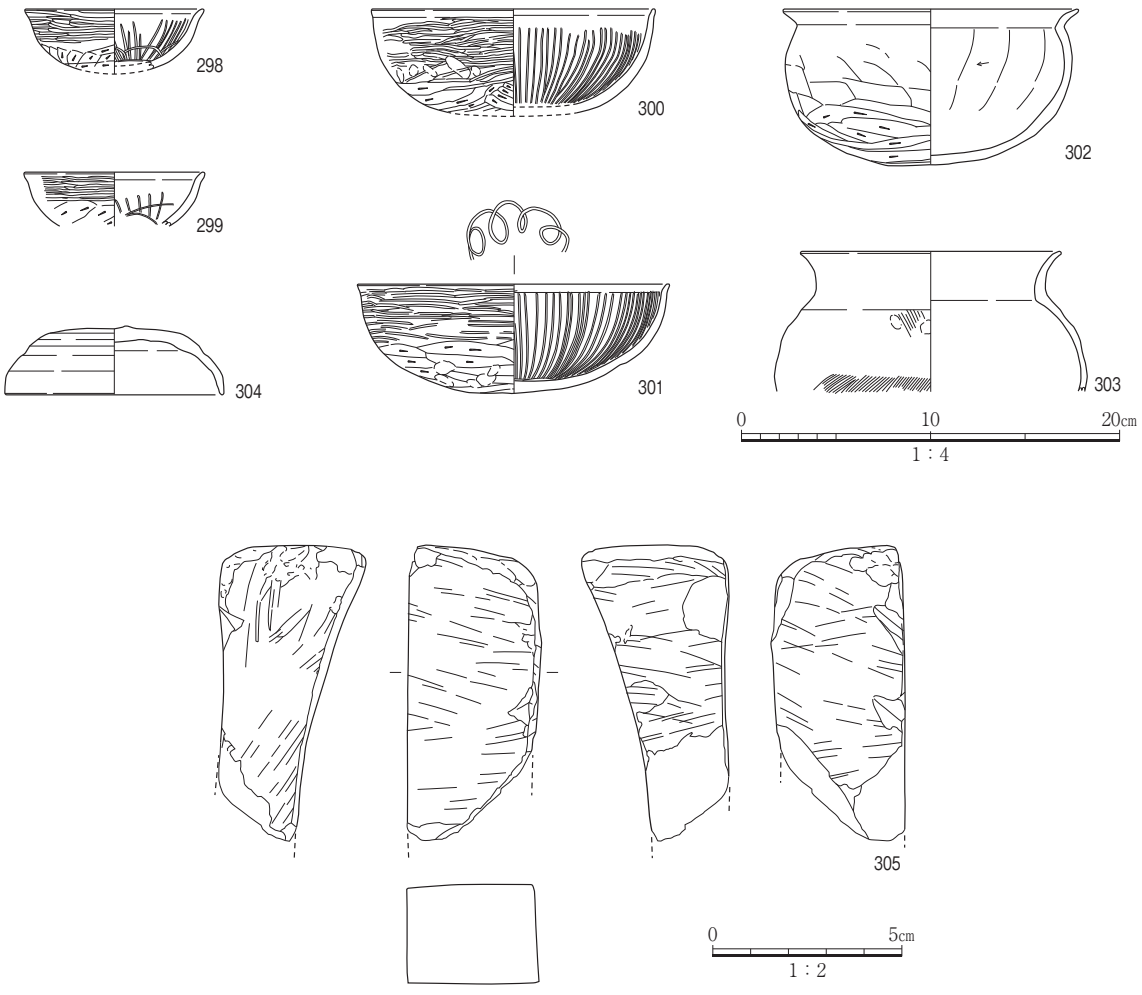



図67　NR301出土遺物実測図

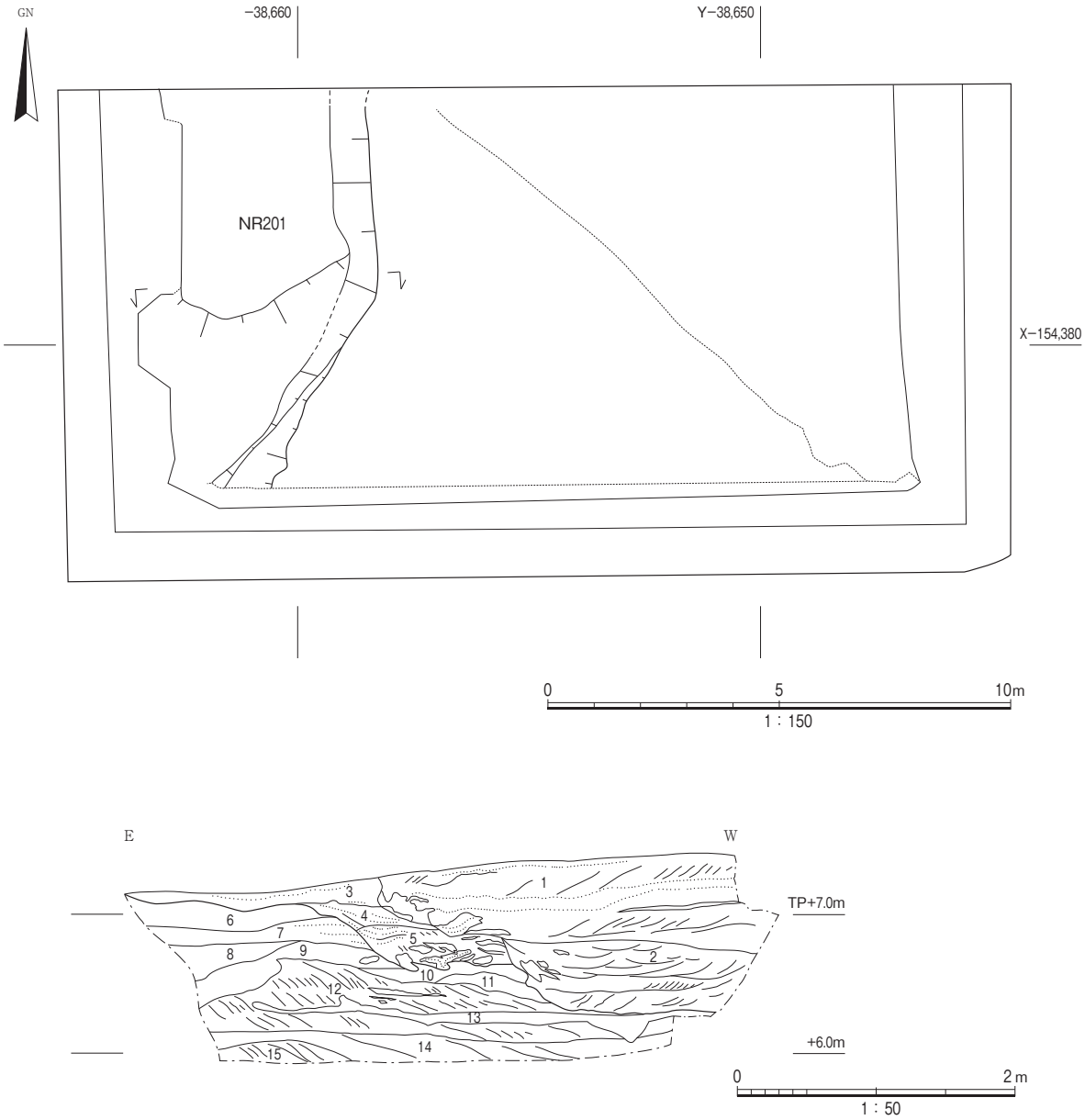
以上の土師器の所属時期は大小の杯Cの形態および共伴した須恵器杯H蓋の型式からみて、飛鳥Ⅰの後半段階に属するものであろう。なお、土師器杯C298～301および甕302の胎土は水簸された良質なものを用い、橙～黄橙色系に硬く焼成されており、藤井寺および羽曳野市方面に居住したいわゆる土師氏が生産した土師器の可能性がある。

また、305は最大長7.9㎝、最大幅3.5㎝、最大厚3.9㎝の砥石で、下端を欠損している。４面すべてに使用痕がある。石材は凝灰岩である。

NR201　第9a層上面で調査地西部にて検出した自然流路である（図68、図版40・41）。南西から北東方向に延びた後、ほぼ南北方向に流路を変えている。NR301を切る。幅6.7m以上で深さは1.4mであった。埋土は極細粒砂～細礫が主体で、ラミナの傾斜から南から北の流れが想定される。下部を中心に飛鳥時代中頃～後半の土師器杯・高杯・甕・鉢（小形鉢・大形鉢・把手付小形鉢・把手付小形鉢）・羽釜・甑、須恵器杯身・壺・甕のほか、円筒埴輪や木質部分が残る鉄製「U字形」鋤先が出土している（図69、図版44・45）。本流路はNG07－１次調査地［大阪市文化財協会2009c］で検出された、東から西に蛇行して流下する自然河川に連続するものと推定される。

306は脚部を欠損した土師器小型高杯である。口縁部は浅い杯部から外上方に開いており、同端部を丸くおさめている。杯部の内外面をヘラミガキ調整している。307は脚部を欠損した土師器高杯で、杯部は口径の割に器高が低い。口縁部は内湾しながら立つ体部からわずかに開いており、同端部を丸くおさめている。器体の調整は外面の上半が横方向のヘラミガキ、同下半は左右のハケで、内面は縦方向のヘラミガキである。内底面に螺旋状の暗文がある。308は底部を欠損した鉢で、口縁部は内湾しながら立つ体部から極わずかに開く。口縁端部を丸く肥厚させており、体部の調整は外面が横方向のヘラミガキで、内面は縦方向のヘラミガキを２段施している。309は底部の中央部を欠損した土師器鉢である。口縁部は球形に近い体部から極わずかに外反しており、同端部は内傾した面をなす。器体の調整は外面の下半部が横方向の逆時計回りのヘラケズリおよび右から左下方向のヘラケズリ、上半部は横方向のヘラミガキで、内面は横方向の時計回りのハケのあと、縦方向のヘラミガキである。310は大型の土師器甕で、体部の上半以下を欠損している。頸部から外反する口縁部の内外面をヨコナデ調整しており、外面にはにぶい凹線状の沈線が３条巡る。体部の調整は外面が左上がりから横方向のハケで、内面は逆時計回りの横方向のナデである。311は体部の下半以下を欠損した土師器把手付鍋である。口縁部は上半部が丸味のある体部から外反しており、同端部の下端を肥厚している。器体の調整は外面が左上がりのハケで、内面は横方向の粗いハケのあと、横方向のナデを加えている。体部の上半に舌状を呈する把手を貼り付けている。

312は須恵器杯G身である。底部はヘラ切りのあと未調整で、体部から口縁部はヨコナデ調整している。口縁端部は丸い。313は須恵器杯H身で、底部はヘラ切り未調整である。立ち上りは低く内傾しており、口縁端部は上方に丸くおさめている。底部の外面にヘラ記号「×」がある。314は須恵器横瓶の口頸部で、口縁部はわずかに開いて立つ頸部から丸く玉縁状に肥厚させている。口縁部の外端面には浅くにぶい沈線が巡っており、頸部の内面には当具痕がある。315は須恵器甕の口頸部で、口縁部は頸部から大きく開き、同端部を上下に肥厚している。器体の調整は内外面ともにヨコナデである。




1 ：灰白色(2.5GY8/1)極細粒～極粗粒砂(NR201)
2 ：灰白色(2.5GY8/1)極細粒砂～細礫(NR201)
3 ：暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト～極細粒砂(NR201)
4 ：灰白色(2.5GY8/1)粗粒砂(NR201)
5 ：灰白色(2.5GY8/1)極細粒～細粒砂(NR201)
6 ：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト
7 ：暗オリーブ灰色(2.5GY3.5/1)粘土質シルト
8 ：暗オリーブ灰色(2.5GY3.5/1)粘土質シルト
9 ：植物遺体含む暗オリーブ灰色(2.5GY3.5/1)極細粒砂
10：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒砂
11：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒～細粒砂
12：植物遺体含む灰白色(2.5GY8/1)細粒～中粒砂
13：植物遺体多く含む暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒～中粒砂
14：灰白色(2.5GY8/1)中粒砂～細礫
15：暗オリーブ灰色(2.5GY7/1)中粒～極粗粒砂

図68　第9a層上面遺構平面・断面図

316も須恵器甕の口頸部で、口縁部は頸部から一旦直立したあと外反し、わずかに内湾しながら外上方に短く開く。器体の調整は内外面ともにヨコナデである。

317は鉄製のU字形鍬先とみられる残欠である。刃部の残存長は約6 cmあり、袋部は深さ約2 cm残っている。

以上の遺物の所属時期は、須恵器杯H身・杯G身、土師器高杯・鉢・把手付鍋などからみて飛鳥Ⅱ

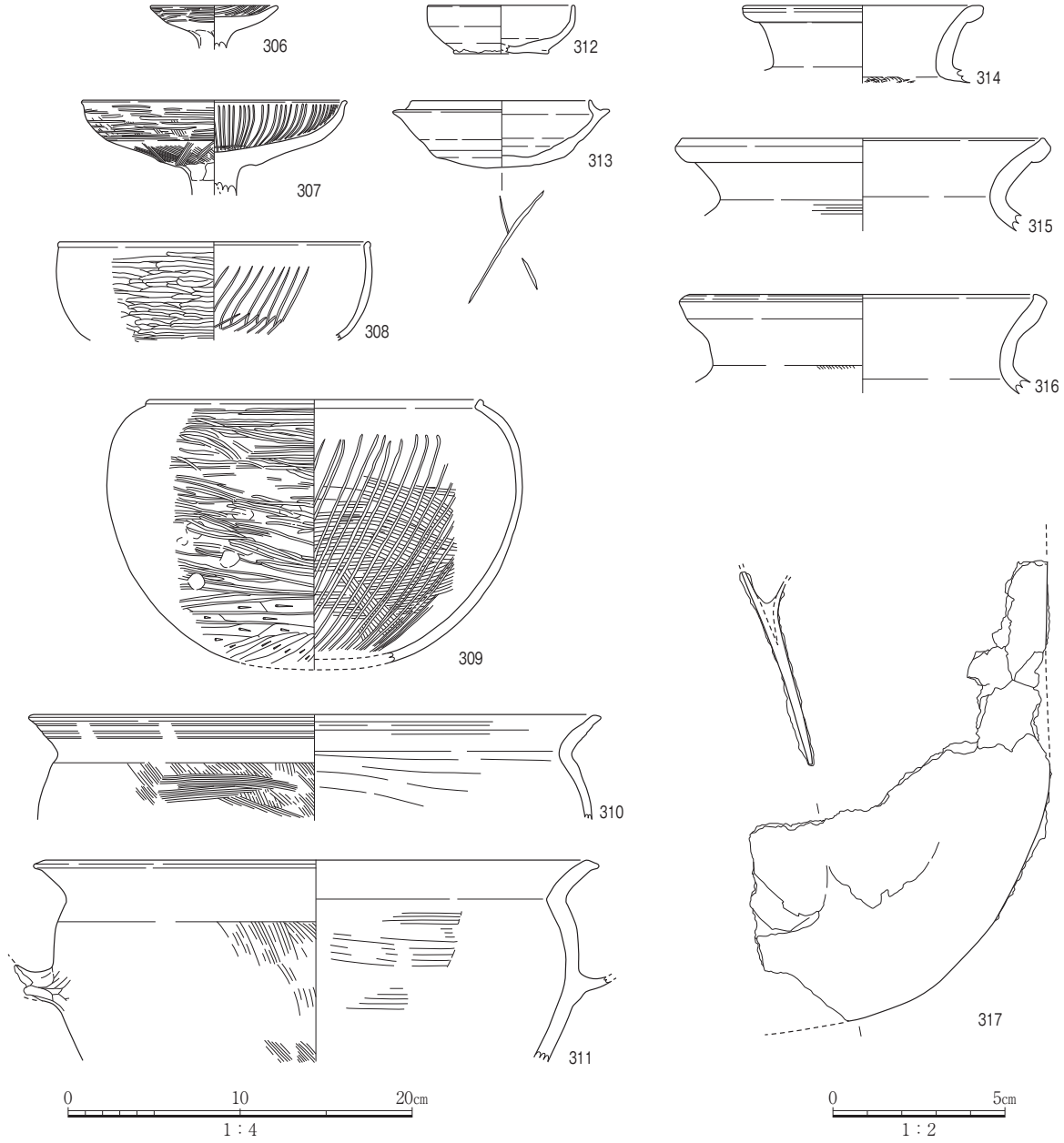


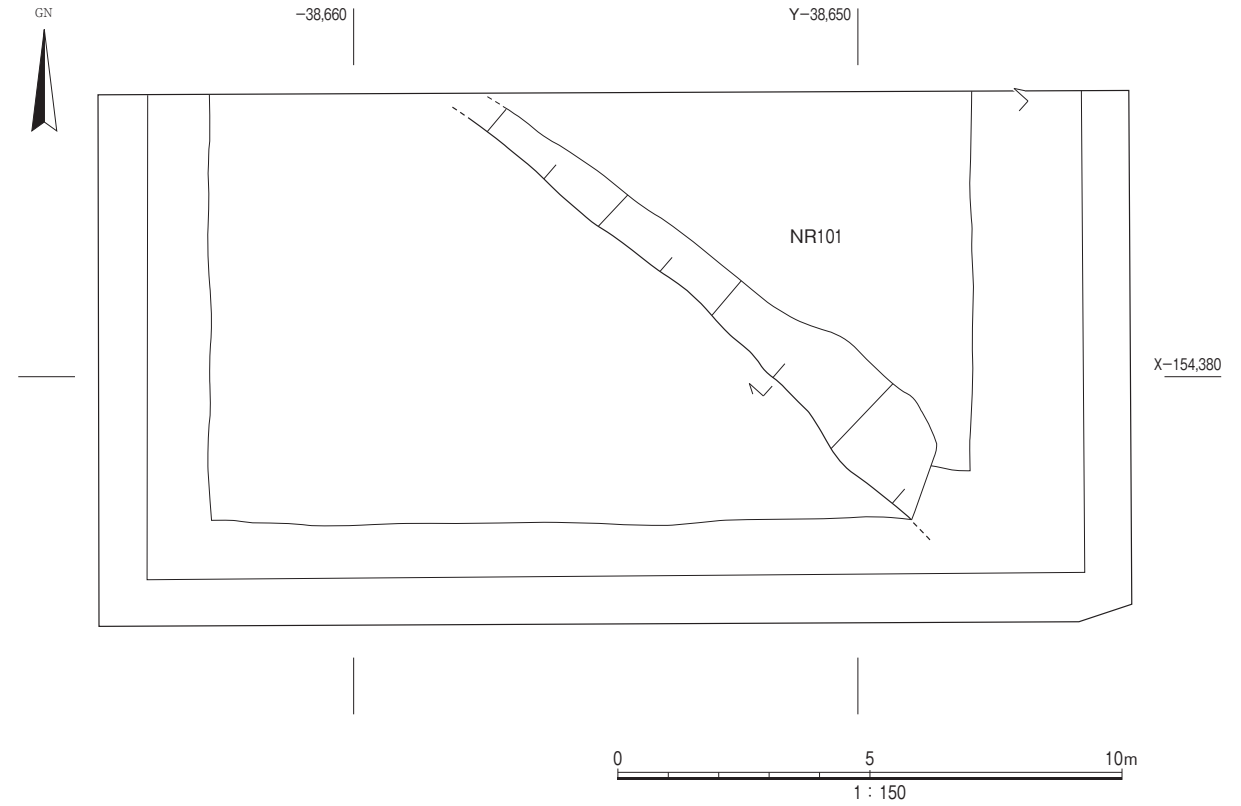

図69　NR201出土遺物実測図

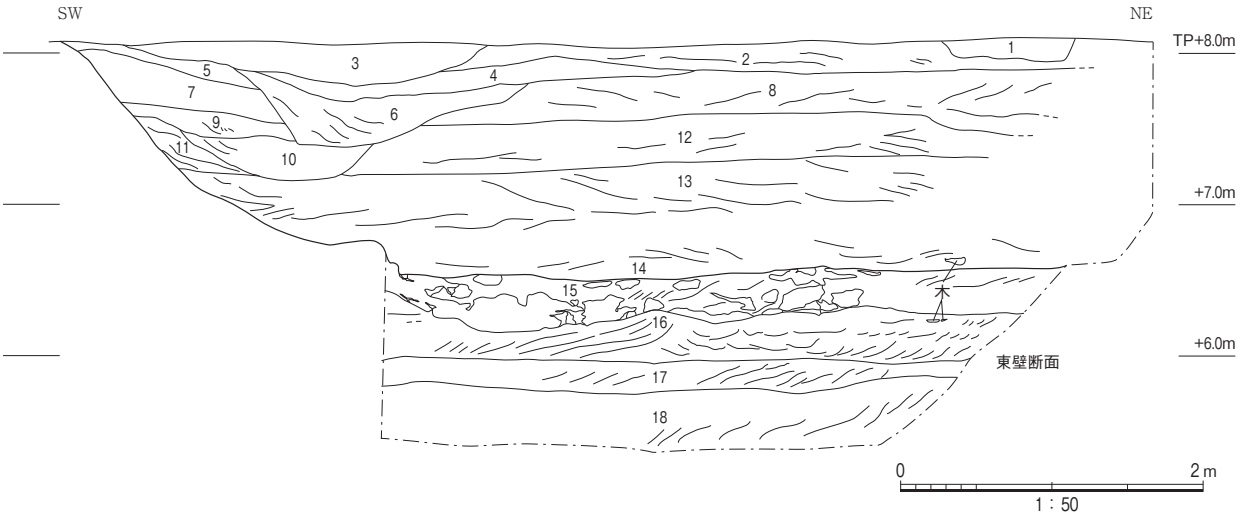
に属するものと考えられる。鉄製U字形鍬先も当該期に属するものとみても大過ないであろう。

iii)平安時代の遺構と遺物

第6a層上面で調査区東半部にてNR101を検出した(図70、図版42・43)。

NR101　南東から北西方向にほぼ直線的に延びる流路である。幅9.0m以上で、最も深い部分で1.9mある。埋土は下位層に由来する偽礫を含む極細粒砂～細礫が主体で、ラミナの傾斜から南東から北西への流れが想定される。下部を中心に弥生時代後期～平安時代中期の弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器・黒色土器の細片や馬歯が少量出土した(図71、図版44)。その大半がローリングを受け磨滅している。なお、高台裏面に「西」の墨書を持つ平安時代前期末(9世紀末～10世紀前半)の黒色土器A類椀が1点出土している(図版43)。本流路は東接するNG97－56次調査においても検出されており[大阪




1～14：NR101

1：浅黄色(5Y7/3)極細粒砂～細礫
2：灰色(7.5Y5/1)シルト～極細粒砂
3：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト
4：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト～細粒砂
5：オリーブ灰色(2.5GY5/1)極細粒砂
6：オリーブ灰色(2.5GY6/1)極細粒～極粗粒砂
7：暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂
8：オリーブ黄色(5Y6/3)細粒砂～細礫
9：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒砂～細礫
10：オリーブ灰色(2.5GY5/1)中粒砂～細礫
11：オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒～粗粒砂
12：オリーブ灰色(2.5GY6/1)細粒砂～細礫
13：オリーブ灰色(2.5GY6/1)細粒砂～細礫
14：灰白色(2.5GY8/1)細粒～極粗粒砂
15：シルト偽礫含む灰白色(2.5GY8/1)中粒砂～細礫
16：オリーブ灰色(2.5GY6/1)極細粒砂
17：灰白色(2.5GY8/1)細粒～極粗粒砂
18：極粗粒砂含む明オリーブ灰色(2.5GY7/1)細粒砂

図70　第6a層上面遺構平面・断面図

市文化財協会2000a]、出土遺物から平安時代前～中期(平安時代Ⅱ期古段階～Ⅲ期古段階)の自然流路と推定されている。

318は土師器椀で、口縁部は内湾しながら立つ体部からわずかに開く。口縁端部は内傾しており、にぶい沈線状に凹む。体部の外面はユビオサエ、口縁部の内外面および体部の内面はヨコナデ調整している。底部には断面が三角形の高台を貼り付けている。色調がにぶい黄橙色を呈するもので、二次的な焼成を受けた瓦器椀の可能性がある。319は土師器杯で、体部および口縁部は平らな底部から外上方に直線的に開く。口縁部を下にして底部から口縁部に向かって逆時計回りにユビオサエを加えており、口縁部の内外面および体部の内面の調整はヨコナデである。320は黒色土器A類椀で、口縁部および体部の内外面の調整は横方向から左上がりの密なヘラミガキで、内底面には横方向のヘラミガキを施している。口縁端部は丸い。底部には断面が三角形の高台を貼り付けており、裏面の中央部に墨書「西」がある。

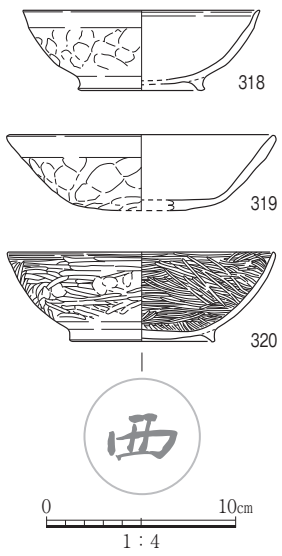


図71　NR101出土遺物実測図

以上の土器類の所属時期は、平安時代Ⅱ期古段階～Ⅲ期古段階に属するものであろう。

### 3)各層出土の遺物

321・322は第16a層、323は第9b層、324は第4a層から出土した遺物である(図72、図版45)。以下古い順から記述する。

321は弥生土器広口壺の口頸部で、口縁部は筒状の頸部から一旦緩やかに外反したあと垂下している。口縁部の外端面の調整は横方向の板状工具によるナデのあと、同方向の断続的なヘラミガキである。口頸部の内外面の調整は外面が左上がりのハケのあと、縦方向のヘラミガキで、内面は縦から横方向のヘラミガキである。322は小型の弥生土器細頸壺で、最大径は算盤玉形を呈する体部の中程にある。口縁部は体部から直立する筒状の頸部から短く開く。器体の調整は口頸部の内外面が縦方向の密なヘラミガキで、体部は外面が左上がりのハケのあと、縦方向の細筋のヘラミガキを上下2段に施しており、内面はナデである。口縁部のヨコナデは最終段階の調整である。底部は小さな平底で、裏面をヘラで調整している。色調が暗灰黄色を呈し、胎土中に微細な長石・雲母・角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。323

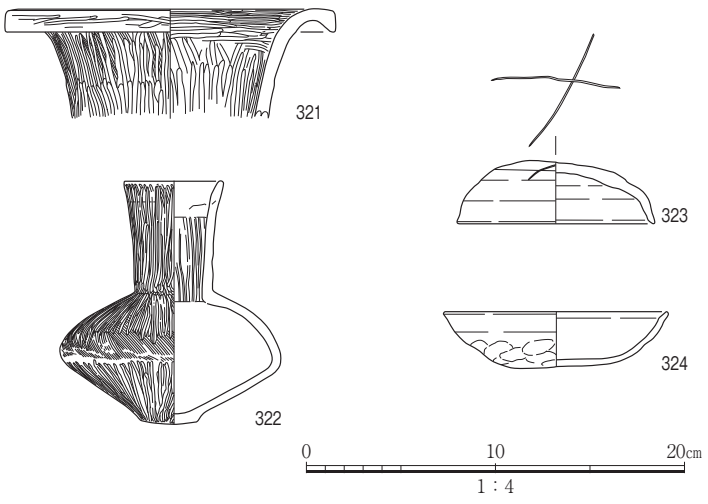


図72　各層出土遺物実測図

は須恵器杯H蓋で、天井部はヘラ切り未調整である。口縁端部は内傾しており、天井部にヘラ記号「×」がある。324は土師器椀Ａで、口縁部はわずかに内湾して立つ体部から短く開く。口縁部を下にして体部に逆時計回りにユビオサエを施しており、口縁部から体部の内面の調整はヨコナデである。口縁端部は内傾している。

以上の遺物の所属年代は、弥生土器広口壺321・細頸壺322が弥生時代後期前葉に、須恵器杯H蓋323が飛鳥Ⅱ、土師器椀Ａ324は平安時代Ⅱ期中段階に属するものであろう。

### ４）小結

今回の調査では、弥生時代後期中葉のSD401を検出した。遺構構築面である第13層および遺物包含層である第12層は、飛鳥時代中頃のNR301や同時代中頃～後半のNR201、平安時代前～中期のNR101の３条の自然流路により大半が失われているが、同時期の遺構がほかにも存在した蓋然性が高いと推定される。第10層上面で検出した飛鳥時代中頃のNR301については、東接するNG97－56次調査で検出された流路につながるものである。第9a層上面で検出した飛鳥時代中頃～後半のNR201については、本調査地の西部一帯で検出されている東から西に蛇行して流下する自然流路に連続するものと推定される。第6a層上面で検出したNR101については、東接するNG97－56次調査でも検出されている。

# 第Ⅲ章　調査のまとめ

本書では、平野区長吉六反一丁目・同二丁目・長吉出戸七丁目における調査成果を報告した。調査地点が離れているため、以下では、調査ごとに時代を追って成果を列記し、まとめとする。

### NG10－２次調査

本調査において、もっとも古い遺物は第13a層上面から出土した古墳時代中期頃の韓式系土器である。ただし、以後８世紀代の遺物までは付近から流されてきたもので、本調査地において同時代の人為的な痕跡は見られない。

平安時代中～後期においては水田を検出した。たびたび洪水に見舞われる低湿な環境のなかで営まれたものであり、長原遺跡において広範囲に始まる荘園開発の動きと捉えられる。ただし、その後も河川の氾濫は続いたと考えられ、本調査地でこうした開発が継続した形跡はなく、本格的な開発が進められるのは室町時代以降のことであった。

室町時代から江戸時代にかけては、集落に係わる多くの遺構・遺物を確認した。長原遺跡では多くの場合、RK２層・NG２層およびRK３層・NG３層の層準は作土層であるが、本調査地周辺が集落の中心であったことを示す特筆すべき遺構を多数検出し、中国産磁器をはじめとする多量の遺物を得ることができた。これは現在の長吉六反地域の歴史を考えるうえで重要な成果である。幅6.8m、深さ0.7mという大規模な溝SD501は、すでに東隣地のNG09－３次調査でも断面で検出されていたが[大阪文化財研究所2012]、今回の成果によって東西方向の長さが70m以上あることが明らかとなった。集落、あるいは屋敷を区画するための濠であろう。その上位層においても東西長30m（100尺）の溝SD404がある。また、墳墓堂遺構SX335は長原東部地区では初めての発見であり、こうした施設を営むことができる有力者層が近辺に存在したことがわかった。遺物のなかでは、SD501から出土した中国産青花碗やSX335の周溝から出土した瀬戸美濃焼茶入は、大坂城跡や大坂城下町跡の資料と比較しても最古級のものであり、遺構の特殊性とともに注目される。

上記の集落に係わる遺構は15世紀頃から現れ、16世紀にかけていったん盛期を迎えるが、江戸時代に入っても、多数の土壙から陶磁器が多量に出土したことからも、本調査地が集落の中心であり続けたことがわかる。西のNG09－２次調査地では、９枚の肥前陶器小皿を埋納して中国産青花皿で蓋をした江戸時代初期の土壙が見つかっている。今回の資料においても、織部向付をはじめ、茶壺の可能性がある肥前陶器や信楽焼の壺、「御菩薩」の印銘から京焼と考えられる鉢など、一般的な農村では見られない遺物が認められ、庄屋クラスの屋敷が付近にあったなどの状況を推定することができよう。今後、東西のNG09－２・３次調査地の成果と合せて、周辺における集落の変遷を復元していく必要がある。

NG10－５次調査

弥生時代中期以前については、部分的にしか確認できていないものの、遺構･遺物ともに希薄であった。第11層が堆積したのちの弥生時代中期後葉になると比較的地形が安定し、遺物が認められるようになるが、確実に弥生時代中期といえる遺構は確認できなかった。

弥生時代終末(庄内期)から古墳時代中期にかけては遺物量が増して遺構も多く認められ、集落の縁辺部に当っていると考えられる。古墳時代中期にかけては耕作域へと変化していくようである。その後、第９層に見られるように本調査地周辺は再び水没する不安定な環境となり、居住域として適さないようになっていく。第８層段階は耕作域として利用され、耕作域の一部分には高まりが築かれていたようである。

古墳時代後期から飛鳥時代にかけては大規模な洪水に見舞われ、１ｍ以上もの堆積土によって調査地周辺の標高は高くなる。その後、おそらくアシなどの植物が繁茂する湿地状となり、調査区西側の自然流路もこの過程で形成されたと考えられる。ただし、飛鳥時代には井戸が設置されたり、飛鳥時代から平安時代初頭にかけて遺物が多く出土している。また、平安時代初頭にも井戸が築かれるなど、居住には適さないが、近隣に集落が存在したことは明らかである。特に平安時代では墨書土器や銙帯など、一般的な集落から出土する遺物とは異なる遺物が出土していることが注目されよう。

平安時代後半以降は、調査地周辺は耕作域として利用される。遺跡全体としては、条里地割にもとづいて遺構が正方位を指向する時期であるが､本調査地周辺では方位の振れたものが多い。かつてあった自然流路やその埋没の際に形成された自然堤防などの地形的要因によるものであろう。鎌倉～室町時代にも引き続き耕作域として利用されているが、方位は自然地形に応じたものであり、飛鳥時代から平安時代にかけて堆積した地層の起伏は大きかったと推定できる。

NG10－６次調査

弥生時代後期中葉では、SD401を検出した。遺構構築面である第13層および遺物包含層である第12層は、飛鳥時代のNR301・201、平安時代前～中期のNR101といった３条の自然流路により大半が失われているが、同時期の遺構がほかにも存在した蓋然性が高い。

第10層上面で検出した飛鳥時代中頃のNR301については、東隣地のNG97－56次調査で検出された流路につながるものである。

第9a層上面で検出した飛鳥時代中頃～後半のNR201については、本調査地の西部一帯で検出されている東から西に蛇行して流下する自然流路に連続するものと推定される。

第6a層上面で検出したNR101については、東隣地のNG97－56次調査でも検出されている。

上記のように、本調査地では検出した遺構の大半が自然流路であり、ほかの遺構は少なかったが、弥生土器や飛鳥時代の土器、平安時代中期の墨書土器など、遺存状態の良い遺物が出土した。周辺の成果と合せて土地の変遷を推定するうえでの手がかりとなる。

# 表4　長原遺跡東北地区の標準層序

| | 層序 | | 層序概念図 | 主たる岩相 | 層厚(cm) | 自然現象 自然遺物ほか | おもな遺構・遺物 | 模式地 | NG層序との対比 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 沖積層上部層Ⅰ | RK0層 | | | 現代客土 | | | | | | 近代・現代 |
| | RK1層 | | | 現代作土 | 10−20 | | | | 1 | |
| | RK2層 | i | | オリーブ灰色細〜中粒砂混り粘土質シルト | ≦15 | 暗色帯 | ↓小溝群 | NG96−66北部 | 2 | 江戸 |
| | | ii | | 灰〜オリーブ灰色細粒砂混りシルト | ≦15 | | | | | |
| | | iii | | オリーブ灰色細粒砂混りシルト | ≦15 | | | | | |
| | | iv | | 灰色粘土質シルト | ≦10 | | ↓小溝群・畝間　国産陶磁器(96−66次) | | | |
| | RK3層 | i | | 灰オリーブ色粗粒砂混りシルト | ≦20 | | | | | 室町〜鎌倉 |
| | | ii | | 黄褐色粘土質シルト | ≦10 | | ↓島畠溝　中国製青磁(96−9次) | NG95−57 NG96−9 | 3 | |
| | | iii | | 灰オリーブ色粗粒砂混りシルト質細粒砂 | 5−15 | | | | | |
| | | iv | | オリーブ色シルト質極細粒砂 | ≦20 | | ↓小溝・水田(99−41次)　瓦器(C−Ⅲ〜Ⅳ期：96−9次) | | | |
| | RK4A層 | | | 黄褐色シルト質極細粒砂〜礫混り粗粒砂 | 15−20 | | ↓自然流路　瓦器(C−Ⅲ期：97−52次) | NG96−79 NG97−12 NG97−52 | 4A | |
| | RK4B層 | i | | オリーブ褐色粘土質シルト | ≦15 | | ↓不整形落込み　瓦器(C−Ⅲ期：96−9次) | NG96−9 | 4B | |
| | | ii | | オリーブ褐色シルト | ≦10 | | ↓土器埋納遺構　瓦器(C−Ⅲ期：96−9次) | | | |
| | | iii | | 黄褐〜暗灰黄色シルト〜中粒砂 ≦55cm　灰オリーブ色シルト〜細粒砂 | 10 | | ▽井戸 平安Ⅲ新〜平安Ⅳ新　↓掘立柱建物　瓦器(C−Ⅱ期)平安Ⅳ期(96−9次) | | | 平安 |
| | | iv | | オリーブ褐色粘土質シルト | 10 | | 瓦器(C−Ⅱ期)平安Ⅳ期(96−9次) | | | |
| | RK4C層 | i | | オリーブ褐色中粒砂混りシルト | 8 | | 平安Ⅲ期(96−40次) | NG96−40 | 4C | |
| | | ii | | 黄褐色中粒砂混りシルト | ≦8 | | ↓溝 | | | |
| | | iii | | 灰オリーブ色中粒砂混りシルト | 6−10 | | | | | |
| | | iv | | にぶい黄褐色中粒砂混りシルト | 8−12 | | ↓溝 | | | |
| | | v | | 暗灰黄褐色シルト | ≦14 | | ↓溝　平安Ⅲ期(96−40次) | | | |
| | | vi | | 灰黄褐色細粒砂混りシルト | 10 | | ↓土器埋納遺構　平安Ⅱ〜Ⅲ期(96−40次) | | | |
| | | vii | | 暗灰黄色中〜細粒砂混りシルト | 5−20 | | ↓溝　平安Ⅰ・Ⅱ期(96−40次) | | | |
| | RK5層 | | | 暗褐色〜黒褐色シルト〜細粒砂 ≦70cm　暗灰黄色シルト質細粒砂 | ≦15 | | ↓鍬跡 | NG96−66 | 5A·B〜6A | 奈良 |
| | RK6A層 | | | 暗灰黄色細粒砂質シルト | 10 | | ▽溝·掘立柱建物 TK43〜平城宮土器　↓溝・土壙　飛鳥Ⅱor Ⅱ(96−79次) | NG96−79 | 6B〜7A | 飛鳥 |
| | RK6B層 | | | 灰色シルト | 10 | | ↓溝・土壙・井戸　飛鳥Ⅱor Ⅱ(96−79次) | | | |
| | RK6C層 | | | 暗灰色粘土質シルト | 10 | | ←溝(97−43次)　↓溝 | | | |
| | RK7A層 | i | | オリーブ褐色シルト〜細粒砂 | ≦40 | 植物遺体多 | 飛鳥Ⅱ(97−43次) | NG97−43 | 7B0 | |
| | | ii | | 灰色砂礫 | ≦70 | | TK209(97−43次) | | | |
| | | iii | | 黄褐色細〜粗粒砂 | ≦180 | | TK10新相(97−43次) | NG97−43 | 7Bi | 古墳後期 |
| | | iv | | 暗オリーブ灰色粘土質シルト〜明黄褐色砂礫 | ≦250 | | ▽土手状遺構(95−57次) TK10(95−57・97−52次など)　←堤防状盛土(98−20次) | NG95−57 NG96−66 | | |
| | | v | | 黒色シルト〜粘土質シルト | 30 | | ▽溝(00−6次)　▽水平断層(99−41次)　TK23・47(97−41次) | NG97−41 | | |
| | | vi | | 灰黄色砂礫 | ≦210 | | TK23・47(96−66次など) | NG96−66 | | |
| | | vii | | 灰オリーブ色中粒砂〜砂礫 | ≦110 | | TK216(98−20次) | NG97−43 | | |
| 沖積層上部層Ⅱ | RK7B層 | i | | 灰オリーブ色シルト | 5−25 | 植物遺体を多く含む | ←踏込み←盛土(98−19・20,00−6次)　水田(00−6次)　曲物(97−12次) | NG96−79 NG97−12 NG97−41 | 7Bii | |
| | | ii | | オリーブ黒色粘土質シルト | 7 | 植物遺体を多く含む | ←水田(99−19・41次)　土師器(船橋O−Ⅰ/Ⅱ：97−12次) | NG97−12 | | 古墳前期 |
| | RK8A層 | | | 暗緑灰色シルト | 5−20 | | 布留式土器(96−66次) | NG96−66 | 7Biii | |
| | RK8B層 | | | 緑灰色粘土質シルト | 7 | | ←水田(99−19次)　庄内〜布留式土器(96−9、97−41・52次) | NG96−66 | | |
| | RK8C'層 | | | 暗灰色シルト | ≦10 | | 弥生V様式(96−9次) | NG96−9 | | 弥生後期 |
| | RK8C層 | | | 暗緑灰色シルト | 5−20 | | 弥生V様式(96−66次) | NG96−66 | | |
| | RK9A層 | | | 暗オリーブ灰色シルト〜極細〜粗粒砂混り粘土質シルト | ≦20 | | ←土壙・溝(97−43次)　弥生Ⅳ様式(96−66次) | NG97−41 NG96−66 NG96−79 | 8A 8B | 弥生中期 |
| | RK9B層 | | | 暗灰色シルト〜シルト質粘土 | ≦18 | | | | | |
| | RK9C層 | i | | 暗オリーブ灰色砂礫〜細粒砂混り粘土 | ≦30 | | ←水田面・溝(97−52次) | NG97−12 | 8Ci | |
| | | ii | | オリーブ黒色シルト質粘土 | 20 | | | NG97−52 | 8Ci' | |
| | | iii | | 緑灰色シルト | ≦3 | | ←土壙・溝・踏込み(97−41次)　▽水平断層　縄文長原式・弥生I様式(97−41次) | NG97−52 | 8Cii | |
| | RK10A層 | | | オリーブ黒色シルト | 5 | | | NG96−79 | 9A | 弥生前期 |
| | RK10B層 | i | | 灰オリーブ色シルト | 40 | | | NG95−79 | 9B | 縄文晩期 |
| | | ii | | 暗オリーブ色粘土質シルト | ≦5 | | | | | |
| | | iii | | 暗オリーブ色シルト | ≦25 | | | | | |
| | | iv | | オリーブ黒色シルト | ≦25 | | | | | |
| | | v | | 緑灰色シルト〜灰色中粒砂 | ≦5 | | | | | |
| | RK10C層 | i | | 黒色シルト | 10 | | ←土器集積・炉(99−19次)　踏込み(97−41・56、99−41次)　北白川上層Ⅱ〜Ⅲ(99−19次) | NG96−79 | 9Ci | 縄文後期 |
| | | ii | | 緑灰色シルト | 8 | | ←噴砂(99−19次)　縄文土器 | | | |
| | | iii | | 黒色シルト | 8 | | 縄文土器(97−12次) | | 9Cii | |
| | | iv | | 黒褐色シルト質極細粒砂 | 15 | | | | 9Ciii | |
| | RK11層 | i | | 灰色砂礫 | ≦250 | | 北白川上層Ⅱ(99−19次) | NG96−79 NG97−12 | 10·11 | |
| | | ii | | 暗オリーブ灰色粘土 | ≦70 | | | | | |
| 沖積層上部層Ⅲ | RK12A層 | i | | 灰〜黒褐色シルト質粘土〜粗粒砂混り砂質シルト　黒色シルト | 5 | 化立石木 | ▽里木Ⅱ式(96−79次)　4740±140SI(Gak−14942)(97−52、98−20次) | NG96−79 NG97−41 NG97−52 | 12Ai | 縄文中期 |
| | | ii | | 黒色シルト質細粒砂 | 10 | | 4910±140SI(Gak−14942)(97−52、98−20次) | | 12Aii | |
| | | iii | | オリーブ黒色シルト質細〜粗粒砂 | 12 | | (97−52、98−20次) | | | |
| | RK12B層 | i | | 暗褐色細粒砂質シルト | 15 | | (97−52、98−20次) | | 12B | |
| | | ii | | 緑灰色シルト〜灰色粗粒砂 | 30−120 | | (97−52、98−20次) | | | |
| | | iii | | 灰黄色粘土質シルト | 30−40 | | ▽周溝・土壙・焼土 船元Ⅱ(99−41次)　(97−52、98−20次) | | | |
| | RK12C層 | i | | 灰色中〜細粒砂質シルト | 12 | 生痕化石 | (97−52、98−20次) | | 12C | |
| | | ii | | 灰色極粗粒砂〜黒褐色シルト | ≦90 | 植物遺体 | (97−52、98−20次) | | | |
| 沖積層下部層 | RK12D層 | i | RK12／13層漸移帯 | 黒色中粒砂質シルト　灰色粘土質シルト | 30 | 生痕化石 | (97−52、98−20次) | | | 縄文早期 縄文草創期 |
| | | ii | | オリーブ黒色シルト質細粒砂 | 5 | | (97−52、98−20次) | NG97−52 | | |
| | | iii | | 黄灰色シルト質極細粒砂 | 5 | 横大路火山灰(K−Aa) | ▽サヌカイト製石器遺物(96−79次) | (97−52、98−20次) | | |
| | | iv | | オリーブ黒色極細粒砂質シルト | 10 | 生痕化石 | ▽不整形土壙・焼土(99−41次) 押型・撚糸(99−41次) 石器製作址(97−52次) | 7230±40BP(Beta−146531)(99−41次) | 12D | |
| | RK13A層 | i | | 灰オリーブ色シルト | 10−20 | | ▽サヌカイト製石器遺物(96−79次) | (97−52、98−20次) | NG96−79 NG97−12 NG97−52 | 13Ai 13Aii |
| | | ii | | 灰オリーブ色火山灰質シルト | 5−10 | 阪手火山灰 | | | | |
| 低位段丘構成層 | RK13B層 | i | | 灰色砂礫質粘土 | 10−20 | | 石器製作址(97−12次)·ナイフ形石器(97−52・96−79次) | | NG96−79 | 13B |
| | | ii | | オリーブ灰色ガラス質火山灰 | 5 | 平安神宮火山灰(AT) | | | NG97−52 | |
| | RK13C層 | | | オリーブ灰色粘土質シルト | 10 | | | | NG97−52 | 13C 後期旧石器 |
| | RK14層 | | | 緑灰色砂礫混り粘土質シルト | 20−40 | | | | NG97−12 | 14 |
| | RK15A層 | | | 緑灰色シルト〜シルト質粘土 | 100−150 | | | | NG97−12·52 | 15 |
| | RK15B層 | | | 灰色砂礫 | ≧100 | | ←ゾウ足跡化石 | | | |
| 中位段丘構成層 | RK16A層 | | | 緑灰色シルト質極細〜細粒砂 | 20−30 | | | | NG96−79 | 16A |
| | RK16B層 | i | | 暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土 | 120 | | | | NG96−79 | 16B 中期旧石器 |
| | | ii | | 暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土 | 10−20 | | | | | |
| | | iii | | 灰色火山灰極細粒砂質シルト | 10 | 吾彦火山灰(Aso-4) | | | | |
| | | iv | | 緑灰色粘土層 | 40 | | | | | |

凡例
←は上面検出遺構
↓は下·基底面検出遺構
▽は地層内検出遺構

# 表５　長原遺跡の標準層序

| 層序 | | | | 層序概念図 | 岩相 | 層厚（cm） | 自然現象 自然遺物ほか | おもな遺構・遺物 | C14 y.B.P | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 沖積層（難波累層） | 最上部 | NG0層 | | | 現代盛土 | − | | | | |
| | | NG1層 | | | 現代作土 | 15～25 | | | | 近代・現代 |
| | | NG2層 | | | 含細礫灰褐～黄褐色シルト質砂 | 6～24 | 暗色帯 | ↓小溝群・畝間　青花・唐津・瀬戸美濃・備前など<br>←地震 | （400） | 近世 |
| | | NG3層 | | | 含細礫淡黄褐～灰色粘土質シルト | 12～20 | | ↓小溝群・畝間・島畠　輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器（Ⅳ－1～5） | | 室町 |
| | | NG4A層 | | | 暗灰褐色礫質砂～シルト 10～45：含細礫黄灰色中粒砂 | 8～15 | | 瓦器 黒色土器 陶磁器 須恵器 土師器／瓦器（Ⅲ－1～Ⅳ－3） | | |
| | | NG4B層 | i | | 褐灰色砂質シルト | av.20 | | ←水田面 ↓小溝群・畝間　瓦器（Ⅱ～Ⅲ） | | 鎌倉 |
| | | | ii | | 含細礫黄灰色中粒砂 | av.5 | | | | |
| | | | iii | | 灰色砂質シルト | av.15 | | ←水田面 ↓小溝群・畝間　瓦器（Ⅰ～Ⅱ） | （800） | |
| | | NG4C層 | i | | 明黄褐色砂質シルト | av.20 | | ▽掘立柱建物／←水田面　平安Ⅰ～Ⅲ期 | | 平安 |
| | | | ii | | にぶい黄褐色シルト質砂 | av.20 | | | | |
| | | NG5A層 | | | 灰色砂礫、シルト質細粒砂薄層を狭在 | 10～80 | | 平城宮Ⅴ～<br>←鍬跡 | | |
| | | NG5B層 | | | 青灰色細粒～極細粒砂 | 2～8 | | ←水田面 | | 奈良 |
| | | NG6A層 | i | | 暗青灰色砂・粘土質シルト | ≦20 | タニシ | 平城宮Ⅲ | （1300） | |
| | | | ii up | | 暗緑灰色中粒～細粒砂 | ≦5 | | ←ヒトと偶蹄類の足跡 | | |
| | | | ii lw | | 粘土質シルト薄層と極細粒砂薄層の互層 | av.10 | | ←水田面 | | |
| | | NG6B層 | i | | 含砂・礫黒褐色～暗灰色シルト質粘土 | ≦15 | タニシ | 飛鳥Ⅲ～Ⅳ | | 飛鳥 |
| | | | ii | | 灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂 | ≦5 | ←乾痕 | 飛鳥Ⅲ<br>←水田面 | | |
| | | NG7A層 | i | | 含砂灰色粘土 | av.10 | | ←水田面 | | |
| | | | ii | | 含砂黒褐色シルト質粘土 | av.15 | | ↓掘立柱建物　飛鳥Ⅰ・TK209 | （1400） | |
| | 上部 | NG7B層 | o | | 明黄褐色砂礫～暗オリーブ灰色粘土質シルト | ≦250 | | ←土手　TK10 | | 古墳後期 |
| | | | i | | 黒褐色砂・礫質粘土・黒色シルト | ≦35 | | 長原古墳群　埴輪Ⅴ期・TK23･47～MT15 | （1600） | 古墳中期 |
| | | | ii | | 褐色極粗粒砂・粘土質シルト互層 | ≦170 | | 埴輪Ⅱ期　TK216<br>←水田面 | | 古墳前期 |
| | | | iii | | 暗褐色粘土質シルト | ≦5 | | ↓方形周溝墓・竪穴住居　布留式・庄内式・畿内第Ⅴ様式 | （1700） | 弥生後期 |
| | | NG8A層 | | | 青灰～黄灰色砂・礫～粘土 | ≦40 | | ←方形周溝墓・溝 | （2000） | |
| | | NG8B層 | | | 暗褐色砂質シルト | av.10 | | 畿内第Ⅲ～Ⅳ様式・凸基式石鏃 | | 弥生中期 |
| | | NG8C層 | i | | にぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂 | av.25 | | ←水田面・溝・ヒトの足跡　←石器製作址・畿内第Ⅱ様式・石斧　木葉形石鏃 | | |
| | | | ii | | 灰色シルト質粘土 | av.10 | | | | |
| | | | ii | | 黄褐色シルト質粘土 | ≦15 | ←乾痕 | ←自然流路の堤 | | 弥生前期 |
| | | NG9A層 | | | 黒褐色砂・シルト質粘土 | 3～15 | | 畿内第Ⅰ様式・長原式・石鏃 | | |
| | | NG9B層 | i | | 灰オリーブ～黒褐色砂礫 | ≦90 | | | | |
| | | | ii | | 暗灰黄色シルト質粘土，植物片多含 | 10～40 | | 畿内Ⅰ様式・竪杵 | | |
| | | | iii | | 灰オリーブ色シルト質粘土 | 3～14 | | 土偶 石棒 | | |
| | | | iv | | 暗灰オリーブ色シルト質粘土，植物片多含 | 8～50 | アラカシ イヌガヤ | 長原式・石斧の柄・弓 | （2600） | 縄文晩期 |
| | | | v | | 灰オリーブ色シルト・砂 | 10～35 | ←乾痕 | ▽石器製作址 ▽土器棺墓 ▽竪穴住居・貯蔵穴　←滋賀里Ⅳ式 凹基式石鏃 | | |
| | | NG9C層 | i | | 黒褐～褐灰色含シルト質粘土 | 2～8 | | | | |
| | | | ii | | 灰色シルト質粘土～砂礫 | 2～10 | | | （3000） | 縄文後期 |
| | | | iii up | | オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土 | 7～25 | | | | |
| | | | iii lw | | 暗灰色シルト～粘土質粗粒砂 | av. 5 | ←火山灰層準（ＢＢ７？） | 縄文 | | |
| | | NG10層 | | | 緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト | ≦80 | ← 地震 | 北白川上層Ⅱ～Ⅲ式 | | |
| | | NG11層 | | | 灰色シルト質粘土 | ≦16 | ← 乾痕 | | | |
| | | NG12A層 | i | | 腐植質黒褐色礫質粘土～シルト | ≦15 | | 里木Ⅱ式・北白川Ｃ式・石鏃 | ←4740±140Sl（GaK-14942） | |
| | | | ii | | オリーブ黒色シルト質砂、礫混り | ≦20 | | | ←4900±140Sl（GaK-14941） | |
| | | NG12B層 | i | | 暗褐色細粒砂質シルト | av.20 | | ← 地震？ | | |
| | | | ii | | 暗黄灰色シルト～灰色礫混り砂 | av.10 | （火山灰の２次堆積あり） | ← シカ・トリの足跡　船元Ⅱ式 | | 縄文中期 |
| | | | iii | | 黒灰色シルト～オリーブ黒色シルト質粘土 | av.10 | | | | |
| | | | iv | | 黄灰色砂礫～灰色シルト質粘土 | ≦15 | | ▽土壙 ▽石器製作址　凹基式石鏃 | ←4900±100Cb（GaK-14941） | |
| | 中部 | NG12C層 | i | | 黒褐色～オリーブ黒色シルト～粘土 | ≦25 | | 甲殻類の巣穴の化石 | | |
| | | | | | 黒褐色～灰色粗粒砂 | 5～10 | | | | |
| | | | ii | | 黒褐色シルト質粘土、植物片多含 | av.10 | | | | |
| | | | | | 灰色中～粗粒砂、礫混り | av.40 | | | | 縄文前期 |
| | | | iii | | オリーブ黒色シルト | ≦20 | | | | |
| | | | | | 灰色砂、一部シルト質 | ≦30 | | | | |
| | | | | | 黄灰色ガラス質火山灰 | ≦5 | ←横大路火山灰層（Ah） | | ← 6300 | |
| | | NG12D層 | i | | オリーブ黒色極細粒砂質シルト | 20～30 | | ← 大礫　押型文土器 | | 縄文早期 |
| | | | ii | | 灰色礫混り砂、シルト薄層を挟む | ≦60 | | 有茎尖頭器・細石刃 | | 縄文草創期 |
| | 下部 | NG13A層 | i | | 灰色細粒シルト | ≦5 | | | | |
| | | | ii | | 灰黄～灰白色細粒シルト（火山灰質） | av.7 | | ▽石器製作址　削器・ナイフ形石器・剥片・石核 | （15000） | |
| 低位段丘構成層 | 最上部 | NG13B層 | i | | 黄褐～灰黄色シルト質粘土 | ≦5 | ←乾痕 | 剥片・石核 | | |
| | | | ii | | 黄灰色粗粒シルト質火山灰 | ≦5 | ←平安神宮火山灰層（AT） | | ← 25000 | |
| | | NG13C層 | | | 暗灰黄～暗褐色シルト質粘土 | av.12 | ↓乾痕 | | | 後期旧石器 |
| | 上部 | NG14層 | up. | | 灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土 | 20～80 | | 剥片 | | |
| | | | lw. | | 灰色砂礫～砂質シルト | | | ▽石器製作址　掻器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器 | | |
| | 下部 | NG15層 | up. | | 黄灰色～緑灰色粘土～砂礫 | 150～450 | | | | |
| | | | lw. | | シルト・砂礫 | | ヒメマツハダ | ←ナウマンゾウの足跡 | | |
| 中位段丘構成層 | 上部 | NG16A層 | | | 暗灰～灰青色シルト・礫混り砂互層 | ≦150 | | ←化石林、ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石 | | |
| | | NG16B層 | i | | 暗褐色泥炭質粘土：沼沢地性層 | ≦20 | ←吾彦火山灰層層準（Ａｓo-4） | | ← 87000 | |
| | | | ii | | 灰色火山灰質砂質粘土～シルト：河成～沼沢地性層 | ≦25 | ←北花田火山灰層層準（ＫＴｚ） | ↓ゾウの足跡状の凹み | ← 91000 | |
| | | | iii | | 灰色砂礫：河成層 | ≦260 | | | | |
| | | NG17A層 | | | オリーブ灰色砂質粘土：古土壌 | av.10 | | | | 中期旧石器 |
| | | NG17B層 | i | | オリーブ灰色砂混り粘土質シルト：沼沢地性層 | av.20 | | | | |
| | | | ii | | 緑灰色粗粒砂質シルト：河成～沼沢地性層 | av.10 | ←ナウマンゾウ臼歯（ラメラ片） | | | |
| | | | iii | | 緑灰色極粗粒砂～細礫：河成層 | av.10 | | | | |
| | 部 | NG18層 | | | 緑灰色砂質シルト～緑灰色砂礫 | av.65 | ←ゾウの足跡状の凹み | | | |
| | | NG19層 | | | 暗緑灰色砂質粘土～緑灰色砂礫 | av.50 | | | | |
| | | | | | 緑灰色砂混り粘土質シルト 上方細粒化 下部で粗粒砂～砂礫 | ca.280 | | | | |
| | | NG20層 | | | オリーブ黒色泥炭～泥炭質粘土 | ca.100 | | | | |
| | | NG21層 | | | 暗緑灰色細粒砂質シルト | ca.40 | | | | |
| | 中部 | NG22層 | | | 含貝化石砂～粘土 | ca.200 | | | （12万年） | |

←：上面検出遺構
↓：下面検出遺構
▽：地層内検出遺構
Cb; 炭　Sl;土壌

# 引用・参考文献


大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、「Ⅳ　長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査」:『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12－16

大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』

1979a、『大阪市下水管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』

1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』

1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』

1980a、大阪市文化財協会2006年「第Ⅴ章 北地区の調査」:『長原遺跡発掘調査報告』XV、p.168

1980b、大阪市文化財協会2006年「第Ⅴ章 北地区の調査」:『長原遺跡発掘調査報告』XV、p.162

1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80－１)略報』

1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80－２)略報』

1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－１)略報』

1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83－５)略報』

1984c、『大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－22)略報』

1984d、『長吉出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－43)略報』

1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－54)略報』

1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－63)略報』

1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－65)略報』

1985a、大阪市文化財協会2006年「第Ⅶ章　東・東北地区の調査」:『長原遺跡発掘調査報告』XV、pp.267－271

1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－18)略報』

1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－49)略報』

1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－86)略報』

1986、大阪市文化財協会2006年「第Ⅶ章 東・東北地区の調査」:『長原遺跡発掘調査報告』XV、p.261

1989、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88－６)略報』

1996b、大阪市文化財協会2006年「第Ⅶ章　東・東北地区の調査」:『長原遺跡発掘調査報告』XV、pp.266－267

1997、『平成８年度大阪市都市整備局による長吉六反第１住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96－79)略報』

1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ

1998b、『平成９年度大阪市都市整備局による長吉六反第１住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97－41)完了報告書』

1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ

2000a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ

2000b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
2001、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅳ
2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
2002b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ
2003、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ
2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XI
2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅶ
2005、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ
2006a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅸ
2006b、『長原遺跡発掘調査報告』XV
2007、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』X
2008a、『長原遺跡発掘調査報告』XVI
2008b、『長原遺跡発掘調査報告』XVII
2008c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XI
2009a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XII
2009b、『長原遺跡発掘調査報告』XVIII
2009c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XIII
大阪文化財研究所2011a、『長原遺跡発掘調査報告』XIX
2011b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XIV
2012、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XV
大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
1986a、『城山(その１)』
1986b、『城山(その２)』
1986c、『城山(その３)』
尾上実1983、「南河内の瓦器椀」：古代を考える会編『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』 藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会、pp.689－705
尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315－327
小野正敏1982、「15～16世紀の染付碗、Ⅲの分類と年代」：『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会　pp.71－88
1985、「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描」：『MUSEUM』№.416、pp.20－29
小山正忠・竹原秀雄2006、『新版　標準土色帖』 日本色研事業株式会社
川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64号第２巻　日本考古学会、pp.95－164
絹川一徳2000、「石器器種とその分類」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.150－189
九州近世陶磁学会2002、「国内出土の肥前陶磁」
京嶋覚1992、「長原・瓜破遺跡の製塩土器」：大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.155－160
建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
古代の土器研究会1992、『古代の土器１　都城の土器集成』
小山正忠・竹原秀雄2006、『新版　標準土色帖』 日本色研事業株式会社
佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102－114

1995、「大阪市内における中世集落の動向の一例－中国製磁器の出土傾向を中心に－」：日本中世土器研究会『中世土器の基礎研究』XI、pp.45－54

1996、「中世後期の陶磁器・土器について」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.81－92

2008、「平安時代前期の長原」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』XVI、pp.92－96

高橋工1999a、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79－106

1999b、「奈良時代以降の長原遺跡東北地区」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.123－127

高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.10－11

田中清美2011、「出土土器の編年的位置づけ」：大阪文化財研究所編『平野馬場遺跡発掘調査報告』、pp.75－78

田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店

趙哲済2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」:『日本第四紀学会「大阪100万年の自然と人のくらし」普及講演会資料集』、pp.1 －16

2005、「河内平野の古地理変遷」：平野区誌編集委員会編『平野区誌』、p.24

2010、「土層の認識と表土・包含層の発掘」：文化庁文化財部記念物課編『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』、pp.93－116

中世土器研究会編1995、『概説中世の土器・陶磁器』

寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、pp.41－146

光谷拓実・大河内隆之2006、『歴史学の編年研究における年輪年代法の応用』－中期計画(2001年～2005年)事業調査報告書－独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター古環境研究室

光谷拓実、田中琢、佐藤忠信1990『年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－』 奈良国立文化財研究所学報第48 同朋舎出版

村上恭通2003、「大和における古墳副葬鏃の形式－ホケノ山古墳出土品を中心に－」：『初期古墳と大和の考古学』学生社 pp.340－350

森田勉1982、「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」：『貿易陶磁研究』第２号 日本貿易陶磁研究会 pp.47－54

八尾市文化財調査研究会2000a、「Ⅴ 太子堂遺跡第７次調査(TS97－７)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59－73

2000b、「Ⅵ 太子堂遺跡第７次調査(TS98－８)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75－93

横田賢次郎・森田勉1978、「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」：『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 pp.1－26

# The Excavation Report of the Eastern Sector of Nagahara Site in Osaka, Japan

## Volume XVI

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

# CONTENTS

Foreword
Explanatory notes

Chapter I Archaeological researches in the North-eastern sector of the Nagahara site ..... 1
1 Location of sites and progress of research ..... 1
1) Location of the Nagahara Site ..... 1
2) Previous investigation in the area ..... 2
3) Progress of research ..... 6

Chapter Ⅱ Investigation results ..... 9
1 NG10 − 2 research ..... 9
1) Stratigraphy ..... 9
2) Features and artifacts ..... 15
3) Conclusion ..... 46
2 NG10 − 5 research ..... 47
1) Stratigraphy ..... 47
2) Features and artifacts ..... 50
3) Dendrochronology of wooden board from SE601 ..... 72
4) Conclusion ..... 73
3 NG10 − 6 research ..... 75
1) Stratigraphy ..... 75
2) Features and artifacts ..... 80
3) Artifacts from each stratum ..... 87
4) Conclusion ..... 88

Chapter Ⅲ Conclusion ..... 89

References ..... 93

English Contents

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | ながはらいせきとうぶちくはっくつちょうさほうこく16 |
| 書　　名 | 長原遺跡東部地区発掘調査報告XVI |
| 編 著 者 名 | 佐藤隆・田中清美・平田洋司・小倉徹也・光谷拓実 |
| 編 集 機 関 | 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 |
| 所　在　地 | 〒540－0006　大阪市中央区法円坂１－１－35　TEL.06－6943－6833 |
| 発 行 年 月 日 | 西暦　2012年３月30日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ながはら<br>長原遺跡 | おおさかしひらのく<br>大阪市平野区<br>ながよしろくたん<br>長吉六反1・2丁目・<br>ながよしでと<br>長吉出戸7丁目 | 27126 | － | 34°<br>36′<br>30″ | 135°<br>34′<br>42″ | 2次 100702～110215<br>5次 100831～110128<br>6次 101201～110315 | 500㎡<br>400㎡<br>200㎡ | 長吉東部地区土地区画整理事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 長原遺跡 | 集落 | 弥生～古墳時代 | 溝・土壙・柱穴 | 弥生土器・韓式系土器・土師器・須恵器・鉄鏃 |
| | 集落・その他 | 飛鳥時代 | 井戸・土壙・自然流路 | 土師器・須恵器・木製品・鏃先 |
| | 田畑・その他 | 奈良～平安時代 | 水田・井戸・落込み・自然流路 | 土師器・須恵器・黒色土器・鉸具 |
| | 集落・その他 | 室町～江戸時代 | 柱穴・井戸・土壙・溝<br>墳墓堂遺跡 | 土師器・瓦質土器・中国産磁器・瓦<br>国産陶磁器・銭貨・漆器 |


要　約

本書では、長原遺跡東部地区における３件の調査成果を報告した。

長吉六反一丁目のNG10－２次調査では、平安時代中～後期の水田や、室町時代から江戸時代にかけての集落に係わる多くの遺構・遺物を確認した。特筆すべき遺構としては、幅6.8m、深さ0.7mという大規模な溝SD501や、東西長30m（100尺）の溝SD404といった区画に係わるものがあり、墳墓堂遺構SX335は長原東部地区では初めての発見である。遺物では、SD501から出土した中国産青花碗やSX335の周溝から出土した瀬戸美濃焼茶入は、大阪市内で最古級のものであり、遺構の特殊性とともに注目される。

長吉出戸七丁目のNG10－５次調査では、弥生時代中期後葉の遺物が出土し、弥生時代終末（庄内期）～古墳時代中期は遺物量が増して遺構も多く認められた。古墳時代中期にかけては耕作域へと変化し、その後、調査地周辺は再び水没する不安定な環境となる。古墳時代後期～飛鳥時代は大規模な洪水に見舞われ、湿地状となるが、飛鳥時代や平安時代初期には井戸が設けられた。墨書土器や銅製の鉸具などの遺物が注目される。

長吉六反二丁目のNG10－６次調査では、弥生時代後期前半のSD401のほか、飛鳥時代のNR301・201、平安時代前～中期のNR101といった３条の自然河川を検出し、弥生土器や飛鳥時代の土器、平安時代中期の墨書土器など、遺存状態の良い遺物が出土した。